大正三年二月七日印刷
大正三年二月十日發行

有朋堂文庫
繪本太閤記上
（非賣品）

不許複製

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

か。然共味方の將卒又多く亡べし。今甲信上駿四國、盡く御手に屬し候上は、眞田一人其儘に捨給ふ共何程の事や候はん。武田一家平均の上は、早く御歸陣あらせられ、より〳〵眞田を招き御味方に加へ給はゞ、御用に立つべき勇士にて候間、此一件御賢慮ありて可然歟」と言上す。信長手を打て笑給ひ「秀吉が計策我意に叶へり。眞田昌幸吾妻の城に楯籠り敵對の色を成せ共、秀吉が所存の如く、纔に眞田一人が爲に軍卒を費すべき事ならずと、未だ敢て勢を向ず躊躇してありけるが、秀吉が一言にて我心定りたり。直に歸陣を催すべき間、此旨秀吉に申せよ」とて堀尾に沙金を賜ひ、御暇下されければ、茂助は有難く拜謝して、急ぎ播州へ歸りける。

下曾根覺雲軒討てこの首を奉る。其外諏訪刑部、同采女、飯挾間右衛門尉、長坂長閑齋、跡部大炊介、小山田左兵衛佐、同八左衛門、武田左衛門、小菅五郎兵衛等生捕れ、皆々甲府において誅せられぬ。其餘召捕れ、首を刎られ、又遠流せらるゝもの甚だ多しといへども、事繁ければ是を略す。爰に眞田安房守昌幸は、武田の幕下として其名海内に響き聞え、信長公御父子も、心を置せ給ふ者にてありけるに、勝頼天目山に生害の後、居城吾妻の城に八千餘人楯籠り、防戰の備を成し、織田の大軍寄來らば、花々しく合戰して、運盡なば討死せんと、靜まりかへつて居たりける。信長公御父子其外の諸將軍卒迄、侮りがたき眞田なれば、左右なく押寄戰はんと云ふ者もなく、兎角の評定に一兩日を過しける。同月十七日、播州羽柴筑前守秀吉より、堀尾茂助吉晴を使者として、信長公の御陣飯島に參著し、甲信御平均の慶賀を祝し奉り、就て四男御曹司御次丸秀勝君御具足始の祝として、備前國兒島郡麥飯の城を攻落し候由言上に及びければ、信長公殊に御機嫌うるはしく、御引出物種々下し賜ふ。時に茂助謹で申上ぐるは、「主人秀吉別に申上候趣意是あり。今度武田家の一門家老共の內、眞田安房守昌幸は、極て謀略ある勇士に候へば、等閑に征し給はん事味方の損亡たるべし。殊に彼が居城上田、吾妻の兩城、何れも要害の地にして、攻に難く守に安し。君御威光を以て討給ふ物ならば、眞田終には誅せられん

武田信勝土屋惣藏天目山に敵を禦ぐ圖

年十六歳、容顏美麗の若武者、十文字の鎗提げ、群る敵を三度突くづし、諸軍の目を驚す。勝頼も自ら鎗追取り敵に當り、命限りと戰へば、前よりは河尻肥前守、稻葉伊豫入道一徹齋、後よりは瀧川左近將監、ゑい〳〵聲して攻上る。此時甲州缺落の侍辻彌兵衞と云ふ者、鄕民等五百餘人を引具し、天目山の後の山より横合に切つて懸れば、勝賴父子主從今は戰ひ勞れければ、いざ死せんとて指違へ〳〵、一人も殘なく皆生害をしたりける。勝賴三十七歳、信勝十六歳、土屋惣藏二十七歳、其餘の勇士秋山紀伊守、同三十郎、小山田平左衞門、同彌介、金丸助六、秋山民部、同彌五郎、同惣六、岩下右近、同惣九郎、小原下野、多田新藏、同角助、寺島藤藏、伴刑部、同又市、甘利釆女、同彦五郎、曾根內膳、小尾五郎介、同十兵衞、安田十郎左衞門、同源藏、安西平左衞門、川村五兵衞、雨宮織部、同善次郎、大龍寺僧麟岳、其弟子圓首座、鷹匠齋藤作藏、足輕山名源藏、山下杢、皆井小助、椎名新藏、淺浪右近、上下四十七人盡く討死し、武田の家系爰に斷絕す。哀といふもおろかなり。抑武田氏は淸和の末流にして、新羅三郎義光の後裔、武田義淸甲州に封を受て以來、凡十七世四百六十餘年にして亡びぬ。扨も中將信忠卿、甲斐、信濃、上野、駿河の野間に隱れ居る武田の餘黨一族等探し捕へ、罪に隨ひ仕置ある。先武田左馬介信豐は、故信玄の甥にして、典厩と稱する人なり。これを信州小室の城主

扨も今迄附隨ひし軍兵皆落失せて、僅に四十餘人ぞ殘りける。長坂長閑、跡部大炊介等は、日頃物每我意にまかせ、時めく事云ふ計なし。邪なる政道を取り行ひ、慾深く佞奸なりしが、人より先に落失せて、其影さへも見えざりける。同月十一日、田野里（天目山の麓の郷）の郷民等、勝頼の天目山に隱れおはするを知りて、織田家の軍將瀧川左近將監一益が陣に來てしか〴〵と是を訴ふ。さらば天目山を取り圍めとて、瀧川左近、河尻肥前守、森勝藏、團平八郞、篠岡平左衞門、瀧川儀太夫、北畠殿の陣代津川玄蕃をはじめとし、數萬の軍兵天目山を十重二十重に取り圍み、鬨を作り鐵炮を打かけ、叫喚んで攻上るは、恐しかりし次第なり。勝頼今日ぞ最期とおぼされければ、其妻に向ひて「いまだ軍始まらぬ内、山を下つて小田原に落行き、兎もかくも生命をつなぎ給へ。女の事なり、敵も又殺すまじ」と聞えければ、いづく迄も一所に死せんとて、更に聞入るべきけしきなし。勝頼初の妻は信長公の姪なりしが、信勝を產て其母死し、今の妻は北條氏政が妹なり。勝頼今はいひても詮なしとて、彼妻を取て刺殺し、主從僅に四十餘人、織田の大軍を引受て切所に支へ待かけ、攻上る織田の軍勢を突伏せ薙伏せ、七顛八倒して戰ひぬれば、さしも勇し織田の大軍、進兼てぞ支へたり。勝頼が寵臣土屋惣藏、強弓の精兵なりければ、寄來る敵十七人矢庭に射倒し、太刀を拔て切捲り、亂軍の中に討死す。勝頼が嫡子太郞信勝、生

三月五日、右大臣信長公安土の城を打立給ひ、翌日濃州六渡と云ふ所に著せ給ふ。信忠卿使者を以て此頃の軍の次第申上げられ、仁科五郎信盛が頸を奉らる。信長公大に悦び給ひ、是を岐阜の長柄川原に獄門にかけられける。同七日、信忠卿諏訪を出給ひ、甲府に發向ましく〱、一條藏人が館に御陣を居られ、武田が親族家老の者等落殘る輩を尋ね出し、或は生捕り或は首を刎るる、其人々には、武田逍遙軒、同隆寶、一條右衛門太夫、武田上總介、朝比奈攝津守、淸野美作守、諏訪越中守等、何れも武田家において歷々たる人々なり。猶中將殿御下知有て、織田源三郎勝長、團平八郎、森勝藏を大將として其勢五百餘騎、勝賴が領國西上野に赴しむ。其軍威益昌なりけるに、武田隨一の家臣小幡上總介、人質を獻じて御味方に降參す。其外甲斐、信濃、駿河、上野の大小の武士等、緣を需め人にたより、織田の門に來り降を乞ふ者市のごとし。扨も勝賴主從五百餘人は、鶴が瀨小松の鄕に逗留し、小山田が御迎に參るやらんとて七日迄待れけるに、小山田左兵衛佐忽ち逆心を企て、己が命を助らんとて、鶴が瀨の向ふ笹子と云ふ所に柵を嚴しく附け、其夜勝賴へ出し置たりし人質をも奪返し、敵の色を顯しける。されば勝賴十方を失ひ、今更眞田が事戀しくて、駒飼といふ山家を心ざし引行く所を、小山田が軍勢、鐵炮を打かけ矢を送る事繁し。是に因て騷動周章大方ならず、勝賴止む事なく天目山に落籠る。

する所に、甲州都留郡内の城主小山田左兵衛佐信茂、之を支へて申けるは、「上州も君の領國なりといへども、先君興業の地甲州にて計議あらんに何れか勝る事候はん。我領地郡内是又嶮岨の要害なり。君遠く吾妻の城に行き給ふに及ばず、我郡内に開き給ひ、籠城して敵を待れ候へ」と勸む。此時勝頼心神亂れ、此兩條を分別すること能はず、寵臣長坂長閑に問ふ。長坂答て申けるは、「眞田は當家の幕下なりといへども、彼が父の一德齋より兄源太左衛門纔に二三代に過ず。小山田は譜代相傳、重世の臣下なり。又吾妻は他國なり、郡内は自國なり。君只吾妻へ行き給ふ事を停て郡内へ開かるべし」といふ。勝頼此議に同じ、眞田が約に背て郡内へ赴きける、運の末こそ淺ましけれ。扨木曾左馬頭義昌が人質を切殺し、其外諸方の味方叛心の者の人質三百餘人、悉く燒殺し、忠節の士の人質纔に十人計助け出し、金銀を分ち與へ、自身の室家伯母妹なんど、捨難き人々五六十餘人、上下の男女五百餘人、郡内さして打立けるが、左兵衛佐信茂を先立てて郡内へ入らしめ、籠城の用意をさせ、自ら郡内近き鶴が瀬小松の郷に陣を取り、小山田が左右を相待ける。

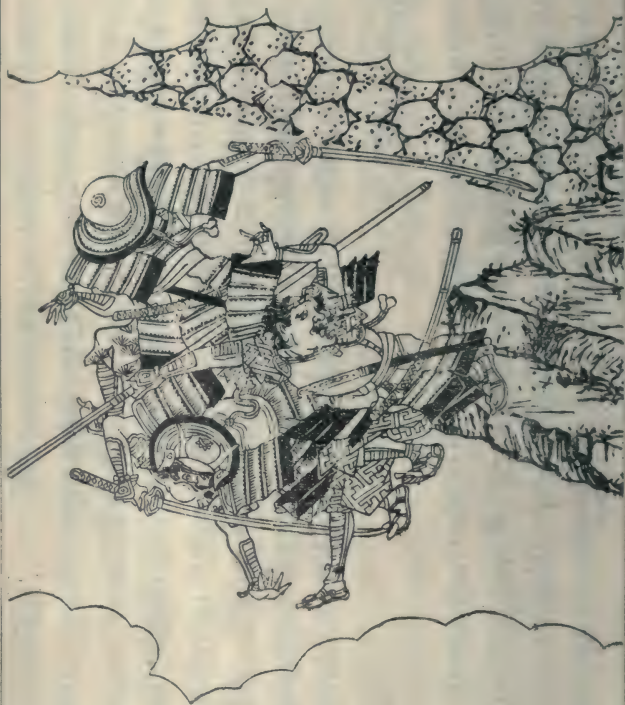
○武田勝頼父子死二天目山一

甲州の騒動大方ならず、一族家老の人々も、面々妻子を引具し落支度するのみにて、軍の評議はなかりけり。此時勝頼が嫡子太郎信勝十六歳、父の前に進み出でて申けるは、「味方諸方の城城みな織田の爲に陥され、今は當家滅亡の時とこそ存候へ。軍將運盡て戰場に死するは武門の常、勇者の望む所に候。爰を去て山林に遁隱れ、家名を汚し候はんは、何ぼうか口惜き事に候はずや。先祖相傳の重器を燒捨て、切腹まし〳〵候べし」と潔く申したり。時に信州上田、上州吾妻二城の主眞田安房守昌幸進んで申けるは、「太郎殿の計議尤に候へ共、いまだ生害なし給ふ期にあらず。死を定むること難くして成し安し、生を保つて敵を亡すは安きに似て難し。一度此所を退去有て、某が居城吾妻の城に入らせられ、時を待て運を開き給ひ、家名を全く相續有んこそ、先祖へ對し孝ならずや。吾妻の城要害無雙にして兵粮尤も多く、兩三年は籠城すべし。其中に計略を以て先敗の餘類を集め、譜代恩顧の老臣をかたらひ、快く一戰し會稽の恥を雪んこと、昌幸が方寸にこれあり。其上箕輪、小室の兩城いまだ敵に落されず、頗る味方の助けと成れり。君早く斯を去て吾妻の城へ御開きあるべし」と申すにぞ、勝頼大に悦び、急ぎ昌幸が勸めに順ひ上州へ赴くべしとて、まづ安房守に暇を賜り、先達て吾妻の城へ遣し、籠城の用意をなさしむ。昌幸畏り、直に上州へと急ぎける。勝頼妻子從類を引具し、眞田が居城へ行かんと

端より切立れば、城將仁科五郎信盛も、今は是迄ぞと本丸に驅入つて、其妻子をさし殺し、腹十文字に搔切て、此城中に英名を止めけり。爰に城兵諏訪勝右衛門といふ者の妻、力あく迄強く勇壯の女なりけるが、城方敗北と見ると等しく、白き小袖に鉢卷引締め、二尺九寸の太刀眞向にかざし、本丸の城戸押開き走出で、近寄る鎧武者七八騎またゝく内に切倒し、猶も多勢の其中へ勇を振うてかけ入りけるに、寄手案の外なる女武者に切立てられ、一度にどつと退たりける。此女も今は是までなりと、刀を口に銜へ、貫れて死たりける。誠に希有の振舞かなと、敵も味方も驚歎す。さる程に寄手次第に亂れ入り、斬廻る程こそあれ、或は討れ又は自殺し、名ある勇士三十餘人、討取る首四百餘級、終に高遠の城陷りぬ。殘兵皆甲府をさして落行きける。

○眞田阿房守昌幸曰ニ奇謀一

三月三日、織田三位中將信忠卿、大軍を率し諏訪の上の原に押來り、本陣を爰に居られ、殘る城々を攻られけるに、先に大島の城を開きし安中左近高島の城に籠り居けるが、又此城も捨て甲府へ赴く。深志の城主馬場美濃守も、同じく開城して退ければ、支る敵一人もなく、織田家諸方の軍勢、一同に甲府へ亂入んとす。勝頼が賴み思ひし高遠の城落て、大軍爰に押來るとて、

諏訪勝右衛門が妻
戦死の図

夫富士川の淺瀬を案内し、其夜信忠卿の軍勢盡く川を渡り、先手川尻、毛利、團、森の四將軍兵を進め、追手より攻かゝれば、中將殿は搦手より向ひ給ふ。城主仁科五郎信盛、軍大將小山田備中守無雙の勇士なりければ、味方の城々皆織田の軍に破られけれども、少しも勢減ぜずして、矢石を放ち鐵炮を打出し、防戰嚴しく守りければ、此城のみは容易く落城すべしとも見えざりける。されども城兵とても持こたふべき戰にあらざれば、死を急ぐ將士、小山田備中守、原隼人、春日河内守等二百餘人、追手の城戶をさつと開き、無二無三に斬て出で、森勝藏、團平八郎が軍兵と火を散し挑戰ひ、命を塵芥よりも輕くなし、死せん事をぞ爭ひける。御大將信忠卿搦手に向ひ給ひしが、城中強く支ふるを御覽じ、自身眞先に馬を進め、逆茂木一重引破り、長刀を取て味方を招き、「此城を破らずしていつか甲信を定むべき。來れや〳〵、進め〳〵」と下知をなし、自ら塀に取附き乘入り給ふ。是を見て諸軍誰か暫も猶豫べき。我劣じと馳寄り〳〵、切ども突共かへり見ず、聲を合せて乘入ける。城兵爰を破れじと、渡邊金太夫、畑源左衞門、飛志越後守、士卒を下知して嚴しく戰ふ。中將殿の小姓山口小辨、佐々淸藏、馬廻り梶原治右衞門等、一番に城に乘り込み、太刀をかざして切て廻れば、討るゝ者數を知らず。此時追手の軍も城方破れ、小山田備中守も森勝藏に討れ、士卒悉く討死し、前後の織田方一同に城中へ亂入り、片

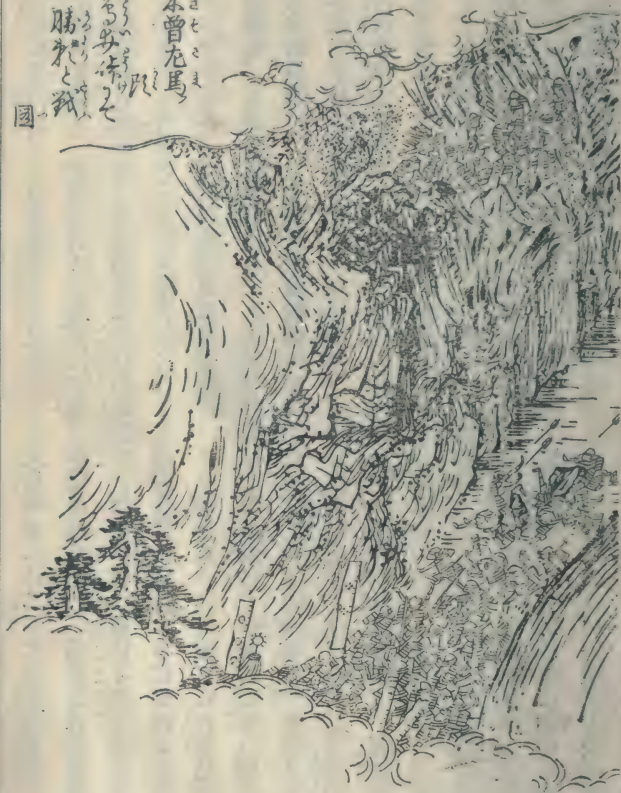
の武士敢て敵する者なく、悉く降參す。是が餘り、村々の鄕民百姓、己が家に火をかけて、武田に叛き一揆をなす。これ皆勝賴が惡行日々に超過し、萬民虐政に苦しみ、武田家の亡ん事を待ものなり。此のごとくして、國家の亡びざるはいまだあらじ。

○高遠之城陷仁科五郎信盛討死

故入道信玄の壻、江尻の城主穴山玄蕃入道梅雪齋といふ者、勝賴の女を以て我子に嫁さんと契約し、事定りぬ。然るに佞臣長坂長閑、跡部大炊介等、武田左馬頭信豐に賄賂を受け、穴山の契約を變ぜしめ、信豐が子に娶せたり。梅雪大に怒り、勝賴を深く恨み終に叛心を發し、信忠卿に降參し、己が居城に楯籠り、謀叛の色を顯しける。是に因て武田に構へたりし城々、持船、田中をはじめとして盡て退散し、或は謀叛して居城に籠り、國中今は皆敵となりければ、勝賴諏訪の陣にもたまり得ず、二月廿八日、殘兵三千餘人を引具し、甲州の新府へ引退く。同三月一日、中將信忠卿天龍川を押渡り、貝沼原に本陣を居られ、川尻肥前守、毛利河内守、團平八、森勝藏等を先手とし、自身旗本の勢を少々引具し、武田方仁科五郎信盛が籠居ける高遠の城を伺ひ見給ふに、此城前に富士川の急流あり、三方は嶮岨の地にして頗る要害堅固なり。小笠原掃部太

迯行くを、團平八、森勝藏、追討して是を斬る事三百餘人、惣大將武田四郎勝賴、此形勢を見聞して甚心を苦め、諸將を集め防戰の僉議しけれど、衆議區々にて一決せず、空しく上の原に陣を取りて居られけるぞ、武田の運の究なりける。其中に或は夜討せんと勸むる者も有り、又は白地に出て戰ひ、一時に勝敗を分たんと諫むる臣下も有りけれど、長坂長閑己が命の惜さにや、兎角拒て勝賴の戰を止む。是によつて適々忠志有る武士も心離れ、主を捨て落行く者少なからず。同十六日、木曾左馬頭、苗木久兵衛等、並坂より進みて鳥井峠に押來る。武田方の今福筑前守七千餘人、是を支いどみ戰ふといへども、軍卒心一致ならず、終に討負け、五百七十餘人討死し、本陣指して敗走す。此時大將信忠卿、木曾が軍忠を稱し感狀を賜ふ。猶御加勢として織田源吾長益、津田孫十郎信次等を以て、鳥井峠を越し桔梗原に陣を取る。武田方深志の城より、馬場民部丞、多田次郎右衛門、横田甚五郎等相支へて日數を送る。信忠卿は大軍を引率し、岩村口より嶮難の切所を越し、平谷に陣を居られ、大島の城を攻られんと評議有る所に、大島に籠たる軍勢、戰はざる前に殘なく落行きければ、主將日向大和入道宗英、加勢小原丹後守、止む事なく城を開て退散す。信忠卿力を用ひずして城を乘取り、河尻肥前守をして大島の城を守し、直にすゝんで飯島にいたり給ふ。森勝藏、團平八先陣を勸め、所々方々に亂暴しけるに、甲信

の城には仁科五郎信盛、山田備中守等是を守る。大島の城には日和大和入道宗英、小原丹後守、安中左近等を籠せ、深志の城には馬場民部丞、多田治部右衛門、横田甚五郎是を守る。駿府筋鞠子の城は諸賀兵部丞、持船の城は朝日奈駿河守、田中の城は蘆田下總守是を守り、其外城々殘りなく軍兵を入置き、堅固に籠城したりける。木曾義昌、勝頼大軍にて向ふと聞き、信長公御父子に加勢を乞ふ。是に因て信長公甲州征伐の手分を定め、二月四日に打立給ふ。先中將信忠卿五萬餘騎、木曾口に發向ある。右大臣信長公は七萬餘騎にて伊奈口に向ひ給へば、金森五郎八三千餘騎飛彈口、參州勢三萬餘騎駿河路、北條氏政三萬餘騎關東口、思ひ〳〵に打立ちけり。爰に武田方伊奈の城は下條伊豆守籠りけるが、其家人下條九兵衛といへる者叛心を企て、織田方の河尻肥前守に内應して其人數を引入れしかば、大將伊豆守大に驚き、散々に成りて落ち行きける。是によつて伊奈郡郎時に織田家へ屬し、諸軍物始吉しと勇み進む。又武田方信濃國松尾の城主小笠原掃部助、織田家に降參し、信忠卿の侍大將團平八郎、森勝藏と牒し合せ、晴多寺口より引入れければ、團、森の二將先陣して散々に斬立れば、信州勢上を下へと騷動し、討る者麻のごとし。小笠原掃部助、所々に烟を揚て織田の勢を手引す。是によつて飯田の城を固め居りし葛西織部、保科彈正、叶はじとや思ひけん、十四日の夜、一戰にも及ばず城を捨て

木曽左馬頭
為安條そ
勝水と戦
圖

兵衛、名和無理之助等を始めとし、三千餘人憤死せり。是より武田家彌衰弊して、佞臣増々機に乘じ、恣に姦邪を行ふが故に、甲信駿の諸士及び農工商に至るまで、怨を含まざる者なし。されば信濃國木曾左馬頭義昌は、伊豫守源義仲の後胤にて、武田勝頼の從弟なり。信玄在世の時、武田の幕下に屬し、信玄が女を娶り、木曾の舊領を安堵して無二の腹心なりけるに、信玄沒して後、勝頼無道を行ひ、年々課役を增し、百姓を虐げぬれば、義昌深く是を恨み疎んじ、忽ち野心を發し、東美濃の住人苗木久兵衞尉に附て岐阜に到り降參して、甲州征伐の魁せんと乞ふ。岐阜の城主中將信忠卿、此事を父信長公に訟へ給ふ。信長公木曾が武田に無二の味方なることを知り給へば、疑うて是を免し給はず。爰において義昌、一子を人質に出して其疑を解く。木曾が家人千村左京といふ者、密に甲州に走り、義昌が叛心を勝頼に告ぐ。勝頼大に憤り、不日に軍勢を出し木曾を誅せんと、一族武田左馬助信豐、神保治部少輔等に七千餘人を與へ、木曾の城を攻討しむ。左馬頭義昌、鳥井峠の切所に待受け、一戰に勝利を得、武田の兩將散々に成りて甲州へ敗走す。爰に於て四郎勝頼益怒り、天正十年二月二日、嫡子太郎信勝、一族左馬助逍遙軒を始とし其勢二萬餘騎、甲州を立ちて、木曾退治の爲、信州諏訪の上原に著陣す。且織田勢の後詰せんことを計り、諸方の城々に軍勢を籠置かんと其手分をなす。先伊奈郡高遠

繪本太閤記　三篇卷之四

○武田勝頼之將士離散

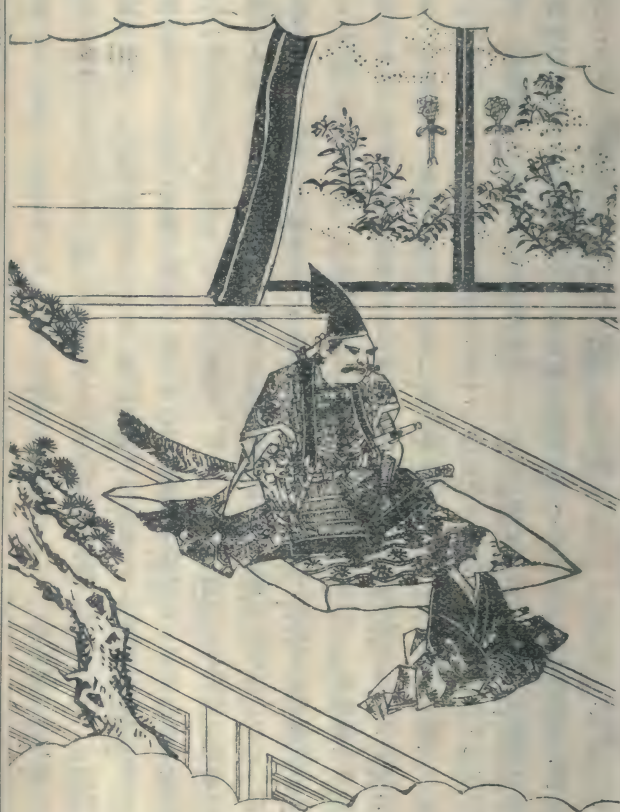
法令明ならず、賞罰信ならざる時は、是に金打とも止らず、之に鼓打共進まず、百萬有りといへども用ふるに益あらんや。甲斐、信濃、上野、駿河の大守武田大膳太夫晴信入道信玄は、日本無雙の猛將にして、兼るに仁智勇嚴を以て其威名を海内に振ひ、恐れざる者あらざりしに、昔日天正元年、參州の陣中において卒去あり。其子四郎勝頼父の世業を繼ぎ、四ヶ國の大守たりしが、勇武父に劣ざれども、其の生質正しからず、佞臣長坂左衞門入道長閑、跡部大炊介勝資兩人を寵し、彼等が言を聞て私慾に耽り、政道を亂し、惡行日々に增りければ、譜代の忠臣これを歎き、屢諫言なすといへども、勝頼曾て是を用ひず。爰において賢臣は遠ざかり、佞人は益寵を得、亡國の兆爰に顯然たり。去る天正三年、長篠において合戰の時、武田の滅亡を計知り、討死する輩には、武田兵庫助、山縣三郎兵衞、馬場美濃守、內藤修理亮、望月甚八郎、安中新藏、眞田源太左衞門、同兵部、土屋右衞門尉、高坂源五郎、三枝勘解由、横田十郎

繪本太閤記 三篇第四之卷 目錄

品々は、國久の御太刀一腰、銀子三千兩、吳服二百領、鞍置馬十疋、播磨杉原三百束、滑革二百枚、明石干鯛千把、野里鑄物數品、蜘蛸三十連、こと〴〵く白木臺に乘せ、前なるは早御門に入れども、跡なるは未だ山下に有り。信長公殿主より是を見給ひ、「彼大量大器者の羽柴筑前守が持參物を見よや」とて、近士等を召て見せしめ給ふ。見る物其夥しきを驚かずといふ者なし。信長公項を撫して、「誠に羽柴は日本無雙の大膽者なり。たとへ天竺震旦を討しむとも、否とは言じ」と笑はせ給ふ。偖御饗應として御茶の間には、波岸の畫大海の茶入を錺せ給ひ、相伴には惟住五郎左衞門、長谷川丹波守、醫師道三を命ぜられ、饗膳終りて御手自御茶を點じ下され、其後樣々の御物語おはしまして、歸國し御暇賜はるに、國次の脇指を下さる。是は御父織田備後守殿の御遺物なり。秀吉難有頂戴し、同二十六日、安土を立ちて姬路へこそは歸られける。

時に鬨を合せ、揉に揉で攻たりければ、纔なる小城、いかんぞや堪ふべき。忽ち降參し、秀吉が陣に來りぬれば、秀吉大に悦び、卽ち池田庄九郎同船にて、安宅木河內守を伴ひ、安土の城へ赴き、信長公に見參に入奉れば、信長公御氣色うるはしく、安宅木に本領安堵の御敎書を下し賜ふ。されば淡路國も一時に平均したりければ、十二月二日、秀吉軍勢を悉く引拂ひ、播州姬路へ歸城ある。同二十日、秀吉歲暮の御禮として江州へ赴き、二十二日安土に著し、菅谷九右衞門、堀久太郎を以て執達を乞ふ。信長公殊に悅び給ひ、卽菅谷、堀を以て秀吉へ云しめ給ふは、「今年諸所の軍陣、勤勞云計なし。夫をことともせず奇特の參勤、殆ど喜悅にたへず。今は往時の藤吉郞にあらず、國持の大名なり。明日饗膳を賜ふべき」條仰出さる。秀吉面目身にあまり、直に前御禮の爲め登城致されけるに、信長公此由を聞し召れ、「輕々しくも來るもの哉。久々見參なく床しく侍る程に、先今宵忍びて對面すべき間、夫に待せよ」とて、御袴を召させ給ひ、大廣間へ秀吉を召れ、御氣色いとも麗しく、筑前守、酷暑より嚴寒の時にいたつて長陣の勞もなく、遙々との登城、滿足限りなし」とて、御盃を下し賜ふ。秀吉謹んで頂戴し、信長公の安泰を賀し奉り、因伯兩國の軍物語數刻に及び、明朝登城有るべしとて御暇賜はりける。扨も秀吉此度登城の捧物數多き事なれば、告渡る八聲の雞もろともに、進物奉行下知を傳へ持運ぶ其

あまりの嬉しさに兎角の詞も出でやらで、只伏拜みて居たりけるゝ秀吉頓て暇を告げ、八郎を誘ひて姫路に歸城せられけり。明年天正十年正月十四日、直家終に病死しければ、盟約に違ずして八郎秀家を介抱し、家督相續なさしめ、終に備前宰將秀家とて、天下の大老職となりけるは、此八郎が事なりける。爰に四國の三好一統の中に三好山城守康長は、先年より秀吉が武威に服し、信長公へ降參し、頗る功勞少からず。其上一昨年、秀吉の甥秀次を山城守が養子とし、三好孫七郎秀次と號し、秀吉とは斷金の交あり。此秀次は中村彌助昌元が子にして、母は秀吉の姊なり。後年、秀次を秀吉が猶子とし、實父昌元を三好武藏守と名乘せ、入道して一路居士と號す。かゝる睦び有りける故、山城守秀吉に深切を盡す事他に越たり。此時秀吉淡路島を平定せんと思ひければ、彼山城守を招き寄せ、阿淡兩國の武士に利害を說せ、大半味方に降參なさしめけるに、由良の城主安宅木河内守一人、更に降參せず。依之山城守を案内として、秀吉大軍を率し淡州に下り、只一時に攻崩せよとて、池田庄九郎に一手の兵を與へ、城の搦手へひそかに廻し、惣軍大手の方よりひら攻に押寄せ、持楯竹策を突立てゝ、塀際近くなる儘に、數千挺の鐵炮雨のごとく打かくれば、城兵敢て挾間を開く事能はず、防戰難儀に見ゆる所に、搦手へ廻りし池田庄九郎之助、卒に起て鯨波天地を動かし、只一息に攻上れば、大手の方も同

深田正家秀吉に
孤を託する圖

粮を運び入れ、戰はずして退きたるは、我及ぶべき者にあらず」とて感歎して、馬野山の陣を拂ひ、本國さして引取りける。

○浮田直家孤託㆓秀吉㆒幷淡路征伐又歳暮登城

扨も羽柴筑前守秀吉、伯州を引拂ひ、姫路の歸路なるにより、備前岡山浮田和泉守直家を弔ふに、此時直家重病に臥て立つ事能ず、病床へ秀吉を請じ、痛氣を忍び對面す。秀吉も又直家が病を問て、頗る談話密なりける。此時直家雙眼に涙を浮め、秀吉に申けるは、「某重病を受て死せんとする事旦夕にあり。養子與太郎基家は、蜂濱の合戰に討死し、實子八郎は先達て君が方へ人質に出し、未だ幼稚なり。我死にたらん後、いかにも君の御計にて八郎を世に出し、人がましき忠戰をも勤め候ふべくば、かまへて我家を相續せしめ給へかし。此事君より外に訴ふる方なく、日夜思うて忘るゝ時なし。生前の迷ひ是のみに止れり。哀仁慈の心を以て我家名相續せしめ給ふならば、草の陰にていか計か嬉しからん」と、血の涙を流し頼みければ、秀吉も痛く哀を催し、「必ず心安かるべし。八郎成人の後は此國の國主と仰ぎ、浮田の家名の榮えん事某が方寸に有り。構て心を苦め給ひそ」とて、八郎を招き寄せ、浮田八郎秀家と名乘せければ、直家

樵夫杣翁の足痕もなし。後は橋津川の曲流縈回し、香象も渡りがたきに、只一條の橋を切落し、渡りの船は悉く碎きたり。秀吉遙に指さして、諸將に向て申されけるは「元春死地に陣を取り、川を後にし橋を斷ち、味方の大軍に當んとす。是韓信が背水の計なり。小勢なりとて輕々しく戰ひなば、味方大敗軍に及ぶべし。戰はずして退くにしくは有るべからず。先羽衣石、岩倉の兩城へ、兵粮を多く運び入れなば、後詰せずとも要害に支へ、落城する事あるべからず」とて、一萬五千人の逞兵を二手に分ち、淺野彌兵衞、蜂須賀小六を大將として、兵粮夥敷車馬に積載せ、暮過る頃より羽衣石、岩倉の兩城へ運びける。折節寒雪頻に降來り山路を埋み、人馬進みがたしといへども、淺野、蜂須賀嚴しく下知し、ゑい〳〵聲を合せつゝ、なんなく兩城へ運び入るゝ。吉川が軍兵、羽衣石、岩倉へ兵粮を入れさせなば悪かりなんと思へ共、頭上に秀吉の大軍陣を取り、今もや討て下るべき形勢をなせば、此兵粮を妨ぐべき暇もなく、徒に守居たりっ淺野、蜂須賀は首尾能く粮米を運送し、秀吉に斯と言上すれば、秀吉は今は心安しとて、翌十一月六日の曉天、蜂須賀小六に逞兵三千餘人を添へ、此所に殘し置き、羽衣石、岩倉の後詰となし、惣勢を引拂ひて姫路をさして退きける。吉川元春是を見て、「秀吉は拔群の大將かな。若大軍を頼とし、我と此所に戰ひなば、彼が軍兵大半は亡ぶべし。羽衣石、岩倉の二城へ兵

なし給ふ物ならば、南條小鴨の兩將、毛利の爲に落城すべし。吉川との合戰は是なくとも、兩城へ後詰の勢を遣され然るべしや」と申ける。秀吉打諾き、「我も左こそ思ひたれ。能術こそあんなれ」とて、頓て諸將を集め計略を申含め、惣勢四萬六千餘騎、わざと軍威を壯になし、千生瓢簞の馬印、五色の吹貫を眞先に押立て、烈風の如く進んで、羽衣石山に續きたる高山に取り登り、馬野山の吉川が陣を眼下に見下し、家々の旗指物嵐に吹靡せ、整々と陣を取る。吉川が軍勢是を見て大に騷ぎ、「秀吉の大軍高山に陣を取り、頭の上より討てかゝらば、生る者一人も有るべからず」と、早陣々備々、色めき立て見えにける。大將吉川元春大に怒り、「きたなき味方の形勢かな。大敵を恐れ、小敵を侮るは愚者のふるまひ、秀吉が軍勢たとへ幾萬騎ありとても、何の恐るゝ事是有らん。所詮心を一致にして討死と覺悟を定めよ。死を厭ふ者どもは、早く此所を落行くべし。たとへ我一人に成りたる共敵陣へ切て入り、秀吉と刺違んに何の難き事あるべき」とて、陣の後なる橋津川の急流に渡したる大橋を切落し、繫ぎたる船共を悉く打碎き、退くべき道を斷ち、一途に必死と下知をなせば、諸軍是に勵まされ、騷動は止にけり。時に秀吉は彼高山を攀上り、元春が陣所を見下すに、此馬野山の地形といつぱ、左は湖水漫々として、浩濤巨浪浸天、釣する漁夫、水馴し海士も渡りを苦しむ。右は巉巖岸崿として、崩岸邃谷、

ど、兎に附角に附、はかぐ〳〵しく集り來らず、凡一月餘りに漸く三千餘人群りて、彼是七千人には足ざりける。此小勢にて秀吉の大軍に向ひたりとも、いかでか勝利ある事あらんと、毛利輝元、小早川隆景を催すと雖も、これも又南方の敵九州の押へなどに事繁く、軍勢も多からざりければ、暫く勢を集めてこそとて事を果さず、早十月下旬に至りけるに、鳥取の城危急のよし追々聞ぬれば、今は何時までか見合すべきと、吉川元春七千餘人の勢を引て、同二十七日、同國馬野山迄發向す。然に鳥取の城昨二十五日落城し、式部少輔經家等生害に及びし由告來りし程に、元春大に驚き、今は必死と定めて、經家が吊ひ合戰、秀吉と有無存亡を爭んと、既に陣を進んとする所に、又々注進有りて、秀吉羽衣石、岩倉の兩城に籠たる南條勘兵衞、小鴨左衞門尉を見繼のため、當國へ來るの由告來れば、吉川元春、さらば此所に待受け、雌雄を一時に決すべしとて、馬野山に陣を居ゑ、秀吉の軍至らば打崩捨んずと、片唾を呑で控へ居る。秀吉の遠見の者此體を見て、早く秀吉に斯と告ぐ。秀吉味方の軍勢を顧て申されけるは、「吉川が軍勢、馬野山に陣を取りて我を待つ由、彼小勢なりといへども必死と定め、我大軍に當んとす、是恐るべきの甚しき者なり。無益の合戰に死武者と戰ひ、味方の士卒を失はんより、是より直に歸陣すべし」と。時に蜂須賀小六進み出て申けるは、「仰さる事に候へども、君此所より凱陣

俄に強き飯を喰ふ時は却て死する者なりとて、粥を煮させ、奉行を附てよき程にあたへければ、死する者更になし。誠に秀吉は人を殺すに忍びざる仁人かなと、心なき雜人までも、末頼もしく思ひける。扨も此首どもを安土の城に送り、鳥取落城の次第具に注進に及びぬれば、信長公御悦び斜ならず、秀吉が功勞を稱し賜ひ、式部少輔經家主從が首を安土の寺院に葬らせ、森下、中村、鹽屋、佐々木、奈佐等五人は、其首を獄門にかけられける。

○秀吉羽衣石岩倉城入二兵粮一

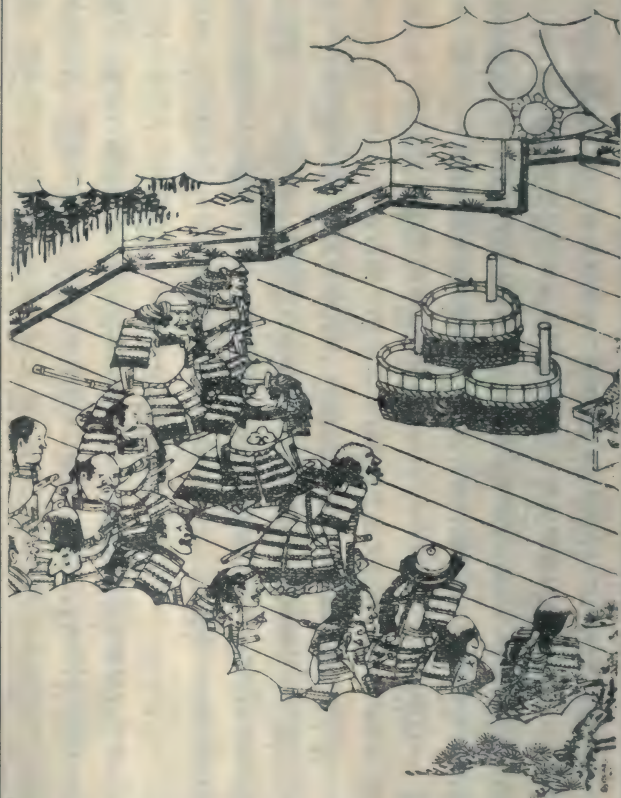
去程に羽柴筑前守秀吉は、鳥取の城を攻落し、當城には宮部善祥坊を留置き、先姫路に歸城せんとせられけるに、先達てより伯州南條勘兵衛が籠たる羽衣石の城、小鴨左衛門尉が居城岩倉兩城を、毛利勢大軍にて攻る事急なりと聞えければ、是又餘所に見なして置べき事にあらず、後詰をなして兵粮をも城中へ入るべしとて、長陣の勞をも厭はず、伯州さして出馬有り。是より先藝州吉川駿河守元春は、鳥取の城中困窮して、籠城かなひがたき由聞えければ、三千五百餘騎を引率し、鳥取後詰の爲まづ伯耆國八橋の城に至り、此所にて諸方の軍勢を催促せられけるに、鳥取落城すべき時至りけん、銘々自國の取合あり。或は重病に臥し、又は九州に赴きなん

有て自殺し畢ぬ。經家兩人の首を見て莞爾と笑ひ、腹十文字にかき切て、郎等靜間に命じて介錯せしむ。此時堀尾茂介、靜間に向ひ、「經家が首は殿下の御覽に入候間、念入れ介錯致さるべし」といふ。靜間諾して兩人に禮をなし、太刀拔持て立寄れば、經家辭世の和歌を口號む。

もののふの取りつたへたる梓弓かへるやもとの栖なるらん

かくなん詠じつゝ、刀を腹に突立ながら、兩手をつきて首をさしのべ、「靜間よくせよ」と詞を懸る。靜間心得、太刀を上て丁と切に、さしも譜代相傳の主人の首なれば、目くれ心きえて、太刀の討所も辨へず、切損じたりけるを、經家弱る氣色もなく、「馬鹿者、切ざるか」とて嘖りけるに、二の太刀にて漸く首を打落しぬ。扨福光小三郎、若鶴甚右衛門、坂田孫治郎、靜間諸とも檢使の所に進み出でて、「恐れがましき事に候へども、我々は式部小輔が厚恩を蒙りし者にて候へば、報謝すべき樣なし。三途川瀨踏の爲、御前を汚し候ふ」と云ひもあへず、一同に腹搔切り、刺違へてぞ失たりける。誠に主も家來も道を盡し死を潔くなしたりと、兩使をはじめ在合ふ者、感歎せぬはなかりけり。志淺からぬ者どもなればとて、是等の首も取り持せ、秀吉の本陣に立歸る。

扨又鳥取の出丸城には、鹽屋周防守、佐々木三郎左衛門、奈佐日本之助等籠城せしが、同時に切腹し死たりければ、城中に籠たる兵士男女に至る迄、悉く放出され、久しく米穀に餓たる者、

鳥取落城の図

傳の主君山名豐國を叛し逆臣なれば、一命を助くべからず。經家は森下、中村が爲に來り籠城せる者にして、聊も咎なき者なり。經家一人は切腹に及ばず、早く城を出て本國へ歸るべし」となり。淺野彌兵衞承り、此旨福光小三郎に達す。小三郎城に入てしか〴〵申す。依之經家重て福光を使として申入れけるは、「御芳志忝く候へ共、森下、中村が輩、山名に於て叛心の者なりと雖も、毛利家にては歸忠の者にて候。是等の輩を捨殺し、某一人何ぞ命を全くし本國へ歸るべき。あはれ三人ともに切腹を免ぜられなば、此上の面目はあらじ」と申す。秀吉殆ど感心にたへず、望みに任せ、三人の妻子從類を先とし、一城の者悉く命を助け候條、相違有るまじき返答に及び、猶美酒三樽、海魚數尾を城中へ送り、切腹の定日明廿五日早天と極め、福光を城内へ歸されければ、經家大に悅び、「我々秀吉に降參し切腹を免ぜらるゝ上は、此酒肴も君より賜りたるなり」とて、裝束を改め諸卒を集め、「今度の籠城、晝夜の辛苦、其忠節忘れがたし。今天命盡て爰に至れり。是即ち毛利家に對しては忠死なり、諸人の命に代らんは仁死なり。何事か此悅びにしかんや」と、到來の酒を以て盃を廻らし、諸卒の勞を慰めらる。翌ば天正九年十月廿五日、檢使として堀尾茂介、一柳市介兩人城中に至りぬれば、式部少輔經家、慇懃に禮を行ひ、客殿に請じ、茶菓を以て是を饗應す。此間に森下出羽入道、中村對馬守兩人、各番所に

もあり。馬の肝を喰ひたく、年來祕藏せし太刀刀を是に換てたび候へと詫悲む體、目も當られず哀なり。わきて不便なりけるは、柵を乘越え遁出んとする餓鬼共を、寄手より鐵炮にて打殺し侍るに、まだ死やらで片息なる者を、軍民群集りて、小刀又菜刀、或は鎌なんどの物を持來り、繼節を放ち削り喰ふ事、恰も屠者の牛馬の皮を剝取に異ならず。佳味は首にや有りけん、爭ひ奪ふ事甚し。彼といひ是といひ、哀なりける形勢なり。是を見て吉川式部少輔、森下、中村兩人に相議しけるは、「城中形のごとく困窮して、今此急難を免るべきやうなし。毛利の援兵いまだ來らず、涸魚の身と迫り、罪もなき軍卒男女、かくのごとく餓に臨ましむる事、我々が不仁にあらずや。所詮秀吉に乞て諸人の命を助け、我輩切腹して死せんと思ふなり。足下達も究めて、其覺期成すべし」といふ。森下、中村今更十方にくれけれども、又施すべき計もなく、一向毛利の援兵なき事を恨み、澁々ながら承引すれば、式部少輔大に悅び、頓て福光小三郎を以て秀吉へ申遣しけるは、「溽暑の比より當地に對陣有りつるに、珍らしき術にも及ばず、箕裘の業空きに似たり。然ば某等籠鳥の身と成りて、雲を戀るに便なし。諸人の餓莩不便に侍る事、申すにも及ばれず。然る間某等切腹いたすべきの條、籠城の者ども悉く助け下されかし」とて、淺野彌兵衛迄申入れければ、淺野頓て秀吉へ斯と訴ふ。秀吉答へ申されけるは、「森下、中村は相

扨も寄手の築地の内には、十町計町家を建て、因幡、伯耆の商人市を立て、餅酒魚類、山野の菜物、己がさま〴〵營み商ふ。是に依て寄手の軍資、乏しき事曾てなし。其中に一夜情の草枕、とめてうさをも慰むる、浮女を鬻ぐ家もあり。然あれど大將の號令嚴なれば、又亂に及ぶに至らず。彼湯王の軍場には、市に行くものは止らず、耕ものは變ずと申けるも、斯こそあらめと思ひ知られ、いと有難き事なりけり。秀吉或夜話の次に申されけるは、「あはれ藝州より後詰の勢の出こよかし。悉く打崩し、直に安藝國に攻入て、嚴島詣せん」と勇れけるを、聞者ともに心のいさみ立ち、「秀吉はよき大將かな。氣味よき事古今に類なし」と、打寄りて語合ける。

○鳥取落城

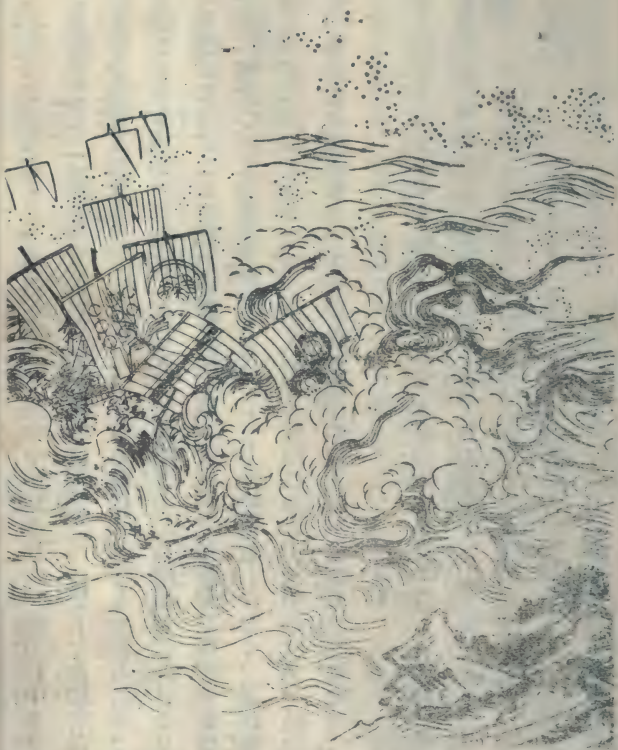
さても鳥取の城中には、七月上旬より今十月中旬に至れども、毛利家より後詰の勢も來らず、就中兵粮の通路を立切てられ、若干の軍民悉く餓莩し、誠に餓鬼道の形勢もかくやと思ふ計なり。色黑く痩衰へたる男女數多よろぼひ出で、「助けてたべ〳〵」と呼り叫ぶに、其聲高くは聞えざれ共、何となう物悲しく、中に苅田せし稲株を上食とや思ひけん、とり〴〵に爭ひ合うて氣を取り失ひし者もあり。後にはかやうの物も皆盡果て、馬を刺殺し喰ひ、馬肉に醉て死する

爰に敵の伏兵あり、打破つて通らんとて、半弓を取つて森の中へ放ちける。忽ち林中より鐵炮夥しく打出し、二百餘人の伏勢一同に起り、蜂須賀、加藤を追取捲き、餘さじと揉だりける。小六、虎之助弓に矢番ひ、矢繼早に切て放つに、暫時に敵十七八騎ばら〳〵と射倒したり。矢種既に盡ければ、太刀拔かざし多勢の中へ切て入り、四角八面に薙立れば、蜂須賀に隨ひし日比野六太夫、川口久介、加藤が郎等井上大九郎、木村又藏、森本義太夫、飯田覺兵衛、一人當千の勇士我劣じと切先を並べ切立つれば、城兵多勢なりといへども此勢に敵しがたく、亂れ騷ぎて城中へ引入ける。兩人が手に討取る首十六級、早く引取り本陣に參じ、城中の次第、敵の伏兵悉く言上しければ、秀吉大に感心あり、手自砂金一握づつ兩人に下し賜り、卽虎之助に感狀を賜る。其文に曰く、

今度因幡國鳥取之城、爲可攻崩著陣畢。爲斥候遣候刻、有伏兵以半弓射退敵軍、猶太刀討之高名、誠以神妙之至也。因玆爲加增百石宛行之畢。彌於抽軍忠、可加增者也。

天正九年七月　秀吉判

加藤虎之助殿

淺野彌兵衛
粮船を
打潰ルの
圖

勢を以て大敵に當るは、要害によつてこそ勝利あるべし」とて、經家が計議に應ぜず、日夜毛利の後詰を待居けり。此事先だつて藝州へ聞えければ、吉川元春、小早川隆景、後卷の勢を出し鳥取を援はんと、斥候を出し伺ふに、秀吉の陣々、兼て後援の備へ有りて、容易に近寄がたしと申すにより、「元來鳥取は無雙の要害にて、兵粮だに不足なくば、いかに攻るとも落城する事有るべからず。急ぎ兵粮を送るべし」とて、二十餘艘の兵船に粮米を積乘せ、鹿足民部小輔、新見左衞門尉、有地右近を奉行とし、鳥取近く漕寄せたり。寄手船手の大將淺野彌兵衞是を見て、大筒を以て彼粮船を打碎く。鹿足民部是が爲に打碎かれ、忽ち船諸共微塵に成て失たりける。是を見て新見、有地大に驚き、急に船を漕ぎ戻し、藝州さして迯行くを、淺野が用意の軍船二十餘艘、一度に纜を解き、鬨を作て是を追ふ事二里計、毛利方粉の如くに成て迯歸り、重て兵粮を送らん術もなく、安閑として眺め居れり。爰において鳥取の城中、次第に兵粮乏しく成り、行末いかゞ有らんずらんと、兵卒保き心更になし。秀吉敵城の强弱を伺はしめんと、斥候として蜂須賀小六正勝、加藤虎之助清正兩人を遣しけるに、城中早く是を見知りて、逞兵二百餘人、密に出て城の傍なる森の中に埋伏し、斥候の敵を引包んで討取んと、鐵炮を持て待懸たり。蜂須賀、加藤敵城近々と進み寄り、城中を窺と伺ひ居けるが、虎之助此森の中を訖と見て、

繪本太閤記　三篇卷之三

○秀吉圍二鳥取城一

情は恩の爲につかはれ、命は義によつてかろしとかや。扨も秀吉の大軍、鳥取の一城を、稻麻竹葦のごとく取圍む。其軍威盛んにして、法令又嚴重成りしかば、城中の兵士男女、誠に網裡の魚、檻中の獸、逃れつべうも見えざりけり。されども城兵兼てより思ひ設けたる事なれば、少しも恐る色なく、敵寄せば嚴しく防ぎ戰はんと、腕を撫て待けれ共、羽柴が軍勢四方を圍みける計にて、露も合戰を催さず、夜に入ては摩尼帝釋山の本陣にて、横笛を吹き、簫をしらべ、又或時は和琴の音、浦風につれて城中へ聞えければ、兵卒肝を碎き腸を斷ち、舊里を慕ひ妻子を思ひ、彼漢の張良が、洞簫を吹いて楚の兵を碎きけんも、斯や有らんと覺えける。此時城將吉川式部少輔經家、森下、中村に向ひ、「かく合戰もなく徒に日を重ねば、城中兵粮盡て難儀なるべし。今宵寄手の陣を夜討して、敵の軍威を挫がん」といひけれど、森下、中村敵の大軍に恐れ、是に隨はず。「毛利の後詰來りなん時、内外より揉合せ、雌雄を一時に決すべし。小

繪本太閤記 三篇第三之卷 目錄

毛利家よりの後詰の勢を押へんとて、秋里村といふ所に城をかまへ、杉原七郎左衛門、脇坂甚内、一萬餘人にて是を固む。又濱邊には淺野彌兵衛、三百餘艘の兵船を繋ぎ、船幕船印浦風に吹なびかせ、是も海路の敵を防がん備なり。丸山の東口には羽柴小市郎秀長、増屋讃岐守、山名但馬守等、北の山には鹽谷駿河守、武田源治郎、龜井新十郎、磯部美濃守などの勇將等、透間なく陣取し、幾年在陣したりとも屈すまじき形勢は、夥しくこそ見えにけり。

專ら籠城の用意をなす。時に秀吉の大軍近くおしよせ、城の形勢を伺ふに、元來此城の要害、四方離れたる嶮岨の山城にして、殊更因州は北より西へ溟海續きなるに、鳥取の城、西の方海手の間僅に二十五町相隔て、西より東南の方は大河夥しく流れ落ち、水深き事計るべからず。此間に繋の城を構へ、海口にも二ケ所の砦を築き、毛利家よりの後詰の兵を引入るべき支度をせり。秀吉つく〴〵是を伺ひ見て、翌廿六日の夜の評定に、諸將に向ひ申されけるは、「此城要害堅固なりと雖も、兵多くして兵粮乏し。遠巻して食攻にし、毛利家より兵粮を城に入れんを堅く防ぎて奪ふべし」とて、秀吉は城の東に摩尼帝釋山の高嶺に攀登り、此山上を本陣として、西には中村孫平治、山名大藏太輔豊國、黑田官兵衛、木村隼人、加藤作内、東の方は信長公の御加勢一萬餘人、雁金山に織田の坊官宮部善祥坊、備前國浮田が人數浮田七郎兵衛、岡越前守、明石飛彈守、長船紀伊守、福田五郎左衛門、楢原監物等八千餘人、次第を守て陣を取り、頓て二ケ所の繋城の間をも悉く取り切り、鹿垣を結廻し、隍を掘り、塀を附け、芝土手を高々と築せ、透間なく櫓をあげ、大將分の陣屋々々も高櫓丈夫に構へ、後巻の用心に、後陣の方にも同く高塀深隍を造り、柵を結ひ逆茂木植ゑ、前後二里計の間に絶間なく築地ありて、其陰に陣屋ひしと造り並べ、夜は篝火挑灯白晝の如く焚せ、夜番、廻番、遠見の役人怠りなく是を守れり。扨藝州

を稱し、姥口といへる釜を賜り、盛政を加州尾山の城主となし給ふ。其外越中の國へ佐々内藏助盛政を下し給ひ、平均せば國を領し守護すべき旨命ぜらる。能登國は前田又左衞門利家を遣はされ、是も同き御下知なり。猶又秀吉にも御下知有りて、早く中國を平定して、探題たるべしと令し給ふほどに、秀吉畏り、天正九年六月二十五日、大軍姫路を打立て因州に赴き、在々所々を放火し、鳥取の城を取り圍む。舊此因幡國は山名大藏太輔源豐國、先祖より年久しく領し來る所なり。然るに豐國柔弱にして、毛利家に國中を掠め取られ、此時一郡をすら領する事かたし。是に依て毛利家に降參して、時の勢を見合せける。然るに先達て秀吉使者を以て豐國を味方に招く。豐國是を幸なりと悅び、忽ち織田家に屬し、此鳥取の城に楯籠る。時に豐國が家臣森下出羽守中村對馬守逆心を企て、毛利家へ一味し主人を追出し、鳥取の城に籠り勢を張り、毛利の加勢を得て終に因州を押領せんとす。豐國忽ち秀吉が許に來りて次第を物語す。爰に於て秀吉、大軍を以て先此鳥取に向はれける。是より先に鳥取に籠城したる森下、中村兩人、秀吉が大軍にて押寄せ來る由を聞き、毛利に訴へ、大將一人申賜るに於ては、城主と仰ぎ防戰すべく旨申けるにより、毛利輝元より一族吉川式部太輔經久に、今田孫十郎を相添へ、兵卒凡五百餘人、鳥取に著城す。森下、中村大に喜び、其勢都合四千餘人、矢石を備へ鐵炮を構へ、

秀吉使者佐久間信盛と柏郷村を弔ふ圖

まに捨置れけるが、此序を以て同く流罪に處せられける。秀吉姫路に有りて此由を聞き、敵國滅して謀臣亡ぶと、竹中が最期の一言、漫に思出でられ、「君子の人を仕ふ、舊惡を咎めずとかや、林、安藤罪ありと雖も、二十餘年、志を改め、怠なく仕參らせ、今以て叛逆の心あるべしとも覺えず。佐久間信盛偏執の心深く、させる軍功なしといへども、又追放せらるべき罪とてもなし。今天下を三分にして其一を得給ふ信長公、早くも老臣等を改易し、心の儘に行ひ給ふこそ、かへす〴〵も薄情けれ」と、深く是を歎息し、私に人を遣して林、安藤、佐久間等に金銀米錢の贈物をなし、聊か辛苦を慰めければ、皆淚を流して悅けり。殊更佐久間信盛は、日頃秀吉が出頭を偏執し、其武功を妨げ計略に違ひ、兼て不快の中なりしが、今零落の時に到つて、つね〴〵睦じかりき傍輩朋友はいふも更なり、親類家人に至るまで、誰か訪ふ者なきに、秀吉一人、恨を思はず、却て金錢を送り、困窮を助くる仁情、何人か是を感ぜざらん。聞者皆秀吉が厚情を稱し合り。佐久間玄蕃盛政は、信盛が甥なりければ、此時纔に咎をも蒙るべきを、柴田勝家が爲にも內緣の甥にして、取譯け勝家がいつくしみ深く、其上玄蕃生得武勇逞しく、加賀越前にて度々武功有りければ、信長公も是を感じ給ひ、其儘に咎もなし。今度勝家盛政兩人より、加賀の一揆を討て、賊將の首十九安土に獻じ奉れば、信長公大に悅び給ひ、勝家が武功

なりと深く憤り給ひ、書立を以て數ヶ條を責誡め、楠長菴法印友閑を使者として、天王寺を追出されければ、佐久間父子大に驚き、今更途方に暮けるが、又いかんともすべきやうなく、僅に黄金二十枚を懐にし、腰に差たる刀差添の外は身に隨ふ者もなく、高野山を志し、すごすごと立出でける心の內、推計られて哀なり。日頃召仕れし家人共も、皆ちりぢりに成り行きて、僅に附添ふ者三人にて高野山へ登る程に、さてしも賴み思ひし三人の家人も、いかに見捨たりけん、二人迄暇を乞て去りければ、高野山にも居りがたく、一萬騎の大將なりし信盛も、今は一僕に手を牽れ、高野山の辰巳なる相鄕といふ小村に辿り著き、暫爰に住みたりける。同十七日、信長公京都に歸り給ひ、又林佐渡守、安藤伊賀守を遠流せらる。此林佐渡守は、信長公の御父備後守殿より附置れて、信長いまだ三郎殿と申せし時より四家老の一人なりしが、弟美作守が叛逆に與し、那古野の城にて信長公を討奉らんとす。信長公武運目出度く、此災を免れ給ひ、忽ち誅し給ふべきを、父君より附けられ給ひし老臣たるを以て、此二十餘年憤を忍おはしけるが、今天下漸御手に屬するに到て、林が死罪を宥めてかくの如く遠流せらる。又安藤伊賀守は、先年武田信玄と心を合せ、信長公を討まゐらせんと謀りし事、世にかくれなかりけれども、其時天下いまだ定らず、味方の將士を殺さん事、敵國の思はん事も恥かしとて、其ま

毛利勢の後へ廻り、歸路を斷切り、挾みて討んとす。秀吉の勢三萬五千餘騎、不日にして打立つべきよし頻に沙汰せしめければ、小早川隆景此事を聞き、安からず思ひ居けるに、彼蜂須賀が先手の兵船、備前の地へはよらずして、毛利家の後へ迫る體に見えければ、隆景いよ〳〵驚き、敵に後を立切なば頗る難儀なるべしと、俄に蜂濱の陣を引拂ひ、麥飯山まで引取りけるが、爰にも溜り得ず、終に藝州へ引入ける。爰において蜂須賀も其儘に船を姫路へ漕戻し、爾々のよし秀吉へ言上しければ、秀吉さればこそとて手を叩て笑はれける。

○信長公舊臣等被㆓改易㆒幷秀吉因州發向

是より前天正八年の秋、攝津石山本願寺と織田信長公、數年合戰止む時なかりしを、朝廷の御扱ひを以て、和平すべき由兩家へ勅使を賜ひ、終に本願寺顯如上人、石山の城を開き、鷺の森へ移り給ひぬれば、信長年來の宿怨を散じ、悅び給ふ事限なし。石山の城見分有べしとて、八月二日、安土を御立有りて、京都より宇治に到給ひ、船にて大阪に下向有り、諸事の仕置を定め給ふ。其中に佐久間右衛門尉信盛、子息甚九郎父子に、七ヶ國の軍勢を與力に加へ、天王寺の城に置れしに、是程の小敵に向ひ、仕出したる事もなく、軍勢を疲しける事、勇威なきふるまひ

勢に横鎗を入て突立れば、此時浮田が軍勢負色立て見えにける。蜂濱に殘り居たる浮田與太郎基家、血氣壯んの若武者なれば、味方の兵を討せじと、白絲にて縅たる小具足に、とつぱいの兜を著し、黑き馬に跨り、鎗を振て味方を勵し、無二無三に切て入れば、毛利勢開きなびきて、良負いろ見えたりけり。與太郎基家が運や盡たりけん、誰が放つとも知らぬ金丸一つ飛び來つて、基家が胸板を打拔たり。何かは暫もたまり得ん、馬より落て死ければ、毛利勢一統に鯨波を作り、喚き叫んで切立つれば、浮田方殆ど戰ひ屈し、散々に成て敗走す。此時姫路の城より秀吉が命を受け、淺野彌兵衞長政三千餘人、兵船に取乘り、備前の兒島へ來りけるが、思ひよらざる大合戰なりければ、何かは少しも猶豫べき、ひた〳〵と船よりおり立ち、英卒勝つて二千餘人、横合より嚾と喚いて討てかゝれば、備前勢大に勇み、色を直して戰ふ程に、中國勢さんざんに討なされ、麥飯山まで引取りければ、戰も是迄なりとて、浮田勢、淺野が勢、勝鬨を作つて軍をまとめ、蜂濱の城へ入りにける。此事中國へ聞えければ、小早川隆景二萬餘騎の大軍を率し、蜂濱表へ發向す。直家も自二萬餘騎を率し蜂濱を助け、猶も姫路に訴へて秀吉に加勢を乞ふ。秀吉忽ち謀計を構へ、蜂濱後詰の爲秀吉自ら大軍にて向ふよしを觸流し、諸方の軍兵を招き集む。扨先手として蜂須賀小六を大將とし、五千餘人數百艘の兵船に取乘り、海上より

左衛門、池田八左衛門、浮田修理助三千餘人を籠城なさしめ、隨て中國へ切入らんと、其用意樣々なり。毛利家是を聞て、蜂濱より四十餘町を隔て麥飯山といふ所に向城を築き、浮田勢を支べしとて、有地美作守、古志淸左衛門、村上八郎左衛門等に三千餘人を差添へ、城の普請を急がせける。すべて戰國の有樣にて、或は遠國へ軍兵を出し、又他國を犯し掠むるには、勝敗を一時に決せん事を需むとすれども、是は自國の取合にて、年月を累ねても味方の損亡なき事を專とすれば、互に城をかまへ砦を築き、緩々と征せんとす。されば毛利勢三千餘人、石を運び土を荷ひ、城の普請最中なるに、浮田勢是を妨げんと、はやり雄の若者三百計押寄せ、鐵炮を打かけ合戰を始む。中國勢兼て期したる事なれば、此方よりも五百騎計かけ出で、宮の森といふ所にて雙方鎗を合せ、火花を散し戰ひける。是を見て蜂濱の浮田方、「敵は大勢なるぞ。味方討せて詮なし」とて、五六百の軍勢走出て戰へば、毛利方にも又數百人の逞兵を出し、追つ追れつ、時移るまで戰うたり。浮田の大將戸川肥前守秀治、よしなき若者等が無益の合戰を仕出し、味方を勞らし何の用にか立やらん、引上て歸るべしと心怒り、手勢を引具し驅出れば、其外の輩も戸川が馬を出す上は、我劣じと駈出し〳〵、其勢既に二千餘人に餘りたり。毛利勢かくては味力叶まじと、麥飯山より穗田伊豫守、村上八郎左衛門、有地美作守、是も同く二千計、浮田

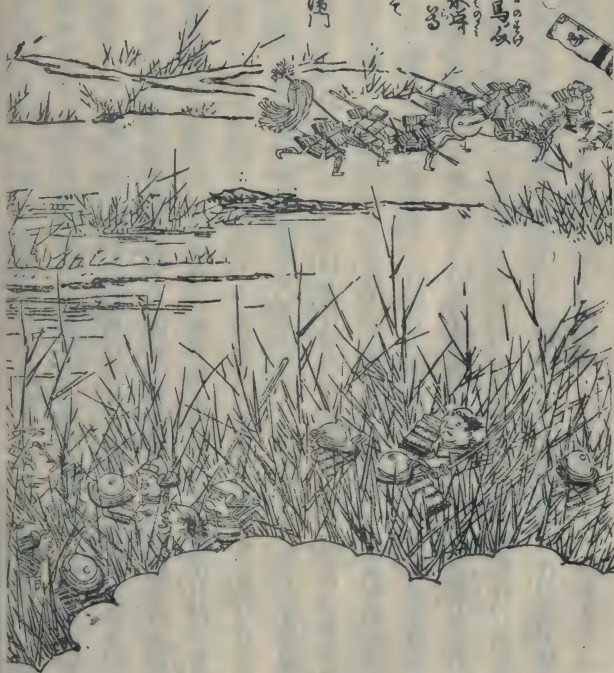
ひしが、赤井終に力盡て半四郎に討れたり。殘兵一人ものこる者なく、高見、保月の兩城忽ち平定したりければ、枝城に籠る輩、あるひは落行き又は討れ、丹州一國悉く平均し、皆光秀が下風に隨ひ、丹州に三十六萬石、西近江に十八萬石、合せて五十四萬石を領し、威勢遠近に震ひける。

○備前蜂濱合戰

中れる哉、羽柴筑前守秀吉、其身賤き民草の中より出て、信長公に仕へ參らせ、朝には固き城を破り、夕には剛き敵を碎き、進み難き先鋒、退き兼たる殿を仕課せ、加之遠き計策を設け、其君をして保きに居しめ、上に事りては朝廷に功を盡し、下に令を下しては四民風に臨で來り懷く。其臣下たる者は皆命を以て此人に捧げ仕ふ。されば今天正九年の春に到て播州悉く平均し、姫路に在城して武威を四方に輝し、仁德を中國に布く。依之鄰國敢て敵する者なく、伯州の南條、小鴨も秀吉に屬し、其餘の城々一郡一村の主たる者、皆降を羽柴の門に乞ふ。就中備前の大守浮田和泉守直家、新に織田家に屬しぬれば、功を立て誠心を顯はさんと、蜂濱といふ所に城を構へ、弟濱田七郎兵衛忠家、猶子與太郎基家を大將とし、戶川肥後守、足立太郎

じ八方に廻り、斬立て薙立する程に、赤井勢討るゝ者數を知らず。此時妻木主計頭、荒木山城守兩人は、手勢引具し保月の城へ押寄せ、城を乘取り、本丸に火を放ち燒立るに、福知山に控たる明智十郎左衞門、四王天但馬守等、高見の城を乘落し、是も同時に火を懸たり。依之赤井の軍兵退くべき途もなく、又進むべき所もなし。何所を宛とも定めずして、思ひ〳〵に落行けり。されば大將赤井五郎は、數ヶ所の手疵おひながら、南なる山手を傳ひ、播磨の方へ落行ける。赤井惡右衞門景遠は、五十餘人に討なされ、居城をさして引けるが、保月の城早火の手の上りければ、今は偖とや思ひけん、馬の頭を立直し、五十餘人を左右に立て、討死と覺悟して、敵を向へて控けるは、流石西丹波にて名を得たる、勇武の程ぞ知られける。惟任勢勝に乘り、眞先に明智左馬介、溝尾庄兵衞、松田太郎左衞門等六百餘人、備を亂し追來るを、惡右衞門會釋もなく切て入り、當る者を切り廻るに、只一人に切立てられ、寄手の大勢四方へばつと迯散たり。惡右衞門圍を出て味方を見れば、十三人ぞ殘りたり。今は是までぞと、郎等に防ぎ矢させ、自害せんとしたりけるに、又惟任勢雲霞のごとく集りて、餘すまじと揉たりければ、惡右衞門大に怒り、鎺元まで血に染たりし大太刀眞向に指かざし、二度敵の大勢を追なびけ、勇を震うて戰うたり。明智左馬介が郎等林半四郎といふ剛の者、惡右衞門と渡り合ひ、半時計戰

惟任が弱兵を破り、八幡山の陣所に火を懸たりと覺ゆるぞ。いざや先手に押續き、分捕せよや者ども」とて、大將赤井惡右衛門景遠、紺絲縅の鎧に、龍頭を居たる白筋の兜を著し、これや赤兎馬共いふべき火よりも赤き荒馬に、貝鞍置てぞ乘たりける。其外中澤、赤松、眞島等の勇士、我劣らじと爭ひすゝみ、門野川を乘越して、迯る敵を追たりける。高見の城主赤井五郎も、同く城を出て是を追ふ。幕下の勇士浦上、衣笠、大河原などを始とし、兩城の逞兵合せて二千四百餘騎、天地も崩るゝ計鬨の聲を發し、「あますな洩すな」と呼つて、揉にもんでぞ追たりける。此時兼て萱原に埋伏したる明智左馬介、同治右衛門等七百餘騎、俄に起りて鬨の聲を發し、二手に分れて敵の眞中を横鎗に突崩し、無二無三に驅立れば、寄手の大將光秀遙に此體を見て、采配打振り、「返せや者ども、かへせや」と下知しけるに、今迄迯たる松田、溝尾、並河、中澤、諏訪、山本、荻野、波々伯部が輩、一同にどつと取てかへし、鎗衾を作つて群る敵を突崩し、喚き叫で戰うたり。赤井が軍勢聲々に、「敵は謀計を構たるぞ。引や〳〵」といふ程こそあれ、主討るれども是を助けず、親鬪ふに子救はず、右往左往に散亂し、我先にと迯迷ふを、惟任方の勇士剛卒、得たり賢しと切て廻り、東西へ破り南北に追靡け、能敵と見るを、馳ならべて組で落ちては首を取り、相ぬ敵と思ふをば、一太刀打ては馳散し、一所に合せ左右に別れ、四方に散

明智左馬介
村上和泉守等
埋伏して
赤井悪右衛門
を討図

等に、「手勢を引て敵の出たる城へ押寄せ、乗取べし」と申遣し、九月十九日の早天、足輕二百餘人赤井方の陣所に進寄り、一同に鐵炮を放ちかけ、鬨を作つて押寄せたり。赤井が先手騎馬の兵是を見て、逆茂木を引退け六十七騎、喤と喚いて驅出ければ、寄手の足輕散々に成て迯散たり。開田太郎八、加成淸治郎、下河邊藤右衛門以下二陣の寄手入替りて、鐵炮を打掛け戰ふ程に、赤井方の馬武者五六騎忽ち討ち落され、少しひるみて見えたる所を、「續け引な」と呼つて、赤井の後陣より數百人馳加り、透間もなく戰ふにぞ、寄手またちり〴〵に成て迯たりけり。惟任方の將松田太郎左衛門、溝尾庄兵衛、諏訪飛彈守、並川掃部介、「きたなき味方のふるまひかな。軍は角こそするものなれ」と大音に罵つて、馬印を押立て一文字に切つて懸る。赤井七郎左衛門、伊田美濃守、赤松刑部少輔、向へ合して火を散し戰ふ程に、以前の廣言にも似合ずして、松田溝尾が勢さん〴〵に成て迯出せば、旗指物も打絞り、押倒し突殺し、周章ふためき本陣さして引取りける。赤井勢計策とは夢にも知らず、いよ〳〵勇み鯨波を作り備を亂して追駈たり。光秀は此形勢を見て、本陣も崩れ立たる體にもてなし、四手陵竹の馬印取亂れ、水色の九本旗もさん〴〵に打倒れ、八幡を南へなだれ崩れて引たりけり。進士作左衛門、比田帶刀は、陣屋々々に火を放て一同に燒立ければ、光秀が案の如く、保月、高見の城中より是を見て、「味方の軍兵

是を征伐すべしとて、大軍を引率し、八幡山迄出張し、備を鶴翼に建て、陣小屋を茂く作り並べ、長陣の用意をなす。赤井惡右衞門此形勢を見て、惟任が軍立何の恐るゝことあらんと、赤井七郎左衞門、同彦兵衞、伊田美濃守、久下彌左衞門、作用左衞門尉、本庄新左衞門等を大將とし、其勢一千餘人、城より廿餘町出張して、勇氣を含んで控たり。光秀が先陣左馬介光春、足輕を懸て戰ふ事數日に及ぶといへども、兼て光秀が下知によつて、城兵を悉くおびき出して討んずる計略なれば、光春態とよわ〳〵と會釋たり。城方には去年の勝軍にならひて、毎度競ひかゝつて戰ふ程に、寄手敗する事多くして、討るゝ者も又少なからず。是に依て赤井が兵士勇み喜び、一時に惟任勢を討崩せとて、追々城より靉出けるを、八幡山より大將光秀克々窺ひ見て、諸將を集て竊に下知しけるは、「伏兵を以て敵の不意を擊べき時節到來せり。明智左馬介、村上和泉守、御牧三右衞門、明智治右衞門、三宅藤兵衞、伊勢與三郎、六頭の將は、敵の前なる萱原に二手に成て埋伏すべし。松田太郎左衞門、溝尾庄兵衞、諏訪飛彈守以下は先手に進み、敵と鉾先を交へ、僞り負て引取るべし。妻木主計頭、荒木山城守は八幡山の後の谷合に隱れ、遊軍と成て我下知を聞て討て出べし。進士作左衞門、比田帶刀は諸軍の小屋々々に火を放ち、迯行く體を敵に知せよ」と、手分既に定りければ、福知山に殘し置たる明智十郎左衞門、四王天但馬守

之助、同新兵衛、中桐小左衛門、木村八兵衛、星崎刑部右衛門等究竟の兵五十餘人、本丸の城戸を支へ烈く戰ひ、皆討死をしたりける。此時旣に寄手の大軍明智左馬介、細川刑部太輔、松田太郎左衛門、溝尾庄兵衛、四王天但馬守、我も〳〵と亂入し、本丸の櫓に火を附たりければ、炎四方に飛び、黑煙空中に立登る。依之大將福井因幡守貞政、持佛堂の前に坐し、妻妾を刺殺し、其身も腹搔切て夕の露と消たりける。光秀大に悅び、奥田宮内を以て此城を守らせ、軍をまとめ龜山へぞ引取りける。

○光秀陷₂鹿集黑井餘田之三城₁

惟任日向守光秀、丹波一國を賜り、入國して是を征伐せんとするに、東丹波僅に平治せるといへども、一郡一城に寄て兵を集め鄕民をかたらひ、國主光秀に敵對せんと計る輩、いくばくといふ數を知らず。其中に手に餘るべき構へして籠城しけるは、野口の城、八鹿部の城、放鹿部の城、篠山の城、草山の城、福知山の城、綾部の城、氷上の城、八上の城、鬼ヶ城なんどの要害に支へて敢て服せず。依之光秀大に怒り、悉く踏崩し微塵になして捨べしと、兵四千餘人に及びければ、度々近鄕へ打出で猛威を震ひける。其年も暮れ、翌天正七年秋九月、光秀

高田邊の城に住し國政を執行ひ、光秀も本國丹波國へ歸城しけり。同十月丹州福知山及び近邊の鄕民、龜山へ訴へけるは、當鬼ヶ嶽と申す所に城を築き、釋迦牟尼佛勒負、宇津大和守、同下總守、仁木左衛門、中澤將監、和田加兵衛、名倉主水などいへる勇士楯籠り、上下の兵士三百餘人、日每に村里を徘徊し、錢財を掠め婦女を犯し、迷惑仕候間、御誅罰下されなば難有候由、追々申出けるにぞ、光秀さらば彼地へ發向し、逆徒を退治すべしとて、同月廿八日、數千の軍兵夜もすがら支度し、丑の刻に先手を進め、明る卯の刻計に鬼ヶ嶽に押寄せ、さしも嶮岨の山城へ無二無三に攻登り、紆立て討ける程に、城中不意の事なれば、防ぐに途方を失ひて、搦手の門を開き、士卒ども我先にと迯行にぞ、大將分の者等必死に成て防ぎ、巳の刻計に城戸押開き七八十騎打て出で、鎗玉を取て聲々に姓名を名乘り、多勢の中へ突て出で、必死に成て戰うたり。城兵勇なりと雖も、寄手は多勢入替り〳〵、四方を圍みて戰ふ程に、二十五六騎討死し、城中へ引入らんとする所を、明智治右衛門光忠嚴しく下知して、附入にせよや者共とて、眞先に進みかけ入るにぞ、逞兵二百騎計馬乘はなし、鎗を揃へて喰留たり。城兵しやさせまじと、二三度四五度小がへしして追拂ひしかども、寄手の猛勢犇々と附て、突伏せ切伏せ慕ひけるに、城兵門を閉るのいとまなく、寄手早くも亂入り、當を幸切立つれば、城方の勇士福井與市、同喜

間、早く思案を極め、いかんとも返答すべし。遲退せば秀尙主從を殺し、火を放つて城を燒盡し、「我々爰に籠城せば主人を殺すも同前なり、いざ降參して主の命を救はん」と、忽城門押開き、我も〳〵と走出るを、兼て光秀が下知を受け、左右に別れ控へたる明智左馬介、四王天但馬守、妻木主計頭、溝尾庄兵衛等三千餘人、卒に鬨を作りかけ、噇と一度に突崩せば、思ひがけなき城兵ども、防ぎ戰ふ氣勢もなく、我先にと途を求めて迯行くを、追詰め〳〵切り殺す事麻の如し。左馬介は一手の兵を引て城中に亂れ入り、老少男女の嫌ひなく片端に切廻れば、血は流て川をなし、尸は積て丘のごとし。此時光秀快げに打笑ひ、下知して秀尙主從を悉く突貫き、哀むべし八上の一城一千餘人、落行く者半に足ず、皆斬害をぞせられける。依之丹波一國に向ふ者なく、大概平均の模樣なれば、細川、惟住、鹽河、中川、高山等の諸大將、皆々歸陣したりける。光秀は諸軍を收め一先龜山の城に歸り、軍卒の勞を休めけり。同年九月、細川式部太輔藤高に丹後國を賜よし、信長公より御下知あり。就て惟任日向守力を合せ、丹後平均を急ぐべしとの御事なり。兩將謹で領承し、細川、惟任大軍を引率し、丹後國へ亂入し、田部の城主一色左京太夫義道と戰ひ、終に勝利を得て義道父子を討取り、一月餘りにして丹後大概平定し、藤

達て我老母を殺したるはいかなる所行ぞや。己城中の奴原、今に思ひ知らすべきぞ」と踊上つて怒りける。

○光秀丹波國平均

此時光秀老母を殺害せられ、憤り心頭より發り、此怨をはらさんとて、妻木主計頭を以て安土に參向せしめ、波多野秀尙主從を申受け、再び八上の陣所へいざなひ來ければ、光秀下知して大なる磔柱を數多拵へ、秀尙及び從者上下十二人、悉く彼柱に高く括り上げ、各頭を鐵鎖にて強柵み、言ことなからしめ、城の前に押立て、大音にて云せけるは、「光秀波多野家を相續し、秀治兄弟を丹波守たらしめんと欲し、大臣家の御下知を相待つ所に、城中の奴原いかに心得たるやらん、人質に出し置たる老母を殺せしは何事ぞや。其報に秀尙主從此所にて磔に懸け誅すべき間、城中の者共眼を拭ひ是を見るべし。然りと雖も是は光秀が私の怨を報ぜんとする所なり。別に大臣家より御下知の趣は、汝等城中の者共、只今城を開き何方へも落行く者ならば、秀尙主從が命を助け、汝等に賜るべき旨、信長公の仁心を以て仰渡さるゝ趣なり。今光秀母の爲に彼輩を突殺し、追福に備へんと思へども、君命默止がたく、御諚の次第申し聞する

ざんに戰ひけれども、多勢の兵士前後に圍み、をり重つて兩人とも搦たり。此時兄右衛門太夫秀治、手疵を負て惱み伏したり。其外從者十一人悉く是を生捕り、主從倶に安土の城へ指上し、信長公の御下知に任せ奉らんとす。光秀波多野兄弟に向ひて申けるは、「今日の計ひ約に違ひ、不信のふるまひに似たりといへども、是光秀が心に非ず、君命はいかんとも成がたし。況や老母を以て質と成し、城中へ入れ置たれば、光秀に於て逆意を抱き、謀計を以て搦捕べき謂なし。汝兄弟主從の命は、光秀が功に申替へ、是非〳〵助命の御沙汰申賜ふべきの間、心を安んじ一度安土へ赴かるべし。就ては波多野家相續の儀も、光秀惡くは計ふまじ。早とく〳〵」と勇めけれど、秀治、秀尙一言の詞も出さず、警固の武士に誘はれ、安土を指て上りける。途にて秀治手疵を苦しみ、終に墓なく成りにけり。然るに八上の城中、光秀が謀計を構へ秀治を搦取り、安土へ訴へ誅戮せしと聞誤りて大に怒り、大賊光秀力を以て攻戰ふ事能はず、僞の謀計を以て主人兄弟を捕へ誅するの條、言語に絕たる不道の行跡、其儀ならば計ふべき事有りとて、彼人質とて來りたる光秀が老母を、大手の門にて樹木へつり上げ、磔に懸て殺しけるこそ是非なけれ。光秀是を見て大に歎き、「我波多野兄弟を殺したらんには、敵又我母を殺すべきは理なれど、我いかにもして兄弟が命を乞受け、波多野の家相續せしめんと心を盡し居る所に、先

諫に随はず。丹州本目の山伏西藏院といふ者をかたらひ、荒木山城守を相添へ、八上の城へ申遣しけるは、「今度大臣家光秀を以て丹波征伐成しめ給ふ事、更に一分の遺恨にあらず。たゞ天下一統の功を立て、萬民太平の世を期するのみなり。然ば汝今大臣家の幕下に屬し、忠勤を抽づるに於ては、丹波一國を賜り、波多野家を相續せしめんとの大臣家の御内存なり。此旨光秀七枚の誓紙を書て、相與ふべきの間、承引に於ては早々和談し、一度出城せらるべし」と云せける。秀治等猶是を疑ひ、定めて是光秀が謀計なるべしとて、更に以て許容せず。光秀又思惟して、重て彼西藏院を以て申けるは、「秀治以下の疑を散ぜん爲、證據として、光秀が老母を人質とし城中へ相渡すべし。秀治此旨信伏し、信長公に屬し、全く丹州平均せば、兩家此上の幸有るべからず」と云ひ遣しければ、秀治、秀尙相議して、光秀老母を以て當城へ送り越す上は、逆心別意の沙汰有るべからずとて、則ち此旨に随ひ、和平の義濟ひ、同七月二日、光秀方より老母を城中へ送りけるに依て、其翌日右衞門太夫秀治、遠江守秀尙等、八上の城を出て光秀が本陣にきたりぬれば、光秀甚だ是を悅び、雙方互に禮儀を伸べ、和談の盃酒取り出し、良酒宴をぞ催ける。時に光秀兼てより、障子の陰屛風の隈に力者數十人隱し置き、此時俄に競ひ起り、波多野兄弟を搦めんとす。秀治秀尙、心得たりと太刀を引拔て、近寄る者を切拂ひ、さん

竭るを待より外に設べき計策なし。然どもさばかり延々に成るべき戰ならねば、いかゞはせんと種々謀計を廻らしけるに、細川刑部太輔藤高、光秀を諫めて申けるは、「羽柴秀長西丹波を平定し、播州へ歸陣せりといへども、自國の合戰にあらざれば、まのあたりの敵徒のみを討亡し、既に鬼ヶ城などの要害は其儘に打捨て置たり。其上西丹波の武士、墓々しき勇剛の輩もなく、尋常の士のみなれば、征伐するに甚だ安し。貴殿の向ひ給ふ所はこれに異なり、敵悉く勇壯にして、數代當國を領し來り、民よく是に懷き隨ひ、皆死て以て其恩を報ぜんとす。加之此八上の城は、丹州不雙の要害にして、秀長が攻落したる城々と日を同じくして語るべからず。況や城將秀治、秀尙絕世の勇夫等にて、相隨ふ郎從一族家人、悉く一人當千の兵といふべし。然るを今卒に攻落さずんば、武勇の名を下さんなんど思ひ候て、無謀の戰せられ候ては、甚だ以て然るべからず。既に秀吉三木の別所を攻るといへ共、未だ勝敗何れとも見えず、遠卷して兵粮の竭るを待のみ。尤も是良將の行ふべき軍立なり。足下其の成功速ならん事を計ずして、始終全たき計略こそあらまほしう候」と言葉を盡し諫めけれども、光秀元來己が勇に慢じたれば、「秀吉ごときの軍慮を見習ひ、僅なる小城を食攻にせしなんど云れんも口惜し。人はともあれ我に於ては卽時に攻干し、當國一圓に平治せずんば、勇ありとするに足らず」と、更に藤高が

繪本太閤記　三篇卷之二

○光秀波多野兄弟捕ㇾ搦

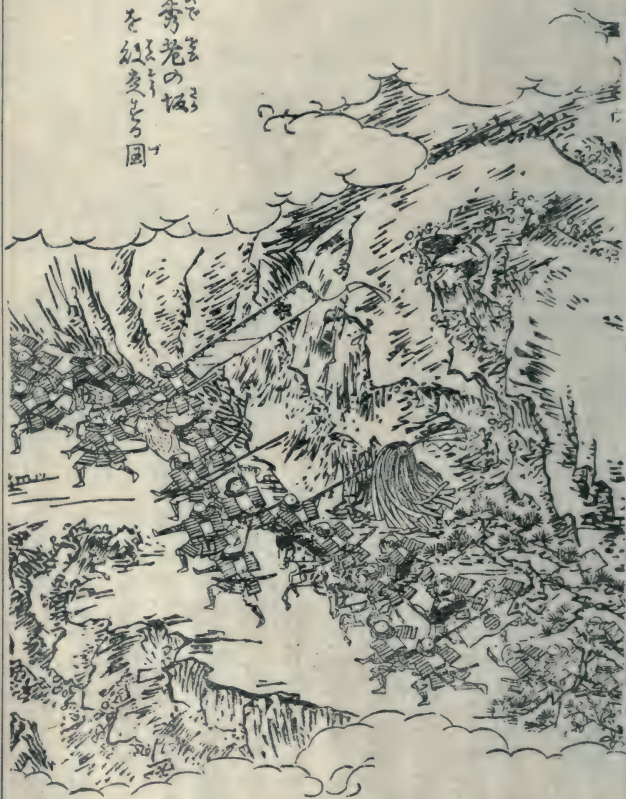
去程に惟任日向守光秀は、八上の城を攻る事既に一月に餘るといへども、城中更に弱れるけしきなく、結句惟任方手負死人數多出來ぬれば、かくてはいかゞならんと心を苦しめ居たる所に、西丹波氷上の城陷り、大將宗長、宗貞自殺して、彼表悉く平定し、羽柴秀長播州へ歸陣せるよし、使者を以て光秀へ申越しければ、光秀大に苦しみ、「我丹波の守護職を承り、羽柴秀長に功の劣りなんは、比興尫弱の擧動、多年の軍功徒に成り、且は信長公の御機嫌叉計がたし。命を捨て此城を攻落し、大功を顯さん」と、細川、惟任、中川、高山の諸將と議し、切ども射れどもかへり見ず、只一乘に乘入んと、喚き叫んで攻登る。城中より此體を見て、大石大木を投落し、大筒小筒の鐵炮を雨より繁く打出せば、惟任方心は矢竹にはやれども、面も向べきやうなければ、拳を握り城を白眼て居たりける。光秀退いて此城の形勢を考ふるに、力を以て攻る時は、味方の死亡多きのみにて、露計も城中の弱りとならず、只緩々と八方を取り圍み、兵粮の

繪本太閤記 三篇第二之卷 目錄

十重二十重に取圍み、晝夜を分ず攻たりけるに、波多野宗貞、所詮籠城叶ふまじと思ひければ、一夜最期の酒宴をなし、切腹して死たりければ、當城の主久下越後守重氏、一族廣澤雅樂介等を首とし、宗徒の者共切腹し、城に火をかけ、烟の內に死しければ、殘兵盡く城を迯出で、或は降參し又は落行き、久下の城落著しければ、秀長惣軍を以て氷上の城を取詰め、鐵炮少々打かけけるが、使者を以て宗長に降參を勸むるといへ共、宗長さすが西丹波に數代名を得し良將なれば、慇懃に返答し、更に降參せざりけり。羽柴秀長、さらば一時に攻崩さんとて、城外へ夥しく柴を積上げ、火をかけて燒潰さんとす。是を見て大將宗長、今は家運も既に盡たり、なまじひに心ぎたなき戰して、敵の爲に笑はれんも口惜とて、一族十餘人諸共に、腹搔切つて果にけり。依之家人山住三郎五郎、多田內藏介、陰山治部右衛門等、切て出て敵と引組み、皆刺違へて討死す。爰において西丹波豫め平定しければ、大將小市郞秀長、三木の合戰も心元なく、此旨一々安土へ注進し、丹波の隙をねがひけるにぞ、信長殊に感じ給ひ、早速丹州を引取り、播州を見繼べきよし仰渡さる。依て小市郞秀長兵を丹州所々に殘し置き、播州の陣へ歸ける。

火矢を放ちて攻ければ、宗長、宗貞終に叶ひがたく、八幡山を引退き、氷上の城へ迯籠りぬ。依レ之秀長が軍勢國中に亂れ散て、放火亂暴様々にふるまひければ、秀長が威名又丹州に震ひける。日向守光秀、此時大軍を引率し、奥丹波へ向ひけるに、今度秀吉が援兵西丹波より攻入り、速に功を立ると聞えければ、光秀大にいらち、再び篠山に押寄せ、大軍八方を打圍み、短兵急に攻たりける。荒木兄弟已前にかはらず様々祕術謀略を盡し、度々敵を討取り退立けれ共、寄手限なき大勢なれば、終に叶はず、兄弟六人討死し、三男荒木山城守を生捕けるが、光秀に降參し、是より随身したりける。扨夫より揉にもんで峠の城、沓懸の城、細野の城、本目などの城々、或は攻取り又は沒落し、終に八上の城を取圍み、息をも續せず攻伏ける。此城に籠る大將は波多野右衛門太輔秀治、舍弟遠江守秀尙、老臣河村助右衛門、野墓市右衛門、夏目杢兵衛、松田儀兵衛等、究竟の勇士一千五百餘人、堅固に籠城しけるに、元來此城嶮岨の要害有て、光秀が大軍取圍みて攻れども、更に落べき氣色なく、空しく城を眺めて暫く時日を移しける。此時羽柴小市郎秀長、氷上の城に取懸り、合戰を始めけるに、城主波多野主殿頭宗長は、居城氷上に楯籠り、嫡子美作守宗貞五百餘人を率し、久下表の要害に打て出で、羽柴が先陣平手伊賀守、同監物を討取り、久下の城へ引入ける。羽柴秀長、先鋒の將を敵に討れ大に怒り、久下の城を

鹽河伯耆守、中川瀨兵衞、高山右近等一萬騎、攝州能瀨口より進發し、光秀と一手に成て敵を討べし」と下知し給ひ、且又「此頃羽柴筑前守秀吉、播州三木の城を取圍み、遠攻にして暫く合戰手明なれば、幕下の武士を以て西丹波を押へ、猶暇有ば切入て、是も光秀と一手に成り、全く功を立べし」と御下知有ければ、秀吉畏り、天正六年五月廿六日、舍弟小市郎秀長を大將として、丹波、丹後、但馬、播磨の降人松田攝津守、小田垣但馬守、出石源左衞門、杉原七郎左衞門、大足次郎左衞門、小野木雅樂頭、長井四郎左衞門、神吉藤太夫、櫛橋左京等を先として、其勢都合四千餘騎、西丹波へ亂入す。此日光秀も龜山を出張し、奥丹波へ押寄る。就中羽柴勢、西丹波口において、長澤外記、久下彌五郎が籠たる城を攻落し、直にすゝんで綾部の城、福知山の城を攻て城將を討取り、氷上の城へと押寄するに、氷上の城主波多野主殿頭宗長、同美濃守宗貞父子、二千餘騎にて八幡山といふ所へ出張し、羽柴の勢を支へ戰ふ。羽柴方勇を震うて戰ふといへども、敵は身命を擲つたる死ぐるひなれば、先陣の兵士さん〴〵に突崩され、侍大將神吉藤太夫、小田垣但馬守、小野木圖書助等、先鋒の者悉く討死す、且疵を蒙る者數を知らず。爰に十餘日對陣し、六月九日、八幡山に兵を殘し、荻野彦六左衞門が居城荻野の城を一日に攻落し、城將及び數百人を斬殺し、次第に山々嶺々に取登り、八幡山を中に取籠め、鐵炮を打かけ

光秀老の坂を経過する図

討ち、切崩しては輕く引上げ、此方を討ば彼方より切て出で、彼を防げば是より仕寄り、さしもの光秀、攻倦んでぞ見えにける。然るに五月十五日の夜、七ヶ所の城々より、相圖と覺えて狼烟高く空に靡し、一時に突て出で、光秀が先陣、二陣、左右の備へ悉く切崩し、勢に乘て殺出す。其勇尋常に超出し、更に向へ戰ひがたく、本陣さして迯たりければ、光秀旗本の勢に下知して、支へ戰はんとする所に、草山の城に籠たる草山將監三百餘人、光秀が旗本へ横合に喚て懸り、さん〲に戰ふにぞ、荒木が軍勢是を見て、いよ〱勇を逞しうし、光秀を討取んと八方より揉立ければ、光秀が軍勢當國へ入部せしより以來、かくのごとく烈しき戰ひをいまだ見ず、丹州の者共を小兒のごとく思ひ居しに、此合戰の嚴しきに途方を失ひ、老の坂といふ嶮岨の道を、備も亂しさん〲に成て引取けるを、あますまじとて追來る軍勢、恰も烈風の浪を動かすに似たり。惟任が勇將四王天但馬守、並河掃部頭、溝尾庄兵衛、明智左馬介等殿して、かへし合せ〱戰ふ程に、惣軍漸に引退き、大將光秀も辛じて迯のびたり。荒木一統、草山將監最早追討も是迄ぞと、勝鬨を三度揚げ、皆軍勢を引取たり。此合戰光秀方討るゝ者七百餘人、手負ふ者其數を知らず、這々龜山へ引取けり。光秀此戰に打負け、世にも口惜き事に思ひ、かくては征伐はかゆくまじとて、信長公に援兵を乞ふ。是に依て「惟住五郎左衛門、池田勝三郎、

とて、惣勢野口の城へ押寄するに、城主村上和泉守、城戸を開いて光秀を請じ、謹で幕下となる。光秀是を免し、祿千石を以て和泉守に領せしめ、直に八鹿部、放鹿部を攻落し、夫より八木の城に取かゝれば、城主内藤日向守、防ぎかねて播州へ出奔す。其次陰山の城へ押寄せ攻たりけるに、城將陰山源太兵衛五百餘人にて切て出で、光秀が先手をさんぐ\に切立けれど、二陣の大勢入替て戰ひ、一人も不殘討死す。其次井上の城、井上出羽守はとても叶ざる敵なりと思ひ、妻子殘らず刺殺し、八十四人切て出で、心のまゝに戰ひて、是も討死したりけり。其外高屋の城、關の城皆悉く落城す。是によつて光秀が威勢丹波一國に震ひ、不日に平定の功を全うすべしと、上下よろこび勇みけり。爰に同國篠山の城には、荒木民部太輔といへる强勇の武士、六百餘人楯籠り、是が兄弟七人悉く勇武の者にて、何れも近鄕要害の地に砦を構へ、土手を築き隍を深くし、互に相助けて戰んとす。光秀此所へ押寄せ、先本城の四方を圍ませ、枝城には悉く軍勢を分ちて是を押へ、晝夜隙なく攻けれ共、元來城の要害堅固なるに、城將荒木民部太輔雙なき勇士なれば、從ふ兵卒皆一人當千の者共なれば、少しも恐れず、矢石を飛し金丸を放ち、嚴しく防戰したりければ、寄手手負死人數多ありて、左右なく攻落すべくも見えざりける。剩へ近鄕に構へたる數ヶ所の砦より、或は朝がけ又は夜討し、思ひもよらざる不意を

禦ぎければ、寄手の大軍、十五日の早朝より十七日の暮頃まで、火水に成て攻ぬれども、更に落城せざりける。其夜亥の刻より、大雨盆を傾くるごとく降來り、雷電夥しく鳴ふためき、兩陣戰を止め雨の晴るゝを待居たり。然るに城兵名倉三四郎行安といふ者俄に謀叛し、城中に火を放ち、門を開き敵を引入たり。寄手の軍兵我先に馳入て、當る者を切倒せば、城中は上を下へと騷動し、落行く者大半なり。大將刑部少輔直政、本丸に有りて此ありさまを見、是迄なりと思ひ自害せんとす。時に赤井彌平兵衛といふ臣下、諫めて申けるは、「今當城陷るといへども、將卒の勇なきにあらず。爰にて亡び失給はんは 謀なきに似たり。此騷に紛れ、何方へも落行き給ひ、重ねて計議をなし給へ」と勸めけるに、直政げにもと思ひてや、一族妻子十五人引具し、雜兵に打まじり、神鳴騷ぎに城を出で、涙の露の篠山を越え、城州伏見へ落行きて、忍びて月日を送りけり。惟任勢一同に城中へ亂れ入り、さんぐ\に薙立れば、刃向ふ者一人もなく、暫時に城を乘取りて、本陣へ使者を以て勝軍を告たりける。

○羽柴秀長平ニ治西丹波ー

此時日向守光秀は、前山の陣所にありて勝軍の次第を聞き、さらば此勢に奥丹波を攻崩すべし

りける。則重は身に樹つ矢數十本、息も絶ぬべく覺えければ、少し引退き自害せんとする所を、敵三騎馳寄て、終に其所にて討れけり。其後此所の郷民等、舊君黨下の餘恩を報ぜんとて、此城跡に一字の廟社を經營し、新八幡とぞ崇ける。此則重が先祖を問ふに、三河守源範頼の三男助重の末孫にて、代々此所の領主たり。明れば三月十三日、惟任勢數千騎、餘田の城へ押寄せ、四方を圍で攻たりける。城主餘田監物爲家、士卒を勵し、防戰嚴しくなすといへども、終に籠城叶はずして、軍卒悉く討死す。其中に餘田彌平次、熊谷忠藏、明石權太夫等三人討殘され、大將監物を供奉し城中を忍び出で、鴨坂越に黑井の城へ赴んとす。寄手の大勢是を見附け、追來る事甚急なり。監物今は力なしとて、三人に防矢射させ、其隙に峠の頂に上り、大なる岩の上に坐し、靜に鎧脱捨て、腹十文字に搔切て、終に空しく成りにけり。三人の勇士、主人の自害見果ぬれば、太刀引拔て切て下り、亂軍の中に討死ぞしたりける。此峠の岩を監物岩と號し、前に小祠を建て、今も猶三月十三日、村翁里嫗聚りて、祭禮を執行ふよし聞侍る。去程に惟任勢鹿集餘田の兩城を攻落し、武威斬々と震ひ、翌十四日黑井の近邊まで押寄せ、先城中へ軍使を立て、明日合戰を始べき旨約束し、十五日の早天より隍際へ押詰め、鐵炮を放ち矢を射かけ、息をもつがず攻たりける。此城の大將は黑井刑部少輔直政、一族郎從八百餘人、必死と覺期して

がず、鐵炮矢石を放ち飛し、暫く防戰したりけるが、則重が家臣足立彦十郎といふ剛の者、矢倉に騰り大音に申けるは、「寄手の大將は左馬介光春殿とこそ見受候へ。城中夜前より今朝迄酒宴を催し、酒いまだ餘り有りと雖も、肴の竭て候程に、御邊の首を賜つて、重て一盞の興を催し候はん。斯申すは鹿集式部少輔則重が郎等足立彦十郎氏眞なり。そこ引給ふな、參り候」とて、五十騎計引具して、五百餘騎の其中へ、拔連て切て入り、縱横に蒐り輪違に切廻り、祕術を盡し戰ひしが、無勢なれば力竭き、引組み〳〵一人も殘らず刺違へてぞ死したりける。則重が二男助三郎虎重遙に是を見て、一族近習の若侍十九人二の丸より討て出で、寄手の鎗衾作りたる正中へ一文字に翔り入り、虎重兵に向ひて下知しけるは、「多勢の中へ小勢の驅入つたるは、皆々生捕にせらるゝ物ぞ。馬の足を薙倒し、引組で討死せよ」と、一所に成て切立つれば、寄手は是に切崩され、三反計り引きたりける。此時早城兵十四人討死し、大將虎重猶も討れず、首二つ鋒につらぬき、殘る兵手々に首提げて城中へ引きけるは、勇々しかりける働なり。虎重父に對面し、「今は角とこそ覺え候へ。はや〳〵御自害候へかし」と勸たり。則重是を見て、「誠に健なる行跡かな。とても死せん命なれば、敵一人にもあれ討取て死せんこそ、黑井餘田の手助なるべし。倡面々もろ共に斬死をし給へや」と、大長刀を小脇に掻込み、主從七騎四方八面に突戰し、皆討死をした

は千石、其以下一族諸士の首は五百石永代可ニ宛行一。於ニ金銀望一者、右之趣を以て宛行者也。八幡大菩薩相違有レ之間敷者也。依而如レ件。

天正六年三月十一日　惟任日向守

奥丹波諸士名主百姓中

とぞ書たりける。爰に鹿集の城主鹿集式部少輔則重は、一族諸臣を招き相議して申けるは、「今度光秀發向に就て、先一番に黑井、次に餘田、當城に攻來るべし。所詮寄手多勢にて、三城ともに滅亡すべし。我多年黑井に一味の志を堅くせり。愚息助太夫則卜、大澤喜龍兩人は、黑井の城に赴き、眞政に力を合せ、渠と生死を倶にすべし。我は此城に止りて、力を限り防ぎ戰ひ、快く討死すべし。いざ疾く〳〵」と勸むるにぞ、助太夫も喜龍も父の命に背きがたく、黑井をさして赴きける。是や誠に義をして恩に勝しむるの謂なりけらし。父子東西に引別れ、義の爲に死せんとする心の裡、いかに名殘の深かりけんと、心なき兵卒まで鎧の袖を絞ける。斯て則重「今は心に懸る事もなし。明日は敵寄せ來るべし、いざや酒宴して今生の暇乞をせん」とて、其夜よもすがら、酒呑うたひ舞てぞあかしける。明れば十二日、光秀が先陣明智左馬介光春五百餘騎、鹿集の城へ押寄せ、鬨を作つて攻たりける。城中にも思ひ設けし事なれば、少しも騷

光秀西丹波の村〻へ高札を建る図

と思ふ者も、二尺餘に積りたる大雪なれば、足の踏べき所もなく、戰ひ難儀なる所へ、赤井勢は兼て期したる事なれば、橇ははきつ得物は取りたり、なじかは暫しも猶豫ふべき、散々に切立つれば、惟任が先陣五百餘騎、亂れ破れて本陣さして迯かゝれば、二陣、三陣、旗本まで惣崩れにくづれ立ち、戰ふべき術を忘れ、微塵に成りて引きたりければ、光秀も心ならず倶に敗して、龜山の本城まで退きける。

○光秀智計滅二亡赤井家一

斯りし程に高見の城主赤井五郎忠家、保月の城主赤井惡右衞門景遠は、大雪を便として光秀を追崩し勝利を得しより、其勢遠近に震ひ、當國近國の浪人ども、我も〳〵と赤井に一味し、今は究竟の剛、先龜山の屬城黑井、鹿集、餘田の城どもより征伐せんと、同年三月十一日、五千五百餘騎を引率し、前山の庄に出陣し、先高札を立て勇威を示す。其文に曰く、

光秀當國の守護職として、龜山の城に在城す。黑井、鹿集、餘田の三黨者、往古より龜山の幕下なり。然處今龜山の下知を不レ受條、今度爲二退治一令二發向一者也。攻寄るにおいては即時に敵軍敗北たるべき間、鄕々村々可二落行一者乎。且落武者を討取り、城主の首を捕る者に於て

忽ち馬より逆に落て死たりける。大將既に討れければ、其手の兵卒右往左往に散亂し、討るゝ者數を知らず、降參する者半にして、殘兵は皆宇津の城へぞ迯歸りぬ。八鹿部の城主波多野中務丞も、過部の城を救ふべしと、其用意したりけるが、宇津右近太夫が討れたると聞き、後詰せん氣勢もぬけ、城を守りて籠居たり。去程に過部の城には寄手の勢次第に重り、賴み思ひし後詰の手當相違しければ、今は是迄なりとて、同月二十九日、防ぎ戰ふと雖も終に叶はず、釋迦牟尼佛、宇津を始めとし、上下の軍兵百餘人討れければ、相殘る輩は蛛の子を散す如く、皆方々へ落行ける。其外同類の籠たる小城五ヶ所、其日の内に開退ければ、此上は別條あらじとて鬼ヶ城を燒はらひ、福知山に四王天但馬守、同又兵衞、藤田藤八郎、御牧勘兵衞、加治石見守等八百餘人を止め置き、此邊を靜謐せしむ。光秀は是より氷上郡を過て金山に本陣を取居ゑ、赤井五郎忠家が籠たる高見の城、同惡右衞門景遠が居城保月抔を攻崩さんと、其用意をなしたりけり。其夜俄に大雪降來りて山路を埋み、光秀が陣所寒氣に堪かね難澁す。赤井惡右衞門、此雪こそ究竟の幸なりと、赤井五郎と合體し、逞兵勝つて八百餘人、皆軍卒に橇をかけ、行程二里を一馳に金山の陣へ押來り、鬨を噇と作り、透間なく突立てければ、惟任勢思ひよらざる事なれば、周章騷ぎて防んとする者なく、たまく戰はん

つまれては悪かりなん」とて、細川刑部太輔、溝尾庄兵衛、松田太郎左衛門等手勢々々を引具して敵の來るべき道筋に埋伏し、今や〱と待居たる。然るに宇津の城主宇津右近太夫友宗、福井因幡守と兼て心を合せ、互に後詰の勢を出すべき約束なりしかば、四百餘人を引率し、過部の城の後詰にむかふ。時に友宗が家來申けるは、「今日は往亡日にて候程に、明朝出陣なし給はんこそ然るべし」と諫めたるに、右近太夫大に怒り、「何條さる事の有るべきや。味方の爲に亡日ならば、敵も又亡日なり。無用の舌を動して軍卒を迷はす事なかれ」とて、自らまつ先に馬を出し、過部さして急ぎける。早過部の城今七八丁にして、山に添て小川の流ある所にさしかゝれば、思ひもよらず敵の伏兵一同に起り、鐵炮を打かけ矢を飛し、溝尾庄兵衛眞先に進み、鎗を上げて突來る。右近太夫士卒を勵し、「敵の伏兵何程の事か有るべきや。打破て通れや」と、自身鎗を捻て驅立れば、軍卒是に勵され、小川の流を北へ追ひ南に追れ、暫く支へ戰ひける。時に細川藤高、松田太郎左衛門、東西より潮のごとく押來り、横鎗に宇津が備に突かゝれば、爰において宇津が軍勢さん〲に打なされ、引色立て見えたるにぞ、溝尾庄兵衛得たりかしこしと喚て驅入り、前後に當て戰ふにぞ、右近太夫大に怒り、馳寄て溝尾と鎗を合す。雙方聞ゆる剛兵なれば、上下左右透間なく、勇を震うて突合けるが、宇津が武運や盡たりけん、誰が放つ

て、明智左馬介光春、四王天但馬守政孝等を大將として、其勢二千五百人、過部の城を取圍み、先使者を以て城中へ申けるは、「當國守護職として日向守入部せるの所に、一圓隨順の沙汰に及ばず敵對の趣、不所存の至りなり。早く降參を遂げ忠節を盡すに於ては、本領安堵たるべき」旨申遣しけるに、城主貞政答て申けるは、「某不肖に候へ共、鎌倉將軍足利左馬頭氏滿の四男福井四郎滿貞六代の後胤、古來未だ武名を穢さざるに、今大敵に圍るゝに到て降參せん事、弓矢の恥辱に候間、銹矢一筋射かけ候て快く討死し、先祖の名を淸くなすべく候」とて、彼使者の髻を切り、腰刀を奪取り、門外へ追出しけるに、大將左馬介大に怒り、「その儀ならば一息に打崩せ」とて、一同に鬨を發し、持楯竹束を突並べ、喚き叫で攻たりける。城中にも兼て期したる事なれば、城主因幡守が一族福井與市政照、同喜之助吉行、精兵の手垂なれば、大手の櫓に走上り、指詰め引詰め散々に射る程に、先に進みし寄手の軍兵、手負死人數を知らず、甲も冑も射徹され、攻口を少し引退き、遠卷してぞ居たりける。此時光秀より援兵として細川刑部太輔藤高、妻木主計頭、松田太郎左衛門、溝尾庄兵衛等五百餘人、寄手の兵に相加り、軍議評定したりけるに、細川藤高申けるは、「敵今纔なる小城に楯籠り、味方の大軍を引受け戰んとするは、いか樣近邊の城々八鹿部、伯々邊、宇津の兵士、後詰せんずる計策と覺ゆるなり。敵に後をつ

の領所にして、地侍數多住り。然るに近年義昭公滅却の上は、主もなき國と成れり。今度汝に宛行ふあひだ、細川刑部太輔藤高を以て加勢として彼國へ打入り、國中靜謐ならしむべし」と命じ給へば、光秀難有存じ、謹て恩を謝し、頓て江州坂本へ歸り、領内の兵三千餘騎、細川藤高一千餘騎、同年二月桂川を渡り、丹州大江山に陣を取る。斯る所に、當國龜山の城主内藤五郎兵衛忠行が家臣内藤忠次郎、同三郎右衛門、和田杢之介等、大江山に參向して申けるは、「日向守殿當國拜領せられ、御進發の條賀し奉る所なり。某等先主内藤五郎兵衛尉忠行は、去年の冬死去致し、親族一人もこれなきによつて、家來の者五百餘人、流浪の體にて罷あり候。向後一命を捧げ幕下に屬し申度間、御許容下され扶助なし給ふに於ては、難有かるべき」旨明智左馬介を以て申入れたりけるに、惟任日向守斜ならず悅び、即彼等に對面し、相違なく扶持し召抱ふべきの由懇に申渡し、則龜山の城に入りて國政を執行ひけるに、國中の士大將光秀が入部を賀し、來り仕ふる輩には、並川掃部介、四王天但馬守、荻野彦兵衛、波々伯部權頭、尾石與三、中澤豐後守、酒井孫左衛門、宇野豐後守、加治石見守等、皆手勢五十騎三十騎引具し參向するにぞ、光秀限りなく悅び、それ〴〵に祿を與へ、勢良強大に成りにける。爰に過部の城主福井因幡守貞政は、己が居城に楯籠り、歸服の色なかりければ、光秀「さらば押寄せ追討せよ」と

り九代高時入道の時に當て、後醍醐天皇一怒つて高時を討亡し給ひ、爰に暫く公家一統の御世とはなれり。然れども天皇賞罰正しからずましますにより、天下又穩ならず、忠臣は退き隱れ、姦人は揚げ用ひらる。是によつて足利尊氏、新田義貞亂を起し、屢挾戰して勢を爭ひ、天に二の日なく國に二の王なしといへども、此時南朝北朝の二に分れ、足利尊氏北朝を守護し、楠木正行南朝を扶け、互に威を張り勢を震ひ、天下一日も保き事なし。しかはあれど南朝の威勢日々に衰へ、五十年にして終に亡ぶ。而して尊氏の子孫、相續いて天下の武將に備り、政道を行ひしに、明德に山名、嘉吉に赤松、應仁に義政公世を亂し給ひて以來、百餘年の間四海の內交亂れ、治らんとするの道を失へり。是を應仁已後の大亂といへり。此時八荒に壽域を開き、諸島に風波靜りて、泰平の道を開きましませしは、織田右大臣平信長公の武功に依り。今天正の年間に到て、其身帝都の守として、近き江州安土に城を築き住せ給ひ、日本の追捕使を定めて海內を征し給ふ。先東海、東山道には瀧川左近將監一益、北陸道は柴田修理進勝家、南海道は惟住五郎左衞門長秀、山陽、西海道は羽柴筑前守秀吉、山陰道は惟任日向守光秀に命じて征伐せしめ給ひければ、今既に天下を三分にして其二を保ち給ひ、威名四海に溢れける。時に天正六年の春、惟任日向守を召て仰含められけるは、「丹波國はいにしへ足利氏

し、いつか此兵亂の靜り、いかなる時にか一統の世と成りなんと、萬民皆深淵薄氷の思ひ止ときなかりき。熟群史の載る所を窺ひ、かく極亂に及びぬる其はじめを考ふるに、鳥羽院の御宇保元年中、皇妃美福門院の御計として、いはれなき讓位ありしにより、新院軍を發し給ひ、源爲義其子義平、爲朝等御味方に參じ、城都の中に兵革を動す。依之時の武將平淸盛、源義朝に命じ、終に院の軍を破り、讃岐國へ遷し奉り、爲義父子を斬罪す。淸盛、義朝此勳功に誇り、終に平治の亂を起し、信賴、義朝運つたなく、淸盛が爲に滅亡しぬ。是より淸盛が威勢日々に盛にして、終に其身太政大臣に經上り、一門悉く公卿に列す。抑その人にあらずんば、微官といへども汚すべからざる我國の風俗なるを、況や卽闕の官に於をや。此時既に國家の政綱亂れたり。淸盛奢侈に超過し、法皇を鳥羽に遷し、大臣は官職を剝ぎ、己が執し申す人には不次非例の高官を授け、傍若無人の惡逆なりしに、木曾義仲北國に起り、一時に平家を西海に追下し、自ら帝都に守護たりしが、是も又暴にして惡行平家に增りたれば、源賴朝東國に旗を靡せ、大に兵を揚て木曾を討ち平家を亡し、天下の權柄を掌に握り、其身鎌倉に有て國々へ守護を置き、庄園に地頭を立て、政道悉く武家より出づ。故に王道爰に廢亡せり。賴朝三代にして其家亡び、舅父北條四郎時政權を奪ひ、武家いよいよ政道を恣にし、天子は有りてもなきが如し。時政よ

繪本太閤記　三篇卷之一

○信長賜二光秀丹波國一

夫想るに、天下を治るに大道あり。賢に親しみ、姦に遠く、是を明といふ。賞に信あり、罰に公あり、是を斷といふ。禮樂を制し、民を教化す、是を順といふ。明なる時は善に進み、惡は退く。斷なる時は功顯れて、罪を懲す。順なる時は人心一に歸して、天下治る。故に唐虞三代の治や、禮樂賞罰正しく行はれ、言ざれども信あり、怒らずして威あり、無爲にして法を越るの民なし。爰に本朝神武天皇より百有七代の帝正親町院の御宇、武將光源院義輝公の時に到て、序次曾て則なく、綱常治法泯沒し、壞亂爰に究り、五畿七道悉く爭ひ、四夷八荒國として亂れざる所なく、王命を恐ず、武命をも用ひず、或は臣として其君を弑逆し、君も又功臣を疑ひて其所領を分離し、或は兄弟讎敵と成り、父子の間も忽ち相殺す。されば尊卑上下、皆不測の害に逢ん事のみを恐る。且運に乘じては庸夫も國を併せて天下に横行し、勢盡ては公侯も奴僕に下る。盛衰日に變り、榮辱更に定まらず。此間に殘害せらるゝ者幾千百といふ計な

繪本太閤記　三篇第一之卷　目錄

戸の透間もる梅が香、朝寐とがむる黃鳥ならで、弊庵をとむらふ賓あり。こは珍らしなど云ふ程に、頓て此卷々を取出て、其始にこと譯せよとや。されど事のやうは、先に一二の篇に、文士の玉を述給へば、今更我輩の何いふべくもあらずと、手をすりてわぶれども、せちにゆるさざれば、唯畫にまこと有り、文に虛なし、是をや眞に顯記といふべしと、あからさまに名附るのみ。

于時寛政己未のはる

廣福王府侍臣三谷立蕃源寛成

書肆予に豊公一世の軍事を圖せんことを請ふ。圖畫は予が産業にしあれば、辭すべきにあらず、需に應じ初篇先に世に行る。今二篇圖成て木に寫しぬ。抑予は、太平の逸民、いかんぞ亂れたる代のありさまを知らんや。唯硯に對し筆を弄し、其さまは斯くやあらん、それのわざなん、かうぞふるまひけらしと、見ぬむかしをおもひやりて、猥に圖し、心に任せ寫しぬれば、軍器、兵具、旌旗、鎗刀、城取、陣所の事に到ては、古畫に見及びたる儘を寫して、强に改め正さず、故に誤りのみ多かるべし。視る人、是を以て予を責る事なるべし。但畫法における、其あやまりのなからん事をおもひ、軍事に於ては、知らざるまゝに寫しぬ。是また畫の則なりき。

時寛政戊午秋八月望

難波御堂之門前法橋玉山書

奉行とし、晝夜作事を急ぎけるに、日あらずして城郭全く成就し、秀吉則ち此城に移住し、三木の城には舍弟美濃守（小市郎）秀長を以て是を守らしめ、不日に中國を切隨へんと、其用意をぞしたりける。

り得ずして、伯父宇野下總守が居城高山の城へ迯籠り、力を合せて秀吉を防んとす。され共三木の名城に、別所一家籠城し、毛利家より助け戰ひしさへ、攻落したる秀吉なれば、纔の小城に、無勢にて敵せん事、いかにしても覺束なく、六月五日の夜、城を開き、九州さして落行ける。秀吉の家人木下兵太夫、蜂須賀小六これを聞知て、手勢一千五百人を引率し、揉にもんで追たりける。宇野方さん〴〵に討なされ、恥を思ふ勇士二十餘人、返し合せ討死すれば、其隙に大將宇野は辛き命を助り、いづくともなく迯失けり。木下、蜂須賀の兩人勢に乘じ、因幡、伯耆の境を放火し、所々にて狼烟を揚げ鬨を作り、さま〴〵奇兵をなしければ、兼て秀吉が手並は知りつ、大軍にて責附られなば叶まじと、或は緣を需めて降を乞ひ、又は人質を出して幕下に屬し、遠近の國々、秀吉の風を望まずと云者なく、功名既に成なんとす。此時羽柴筑前守、三木の城にありて國政を執行はれけるに、黑田官兵衞、秀吉に告て申けるは、「三木の城は要害無雙の堅城なれども、播州にては偏地にて、國政を行ふ土地にあらず。某が居住の地姫路こそ、一國の中央にして、爾も四國、九州、西國より京都まで、船の通路心の儘なれば、播磨を領せん者、姫路に過たる住所は有る可らず。彼所に城を改め作り住せ給へ」と勸めければ、秀吉是に隨ひ、舊城を破却して、新に地の理を選み、要害に繩張し、黑田官兵衞、淺野彌兵衞兩人を

盡く亡び失せ、播州平均の旨言上に及ぶの所、信長公大に感じ悦び給ひ、中尾源太郎を以て秀吉が武功を祝し、且稱美し給ふ。扨も秀吉三木の城に入て、下知を傳へて播州の仕置を定め、志方、魚住の城共一時に攻落し、民を撫育し、仁慶を布施し、專ら國人をなつけられければ、播州は勿論、但馬、備前、美作の國々迄、皆秀吉の德を慕ひ、一城一郡に主たる者、招かざるに來り、召ざるに集り、英名山陰、山陽、四國、九州に震ひ、皆悉く歸伏の色を顯はしける。爰において三木の城下繁昌せる事都に勝れり。白子杢左衛門と云ふ者、秀吉の武功を讃し、狂歌を作りもてはやしぬ。

はりまなる三木の赤松きりすててはしばぞ山の大木と成る

別所一家は、赤松氏なるが故に斯くはよめり。秀吉是を聞き給ひ、「をかしく詠たり、杢左衛門を召せ」と呼寄せ、數々引出物を賜はりける。

○秀吉築〓城播州姫路〓

爰に西播磨廣瀨といふ所に、宇野民部太夫といふ者あり。此者城を構て敢て秀吉に隨はず。秀吉軍勢を引て攻寄せ、只一戰に首百五十餘打取り、散々に切崩せば、民部太夫己が居城へも入

秀吉援則姫路に城を築く

小三郎長治、彦之進友行、肥前守治忠、三人一同に切腹し、名を後世にとゞめけるは、ゆゝしかりし事どもなり。時に長治二十二歳、友行二十一歳なり。抑此籠城のはじめ、天正六年の春よりして、今八年に至て三ヶ年の間、勇士を失ひ士卒を亡し、千辛萬苦を重ねし事、悉く山城守賀相が心中より出でたる事なり。然るに終に至て命を惜み約に背き、家人の爲に討殺さるゝは、悲しかりき事ならずや。扨も筑前守秀吉は、約束のごとく主將生害の上は、城中の士卒雜人、老少男女、悉く放ち遣り、長治已下の首を請取りけるに、小姓一人短册を持て秀吉の陣に來り、執次を以て秀吉に呈す。秀吉取りて披き見るに、長治、友行等が辭世の歌なり。

今はたゞうらみもなしやもろ人の命にかはる我身と思へば　長治

諸ともに果る身こそは嬉しけれおくれ先だつ習ひ有る世に　長治妻

命をもをしまざりけり梓弓末の世までも名をおもふ身は　友行

たのめこし後の世までも翅をも雙ぶる程のちぎり成りけり　友行妻

後の世の道も迷はじ思ひ子をつれて出でぬる行くすゑの空　山城守妻

君なくばうき身の命何かせん殘りてかひの有る世なりとも　治忠

かく聞えければ、秀吉いとう哀を催し、三人の首に此辭世の和歌を添へ、安土へ送り、別所一黨

そ」と申けるにぞ、長治大に氣色を損じ、怒つて申けるは、「士卒と共に切つて出で、討死切死なしてんは、十に一つも勝べき術の有りてこそ。是は兵粮數日乏しく、刀をまはし弓を引くべき力だになく、只徒に城中の軍卒を殺し捨て、何の益かこれあらんや。既に一昨日我々に同心し、秀吉へ盟約を成し、彼も我輩の信義を感じ、敵ながらも酒肴を送り、將に此事決定せり。然るを今に至て約を變じ、假令討て出でたりとも、やはか人並の働をなし、敵の目を驚かす討死は心元なし。況や永き末代に名を汚さん事、此上の恥辱や有るべき歟。比興未練の山城守、將卒押寄せて討殺して首を取れ」と罵りけるを、彦之進押止め、山城守未だ妻子共の死したるを知らず、今一應此事を申遣り、是非承引これなくば、其時兎も角も計ひ給へと、再び使者を以て言せけるは、「足下の妻子を始め、我々が妻子、早先達て自害し畢ぬ。今は何をか期しつらん。まげて一所に生害あれかし」と勸めけれども、賀相敢て承引せず。爰に至つて城中の兵士一同に憤り、「主將小三郎殿、彦之進殿、諸卒の命を助けんと、樣々心を盡し給ふにより、我々又其志の難有さに、惜からぬ命を活て大將の御存念を全くす。然るに山城守是を拒み、首際に命を惜み、多勢の死をかへり見ざるは不當の惡人、討殺して後の見せしめにせよ」と、大勢一度に群り寄り、賀相を捕て、寸計々々に切て捨たりける。長治、友行大に悅び、能も計ひしもの哉と心を安んじ、

りけるを、心強くも刀を拔てさし殺し、我身は刀を首に押當て、かき落して死たりけるは、誠に希有の最後なり。此人は畠山上總守が女なりけるが、心剛におはしければ、今日の生害もいと猛くものしけるぞ、いとゞ哀に聞えけり。次に長治の室、是も三歳になる男子をさし殺し、同く自害せられければ、其次彦之進友行が妻女、是は未年も二八に滿ざりけるに、容顏美麗の嬋娟女の、しかも此頃たゞならず妊身の心地成けるに、一方ならず悲しみて、泪更に止らず、是なん女子の常なりと、見る目もいたく哀なりき。されども止まるべき事にしもあらざれば、刃をのんどに突立て、是も空しくなりにける。長治悉く生害を見屆けて、剋限次第に移りぬれば、山城守と彦之進を呼び、ともに切腹の用意せんと相待けるに、彦之進、三宅肥前守治忠兩人早速さんじけれども、山城守曾て來らず。長治いらつて、人をして呼しむる。山城守忽ち心變じ、彼使へ申けるは、「一將の爲に萬卒の命を拋ち、日頃の報恩に死を致すは、我常に是を聞けり。士卒の命を助んとて、大將の死する事を未だ聞ず。時を得て重んずべき將の命、日を以て輕んずべきは士の死なり。今落城の際に及んで、我々三人生害し、首を獄門に掛られんも、誠に口惜き事ならずや。城中の兵士を引率し、一同に切て出て、思ふ程戰ひ討死せんこそ武士の本望なれ。若さる業の叶ふまじくば、城に火をかけ、死骸を隱さんこそ、せめてもの心やりにこ

生害者、士卒赦免之事、相違有間敷候。猶從淺野彌兵衞委曲可申述候。謹言。

羽柴筑前守秀吉

天正八年正月十五日

別所小三郎殿

同　彥之進殿

同　山城守殿

かくのごとく書たりければ、長治、彥之進悅びに絕ず、秀吉の禮義あるを感じける。既に十七日になりければ、別所小三郎長治、城中の諸卒を殘らず呼出し、貯置きし金銀財寶、武具馬具、太刀刀の類を分ち與へ、秀吉より送り越たる酒肴を以て酒宴を催し、兵士に向ひ「籠城既に年月重ね、忠義の志を變ぜずして今日に至る事、感歎少なからず、死後までの悅びにこそ。今より當城を去て、何方へも身を寄せ、終身の納りを計るべし」と、悉く暇乞をなしければ、數多の兵士從卒共、鎧の袖を絞ける。早剋限も移りぬればと、長治座を立ちて奧の間に入りぬるに、爰に長治の妻女及び友行、賀相などの妻子、皆生害の覺悟にて、圓居して有りけるが、長治の出來るを見るより、最後を催し給ふならんと、先山城守賀相の妻、男子二人、女子一人あ

唯今申上候意趣、去々年以來敵對之事、雖非無其謂、今更不能述其素意。併時節到來、運命既窮畢、何噬臍哉。依之長治、賀相等宗徒兩三人、來正月十七日申剋、可切腹相定畢。殘士卒雜人以下無科而可被刎首之事、誠以不便之題目也。以憐愍於被助置者、今生之悅、來世之樂、何事如之哉。此旨宜被披露者也。

天正八年正月十五日

別所山城守賀相

同　彦之進友行

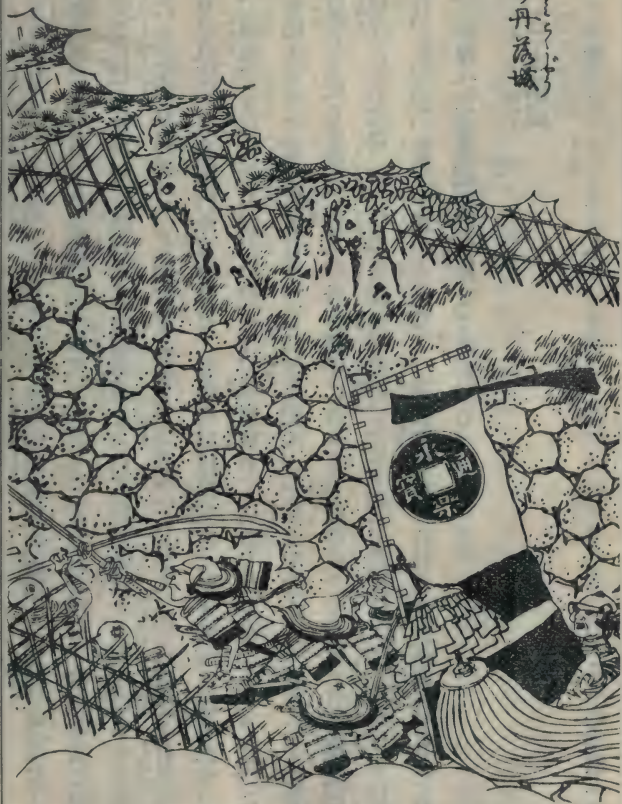
同　小三郎長治

淺野彌兵衛殿

淺野彌兵衛、此書翰を秀吉の陣所に持參し披露しければ、秀吉仁心を感歎し、返書を認め使者に與へ、別に士卒に命じて酒十樽、鯛十餘尾を持せ、城中に送りければ、小三郎長春彦之進友行甚だ悅び、秀吉の返書を披き見るに、其文に曰く、

書札到來卽令披見候。今度合戰、一而無不當理矣。雖失勝利更不可謂怯弱、雖然運命難遁與、來十七日申剋長治、友行、賀相被致自害、殘士卒雜人以下被助申度之由。誠大將愛士之道、前代未聞可謂良將、感其心底者落涙不留。右三人於

計を牒じ合す故なりとて、城際近く仕よりを附け、南は八幡山、西は平田、北は長屋、東は駒塚の間に搔楯をかき並べ、所々に井樓を高く上げ、川の表に大綱を引渡し、亂杙をひしと打ち、辻々街々は多くの番所を構へ、夜は篝を絶間なく焼き、番兵六百餘人、晝夜怠ず陣中を見巡りければ、三木の城中よりは、鳥ならでかよふ事叶はず、諸方の往來ひしと止けるに、城中大に弱りはて、次第々々に兵粮乏しく、今冬の末十二月に至りては、馬を殺し爭ひ喰ひ、陣々に餓孚の者數を知らず倒れ臥し、たま〳〵起てある輩も、此數月が間はか〴〵しく食事せざれば、弓を引く力もなく、刀を廻す精もなく、敵寄せば如何して防ぎ支べきと、安き心は無りける。其年も暮れ、明る正月上旬、城將別所小三郞長治、一族宗徒の者を本丸に聚め、相議して申けるは、「去々年以來、城中の兵士忠勇を盡し、堅固に籠城せるといへども、時運既に傾き、落城せん事旦夕に逼れり。されば城中の軍民士卒、悉く命を落しなんも、不便の至り何か此上のあるべきや。然れば某を始め、一族三四人切腹し、敵に乞て城中の兵士等が命を助けば、生前善事、死後の本望にこそと、早く覺期を究めたり。いかゞ思す」と申けるに、皆一同に尤なりと同心し、さらば書翰を以て此事を申すべしと、宇野卯右衛門佐を使として、淺野彌兵衛が陣所へ送る。其書に曰く、

伊丹落城
永樂通寳

調候上は、父母妻子已下の一命を助られ候やうに」と申送けるにぞ、瀧川左近此旨大將に申上げ、城中の妻子等を人質に取置き、久左衛門三百餘人を引具し、十一月廿四日、伊丹を出て尼ケ崎へぞ赴きける。されば伊丹の城へ織田七兵衛尉信澄を入れられ、人質の男女を守らせらる。荒木攝津守村重此企を聞ければ、久左衛門已下の者を尼ケ崎へ入れず、剰へ鐵炮を打出し、討殺さんとしたりければ、久左衛門途方を失ひ、伊丹の城は開渡す。尼ケ崎へは納られず、三百餘人の者共と、惘はてゝ居たりしが、いやく、時刻移りてはあしかりなんとて、其所より直に出奔して、何國ともなく成り行きけり。是に依て荒木が一族三十餘人は、京都にて誅せらるべきとて、警固嚴しく成して京に上せ、伊丹の城中に有りし宗徒の武士が妻子百二十餘人は、瀧川左近將監、惟住五郎左衛門尉、蜂谷兵庫頭等に仰て、尼ケ崎七本松にて磔にかけられたり。同十二月十四日、荒木が一族、一條の大路にて、不殘誅戮せられける。まのあたり見たる者はいふも更なり、聞傳へたる者迄も、皆袂をぞ濡しける。

○三木落城

去程に羽柴筑前守秀吉は、去る九月九日の合戰に、谷大膳討死せし事、城中より毛利家へ通じ、

○伊丹落城

偖も攝津伊丹には、荒木が一族及び諸士の妻子、荒木久左衞門等籠城して有けるが、寄手瀧川左近將監計を巡らし、城中に籠り居たる中西新八郎といふ者を密に呼出し申けるは、「和殿の主人荒木攝津守は、命の惜さに數多の兵士を爰に捨置き、只一人此城をのがれ出でたり。斯る比興の大將を賴み、あたら命を捨んよりは、御味方に參りて忠を盡すべし。某宜しく執成申べし」と語らひければ、中西實にもとや思ひけん、荒木が定め置し足輕大將星野左衞門尉、山脇加賀守、同源太兵衞と心を合せ、十月十六日、瀧川が人數を上臈塚へ引入たり。瀧川勢老若男女をいはず、當るを幸に切捨ければ、或は親を討れ又は子を殺され、城中へ迯入る形勢、目も當られぬ事共なり。鵯塚の出城に籠たる野村丹後守親賀、所の者共八百餘人加はりて、暫く支へ防ぎけるが、士卒大半討死し、今は叶まじと降參を乞たりけるに、是を赦さずして烈しく攻詰め、丹後守を始とし、城中一人も殘らず切盡しける。其外の出城々々悉く打崩し燒潰し、本城計に成したりければ、荒木久左衞門大に恐れ、使者を以つて瀧川が陣へ申けるは、「某尼ケ崎の城へまかり越し、攝津守村重に對面し、尼崎、花隈の兩城を開渡し候樣相計申べし。此儀

捨て、三木勢に討てかゝる、いとゞさへ負色なりし別所方、六七段に陣を割れ、思ひ〳〵に迯たりける。秀吉が兵ども爰に追詰め、かしこに押寄せ、分取高名さま〴〵なり。三木方に名を惜み勇にすゝむ兵士、踏止て討死する人々には、別所甚太夫、同左近將監、光枝小太郎、高橋平左衛門、三宅與平治等六百餘人討れたり。大將山城守はさん〴〵に成り、城中さして引行くを、秀吉が軍勢附入にせんと厳しく追かけ、既に危く見えける所へ、三木の城より淡川彈正定教、手勢二百餘人討て出で、必死に成て戰ふ內、山城守は辛じて城中へ逃入たり。彈正が三百餘人盡く討ぬれば、今は是までなりと、高き丘に上り、腹搔切て死たりける。秀吉鉦を鳴して味方をまとめ、戰も是迄なりと、勝鬨を三度揚げ、本陣へ引入りたり。此時中國勢は、平田の軍場を秀吉の一言に追落され、夢路を走る心地にて、魚住の海邊に來て見れば、秀吉が勢五百餘人、船に積たる兵粮を奪取り、平山の陣へ運けるを、船に殘りし三百餘人の中國勢、奪れじと戰ひけるが、羽柴勢平田の敗軍歸り來るを見て「さのみ兵粮も入らざるなり。此儘に追かへせ」と、備を開き、鐵炮を雨のごとく打かくれば、中國勢取物も取敢ず、漸に船に取乘り、藝州さして引取りたり。されば三木の城中いよ〳〵困窮し、籠城かなひ難くぞ見えにける。

の聞え高かりし源太左衛門なりけれども、終に脇坂に討れける。此魚住源太左衛門は無雙の忍なりけるが、只一人秀吉の陣其外附城の中へ忍入り、或は人を斬り、又は陣屋へ火をかけ燒立てんとしけれども、秀吉の陣中此長陣に少しも怠らず、軍令尤嚴しく有りければ、源太左衛門志を遂ず、秀吉も彼忍びの者は魚住源太左衛門なりと知りければ、樣々手を盡し捕へ討たんと計りけれど、終に捕ふる事能はざりしに、天命限り有りて、此合戰に討れけるは、惜むべき勇士なり。此時中國勢は平田の砦を攻落し、勢盛に秀吉の後より討てかゝり、三木勢と挾で攻立てけるに、秀吉馬上に鐙ふんばり、生れ得たる大音にて、「後の敵には目をかけな、前の敵を突破れ。中國勢はもはや落し穴へ入れたるぞ」と、押かへし〳〵、二三度四五度下知すれば、羽柴が軍兵此下知に依て、只一文字に別所が勢を切崩せば、秀吉が大音、中國の軍中に響渡て聞えけるにぞ、大に疑ひ、智謀無雙の秀吉なれば、いかなる計を構へたらん、我々は皆落し穴へ入れたるかと、早引色に成りける所へ、四方に構へたる附城より、中村孫平治、宮部善祥坊、加藤作内、淺野彌兵衛、思ひ〳〵に手勢引連れ、どつと喚て横合より突立れば、中國勢周章ふためき、「すは件の落し穴は是なるべし。引や〳〵」と云ふ程こそあれ、我先にと濱邊を指て迯出し、踏倒され押こかされ、討るゝ者大半なり。中村、宮部、加藤、淺野が輩、中國勢を討

し、大將討れぬれども少しもひるまず、鐵炮矢石を投出し、命限りと防ぎければ、寄手案に相違して、手負死人數を知らず。此時筑前守秀吉、平山の勢五千餘騎を引率し、大村表を馳來り、別所山城守賀相が三千餘人の正中へ、備を鋒矢に立て、どつと喚いて突て入れば、山城守士卒に下知し、鐵炮を打かけ、鬨を作て、火を散し戰うたり。三木の中より魚住源太左衞門と名乘り、眞先に進んで、中る者を突伏せ〳〵、勇を振うて戰ひければ、秀吉の勢ばつと四方に引たりける。脇坂甚内、「もの〳〵敷敵の振舞かな。手並の程を見せんず」と、大太刀打ふり討てかゝれば、魚住何かは猶豫べき、鎗を上げて突來る。兩方名譽の勇夫なれば、勝負の色未見えず。堀尾茂助かけ來り、聲をかけて申けるは、「今宵の合戰、一騎討の戰は無用なりと大將の御下知なるぞ、御免候へ、助申す」と呼つて、左の方より魚住に切つてかゝる。魚住手だれの剛兵なれば、是にもひるまず、二人を相手に戰うたり。三木方の櫛橋彌五郎これを見て、魚住を救はんと一散に駈來り、聲をも掛ず、堀尾が後より切附けたり。茂助心きゝたる壯士なれば、しり目に是を吃と見て、魚住を捨て櫛橋と渡り合ひ、しばし打合ふと見えけるに、堀尾が勇や勝けん、櫛橋を馬より下に切つて落し、又魚住に討て懸る。此時魚住、脇坂が討太刀を拂ひ損じ、內兜を切込れ、目に血ながれ入りて、戰少しゆるみたるを、堀尾、脇坂兩人に切立てられ、さしも勇士

約束ば、別所長治、山城守賀相大きに悦び、寄手北の方谷大膳が固めたる平田の砦を攻べしと約束し、使者を中國へ歸しける。毛利勢さらば船を乘出せと、侍大將生石中務、乃美兵部、兒島六太夫、案内者手島、土橋、渡邊を引具し、其勢上下八百餘人、九月九日暮方、室山に著て、城中へ相圖の狼烟を上げ、谷大膳が砦へ濱手より押寄せ、卒に鬨を作て討入んとす。三木の城よりも別所山城守賀相三千餘人、同時に城戸を開て討て出で、是も同く大膳が砦を目當に一文字に駈たりける。谷大膳は無雙の勇士、大力の譽ある兵なれば、少しも騷がず士卒を制し、「汝等必ず騷動する事あるべからず、我自ら切て出で敵兵を防ぐべし。其隙に城中防禦の備を堅固にすべし」と言捨て、僅に二十餘人の甲兵を引具し、柵際にせまりし中國勢が眞中へ、面もふらず切て入り、當る者を選なく、前後左右へ突伏せ、恰も猛虎の群羊の中に入るが如く、またゝく内に三四十騎ばら〳〵と切倒せば、四方へばつと退たりける。されども中國方大勢なれば、四方より取廻し、「あの勇兵こそ敵將谷大膳なるぞ、討取て高名せよ」と、鎗ぶすまを成して突かゝれば、大膳更に驚かず、四方に當つて戰ひしが、持たる鎗を突折て、刀を拔て鎧武者五騎切つて落し、八人に手を負せ、其身金鐵にあらざれば、數ヶ所の手疵叶がたく、亂軍の中に立ちながら腹掻切り、刀を首に押當てゝ、掻落してぞ死たりける。此戰の隙に砦の內、嚴しく防禦の用意をな

荒木村重
伊丹を去る

ける。去程に攝州伊丹に籠たる荒木攝津守村重、未だ堅固に籠城し、織田家の諸將と合戰度々なりけれ共、はか〴〵しき戰もなく、徒にこそ過しける。高山右近、中川瀨兵衞兩人は、度度荒木が方へ使者を立て、利害を說て降參を勸めけれども、荒木曾て承引せず、いよ〳〵募て敵對しぬれば、高山、中川の兩將も、詮方なうぞ見えたりける。同年七月三日、攝津の附城に籠たる武藤彌平兵衞病に死せり。信長公惜み哀み給ひ、遺跡相違なく其子助十郎に賜ひける。同八月廿日、中將信忠卿、堀久太郎秀政等、大軍を率し攝州に出陣し給ひ、伊丹の城を攻落さんと議せられけれる。然るに荒木村重は、中國三木の別所と心を合せ、諸方の手番をなしてんと、同九月二日の夜、女房只一人召具し、家人助治郞に祕藏の茶壺を取持せ、密に伊丹の城を忍び出て、尼が崎の城に入りたりける。此時三木の城中別所一家の輩は、日々日々に勢を失ひ、今兵粮乏しくなり、上下心を惱ましける。中國の毛利輝元は、先に別所が催促に應じ、兵粮數多送りけれども、羽柴が勢に往來の道を斷切れ、すべきやうなく本國へ引かへしけるが、あまり云甲斐なき事なりとて、今度も兵船數多仕立て、粮米夥しく積乘せて、密に三木の城中へ使者を遣し、「魚住の濱へ兵粮を送り著べき間、九月九日夜半の頃、城中より討て出て、敵の陣を切崩し、兵粮を取入るべし。此方よりも軍勢を差向け、同時にさし挾んで討破るべし」と申送りけれ

遁れ給へかし。信長公英智大才あるといへども、温順ならずして氣風偏なり。恐くは大志全く遂がたからん歟。尊公よく是を心に認め、時に臨みて計略を運らし給へ。此事常に小臣が心に的する事ありと雖も、敢て詞に是を發せず。今病苦頻にして死せん事旦夕にあり。人の將に死んとする時、其云ふ事よしとかや。構てあだし事と思し給ひそ」といひ終て枕に著き、眠がごとく死たりける。時に天文七年六月廿二日、行年五十一歲なり。秀吉聲を揚て悲み歎き、死期の一言肺腑に徹し、片時の內も忘るゝ事なく、後の形勢を考ふるに、重治が詞に符合せる事のみなりける。實に惜むべき謀士なりしを、齋藤家を去てのち、智術謀計を出さずして終りけるは、三國の徐庶に似たり。

○三木毛利兩勢襲谷大膳砦

羽柴筑前守秀吉は、竹中半兵衛が遺言に隨ひ、浮田和泉守が降參、君命を受て取計ひ申すべき旨、信長公へ伺ひければ、信長公御氣色うるはしく、「中國一圓を秀吉に任する間、宜しきに著て取計ひ、悉く尋問ふに及ぶまじ」と仰せ渡されければ、秀吉頓て浮田が家督たるべき與太郎を名代とし、信長公に御目見えなさしめ、本領安堵の墨附を賜ければ、浮田一家初めて心を安じ

郎を厚く勞り、我子のごとく傅けば、彌九郎よりは其趣を密に浮田方へ内通し「秀吉が寛仁大度、當時の諸侯雙ぶものこれあるまじ」と告けければ、直家大に心を安んじ、是より無二の織田方となり、毛利に敵對の色を顯しけり。時に此頃羽柴が陣中に有ける竹中半兵衛重治、暑氣に犯され病を發し、種々醫療を盡すといへども、更に其驗もなく、日毎に元氣衰へければ、秀吉甚だ心を痛め、軍中の保養覺束なく、數多の人を添て竹中を京へ登せ、典藥名醫を迎へ、手を盡し術をかへて療ずれども、微は効有に似て大なる驗はなし。竹中元より死病なりと覺悟して、從者に向ひて申けるは「武門に生れ合ひたる者は、軍陣の内に死せん事こそ本意なれ。我を播州平山の陣所に伴ひ、彼所にて死せしむべし」と、爰において止む事なく駕に取載せ、數多の人數を以て守護せしめ、又秀吉の陣へ赴きける。是によつて秀吉、晝夜竹中の側を去らず、看病して有けるが、重治少し病の間ある時、秀吉に告て申けるは「此度浮田直家より降參を乞ひ、人質を捧げ來る由承る。此儀一應信長公へ伺ひ給ひ、下知をうけて降を免し給へ。假令人質を送り來りたり共、夫を隱して下知を受させ給へ。信長公の御心を物に譬ば、綿に針を包みしに似たり。貴君の英名餘りに高く、功業日々に盛なれば、信長公心裡に是を忌み給ひ、狡兎死て良狗贅らるの諺あり。既に韓信は女子の爲に殺されたり。爰を以て九分目に事を行ひ、患を

繪本太閤記　二篇卷之十二

○竹中半兵衞尉病死

時に天正七年夏五月、浮田和泉守直家、信長の幕下に屬せんと、小西彌九郎を使者と成し、秀吉の陣へ遣しけるが、歸來りて直家に申けるは、「御口上の次第具に秀吉に申入候處、仔細なく承引致され候へ共、凡歸降を乞ふ者、大家小家によらず、皆人質を出し味方に參る事、諸家一統同事なり。早く人質を具し來らば、大將に言上し、本領安堵の朱印を申下し、御前よろしく執成し致すべき旨、懇に申され候。某密に思慮をめぐらし候に、御愛子八郎殿を人質として秀吉に預け給はゞ、秀吉少しも疑はず、悅んで當家を吹擧すべし。右八郎殿には、不肖に候へ共某介添と成りて參り候はゞ、いかなる大事出來候とも、君達の御身において、少しも御心をもちひ給ふ事ある可らず。且は織田家内外の風說、奇密悉く某より內通致さば、此上もなき間者たるべし。御家の爲あしき事は候まじ」と申けるにぞ、直家早速此議に同じ、今年八歲に成りける男子八郎を人質と成し、小西彌九郎を附て秀吉方へ送りける。秀吉大に滿足し、彼八

繪本太閤記 二篇第十二之卷 目錄

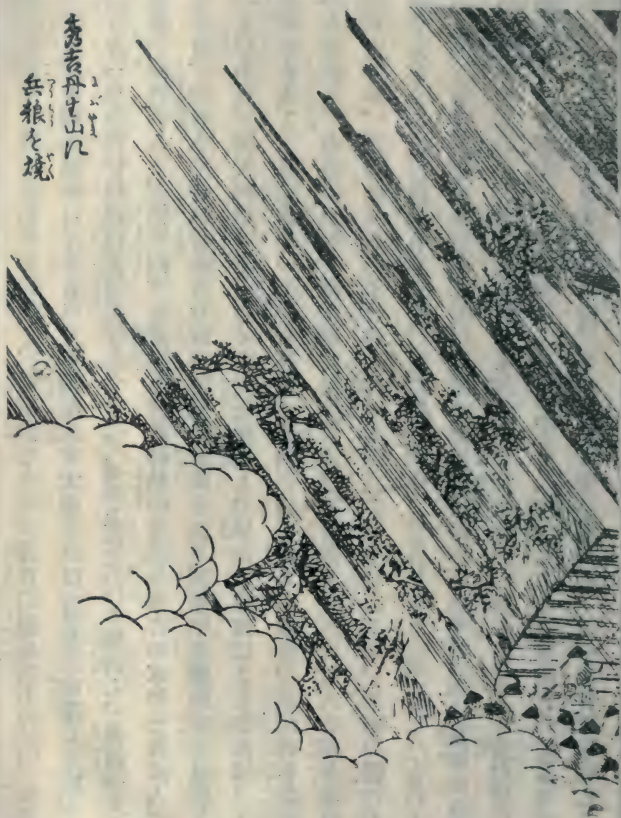
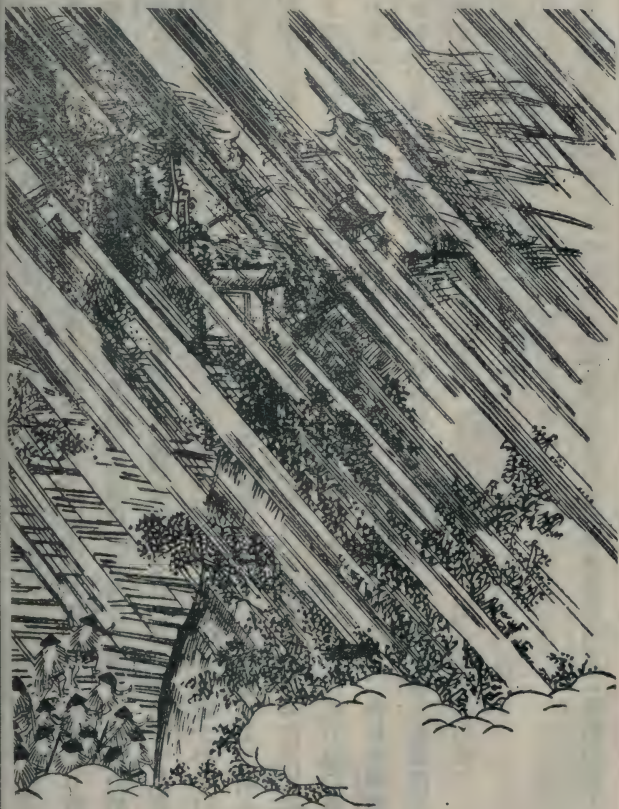
し、暫く言句も出でざりしが、良有りて頭を上げ、「あら恐しき御眼力に座する者かな。賢察の如く某浮田の家人にてはこれなく、舊泉州堺の津の町人小西如清と申す者の悴にて、去る永祿十二年、堺莊官信長公に背き籠城の結構候ひし時、君未だ木下藤吉郎と申し堺の津へ入來有りしを、某其時十一歳、御茶の給仕に罷出で、我は見知り奉りたれ共、夫より凡十餘年の星霜を重ね、斯の如く男に成て候へば、見知り有るべきとは思ひもよらず、浮田が命を蒙りて家人と稱し參上せし事、御惡みに依て首を刎られ候とも少しも恨み無之候」と殘らず身の上を言上し、跼つて控へける。秀吉彌九郎が器量拔群なるを心中に甚感じ、面色を柔げ申けるは、「直家當家に屬せんとならば、人質を差出すべし。然る上は本領安堵の御朱印を申受け、御前宜しく取成すべし。此旨篤と直家に申達し、重ねて否應を報ずべし」とありければ、彌九郎謹で領承し、「和泉守誠心信長公へ歸伏致し候上は、人質の事何より安き御事に存候。併其趣今一應申聞け、早速御報申すべし」と、暇申して備前へこそは歸りける。

城を攻て尼子主從を殺し、今別所一家將に滅亡せんとするを見て卒に降を乞ふ、表裏定らざる直家が心底、我未だ是を信ぜず。降參の實否を糺て後、兎も角も言上すべし」と云ふ。彌九郎是を聞き、大口を開き甚だ笑うて申けるは、「織田家の內にて羽柴筑前守こそ武略智謀古今に秀て、義經正成にも勝れりと聞しが、夫には違ひ覺ゆる者哉。浮田直家は備前美作二州の主たり。兵多く糧足り、勇名又人の下に出ず、假令織田の軍を迎へ合戰を成したり共、矢の一筋も射かけでや候べき。當時の形勢織田や勝べき、毛利や利を得べき、又浮田家是を倂吞すべきや、諸家存亡勝敗の分際未だ定らず。其中より信長公に屬せん事を乞ふ主人和泉守、本心歸伏せるに非ずして、何の要ありてか某を使者たらしめ、足下に事を計んや。毛利は大敵にして爾も鄰國なり、然るを是と因を斷て、來て幕下たらんと乞ふ直家が心底、云はずして知るべき事なり。願はくは能察し給へ」と云ふ。其言語流水の如く、應對更に人の心魂を取り挫ぐ。秀吉、「汝が云ふ所一理なきにあらず。されども浮田家備前美作の領主なれば、臣下に人なき事はあらじ、何ぞ腹心股肱の輩を使者とせずして、汝ごとき匹夫、僞りを以て人に對する町人を用ひぬる直家が腹中、僞心有る事顯然たり。我よく汝を見知つたり、有りの儘に申さば此降參承引すべし。僞らば軍勢を差向け微塵になさん」と、聲を勵し呵ければ、さしもの彌九郎大に驚き、席を下つて低頭

中を心の儘に往來し、直家常々彌九郎を座右に召寄せ、臣下同前に心安く會釋けるが、彌九郎年老たりければ、去年より隱居して世業の事に預らず、一男あり、是を彌九郎と名乘せ、相續て公用を勤させける。今の彌九郎は先彌九郎の實子にあらず、泉州堺の町人小西如清が子なるを養ひ嗣とす。今の彌九郎此時年二十一、力飽まで強く、智略衆に秀て、色白く長高く、尋常の者とは見えず。和泉守直家常々彼が才智を感じ、物の用に立つべき奴なりと睦くあしらひけるが、此者を使者と成し秀吉が許へ遣しなば、結句事調ふべしと思ひ、頓て彌九郎を召寄せ、詳に仔細を申聞せ、「此使者を仕課なば、武士に取り立得さすべし」と語りけるに、彌九郎元來大膽不敵のをのこなりければ、大きに悅び、委細領承し、浮田の臣下と稱し、平山の羽柴が陣所へ赴きける。秀吉浮田直家より使者到來の由聞ければ、一間に請うて對面す。彌九郎少しも恐るゝ色なく、秀吉と座を對して禮をなすに、秀吉寂々と打守り、「使者の姓名はいかに」と問ふ。彌九郎答て、「某浮田和泉守が家人小西彌九郎と申す者なり。主人和泉守信長公の幕下に參らん爲、某を以て使者と成し、足下の吹擧を賴まんとす。いかゞ承知これ有るべきや」と云ふ。其詞短くして勇有り。秀吉是を聞て、「和泉守當家に歸伏せんと乞ふ事、尤神妙の至なり。併前に信長公召るゝ事ありしかども、御下知に隨はず、度々敵對の色を顯し、毛利と共に上月の

ぱつと迯たりける。城將淡川彈正、急に下知して軍勢をまとめ、城を捨て三木の城へつぼみけるは、氣早なりし行跡なりと、敵も味方も感じける。秀長先手の敗軍を怒り、惣勢を以て淡川の城へ押寄けれども、空城にして敵一人もなかりければ、頓て城中に入て、此旨秀吉へ注進しける。去程に三木の城中には、丹生山、淡川兩城を攻落され、剰へ若干の兵粮を燒捨られ、荒木との通路を斷切られ、賴み少く成りければ、毛利家へ使者を立て援兵を乞ひ、並に兵粮借用せん事を賴ければ、毛利輝元承引し、兵船三百餘艘に兵粮多く積み載せ、軍兵七千餘人、船手の大將兒玉兵太夫、野見兵部等に奉行させ、播州魚住に船を押寄せ、三木の城を見繼んとす。秀吉兼てより是を察し、君が嶺といふ切所に陣を張り、三十餘ヶ所に附城を構へ、溝を掘り、亂杭逆茂木引渡し、三木と魚住の間を取切り、通路を止ければ、毛利家より送り越したる粮米も取り入る事能ず、城中大きに困窮し、かくては籠城叶まじと、別所山城守賀相、加古右京亮、梶原平三兵衞、魚住隼人、垂井民部、櫛橋三郎四郎等數千の精兵を引率し、羽柴方の神子田半左衞門、古田吉左衞門、中西彌五作等が固めたる二つ子の砦へ押寄せ打破て、毛利家の兵粮を城中へ取入れんとす。神子田、古田是を見て「敵は大勢なるぞ。此要害もなき假城にて防ん事心元なし。切て出て打崩せよ」と、五百餘人城戸を開き、面もふらず眞一文字に突て入れば、三木

兵糧數多蓄置けり。秀吉弟小市郎に命じ、風雨烈しき夜、究竟の逞兵六十餘人、彼丹生山に忍び登り、密に塀を越し城中に忍入るに、車軸を流す大雨なれば、城兵共油斷して寢入たるに、所所の陣所々々へ火を附けければ、火炎高く立上り、城中上を下へと騷動し、夜討や入りつらん、反心の者や出來たらんと、同士討する者夥し。此時麓の方より秀吉の軍勢三百餘人、金鼓を鳴らし鬨を作り、攻登るべき形勢をなせば、城將三宅與平治、高橋平左衞門這々城中を迯出で、道を需て走ければ、秀長何の辛苦もなく此砦を攻落し、早日も東山にさし登れば、此勢に淡川の城へ押寄せんとて、兵士を引いて急ぎける。淡川の城を守る大將は、淡川彈正定範とて、軍事になれたる舊兵なりければ、敵の押寄せ來らん事を計知り、三百餘人の逞兵を敵の來るべき道に埋伏せしめ、別に士卒百人計鋤鍬を持せ、雨後の路を補はしめ、油斷の體にもてなしければ、秀長が先手の軍勢此體を見て、「扨は敵城油斷してありけるぞ。進め〳〵」といふ程こそあれ、はやり雄の兵五百餘人、揉にもんで討てかゝれば、彼路作の兵卒共、大に驚きたる形勢にて、さん〴〵に迯たりければ、計事とは夢にも知らず、押詰め〳〵附入にせんと進む所に、相圖と覺えて鐵炮の音高く響くと等く、左右の竹藪の中より、埋伏したる三百餘人の城兵、一同に噇と討て掛れば、思ひがけなき秀長が軍勢、さん〴〵に切り崩され、討るゝ者數を知らず、四方へ

秀吉丹生山に
兵粮を焼

其外勇夫ども必死と成て攻合ひ、はげしき事いふ計なし。此時秀吉の二陣に進みし一柳、平野、大谷等先手の戰を打捨て、引返して旗本の合戰を助け、別所小八郎が勢を前後より取廻し、餘すまじと切立てければ、さしも勇みし三木勢も、前後の敵に途を失ひ、討るゝ者麻の如し。大將小八郎治定、急に士卒を下知して、用意の鐵炮二百挺ばら〳〵と打かけ、煙の中より切て出で、突崩して退かんとす。別所の先陣山城守賀相は、羽柴の二陣引かへして小八郎が勢を取包むと見てければ、當の敵を無二無三に突破り、味方の兵を一所にせんと、勇を逞うして戰ふ所に、秀吉の脇備青木、神子田、木下等二千餘騎、横合に押かゝり、山城守が勢を二三段に斷切て、微塵にせんと突入りければ、三木方の先陣後陣さん〴〵にまくり立られ、暫時の戰に勇士數多討死す。小八郎治定は踏止つて味方の兵を引せんと、身命を捨て戰ひしが、秀長が郎等樋口太郎と云ふ者に討れ、粂五郎忠親は大谷慶松に切れける。されば三木の軍勢勇士八百餘人討死し、漸く城中へ引入りけり。

○秀吉燒レ兵ニ粮於丹生山一

爰に播攝の國境に丹生山といふ切所あり、此所に砦を築き、荒木と別所互に通路の便とし、就中

守、立橋源太左衞門、神保民部少輔、大村九郎右衞門等軍勢を引て相隨ふ。後陣は別所小八郎治定を大將とし、同甚太夫、光枝小太郎、淸水彌四郎、服部五郎左衞門、垂井武藏守、有田兵庫頭、葉山左馬之介等相隨ひ、二月六日の曉に城を馳出で、秀吉の向城平山に向うて寄せたりける。秀吉是を見て大きに笑ひ、「城兵等我に頭を送らんとて、はる〴〵爰に來つたり。一的に蹴ちらせよ」とて、先其備をぞなしたりける。先手は蜂須賀小六郎正勝、加藤孫一、中村孫平治、堀尾茂助千五百人、二陣は一柳市助、平野權平、大谷慶松一千餘人、秀吉が旗本は令弟小市郎秀長、加藤虎之助、福島市松、片桐助作、增田仁右衞門等一千餘人、別に神子田半左衞門、青木勘兵衞、木下彌助、藤井又太郎等二千餘人左に備へ、既に手分定りしかば、敵の來るを待かけたり。程なく兩方の軍勢近寄ると見えけるが、互に鐵炮を打かけ、雙方鎗を合せて戰ふ程に、喚き叫ぶ鬨の聲山川を動搖し、討つ討れつ揉合ける。此時兼て手配りやしたりけん、三木方の後陣一千餘人備を繰出し、東の山を越えて秀吉の本陣へ撞きたる。秀吉の旗本少しも騷がず、是を迎へて火をちらして戰ふ程に、小市郎秀長三木方の將大野大八郎と鎗を合せ、馬より下に突伏たり。秀吉方は加藤、福島、片桐等名にしおふ勇士ども、我劣らじと働けば、三木勢も小八郎治定不當の勇士なれば、諸卒を勵し眞先に進み戰へば、從兵粂五郎忠親、淸水彌四郎直親、

城を構へ、歸陣の催とり〴〵なり。先塚口の城に神戸信孝卿、惟住五郎左衛門、蜂谷兵庫頭、蒲生忠三郎、高山右近を籠らせ、毛馬の城に北畠信雄卿、織田上野助、瀧川左近、武藤助十郎、倉橋の城に池田父子、原田の城に中川瀬兵衛、古田佐介、刀根山の城に稲葉伊豫入道、氏家左京亮、芥川の城に織田七兵衛信澄、池田に鹽川伯耆守、加茂岸に中將信忠卿の御勢を置れ、其外詰々に兵を殘し守らせ、羽柴筑前守は三木の城に向ひ、惟任日向守は丹州征伐を命ぜられ、波多野が居城に向ひける。かくのごとく御手配調ひければ、十二月二十二日、信長公御父子、本國へこそ歸陣し給ふ。

○別所治定討死

明れば天正七年の春二月の始め、三木の城將よりつどひ談じけるは、「秀吉去年より當表に宿陣し、野口、神吉、志賀多の城々攻落し、勢を得るといへども、敢て當城へ攻かゝらざるは、味方の兵粮を費さんとはかるものなるべし。斯の如く徒に籠城し、手を叉て有らんよりは、切て出て相戰ひ、敵の勇氣を塞べし」と、衆議これに一決し、三千餘人を二手に分ち、先陣は別所山城守賀相を大將とし、同左近、北野權右衛門、櫛橋彌三郎、保隅越中守、室田内匠、岡村因幡

を教訓する事能はずば、提宇子の法を禁じ、汝等盡く本國へ追歸らしむる間、心を責めて此一事を勸むべし」と云ふ。伴天連委細領承し、直に高槻に至り、さまぐ〵宗法を以て說さとしけるに、右近終に是を信用し、人質を出して信長公に降參す。信長公甚悅喜し給ひ、芥川郡を高山に賜り、伴天連には黃金三百兩を下し賜ふ。秀吉また高山を以て、茨木に籠りたる中川瀨兵衞に降參を勸む。中川瀨兵衞同心して、秀吉が陣に來りて相見す。信長彌〳〵悅び、中川瀨兵衞に本領安堵すべきよし仰渡され、則重卿の脇指と一の戶鹿毛の駿馬並に黃金三百兩を下し給ふ。同廿八日、昆陽野に陣を移し、花隈の城を攻落し、兵庫あたりを殘りなく燒拂ひ、十二月八日、伊丹の城に取掛り、四方を圍み攻られける。然るに城中にかへり忠の者ありて、相圖を定め城戶を開べき旨、織田方へ内通しければ、寄手大きに悅び、爰を先途と八方より押寄せ、堀際を攻詰て、あはや城門を開きぬらんと見る所に、城中よりかの謀叛人の首を切て寄手の中へ投出し、どつと一度に笑ひければ、織田勢の支度相違して、興さめてこそ見えにけり。其中より萬見仙千代只一人、塀に取附き乘入んとする所を、城中より長刀を以て切拂へば、むざんなるかな、突貫れ死したりけり。されば寄手何の仕出したる事もなくて、夜に入て繰引に引取りける。此時年も末に成りぬれば、信長公、とても冬の内に退治せん事能ふまじと、方々に附

再び謀叛の旗を揚たりけり。信長公今は此者赦し難し、播丹未だ平治せざるに、攝津に敵ありては始終宜しかるまじとて、三七信孝卿、稻葉伊豫入道等を安土の城の留主代として、自ら大軍を率し、同十一月攝州に發向し、天野山に本陣を居られ、中將信忠卿を天神の馬場に陣を張せ給ふ。此節播州三木の城には、兩陣互に時を見合せ、猥に戰を始めず、相守りて居たりければ、信長公密に使を以て秀吉を招き、荒木征伐の計を尋給ふ。秀吉己が陣を竹中半兵衞尉重治、浅野彈兵衞に守らせ置き、三千餘騎を引率し、天野山の本陣へ馳來りぬ。爰に同國高槻の城主高山右近長房といへる者は、荒木攝津守が無二の味方にして、倶に信長に敵對の色をなし、高槻に楯籠りけるが、右近元來剛勇無雙の壯士なれば、秀吉思ふやう、先荒木が賴み切つたる高山右近、中川瀨兵衞なんどを味方に降し、伊丹を裸城に成て攻かゝるべしと、其工夫を巡らしけるが、此頃耶蘇宗門提宇子此國に蔓り、信長公もより〳〵歸依し給ひ、歷々の勇士剛將、此宗門を尊敬する者少からず。高山右近も此提宇子の徒なりければ、秀吉其導師伴天連を招き申けるは、「汝が宗門切支丹の法は、非義の者に與せずと敎へなすに、高槻の高山右近無二の門徒に有ながら、荒木が不義不忠を助け、信長公に弓を引くは何事ぞや。汝早く高槻に到り、敎導して右近を織田に降參せしむべし。此事全く調ひなば、汝が宗門、日本に建置べし。自然右近

ば、是より三木の城へ取掛り、四方を圍攻たりけれども、此城無雙の要害にして、不當の勇士數多籠城せし程に、更に落べきけしきなく、所詮卒には平治しがたきを察し、八月中旬、三木の東平山の峯に向ひ城を築き、羽柴秀吉陣營を張り、西の方平田に宮部善祥坊を差置き、南の方へは脇坂甚內、加藤作內、糟谷助右衛門等に陣を取せ、緩々と攻たりける。爰において惣大將信忠卿、させる戰もなかりければ、諸軍を引きて歸國をこそせられける。

○荒木攝津守謀叛

爰に攝津國伊丹の城主荒木攝津守村重、は信長公を恨み參らせ、播州の後詰にも秀吉の計に隨はず、合戰を餘所に見なして有りけるが、此節本國に歸城して、露して謀叛の色を立てにける。信長公此由を聞し召れ、松井法印友閑、惟任日向守光秀、萬見仙千代を使者として、種々仰宥められければ、荒木其理に屈伏し、安土に出仕して其罪を謝せんといふ。是によつて三使歸國して、信長公に報ず。信長是を聞し召し、安堵しておはしけるに、荒木が郞等皆村重に申しけるは、「信長は狐疑深き大將なれば、たとへ一旦赦免有るとも、終にはよろしき事有るべからず。只其儘に思ひ給へかし。安土出仕の事は危く候」と、一同に諫めければ、荒木又これに心決し、

を郎等に持せ、大手をひろげて駈巡り、手先に當る兵を摑んでは投付け〳〵、心の儘に働きける。されども寄手は目に餘る大軍なれば、新手を以て討つ程に、城方三百餘人討死し、繰引に引入んとす。筑前守秀吉此體を見て「旗本を急に進め、此敵を追入て、附入にせよ者共」とて、采配打振り下知をなせば、蜂須賀、中村、堀尾、脇坂、加藤、福嶋、片桐、糟谷、鎗追取て突立て突立て、土橋半に追詰しが、城中より鐵炮の筒先を揃へ、ばら〳〵と打出せば、先に進みし軍卒共、將棊倒しに討れける。脇坂甚内味方の氣臆れせん事を察し、眞先に進み大音にて「爰を恐れて退かば、いつか城に乘入べき。一番乘は我なり」と、呼はり捨て馳登るに、鐵炮一つ脇坂が左の膝口に中ければ、從者の肩に手をかけて無二無三に乘入れ、大手の外構を打破れり。寄手續て押入り〳〵、勢に乘て本丸を攻る事甚急なり。城主民部少輔が叔父神吉藤太夫といふ者心變して、民部少輔を欺き討て、首を携へ織田の陣へ降參す。大將討れぬれば殘兵いかでかこらふべき。梶原入道を始とし、中村長谷川等の勇士悉く討て出て思ふ程戰ひて、皆討死をしてければ、神吉の城は落たりける。彼大將を欺き殺せし神吉藤太夫、臆病不義の賊なりとて、甲冑を剝取り、裸にて追拂ひぬ。扨此勢に志賀多の城を攻よとて、惣軍一同にすゝみければ、城主櫛橋左京進、一戰にも及ばずして城を開いて退散す。かく兩城ともに落著しぬれ

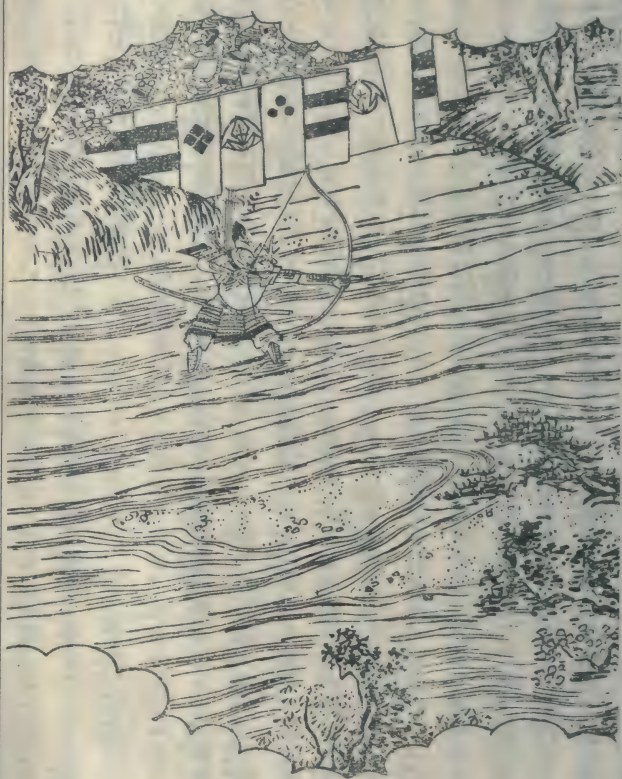
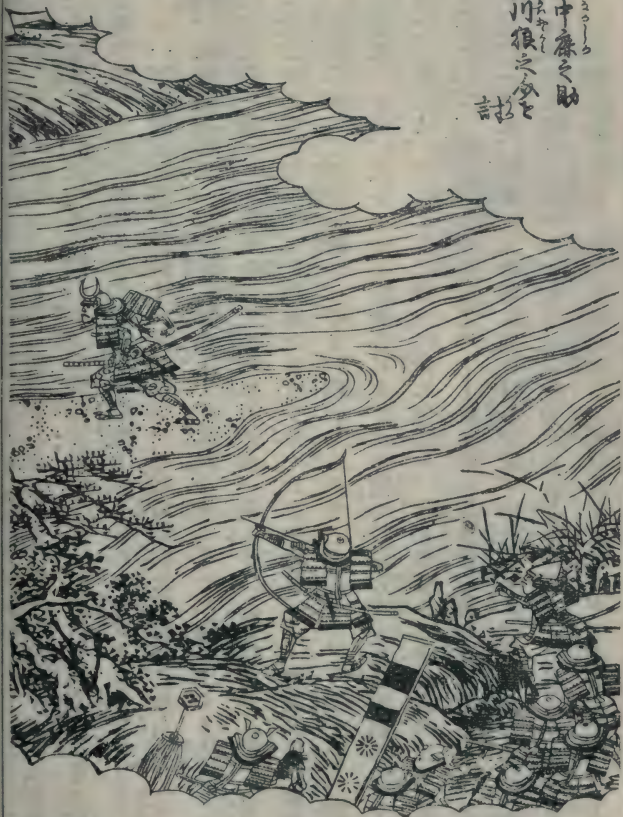
に對し面目なき有樣におはしけるが、今は何哉秀吉の手助けをなして、彼が不快を解んものとて、七月三日、下知を傳へ、惣勢を以て神吉、志賀多の兩城に押寄せ、息をも繼ず攻められける。神吉の城には神吉民部少輔、梶原十右衞門入道冬安、中村壹岐守、長谷川權太夫、小寺主馬介、藤田東治、柏原治部右衞門抔いへる一人當千の勇士一千餘人楯籠り、寄手の大軍を事ともせず、鐵炮を飛し、大木大石を轉しかけ、手痛く防ぎ支ふれば、寄手忽ち手負死人數を知らず、攻倦んでぞ見えにける。其夜羽柴筑前守秀吉、士卒に命じ、近鄕の藪を多く切せ、竹束を夥く拵へ、是を先に押立て、鬨を作て攻登れば、此頃西國に未だ竹束を用ふる事なかりしかば、城兵半は是を怪み、猶豫して見えけれども、早寄手近々と押寄せ來れば、鐵炮を雨より繁く打出すに、彼竹束にて是を防ぎ、城際まで寄たりけり。城將神吉民部少輔是を見て、扨は弓鐵炮も功なきかな、さらば切て出で追散すべしとて、逞兵勝つて五百餘騎、城戸を開き、噇と喚て駈出たり。此民部少輔は聞ゆる勇力なりければ、重代の太刀菊一文字則宗二尺九寸ありけるを、電光の如く打振つて切廻る程こそあれ、此太刀蔭に向ひし者、堅甲鐵胄もその用なく、ばらり〳〵と斬れけり。梶原入道冬安も老年なれど大力大兵、刃のわたり五尺計の大長刀水車のごとく振廻し、向ふ者を切て落し、烈しき猛勇、左右なく近寄る者もなし。入道は件の長刀

なき働をなし、人目を驚かしむ。其外山名禪高を勸めて、因州鳥取の城を攻め、武田豊前守を殺し、因幡を去て丹後の國に身を忍び居たりしが、尼子式部少輔が子勝久、泉州堺の津に桑門の身と成りてありけるを、迎へ取りて大將と崇め參せ、雲州の浪人を聚め、再び出雲國へ亂入し、勢を震ふ事大方ならず。隱岐判官を恨みて、纔に百餘人夜中に海を渡り、三保の上なる山に取り登り、夜半計に鬨を噇と作りかけ切てかゝれば、隱岐の軍勢寢耳に水の入りたる如く狼狽騒ぐを、追詰おひ廻し、撫切に切ては捨て〳〵する程に、爰にかゞみ彼所に迯て、ふるひ慄く形勢は、譬へていはんやうぞなき。鹿之助が刀は四尺三寸の大太刀を以て、終夜人を斬る事數を知らず。後には刃も損じ鐵も鈍りて、切止みたるを振廻して討つ程に、幾許の人悉く打殺されけり。扨大將隱岐判官をも終に其夜討取りて、凡千餘人の軍兵、僅に百餘人にて一夜の内に切り盡したる事、古今例少なき勇士かなと、聞く者擧つて賞しける。

○神吉志賀多之城落敗

去程に織田城之助信忠卿は、上月の城陷り、主將勝久幸盛生害の由聞しめされ、惟任、瀧川、佐久間等が秀吉を拒て上月を退陣させしと心づき、山中が討死を深く後悔し給ひ、何となう秀吉

云はやしければ、毛利方に品川半平といふ大强無雙の剛兵有りけるに、鹿之助を討んとて、名を狼之助とかへにけり。或時の軍に彼狼之助、弓を妻手の脇に挾み、ゆらり〳〵と川邊に打出で、大音に呼はりけるは、「山中の鹿殿やおはす。かく申すは品川狼之助といふ大剛の兵なり。向ひ候へ」とて河中さして渡り來る。鹿之助もけふを晴の戰なれば、常よりも勇み進み、既に近く成りければ、狼之助弓に矢つがひ、忘るゝ計引しぼり、暫持堅めありけるを、岸左馬進といふ者、「南無三寶、鹿は狼に取らるべし」とて、矢一つひやうと放ちけるに、品川が引堅めたる弓の鳥打をふつと射切れば、狼弓を川中へからりと打捨て、大太刀拔て向うたり。鹿之助は打物取りて名譽の者なりければ、太刀合に成りて拔くぞと見えしが、はや狼之助が馬手の小鬢を切割たり。狼之助は鹿之助に比すれば力はるかに勝り、身の長も拔群のびて有ければ、引寄せて無手と組み、上に成り下に成り、時移る迄揉合しが、鹿之助脇指を引拔き、狼之助を一刀に突通し、拔もやらで二くり三くりくつてければ、のつけに反て倒れざまに太刀にて拂たりければ、山中が向臑を切りさきたり。されども深手叶ひがたく、終に狼が首を取つて差上げたり。是によつて鹿之助が英名天下に響けり。尼子義久亡て後、鹿之助方々と經廻り、いかにもして尼子の家を起さんものと、上方へ登り來て、明智光秀によつて遊客と成り、丹州の一揆を討て比類

山中鹿之助
品川狼之介を討

し、能首取つて其名を人に知らるゝ。成長て器量世に超え、心剛に慮ふかくして、人を撫するに恩澤厚く、十七歳の時、三十日の間に武勇の譽取り候やうにと、三日月に立願をこめ、兜の立物に半月を附たりけるが、伯州の山名の戰に、菊池音八といへる剛の者を討ていよ〳〵名譽を顯し、是より一世の間三日月を信仰す。永祿五年、毛利右馬頭元就雲州に發向し、尼子一家と挑み戰ふ時、山中甚治郎只一人民屋に隱れ居て、「一人塚を築んぞ」と、獨つぶやき休息し有ける所に、元就の兵三四十騎、尼子の勢を追て進み來る。山中踊出て、騎馬武者一騎切て落せば、次なる武者三尺五寸の太刀打振つて向ひ來るを、やさしき者の行跡やと、身を開いて拜討に斬たりければ、微塵に成りて谷底へ轉びにけり。續いたる武者三十餘人、得物々々をおつ取つて、山中只一人を追取りまき、火をちらして戰ふにぞ、山中請つひらいつ、暫時の内に十七人切倒せば、殘る兵ども叶じと、さん〴〵に成りて迯たりけり。扨山中傍なる小家に入て、「飯や有るふるまへかし」といふに、老尼一人居合せて、しらげもせぬ黑き飯を椎の葉に盛て出しければ、山中「心あるかな」と感じ、喰終て又合戰に向ひける。或年の長月計に、夜番せし徒然、朋輩の勇士秋宅甚介、寺本半四郎と三人申合すやうは、「武勇を好む者は、耳立たる名を呼んこそよろしからん」とて、山中鹿之助と改め、秋宅は庵之助、寺本は障子之助とぞ名乘ける。此事早く人々

二十九日、城中の諸士軍卒段々に退城せしめ、其後「檢使を賜るべし」と、毛利の陣へ乞けるにぞ、吉川元春より香川兵部太輔春繼、小早川隆景より平賀太郎左衛門元祐、兩人城中へ赴きければ、山中鹿之助禮を正しく堂上に請じ、尼子勝久、同勘四郎、神西三郎左衛門、池田甚三郎、加藤彦四郎居竝び切腹せり。鹿之助篤と是を見屆け、腹十文字に搔切て、永く此世を去にけり。時に四十五歲なり。兩使人々の首を取り持せ陣中へ立歸り、委く最期の行樣を物語れば、吉川、小早川の兩將感歎する事少なからず。其首どもを雲州に送り、富田月山の城下尼子一家の菩提所へ葬り、佛事供養修行せられけるを、聞く者袖を濡しけり。

或說に、山中鹿之助上月の後詰退去しければ、僞つて毛利に降參し、輝元に近附寄り、刺殺さんと計けるに、小早川隆景鹿之助が內心を察し、備中松山の麓阿井川といふ所にて、天野中務少輔元明に命じ、鹿之助を鐵炮にて打殺せりともいへり。然ども想見記等の說を以て考ふるに、義死する事是なりと云々。

抑山中鹿之助幸盛は、武功勇略かぎりなき兵なり。初の名は山中甚治郎と呼り。去る天文十四年八月十五日、雲州富田の庄に出生し、尋常の兒童にかはり、眼に廉有て手足太く逞く、十歲にて強弓を引き、軍法を執心し、武勇のみを心としけるが、十三歲の時手がらなる太刀打

らんとの厚志、黄泉の下においていか計か悦び候はんと、よきに申達せよかし。早刻限も移ぬらん、はやく城中を忍び出で、敵に見咎らるゝな」と、心を附て下知すれば、龜井新十郎理に服し、暫時詞もなかりしが、押かへしてさまぐ退城の儀を勸むれ共、鹿之助曾て隨はず。今はすべきやうなければ、暇乞して涙をおさへ、又城中を忍び出で、秀吉に此事を告けるに、秀吉先龜井が功勞を感心し、鹿之助が厚義信情を深く歎惜し、涙流るゝ事雨のごとく、臥沈みて居られけるが、又施すべき術計なければ、翌日惣軍を引拂ひ、自ら殿して書寫山へ退きける。

○山中鹿之助義死

扨も上月の城には、後詰の勢悉く退陣せしかば、今は籠城なり難く、山中鹿之助使者を以て敵陣へ申送けるは、「當城後詰の勢退散して、籠城の術既に盡て候へば、快く討て出で、死をいさぎよく致すべきの所、所詮功なき戰に、雙方の士卒數多死亡せしめん事、便なきわざに候へば、士大將尼子勝久及び山中鹿之助、神西三郎左衛門、加藤彥四郎等宗徒の者四五人切腹いたし、士卒の命に代らん事を願ふ。此儀許容有においては、毛利家の仁心、厚く感心し奉るべき」と申ければ、吉川元春、小早川隆景、其信義忠勇を甚だ感じ、早速承引の旨返答しけるにより、翌

れ聞えなば謀空しかるべし。汝忠勇孝悌を守り、此使をなすにおいては、今度の合戰第一の功なるべし」といふ。新十郎大きに悦び「某此仰を蒙ること、生前の面目何事か是にしかんや。首尾よく城中へ忍入らば、相圖の火を揚げ申べし」とて、大野四郎兵衞、高橋彌四郎といへる勇士二人を引具して、夜中に敵陣を忍び拔け、難なく城中へ入たりける。扨約束の火を高く揚げ、秀吉の陣へ相圖をなし、鹿之助に對面し、秀吉が口上委細に演舌し、陣中の次第、諸將の不和悉く物語り「とても籠城叶まじく候へば、急ぎ用意をなし、明朝夜の明きらぬ内に切て出で、秀吉と倶に引退き給ふべし」と、說勸めたりけるに、鹿之助大息つぎ、泪をはら〳〵と流て申けるは「尼子の運命既に盡たり。汝も人身をうけ、武門に入て人と成れり、定めて道理を知りつらん。抑我當城に楯籠り、毛利の大軍を引受け、僅に七百餘人の小勢にて數月の間籠城したるは、兵士軍卒身命を委ね、粉骨して防戰をなすが故なり。然るを我一人の命を全せんとて、切て出て戰ひなば、多くの軍卒活る者少なかるべし。楚の項羽は江東八千の子弟あれ共、江を渡らずして死せり。己が命を活んとて、多くの士卒を捨殺さん事、土木を以て作りたる者なり共、いかでか是を忍ぶべきか。所詮敵の大將に乞て我一人切腹し、城中の老少軍卒が命を全くし、其忠戰に報ぜんと思ふ間、此旨秀吉に返答すべし。併汝を使たらしめ、我を救ひ出さ

秀吉上月
表退陣

信盛等より使者到著して、播州御出馬の儀を止め奉り、先に光秀が信忠卿へ申上し趣の口上にて、「上月表の合戰こそ味方損のみにして益有まじく候へば、軍をまとめ候樣御下知下され度」旨、皆一同に申上ければ、信長公も實もとや思し給ひけん、直に御使者を秀吉へ遣され、早々軍勢を引上げ、別所一家誅伐に掛るべきよし、嚴に命じ給へば、秀吉天を仰で長く歎じ、大事既に止ぬとて、陣拂の用意をなしたりける。爰に尼子が從兵龜井新十郎玆矩といふ者あり、山中鹿之助が聟にして、勇猛の壯士なりしが、此時陣中に有けるを、秀吉近く招きて申けるは、「此度某當城の後援に向ひ、數月の間はかゞ〳〵しき戰もなさず、敵の圍をも解ざる事、武門の恥辱此上の有べきや。然といへども陣中の兵士偏執を懷き、心更に一致せず。故に信長の御出馬を乞希ふ事再三なれども、佞臣これを拒み、御出馬の儀なきのみならず、當表の師を治め、三木の城を圍むべき旨、嚴命既に下れり。我又是をいかんともする事なく、明日は書寫山迄軍勢殘らず引取べし。然らば此城忽ち落城し、勝久、鹿之助討死せん事、某深く痛み思ふ最上なり。汝勢を厭ず城中へ忍入り、鹿之助に申べきは、秀吉明日軍勢を纏め引退く間、城中の兵士殘らず切て出で、嚴しく當つて戰拔べし。我其時一同に進み討つて敵軍を駈破り、鹿之助主從宗徒の者を助け、倶に書寫山へ退くべき間、必ず相圖を誤る事なかれと告候へ。若此事敵に漏

繪本太閤記　二篇卷之十一

○秀吉上月表退陣

天の時は地の理にしかず、地の理は人の和にしかずとかや。秀吉上月の後詰に向ひ、烈しく戰うて中國勢を追崩し、尼子主従を救はんと、さま〴〵心を盡しぬれども、嫉妬偏執の者多く、陣中更に和合せず、徒に月日を累ねたるが、不圖に熊見川の合戰出來、佐久間、瀧川、筒井が輩既に敗軍せんとするを、秀吉が籏本の勢勇にして、終に對容の合戰となり、相引に引取ける。此合戰の最中に、秀吉が計略のごとく、荒木攝津守高倉山より、中國勢の本陣を逆落しに討崩さば、十分上方勢の勝利たるべきに、荒木心に思ふ仔細有ば、秀吉が計に合體せず、よそ目に見なし居たりけるは、是非もなき事なりけり。いかなる者の所爲なりけん、荒木が陣の柱に狂歌して押たりける。

荒木弓けふのいくさに弦きれて射るもいられず引くもひかれず

去程に右大臣信長公は、不日に播州御出馬の御催し有けるに、中將信忠卿、惟任光秀、佐久間

繪本太閤記 二篇第十一之卷 目錄

白眼で控へければ、其行勢にや恐れけん、敵勢敢て近寄らず。箭玉を送くる事しげしといへども、中らずして退きたり。

度は上方勢を切崩すべけれども、高倉山の絶頂に、荒木村重一萬餘の軍勢、少しも動ず陣を堅めて控へたれば、智慮ふかき吉川、小早川、我本陣を討れん事を恐れ敢て動ず、合戰は此度に限るべからずとて、繰引に引取ければ、上方勢も是を幸に軍勢を引上る。秀吉が旗本の勇士追討にせんとどよめきけるを、秀吉かたく制しとゞめ、「小早川、吉川尋常の將にあらず。今軍を治めんとするは、高倉山の荒木が勢を恐るゝものなり。敗北して引くにはあらず。輕々しく追討せば味方の大患なるべし」とて、師をまとめ、是も同く引たりける。其中に福島市松正則、血氣壯の若者なれば、「あたら敵を見捨る事よ」と呟きて只一人、小鴨左衛門進元淸が引行く勢を追附て、さんぐ\に戰ひける。元淸が郎等末石彌太郎といふ者福島と鎗を合せ、暫く支へ突合しが、いかんぞ福島が勇に敵すべき、一鎗に突殺さる。福島が郎等六七十騎驚きて馳來り、「續く味方もなく候へば、早くしりぞき給ふべし」と、手を取て引返せば、正則も是非なくて半丁計退きけるに、「今討取し敵の首を取らざるこそ無念なり」と、又馳出し元の所に來り見れば、一丁計向の方に、南條小鴨が勢三千計、備を堅め陣を取り、追ふ敵あらば戰はんと、鎗をかまへて待かまたり。正則少しも恐るゝ色なく、彼末石彌太郎が首を取る。正則が郎等星野又八郎といふ勇猛の兵、福島が後に二王立に立て眼を怒らし、近寄る敵あらば切捨にせんと、あたりを

強く敵にあたらんとす。然れば敵將吉川、小早川の兩人、究て切て出べき間、足下山上より敵の陣所へ逆落しに切込給はゞ、此合戰味方の勝利疑ひなし。かまへて約を誤り給ふな」と云せ置き、旗本の兵一萬餘人をまん丸に備へ、咄と喚て切て掛るに、秀吉が郎等中村孫平治一氏眞先に鎗を入れ、忽ち敵兵七八騎馬より下に突落せば、中國勢兒玉小治郎、浮田與三右衞門、鐵炮の兵三百餘人先に備へ、秀吉が旗本へばら〳〵と打入るれば、秀吉が兵士鎗を伏て下敷き、暫し猶豫居たる所に、彼中村孫平治只一人敵中へ突て入り、大將兒玉小治郎を一鎗に突殺し、勢に乘て駈たりける。是に續て加藤、福島、片桐、蜂須賀、堀尾、脇坂、糟谷、平野が輩、我れ劣じと切廻れば、中國勢此鋒先にあたりかね、一度にどつと引たりけり。是によつて瀧川、佐久間、安藤、氏家、筒井が輩、忽ち勝色になりて、勇を震うて揉合たり。此時中國勢既に敗走せんずるを、大將吉川駿河守元春、采配追取り大音にて、「下敷けや兵ども、迯て中國の名を下すな」と、馬を東西に乘り廻し、頻て下知をなしければ、杉原攝津守、同彌八郎、同又治郎、香川兵部太輔、森脇市郎左衞門、行見左衞門尉等、其勢二萬餘人、微塵になる迄動くまじと、悉く下敷て、鎗を膝の上に置て、息をしづめて居りけるにぞ、上方勢も左右なく掛崩す事能はずして、馬を控へて息繼居たり。此時小早川隆景、吉川元春の兩將、一同に切て出て戰ひなば、一

○熊見川合戰

比は水無月廿日計、炎暑燒がごとく、兩勢涼を迎へんとて、木蔭藪蔭に陣を移し、暑を凌ぎ居たりける。此時高倉山の半腹に備へたる瀧川氏家が士卒ども、毎朝山の麓なる熊見川に下りて、馬の四足を冷しけるを、中國勢伺ひ知りて、百餘人俄に起り來り、ばら〳〵と鐵炮を打かけ、一文字に切てかゝれば、瀧川氏家が士卒ども大きに驚き、馬ども打捨置き、我先にと迯たりけるを、中國勢あますまじと取圍て戰ふにぞ、氏家左京亮是を見て、味方の士卒討すなとて、一千餘人切て出れば、吉川、小早川が陣中より杉原攝津守、吉田肥後守、宍戸五郎兵衞、河口刑部、今田中務一萬餘人殺出し、火花を散して戰ふにぞ、又上方勢佐久間信盛、瀧川一益、安藤、筒井一萬餘人、氏家を討すまじと、鎗襖を作り、鯨波を揚て相戰ひ、殆ど大合戰とぞなりにける。元來中國勢地の理は得たり、八方に分れ、互に味方を助けあひ、進退駈引自由をなし、喚き叫んで戰ふにぞ、上方勢勇氣は更に劣ね共、心々の軍にて下知を司る主將なければ、いつしか中國勢に押立られ、麓をさして敗走す。是を見て筑前守秀吉、高倉山の上に陣を布たる荒木攝津守村重へ使者を以て申けるは、「計ざる合戰始り、味方難儀と相見え候程に、某手勢を以て

の追討司を蒙り、俄に功を立んとて、味方の損亡を厭はず、無謀の合戰をなさんとす。抑〻三木の城に籠りたる別所一家の輩、是容易の敵にあらず。年久しく東播の主と成り民の心を得て、神吉、淡川、波志谷等の城々に、一味の勇士楯籠れば、尤も恐るべき大敵なり。今若秀吉が趣意の如く、上月表に合戰始りなば、忽ち三木の城より討て出で、味方の後に迫るべし。此時秀吉いかにしてか戰ひ勝事を得んや。今別所一家の輩討て出ざるは、上月表の合戰なきが故なり。秀吉正道を行はんと欲せば、先上月表の師を治め、三木の城を攻落し、後の患なき時に、緩〻と中國を征伐せば、味方死亡の災なく、全く大功を立べきなり。是上月城尼子一家を撥るに似たれども、纔に小城一つを救はんとて、味方の大損を厭ざるは、秀吉が功を急ぐの誤なり。君よく〳〵是を察し給ひ、此度の御下知も先上月を引取候やう仰附られ、就ては信長公御出馬の儀など、努々然るべからざる旨御制止有度候」と申入置ければ、未だ若年の信忠卿、此詞を理に聞せ給ひ、秀吉が勸を用ひ給はず、剩へ使者を安土に遣して、信長公の御下向をも止め給ひけるは、是非もなき事共なり。併し是尼子一家の運傾き、勝久、幸盛が亡ぶべき時なりけりと、後に哀れを催しけり。

光秀偏執上月の後詰拒む

吏申上るに及ざる事に候。然るに毛利の勇將吉川、小早川、大軍を以て上月を攻る事甚だ急なり。秀吉後詰に出陣いたし候へども、御加勢に下向なさしめ給ふ人々は、公達老臣の歴々なれば、秀吉ごとき者の猥に命を下すべき方々ならず。此故に味方和せずして、數月の間未だ一戰にも及ばず、徒に光陰を送り畢ぬ。かくては上月落城し、尼子一家悉く滅亡せん事、頗る本意なき次第に候はずや。あはれ此上は君自御出馬有て諸將を下知し、合戰をいとなみ給ふ者ならば、秀吉眞先に敵を切崩し、粉骨細身して此度の圍を解き、尼子一家を救ふべし。是强に尼子主從を助るのみにあらず、中國征伐の手初めなれば、毛利の大軍を討崩しなば、敵の勢其大半を取挫ぐべきか。かつは三木の城に籠りたる別所の輩、忽ち後援の便を失ひ、英氣くじけて、はかばかしき敵對もいたすまじ。されば中國一時に平定せんこと、只此一戰にありとこそ思ひ候らへば、急で御出馬ねがひ奉る」と、理非明白に言上しければ、信長公一々御許容有て、「尤なる軍配、我かならず出馬すべし。先夫までの惣大將として中將信忠を下向せしむる間、秀吉と計を定め合戰を始むべし」とて、信忠卿に惟任五郎左衛門を差添へ、軍勢二萬五千人、播州へ下向ありて書寫山に著し給ふ。是によつて秀吉少しは力を得て、「早く上月表へ出馬なし給ひ、諸將の下知を司らせ給へかし」と勸め奉れど、是より前に光秀、信忠卿に申奉る趣は、「秀吉中國

瀧川、惟任、佐久間をはじめ織田家の勇將、悉く偏執を心に抱き、兎に付け角に付け、秀吉が功を立てざる樣に計ひければ、援兵加勢は名ばかりにて、軍中更に和合せず、秀吉が力とならん者とては、手勢の勇士のみなりけり。中國勢は秀吉の加勢日每にかさなり、今は大軍に成りければ、「頓て信長も出陣しぬらん、早く上月の城を攻落せよ」とて、軍勢を二手に分ち、一手は秀吉の勢に向ひ對陣し、一手は上月の城に攻かゝり、短兵急に揉立れど、城將山中鹿之助、後詰の勢の來らざる已前にさへ嚴しく支へ戰ひぬれば、今は織田の大軍雲霞のごとく陣取し、軍威を示し控へければ、從兵士卒に至る迄勇み悅び、鐵炮を打出し火矢を放ち、近寄る武者を大木大石を轉しかけて打殺し、更に弱れる氣色なく、勇を振うて防ぎければ、六月中旬に至れ共、勝負の色は見えざりけり。

○光秀偏執拒ニ上月後詰一

扨も秀吉は上月城後詰に向ひたれども、味方の諸將和せずして、數月の對陣一度も毛利家と取合なく、斯てはいつの時にか城の圍を解べきと心を苦め、再使者を以て信長公の出馬を乞ふ。其口上は、「秀吉君命を領し中國を征伐なさんと、晝夜寢食を忘れ、合戰に心を苦め候條、今

戰すべき心なく、味方小勢を以て中國の大勢にあたらん事然るべからずとて、敢て秀吉と和熟せず。秀吉元より心きゝたる大將なれば、村重が逆心を豫め察し、此者中國勢と心を合せ味方を討ば、由々しき大事なるべしとて、より〳〵好言を以て宥め賺し、其心の怒らざる計をなしけれども、後には別所一黨の逆徒有て、勝敗いづれなるやわきがたきに、前に毛利の大敵雲霞のごとく集りて、是又尋常の對陣ならず。前後の剛敵、小勢を以てあたるべからざる大事の合戰なるを、たま〳〵味方の援兵なりとて向ひ來りし村重は、かくのごとく反心を懐き、結句加勢の至らざる已前よりは猶危く、秀吉の心勢大方ならず、晝夜油斷なく心配をせられける。是によつて再び早打を以て信長公に加勢を乞ふ。信長頓て瀧川左近一益、惟任日向守光秀、筒井順慶、武藤彌平兵衛等に命せ、一萬五千餘騎五月朔日自國を發し播州表へ出陣す。續て北畠信雄卿、神部信孝卿、左久間右衛門尉信盛、細川刑部小輔藤高、氏家左京亮、稻葉右京進、安藤伊賀守、蜂谷兵庫頭等、都合一萬五千餘人、だん〳〵に下向して、五月十四日、悉く高倉山に著陣せしかば、今は秀吉の軍勢都合五萬餘騎に及びければ、中國勢の七萬餘騎に對すべき多勢と成り、進んで敵を討ば勝利を得ん事安かるべきに、秀吉中國の探題と成り、此合戰に勝利を得て、進んで中國を平治せば、其功諸勇臣の上に有て、殆ど勢凌ぎがたくならん事を恐れ、

兵士等は、去年此城の後巻に向ひし時、嚴く秀吉に切崩され、羽柴が名を聞ては、兵卒悉く震ひ恐る。今高倉山の馬印を見て、何となく色めき立ち、すは羽柴が援兵向ひたるぞ、等閑の戰をなし、不覺を取る事ある可らずと、今も敵のかゝり來る如く、弓よ鐵炮よと狼狽騒げば、陣々これを傳へ聞き、何と取定めたる事もなく、上を下へと騒動す。大將吉川元春、小早川隆景、陣陣へ馬を乘廻し制しければ、漸々陣中鳴を鎭め、備々を固めける。秀吉の武威、恐怖する事かくの如し。去ほどに羽柴秀吉當表へ著陣し、中國勢の行勢を見るに、要害に寄て陣を取り、土手を築き柵を結ひ、大軍長陣すべき模樣なるに、熊見川の急流中を隔て、小勢を以て猥に向ひ戰はん事覺束なく、河のこなたに陣を布き、早打を以て信長公に注進し、後詰の勢を乞ふ事甚急なり。又毛利方の軍勢も、秀吉小勢なりと雖も、軍慮賢き大將なれば、無謀の合戰成しがたしとて、銘々陣を固めて敢て動かず。三方の軍勢、白眼合て日を送りける。去程に秀吉の早打の使江州安土の城に著し、委細言上に及びければ、信長公「さらば加勢を出すべし」とて、荒木攝津守村重に命じ、播州に下向せしめ給ふ。村重領承して、攝津の勢一萬餘騎を引率し、高倉山に著陣す。秀吉大きに悦び、荒木と謀て先戰を始めんとす。此時荒木攝津守、信長公を恨み參せ、既に叛心をさしはさむといへども、未其色を顯はさず、命に隨ひ後詰をなせども、羽柴を助け合

けたる事なれば、少しも騷ず、矢石を飛し大木を投かけ、嚴く防戰なしければ、寄手大軍なりといへども、更に近寄る事能ず、手負死人夥敷く、容易落城すべき體ならねば、毛利の勇將吉川駿河守元春、才智賢き名將なれば、諸軍に下知して城攻をさし措き、陣々要害に寄て備を堅め、遠攻にこそしたりけり。是は籠城の大將たる山中鹿之助、古今無雙の勇將にて、必死の防戰をなせば、卒に落城せん事覺束なく、徒に日數を經るうち、羽柴秀吉後詰をなさば、味方敗軍せん事疑なしとて、かくこそ下知を傳へける。先高倉山の尾崎には、浮田勢一萬五千餘騎陣を取れば、其次に小早川隆景、三吉、平賀が輩、備中備後の勢二萬八千餘騎、備を立てゝ控ける。又其次上月山の麓には、吉川元春、南條小鴨等二萬七千餘騎陣を張る。都て惣陣の廻りに芝土手を築き、柵逆茂木を結ひ、專ら後詰の勢を迎へ戰はんとす。然るに書寫山にありし羽柴筑前守秀吉、兼ては三木の城を攻んと計りけるに、此事を聞き、扨は上月の城を援ずんばある可らずと、別所孫右衛門、竹中半兵衛兩人に、一萬七千餘騎を與へ三木の城を押へ置き、自ら一萬二千餘の逞兵を以て上月の城へ發向し、高倉山の峯に五色の吹貫瓢簞の大馬印を押立て、軍威を示し陣を取る。城中には尼子勝久、山中鹿之助遙に此吹貫馬印を見て、秀吉自身後詰に向ひけりと知りてければ、勇み悅び、勇氣十倍してふせぎ戰はんとす。然るに寄手の先陣浮田直家が

ける。扨彼馬口附の男四人にて牽來るに、眼ひかり息あらく、躍上りていと騷がしきを、孫一事ともせず打乘て、口附を放しむるに、此馬形氣穩にしてたるき馬のごとし、輪をかけて地道を乘に、見る者其術を驚歎す。孫一靜に七八度乘廻し、さて諸鐙に鞭を合せ、一散に馳立つるに、馬場末の隍際までかけ詰め、馬の前足の蹄を揃へてひしと駐め、やはらかに索廻し、件の所に乘り居て、顏色平生のごとし。並居る諸士も膽を潰し、始め惡口雜言せし若侍等、口を閉て屈服す。加藤權兵衛大きに驚き、此兒これ只人にあらずと、誘ひて宿所に歸り、生國素姓を尋るに、孫一有の儘に姓氏を物語す。權兵衛いよ〳〵悅び、「思はざりき、汝と我と同姓なれば、將に是親族の岐れなるべし。我汝を養ひて子とし、武士に成して高名させんはいかに」と問ふ。孫一大きに悅び、終に權兵衛が家に養育せられ、後秀吉の臣下と成り、加藤左馬介嘉明として、武功勇略、雙ぶ者こそなかりける。

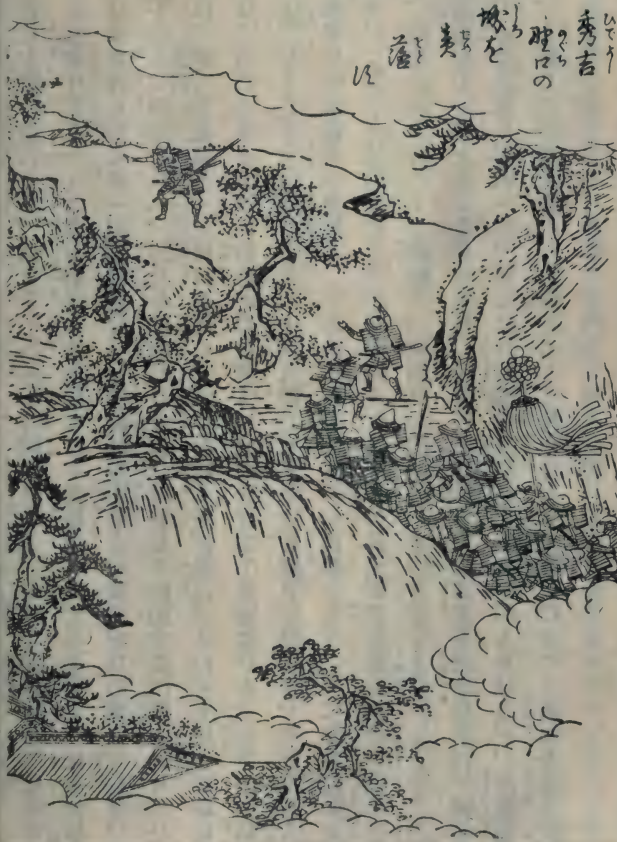
○中國勢圍二上月城一

關西十餘州の大守毛利右馬守輝元、三木の城後詰のため、三月廿八日、七萬餘騎を引率し、先尼子勝久山中鹿之助等が籠りたる上月の城へ押寄せ、四方を圍て攻立ける。城中元より思ひ設

なば、諸士の行跡おとなしからず、上の聞えも恐れあり、一向に免させ給へ」と、手をすりて詫ければ、若侍ども此言葉を實にもとや思ひけん、引捕へたる孫一を放ち、さま〴〵に惡口し、「已後の見せしめなりけるぞ」と、拳を以て孫一が頭を討つ。孫一大にいかり、「我稚くして汝が輩に頭を打るゝといへども、まのあたり此報をなす事能はず、非道の打擲を蒙るこそ安からね。もと汝達が馬術の拙き故、有の儘に笑ひしは我誤にもあらず。然るを己が藝を勵む心はなく、猥に人を打叩くは何事ぞや。己頓て成人して、思ひ知らすべきぞ」と、白眼まはして歸らんとす。若侍ども又々怒り、「言語道斷の兒悴かな、討捨くれん」と刀に手をかけ走りよるを、加藤權兵衛押へだて、嗔て申けるは「己惡き童、武士に對し過言せるは命しらずの曲者かな。早く此場を迯去ば、其儘に免しくれる。再び詞を出しなば、某が手討にする」と、聲を勵し怒りける。孫一更に恐るゝ色なく、「我元來馬に乘る事を好めり。我未だ藝未熟なりといへども、各方には勝るべし。先我を馬に乘しめ、乘得ざる時に我いかなる打擲にあふとも少しも恨むる事なし。理不盡に頭を打れ、何ぞ無言にして歸るべき」といふ。權兵衛を始めとし、數多の壯士是を聞て、「何樣此小兒尋常の者にあらじ。先試に馬に乘しめ、彼者が馬術を見ん」と一同に申合せ、彼荒馬を傍に引せ、「さらば一鞍乘べし」と、左右に別れ見物するは、もの〳〵しくぞ見えに

○加藤嘉明素姓

今度野口の城一番乘をなしたる勇士、加藤孫一嘉明が素姓を尋るに、是も淸正と同姓にて、利仁將軍、魚名公の末流にして、越前の產なりしが、十二歲にて父母におくれ、江州に來て長濱の馬借の家に養はれけるが、生得物に驚く事なく、沈勇にして才智面にあらはれず、大膽不敵の者なり。常に武を好み馬術を嗜み、師によらずして頗其妙に至れり。十六歲の時、業の事にて美濃國へ赴く。此時信長公未だ岐阜に居給ひけるが、幕下の壯士城外に出て馬を責むるに、其中に無雙の荒馬あり、口强くして乘る者なし。若侍どもさまぐ〵に力を盡しぬれど、悉く刎落され、惘はてゝ詠め居るを、彼孫一好む道なれば、最前より見物しありけるが、さても下手なる乘人かなと、手を叩て大きに笑ふ。侍ども氣色を損じ、孫一を引捕へ「此小童め、鞍味も知りたるやらん、我々が落馬せるを見て笑ふこそ奇怪なれ。此荒馬に肋骨を踏折せて、思ひ知らせん」と大勢立寄り、孫一を宙に舁上げ、彼馬に乘せんとす。爰に信長公の馬廻に加藤權兵衞といふ者あり、是を見てあわて押とめ申けるは、「此童諸士の馬術を誹謗せるは惡むべき曲事なれども、土民といひ、いまだ年さへ長ぜざる童なれば、聞のがして宥し給へ。自然此馬に踏殺され

秀吉野口の城を責落す

んため、此山に本陣を居んとす。然りといへども寺院を亂暴し、僧徒を狼藉する事曾てなし。平日のごとく安居すべし」とて黄金若干布施しければ、衆徒はじめて心を安じ、騒動は靜りける。秀吉當山に本陣を堅く構へ、同四月三日、一萬餘騎を引率し、俄に野口の城に押寄せ、四方を圍み、鬨を作り、鐵炮を放ち、短兵急に攻たりける。城將長井四郎左衞門兼てより思ひ設けたる事なれば、驚く色更になく、持口を固め、士卒を勵し防ぎ戰ふ。されども城中千騎にたらぬ不勢なれば、目にあまる大軍に防戰かなひ難く、色めき立ちて見えにける。寄手は一騎當千の勇兵ども、射れども斬れども事ともせず、十四五騎ひた〳〵と塀際にかけより、取附て乘入んとす。秀吉が郎等に、加藤孫一嘉明といへる大剛の若者あり。此體を見て、人に先を越れじと一さんに駈來り、一番のりは我なるぞと、塀に取附きたる味方の兵士が肩に手をかけ、鎧の上帶に足を踏立て、飛鳥の如く肩の上を飛越え「加藤孫一此城の一番のりぞ」と大音に呼はりながら、難なく塀を乘越たり。是を見て寄手の大軍、一同に鬨を作り、我劣じと攻のぼれば、城兵爰を破られじと、必死に成りて戰へ共、終には外曲輪を乘取れ、本丸へ引入りけるが、所詮籠城かなひがたく、大將長井四郎左衞門、人質を出して降參す。秀吉これによつて攻口を退き、使者を以て四郎左衞門を召寄るに、四郎左衞門頓て秀吉が陣に來て罪を乞ふ。

で討んず結構たり。秀吉尋常大の將にあらざれば、容易に攻落し難きを計知り、直に軍を返し、自身殿して引退く。三木の城中其外の城々より此體を見て、追討んと議しけれども、秀吉大軍にて押寄せ、一戰をなさずして卽日に引退くは、必ず深き計略ならん、追討せんとて敵の計策に落入り、不覺を取る事有るべからずと、兵を制して敢て出ず。爰に於て秀吉事なく姫路まで引退き、將士に向ひて申けるは、「三木城要害堅固にして、一時に攻落す事かたし。强て戰はゞ、味方の損亡多かるべし。我一戰もなさずして退きたるは、三木の城兵こそ網裡の魚、籠中の鳥、城の要害を頼み徒に籠城せしのみにて、出でて戰ふべき勇氣もなし。所詮味方兵士の損ぜざるやう、先野口、淡川なんどの附城を攻落し、其後三木の城中英氣蹇け退屈してあらん時、俄に攻附惱しなば、忽ち一時に功をなすべし。先野口城を攻拔ん」と、其用意をぞせられける。

○秀吉攻₂落野口城₁

秀吉小寺官兵衞と計て、三木の城を攻んには、書寫山へ本陣を移すにしかずとて、卽時に惣勢を引て、書寫の山へ登山す。一山の僧徒これを見て大きに驚き、いかなるうき目にかあはんずらんと、周章騒ぐ事大方ならず。秀吉使者を以て僧坊へ申遣しけるは、「羽柴筑前守當國平定せ

重棟謹で、「長治斯る企有之事、某曾て以て存ぜず」と申す。秀吉怒て、「汝長治が叔父山城守賀相が弟ならずや。疎き一族門葉すら催し集め籠城せるに、汝知らずしてありや。明に申すべし」といふ。重棟大に恐れ迷惑し、暫く涙を流し有けるが、良あつて申けるは、「御疑ひ蒙る事是非なき次第なり。去ながら長治幼稚の時、兄山城守と同く後見と成て郡村の仕置執行ひしに、我と山城守と不和にして、事全く調はず。其頃將軍義昭公御上洛の期に候へば、兄を捨置き某一人馳登り、寸忠を盡し、夫より信長公に隨身し、他事これなき事、足下よく知召す所なり。さる故を以て兄賀相某を忌惡み、さばかりの大事を思ひ立候にも、露斗も知らせ候はず。此事猶疑しく思召候ものならば、速に某が首を刎て御心を晴させ候へかし。聊恨なし」と云ふ。秀吉笑て、「我何ぞ汝を疑んや、先言は戲るゝのみ、汝試みに長治に書翰を送り、降參を勸むべし」と。爰に於て重棟使者を三木の城へ遣し、書を以て利害を示し、降を勸むる事再三に及べども、賀相敢て承引せず。秀吉是によつて三月廿九日、二萬餘騎の軍勢を引率し、三木城近く押寄せ、遙に籠城の形勢を伺ひ見るに、此城元來大河を前にし、嶮山を後に當て、要害無雙の名城なるに、別所累世の門葉、恩義の兵士等八千餘人、必死と極め籠城し、加之神吉、淡川、志賀多、野口、波志谷の城々に兵士數多籠り居て、敵三木城を取圍まば、八方より牒じ合せ、挾

とく貯へ、既に旗をぞ揚たりける。三木の城中に籠りし士に、後藤將監基國といふ者あり、今度長治一家謀叛の事、自滅亡を招く端なりと、樣々諫言をすゝむれども、長治、賀相曾て承引せず、無據籠城し、運を天に任せ討死せばやと覺悟せしが、一男子あり、今年八歳にぞ有けり。生得聰明怜悧にして、行末賴もしき童なれば、寵愛深く傅きけるが、今度の籠城、とても味方の勝利覺束なく、倶に此兒を殺んも便なしとて、或夜小兒をいざなひ、小寺官兵衛（小寺後に黑田と改む）が許に到り、我心體を物語り、「此身は三木の城にて快く討死を遂べき間、あはれ此兒を養育し、後藤の家名を相續なさしめ給はゞ、泉下にありて何ほどか悅び候はん」と、餘儀もなく賴みければ、官兵衛元來基國と深き交ありければ心易く諾ひ、「身不肖には候へども、某守立て、後藤の家を再び發させ候はんに、心苦しくおぼしそ」と、賴しく聞ゆれば、基國淚をながし、恩を謝して退きける。此小兒生長して後藤又兵衛基次と名乗り、智謀勇略群に秀て、英名海内に鳴響けり。

○秀吉圍三木城

去程に羽柴筑前守秀吉、別所長治が謀叛の由を聞ければ、別所孫右衛門重棟を召て其故を問ふ。

門に名を輝さんと思ふもの、敵の剛を恐れて征伐を怠らんや。彼を討ずんば我討るべし、我活ば彼を斬べし、何條事の有るべきや。猥に敵の威を語り、味方の英氣を失しむる事なかれ」と苦々しく罵りければ、別所主從重て云ふべき詞もなく、しぶ〳〵三木へぞ歸ける。是に因て山城守賀相、俄に謀叛の色を顯し、當城に楯籠り、毛利の援兵を乞ひて秀吉を挾み討んと、其計議さま〴〵なり。長治が弟小八郎治定、今年十七歲、未だ若冠なりといへども、軍慮にさかしき若者なりければ、進み出て申けるは、「兵は神速を尊み、先ずる時は人を制するに利ありといへり。既に味方かくの如き企あらば、秀吉が未だ悟らざる先に此方より押寄せ、敵の不意を討ば、必ず秀吉が首を見るか、若討洩すとも十分の勝利を得べし」と云ふ。去ども賀相秀吉が武勇に恐れけるにや、是に同心せず、一族幕下の輩、一城の主は其居城に楯籠り、當城の後詰に備ふべしと、先志賀多の城には櫛橋左近進、手勢を以て籠城すれば、神吉城には神吉民部少輔、これも手勢にて楯籠る。其外高砂の城に梶原平三兵衞、野口城には長井四郎左衞門、淡河の城には淡河彈正、波志谷の城は衣笠備前守等是を守り、總大將小三郎長治、是に隨ふ勇士等は別所小八郎治定、同彥之進友行、同山城守賀相、其外中村、高橋、服部、後藤、長谷川、神澤、大村、上原、魚住、飯尾、藤田が輩、みな三木の城に群參し、軍勢都合七千五百餘騎、兵粮矢玉山のご

ね參らせければ、信長、「いやとよ、秀吉が軍列を笑ふに非ず。彼猿冠者藤吉郎、氏もなき下郎なりしに、我に仕へて二十餘年、戰場に向ふ每に魁殿を心がけ、勳功を積高名を重ね、終に中國の探題と成り、今日の出陣實に勇々しき形勢、あはれ大將哉と思ふに附き、小猿と呼びし昔を思ひ合して、今の如く笑ひたり」と宣ひければ、友閑、夕庵等く頭をさげ、「命のごとく希代の勇士、不思議の謀臣にて候。是併君の洪福によつて如斯發出せる者にて候」と申上ぐれば、信長益氣色うるはしく、頓て安土へ歸城ありける。

○別所長治叛二信長一

同七日、羽柴筑前守秀吉姬路に著し、小寺官兵衞及び中國の諸士を招き、中國退治の計議を成す。此時別所小三郎長治が名代として、後見山城守賀相、家老三宅肥前守治忠席につらなり、兩人等しく進み出で、頻に毛利の武威を語り、「麁忽に中國へ向ひ給はゞ、由々しき大事を引出し候はん、緩々と毛利方の枝城を攻かけ、能々虛實を伺て後、大に軍を發し討給ふものならば、一擧に中國を定むべし」と、强に毛利の威をしめし、秀吉の軍を恐れしめんとす。其中に謀を行ひ、秀吉を討たんと計る者なり。爰に於て秀吉大に怒り、「我は足下達の見と異なり。抑武

べし。某等案内先陣して、中國へ討入べき」旨言上しければ、信長さらば此時を失ふ可らずとて、羽柴筑前守を中國の探題に補せられ、再び播州へ遣し給ふ。秀吉面目身に餘り、早速軍兵を催促し、三月四日、首途陣押の行列最も嚴重なり。先一番に旗、二番に鐵炮、三番に弓、四番に長柄鎗、五番に切具足各二行に列し、其前後騎馬の兵士犇と隨ふ。次に兵鼓、次に軍監、次に乘替の馬、次に秀吉の兵具、次に螺、次に小印、次に歩卒、扨大將の本陣なり。秀吉其日の出立には、緋威鎧に鍬形打たる甲を石田佐吉三成に持せ、信長公より拜領の不動國行金作の太刀を帶し、村雨と號けし黑き馬に跨り、前後左右に加藤、福島、片桐、堀尾、蜂須賀、脇坂等を始めとし、萬夫不當の勇士これを守護して打せたり。次に宿老、次に使番二十八人、次に斥候三十六人、其跡は騎馬歩卒打まじへ五千餘人、少しさがつて竹中半兵衞尉重治、小荷駄奉行として其勢一千餘人、整々として打立たり。惣軍二萬五千餘人、其行粧美々として人目を驚かしむ。誠に希有の見物なり。此時信長公も御馬廻り少々召連れ給ひ、半途に出て見送り給ふに、秀吉が軍兵人盛に馬強く、威風堂々たる有樣を御覽じ、松井友閑、武井夕庵に向ひ宣ひけるは、「秀吉が軍列尋常ならず、中國征伐成就すべき事疑ひ有る可らず」と喜び給ひけるが忽ち聲を發して大に笑ひ給ふ。友閑、夕庵其意を知らず、「君何故に秀吉の軍列を笑ひ給ふ」と尋

繪本太閤記　二篇卷之十

（一）秀吉播州出陣

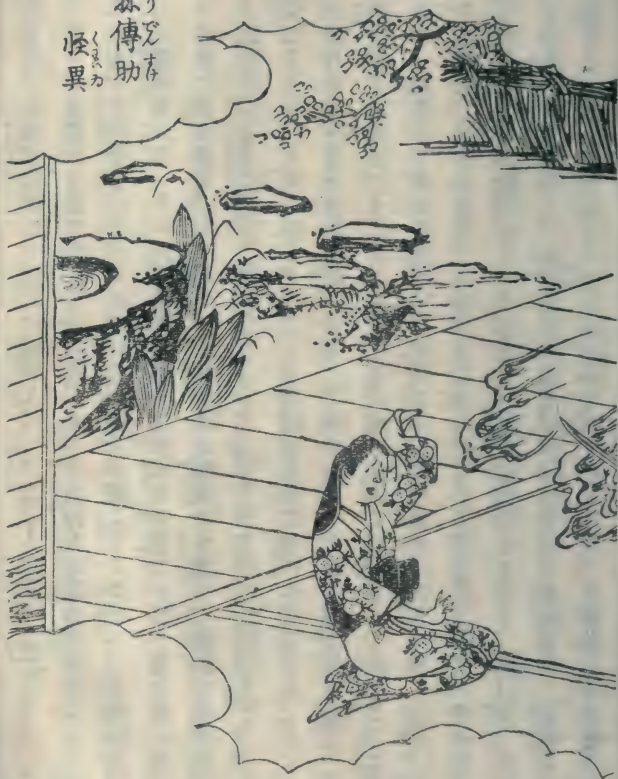
爰に播州三木の城主別所小三郎長治、同小八郎治定等は、其先村上天皇の流にて、赤松入道圓心が孫敎範の末葉なり。足利將軍義詮公より、代々東播八郡の領主として、その武名中國に高し。小三郎長治若年なるによつて、叔父別所山城守賀相、同孫右衞門重棟兄弟、後見して長治を守立けるが、賀相、重棟不和にして、弟重棟は信長公に心を寄せ、兄賀相は毛利家に力を合せ、自立せんと計る。是によつて去年秀吉下向の時も、賀相僞つて信長に歸伏の色を顯し、秀吉を欺き討んと工みけれど、秀吉播州入國已後、片時も油斷の心なく、國人を懷け百姓を愛憐し、僅に一月餘にして東播悉く切したがへ、備前の境に至つては浮田直家を討崩し、さしも名を得し直家も、これより密々に心を通はし、遠近其武威に服し、終に歸國したりければ、賀相いかに思ふとも更に手を出す事能はず。爰に於て山城守再謀計を廻らし、使者を以て信長へ申けるは、「毛利家當時九州との取合に暇なく、幸の時節に候へば、日代の勇士を下向なさしめ給ふ

繪本太閤記 二篇第十之卷 目錄

生士卒を憐む事なく、士を塵芥のごとく輕んじければ、兼々恨みを含む者多かりしに、家臣山田藤三郎といふ者、迚も籠城かなふまじく思ひけるにや、深夜、十郎が居間に忍び入り伺ひ見るに、上月十郎數日の防禦に勞てや有けん、箙を枕として臥居たり。藤三郎折よしと枕上に立寄り、刀を拔て十郎が首を打落し、塀を越て秀吉が陣に來り、首を捧げて降人と成る。秀吉其首を實檢し、忽ち左右に命じて山田を捕へ、首を刎さしむ。是藤三郎重恩の主人を害し、落城を計つて降參する事、不道不忠の者なりとて、斬て軍中に是を示す。兵士等悉く慄ひ恐る。上月の城兵、主將討れぬる上はしばらくも籠城かなはず、降參して秀吉に城を奉る。爰において山中鹿之助、尼子勝久を當城の主と成し、軍兵を附て籠らせ、浮田が兵の押へとす。秀吉播州に下向して二月にいまだ滿ざるに、東播州悉く平治し、天正五年十二月廿三日、姫路を立て江州に歸國し、安土の城に參じ、播州合戰の有様を言上に及びければ、信長公其成功の速なるを感じ給ひ、秀吉に播州を賜り、當座の褒賞として不動國行の御刀幷に乙御前といふ名器の釜を賜ふ。秀吉面目を施し、恩を謝し退出す。翌年天正六年正月、信長公從二位の右大臣に昇進し給ひ、信忠卿は三位中將に敍せられ給ふ。

入たるぞ、引返せよ」といふ程こそあれ、狼狽騒ぎ川中に漂ふ所に、川水次第に彌益て、溺死する者數を知らず。羽柴が勇士、浮田勢の亂立たるを會釋もなく切て廻れば、大將直家も既に討れつべう見えけるを、長松紀伊守、花房志摩守、高越中守死力を盡して防ぎ戰ひ、辛うじて一方を切拔け、二十餘町走りけるが、人馬ともに勞れ苦しみ、鬨の聲も遠ざかりぬれば、爰にて味方の勢を待べしと、馬よりおりて暫く休息したりける。時に後の森の中より俄に鐵炮を打かけ、「浮田直家早く降參せよ」と呼つて、黑田官兵衞五百餘人、まつしぐらに討てかゝれば、「すはこそ爰にも伏勢あり、迯る道を取切られな」と、押合へしあひ敗走し、迎へ戰ふ者一人もなく、さん〴〵に成て走りける。大將直家もあまりの事に惘れ果て、雲霧の中を行くが如く、はふ〳〵のがれて迯たりけり。はじめ二萬五千餘騎と聞えし大軍も、暫時の戰に落失て、此時僅に一千餘人には過ざりけり。此浮田和泉守直家は、備前美作を切隨へ、數多の戰場に功名を顯し、威を近國に震ひし勇剛の將なりしが、一戰に勝利を失ひ、織田の武威に恐れ、秀吉が智謀に感じ、これより信長に歸伏の色ありけれども、白地に毛利を叛かば、身の禍とならん事を計り、時を見合せ居たりける。さる程に上月の城中には、賴み思ひし直家が援兵も、只一戰に討負け、本國へ引取しかば、軍卒大きに力を失ひ、防ぐ氣勢はなかりける。此城主上月十郎といふ者、平

なり。力量衆に超え、武術群に秀て、兼るに才略あり、勇名天下に鳴り、恐れずといふ者なし。去る永祿七年、尼子一家毛利の爲に滅亡しけるに、山中幸盛殘兵を集め怨を討んと、屢毛利と合戰すといへども、元就智勇に富たる名將にて、爾も中國悉く切從へ、威勢四方に輝しけるに、息男吉川駿河守元春、小早川左衞門佐隆景等希代の勇將なれば、鹿之助小勢を以て敵する事能はず、京都に登り來り、尼子晴久が一族孫四郎勝久を守立て、織田信長に屬し、中國征伐の魁して、毛利を討て主君の怨を晴さん事を乞ふ。信長公も山中が武勇を知しめしければ、中國平治の先鋒たらしめんと約し給ふ。扨こそ此時秀吉と倶に播州へ向ひける。かゝる宿怨ある毛利を討ん手始なれば、勇を震ひ、嚴く下知して攻立れば、上月十郎士卒を勵し、防禦倦まず戰へども、叶ひ難くぞ見えたりける。されども此城、山高く谷深うして屈竟の要害なれば、又容易も落城せず。相戰うて數日を過すに、浮田直家、備前、備中、美作の勢を催し、上月の城を後詰として討て出る。秀吉是を見て兵を二手に分ち、一手を以て城を攻め、一手を以て直家に當り、僞り負て熊見川の中へ敵を引入る。浮田勢計略とは思ひもよらず、勝に乘て川中迄追來るに、忽ち秀吉の伏勢蜂須賀小六、神子田半右衞門、中村孫平治、堀尾茂助、脇坂甚内等、川上にせきとめ置たる土俵を切て落し、流れに添ひて討てかゝれば、浮田勢「すは敵の計に落

森傳助怪異

狂ふ事三十餘日、終に翌年天正六年十月十日、信貴山落城の日に當つて、叫び死に死たりけるを、聞く人舌を縮めて恐れあへり。

○秀吉上月城攻落

天正五年十月廿三日、羽柴筑前守秀吉、信長公の御下知によつて、中國征伐のため、先播州に下向し、姫路の城に入て軍卒を休憩せしむ。城主小寺藤兵衛識隆、其臣黒田勘兵衛孝高等、奔走して先鋒を勤む。秀吉進で東播三木の城に入ば、此城主別所小三郎長治、叔父山城守賀相其外隊下の士を召連れ、秀吉を迎へ城中に請じ、饗應善盡し美を盡せり。然れ共これ別所が本心降伏せるに非ず。兼て毛利輝元と内應し、秀吉深く備前に討入らん期、三木城より切て出で、輝元と東西を挾み伐んと計けるなり。時に秀吉軍兵を發し、佐用の城、福岡の城を一日に攻落し、軍威を振うて進む程に、敢て敵する者なくて、人質を納て降を乞ふ者數を知らず。爰に於て東播忽ち秀吉に伏し、直に西播上月の城に攻かゝる。この城の主將上月十郎、備前の浮田直家に與力し、固く守て秀吉をふせぐ。秀吉怒て山中鹿之助幸盛を先鋒とし、鐵桶のごとく城を取圍み、攻討つ事甚だ急なり。抑此山中鹿之助幸盛といへるは、雲州富田の城主にして尼子吉久の家臣

限りなし。

○森傳助怪異

爰に怪しかりけるは、松永久秀が功臣森傳助好久、信貴山落城の後は筒井順慶が幕下にありて、祿數多領し居けるが、毎夜臥所に入つて枕に附けば、夢ともなく幻にもあらず、松永久秀血汐に染し直垂を著し、亂髪の間より、怒れる眼逆に裂け、突息は炎のごとく、傳助をにらまへて「我信貴山に大敵を引受け、希成氣に防戰成しつる程に、織田の勇兵攻あぐみ、勝敗更に別れざりしを、汝が姦謀にあざむかれ、堅城忽ち粉と成つて、父子主從刃に臥し、無意の生害なせし事、皆汝が所爲ならずや。早く來て我と倶に修羅の苦しみを蒙れよ」と、飛かゝつて捕へんとす。傳助恐れ驚き、刀を拔て薙拂へば、陽炎のごとく稻妻に等しく、爰にかくれ彼所に顯れ、罵る聲彌高く、終に一團の炎と成りて飛行ば、窓の隙しら〳〵と明渡り、苦き夢は醒にける。かくの如くなる事月を重ねて怠らず、次第々々に增長し、後は白晝といへ共松永が姿傍に附添ひ、一向罵り怒り止ざれば、傳助今は神心亂れ、或は大音にて是と罵合ひ、又は刀を拔て踊り狂ひ、物怪と成りければ、妻子家人も甚だ恐怖し、悉く迯去て近寄る者更になく、水穀を斷て

ば、寄手も一時に亂れ入り、城中討るゝ者數を知らず。松永父子本丸に引籠り、猶も下知して戰けるに、松永が功臣入江大五郎、岩成小四郎等久秀が前に來り「森傳助が反心にて、味方の惣勢悉く破れ、今は角とこそ覺え候。潔く生害なし給ふべし。我々も冥途の魁仕らん」と、兩人差添拔より早く、腹十文字に搔切て死たりける。松永久秀これを見て、涙をはら〳〵と流し、「去にても森傳助が反心こそ、生を替ても忘るまじき恨なれ。おのれ傳助思ひ知らすべきぞ」と、牙を嚙で怒りける。時に早寄手本丸に亂入しければ、いざ我も快く切腹すべしとて、天守の四方へ火をかけさせ、日頃祕藏しける平蜘の釜を取出し、天下に二つなき名器を敵の物と成ん事の妬しとて、微塵に打碎き、脇腹へ指添突立て引廻せば、嫡子小次郎春之後へ廻り首打落し、其刀にて我胸元を刺通し、父の首を提げ、猛火の中へ飛入て、一時の烟と成にける。久秀行年六十八歲。落殘りし郎等百餘人、刺違へ〳〵、皆生害をしたりけるは、哀なりける有樣なり。斯て信貴山落城に及びしかば、信忠卿總勢を率し、同月十二日、京都まで凱陣し給ひ、二條の城に入らせ給へば、禁廷より今度の軍功の賞として、信忠卿を三位中將左近兵衞に任じ給ふ。安土よりも林佐渡守、松井友閑を使者とし、成功を賀し給ひ、就中筒井順慶が大功を稱し、大和一國を下し賜ふ。順慶謹んで恩を謝し、年來の怨敵松永を討亡し、其領地を賜りければ、悅ぶ事

め、追取巻いて搦捕り、順慶が本陣へ參り、此由を訴ふれば、順慶大に悦び、自ら傳助が繩を解き、座上に請じ、詞を正して申けるは、「松永久秀將軍家を弑害し、主家たりし三好を殺し、天下の人彼が惡逆を惡まずといふ者なく、皆其肉を喰んとす。今其天罰の廻來て、織田の大軍に圍れ、落城せん事旦夕にあり。かゝる不當の惡人に組し、あたら命を失はんより、速に信長公に降參し、順に隨ひ逆を討ば、拔群の恩賞を申賜り、子孫繁榮なるべし」と說聞せけるに、森傳助殆ど是に伏し、織田に降參して松永を伐んと乞ふ。順慶甚悦び、「當城を攻拔ん事汝一人の力に有べし」とて、逞兵二百餘人を石山勢に出立せ、傳助にあたへ、委く計を教へ、十月九日の夜、間道より城の搦手に到り、態と寄手の兵士等と戰ふ形勢を成し、難なく傳助件の二百餘人を城中へ引入たり。扨松永を欺きて、「本願寺より先逞兵二百餘人、加勢の爲さし越る。明後十一日は大軍を以て後詰致すべきよし」誠しやかに語りければ、さしも邪智深き松永なれども、更に此議を疑はず、大きに喜び、「石山の援兵を得る上は、織田の大軍を打破らん事掌の内にあり」と、彼加勢の軍兵を厚く饗し、傳助が大功を讚稱しける。翌れば十日の早天より寄手の軍兵二萬餘騎、一同に鬨を作て攻登れば、松永久秀嚴しく下知して防ぎ戰ふ。此時順慶が入置たる二百餘人の兵共、爰彼所に火をかけ燒立て、內より城戶を開き鬨を發し、當る者を切廻れ

信貴山

落城

色をあらはしたり。

○信貴山落城

去程に信忠卿大軍を引卒し、片岡の城へ押寄せ、無二無三に攻られける。城將海老名友清、力を盡し防ぎ戰ふといへども、終に大軍支へがたく、城に火をかけ、腹搔切て死たりければ、信忠卿物はじめよしと悅び、十月五日、信貴山へ押向ふ。先陣筒井順慶、數年の怨敵松永を打潰さんは此時なりと、郎等士卒に到る迄、勇みいさんで眞先に攻登り、鐵炮を打掛け、火矢を射させ、喚き叫んで攻たりける。織田の勇將惟任、佐久間、細川等筒井を助け、同時に四方を取圍み、二日が間息をもつがず戰へども、無雙の山城、要害元より堅固なるに、大將は老功の松永久秀、從ふ兵士從卒は必死と覺悟の若者共、八千餘人楯籠り、矢石を飛し嚴しく防ぎ戰へば、寄手死人手負數を知らず、容易落城すべきとは見えざりける。時に松永、森傳助といへる者を招き、「汝いかにもして敵の圍を紛出で、大阪石山本願寺に到り、援兵を乞て後より敵を討しむべし。其時圖を見合せて城中よりも切て出で、一箇に勝敗を定むべし」と云ふ。傳助領承して、其夜密に城を出て、大阪さして走りけるが、いかゞしたりけん、筒井順慶が斥候の兵是を見咎

釜を市に買て祕藏しけるが、此釜を需しより猶々富有の身と成り、凡そ心に欲する事悉く成就せずと云事なし。爰に始めて大志を起し、彼美濃の國主齋藤道三も、古は西の岡の商人松並正九郎といひし油賣なりしが、終に美濃一國の主となりしに倣はんとて、松並の氏に似せて松永と苗字を改め、三好長慶に仕へて祐筆と成り、才智を以て次第に出身し、終に三好が家老となれり。その頃信長公上洛の序、松永と出會して、豫め久秀が性質を悟り、松永に向ひて「足下才勇兼備へし英雄なれども、足ざる事一つあり、これなん明玉の瑕瑾とも云べし」と欺き給へば、松永頻に其故を問ふ。信長他事を云うて更に其所謂を語らず。久秀大に心を迷はし、強ちに是を尋て止まず。信長側の人を退け、私言て申けるは、「足下英才を懷きながら、大業を爲すに昧し、大丈夫何ぞ區々として人の下位に居らんや。此所に心を用ひざるは、豈足下の大疵ならずや」と、松永此言を聞てより惡心を生じ、三好長慶が沒後、主人河内守を毒殺し、將軍義輝公を弑し奉り、暫く天下の權柄を掌握せるといへ共、信長の威勢に恐れ、幕下に屬し、織田の命に隨ひぬれど、先に信長一言を以て我を欺き、足利、三好の君を弑せしめたるは限りなき姦人なりと、深く信長を恨み、折を見合せ居たりしが、此時織田の諸勇士北國に赴き、又は大阪に對陣し、信長の旗本空虛なるを以て、片岡の城主海老名兵衞友淸をかたらひ、終に謀叛の

ば、頓て勘氣も免ぜらるべしと、聊かも退屈仕らず、結句數年の積勞を散じ、英氣を養ひ、勇勢日頃に増りて覺え候。いかなる剛敵强賊も、物の數ともせず候」と申す。信長大きに笑はせたまひ、「汝實に英傑なり」と、御盃を下し給ひ、君臣の情いと濃かなり。時に信長宣ふ樣は、「松永久秀謀叛して、信貴山に楯籠る。いかにしてこれを伐んや、其計略を聞くべし」と、秀吉畏つて答へけるは、「松永叛逆を企て、當家に敵對なすとも、何程の事か候はん、一時に退治仕るべし。君松永を討んには、筒井順慶にしく者有べからず。松永、筒井は年來國を爭ひ合戰止時なし。筒井に命じて先陣たらしめ、石山本願寺の押に置れたる惟任光秀、佐久間信盛、細川藤高等をしてこれを助けしめ給ふものならば、順慶粉骨を盡し、不日に松永を退治すべし。且又本願寺に押の兵はこれなくとも、元來法師原の事なれば、軍兵を出し攻め來る事決して有べからず。某は君の御籏本を守護し奉り、根本を固め候ふべし」と申す。信長これに隨ひたまひ、御曹子信忠卿を大將として、大阪在陣の將士筒井順慶等都合其勢二萬餘騎、十月朔日和州をさして進發す。抑此松永彈正久秀といふは、舊山城國西の岡の何某といへる百姓なりけるが、聰明怜悧にして、細少の事にかゝはらず、農夫をきらひ、常に博奕の賭を事とし、放逸なる行跡のみなれど、高運にして賭にも負を取らず、いつしか財寶を貯へ、常に茶事を好み、平蜘といへる

らるべき筈の處、御籏本無勢にして、今ぞ秀吉が諫言的當せしを感じ給ひ、甚だ後悔ありて、猪子兵助を使者として、小谷の城へ遣し給ひ、秀吉を招かれける。此時小谷の城には、筑前守秀吉形の如く遊樂をなし、謳ひ舞ひてありける所に、松永久秀謀叛を發し、信貴山の本城に楯籠りし由聞えければ、「さらば酒宴遊興も是限りなり、數日の安居に筋骨を養ひ、さらに英氣を増たるぞや。急ぎ登城の用意すべし」と、俄に供觸したりければ、家中の面々合點行かず、心もとなく思へども、命に任せて支度しける。然る所へ信長公より使者入來ありて、則ち猪子兵助秀吉に對面し、申聞ける口上の趣は、「頃日筑前守出仕を差留置れたりといへ共、俄に尋問べく事のこれある間、常の如く登城致すべしとの仰なり」と述たりければ、秀吉謹んで承り、「委細畏り奉る、只今直樣登城仕るべき」とて、先使者を歸らしめ、卽時に供の兵士を集め、急で安土に赴きける。

○松永久秀謀叛

羽柴筑前守秀吉、安土に登城しければ、信長公、近く召寄られ、「汝數日の籠居さぞ鬱屈しぬらん」と宣ひければ、秀吉謹で頭をさげ、「臣暫く御不興を蒙るといへども、君元來仁惠厚くましませ

と、餘儀もなく賴みければ、重治微笑して答て曰く、「御邊達の心配尤至極せり。併倩筑州の行勢を見るに、天性の聰明にして高運限りなき英傑なれば、小人の腹中を以て伺ふべき器量に非ず。且酒量高からぬ人物なれば、晝夜酒に浸るとも、亂醉酩酊の氣遣なし。亂れたる世の有樣にて、武士の生命は朝露よりも猶たのみなし。旦には主從朋友親子兄弟、相倶に軍に連り、勇ましく敵に向へ共、夕には親を討せ子を失ひ、我身の生死だにも定かに辨へ知らざるは、我も人も違ふ事なし。されば一時の遊宴に、千歲の齡を延る思ひをなし、主人と共に打よりて、飲つ謠ひつ鬱散し、屈せずして勇氣を養こそ、戰國の心得なれ。心づまりの諫言を取置き、心ゆるして酒宴の興を增し給へ」と、案に相違の竹中が所存、皆一統に惘れはて、とかう云べき詞なく、顏見合せて居たりけり。淺野彌兵衞、蜂須賀小六兩人は、竹中が言葉を聞き、少しく心に是を悟り、何樣戰國の時に生れ、死を輕んずる輩は、かくこそ有るべき事なりと、重治が敎に隨ひ、此後は諫を入れず、折節は秀吉の前に出て、酒宴の興を添にけり。時に石山本願寺の押へとして、天王寺の附城に定番たりし松永彈正少弼久秀俄に謀叛し、己が居城信貴山に楯籠り、信長公へ敵對の色を顯しける。此よし佐久間信盛、筒井順慶兩人より急使を以て訴へければ、信長大に驚き給ひ、元來松永は勇武備へし老功の者なれば、等閑の敵にあらず、急に討手を差向

自らも左思ひつれば、折々諫言し侍れど、いかなる事にか御用ひなく、一向遊興にのみ耽り給ふ。是は汝達、自らなどの諫めにては事行くまじ、竹中半兵衛尉重治こそ、夫秀吉の平生敬ひ給ふ人なれば、此人の諫言に非ずんば信用し給ふ事有るべからず。急ぎ汝達竹中に此事を告げ、よきに諫め參らせよ」と聞えければ、両人大によろこび、「我々此の人の御事を磆と失念致したり、早々竹中氏へ談じ、宜敷計ひ申さん」とて、淺野彌兵衛を始として、蜂須賀、堀尾、加藤、福島、片桐、脇坂の輩打連れて、竹中半兵衛が居宅にこそは赴きける。

○竹中重治演二時宜一

竹中半兵衛尉重治といへるは、先の美濃の國主齋藤の幕下なりしが、今秀吉の扶助を受けて、小谷の城中に在けるが、元來智仁勇嚴兼備へたる謀士なれども、始め秀吉と約したる事のありて、曾て人の爲に謀を出さず、才を隱し智を暗くし、只世の盛衰興廢をたのしみ、引籠てぞ居たりける。時に羽柴秀吉が郎等淺野彌兵衛、蜂須賀小六、堀尾、加藤、福島、片桐、脇坂が輩竹中が宿所に來り、銘々存急の趣を物語り、「足下に有らずんば主人を諫むべき者爰なし。願くは勞を辭せずして諫言を進め、主人が遊興を止め給はゞ、我々が喜び何事かこれにしかん」

を招き遊女をあつめ、亂舞酒宴に日を暮し夜を明し、聊も愼む色なく、笑ひ樂み居たりける。是に依つて羽柴の長臣、淺野彌兵衞、蜂須賀小六等殊の外心を痛め、日頃にあらぬ主人の有樣、これは天魔の所爲なるかや、さらぬだに短慮强氣の信長公、此爲體を聞し召ば、いかなる御咎か有らずらんと、頓て兩人秀吉の前に出で、「君御不興を蒙りながら、常になき放蕩の御行跡は何事ぞや。御誤の行はなくとも、當時閉門の御身にして、斯のごとき御ありさまは、ひとへに小人愚痴の所爲にして、自ら禍を招き給ふに似たるべし」と、詞を揃へて諫めけるに、秀吉大に笑ひ「何條我身の上にさる禍の起り來らんや。抑去る永祿のはじめ、信長公に仕へ奉りしより、萬死を淩ぎ千傷をのがれ、一日一夜の安臥もなく年月を送りぬるに、今幸の時來り、暫く軍事のいとま有りて、爰に籠居せる事は、是なん罪なくして配所の月を見るとこそ謂ならめ。此時に日頃の鬱をはらし、酒宴遊興に積年の疲勞を休むべし。汝等も我と共に軍事にいとまなき身なれば、此間に酒をも飮み、身分相應に鬱散し、英氣を養ふこそ肝要なれ」と、盃を取て一座へめぐらし、屈するけしき露ほどもなし。淺野、蜂須賀が輩も、何樣これは主人の心に狐狸などの入りかはり、斯る行跡をなし給ふものならんと、いよ〳〵こゝろを苦しめける。秀吉の奧方於八重の方此體を見給ひて、私に淺野、蜂須賀を召れ、「汝等が心配理に過ぎたり。

爲ならずや。早く手勢を引連れ、本國に歸りて君を守護せよ。我決して汝が助力を受まじ」と、大聲になりて罵りけれど、秀吉更に怒れる色もなく、「夫こそ某が望む所なり。片時も早く立歸り、御旗本を守るべし。諸將各匠作に力を合せ、粉骨して功を立て給へ。兎するも角するも、皆是君への忠義なり、私の事にはあらず」と暇乞して、取物も取敢ず手勢引具し、江州さして歸りければ、柴田を始め竝居る諸將、あなけしからずの秀吉が行跡やと、惘れて言もなかりける。

○羽柴筑前守閉門

羽柴筑前守秀吉は、手勢を引具し江州へ歸り、安土の城へ參著し、詳に事の次第を言上しければ、信長甚だ氣色を損じ、「我下知を用ひず、我意に任せ歸陣せし事、言語道斷の曲事なり」とて、出仕登城を止められ、小谷の城にかへりて、門戸を閉て引籠れば、日頃秀吉と睦じかりき輩は、信長公短氣の大將なれば、いかなる御咎や有るべきと、眉をひそめ手に汗を握るもあり、又秀吉が出頭を偏執して忌妬む小人は、「哀れ羽柴が猿智恵の、赤き尻こそ露れたり」と、とりどり噂しける中に、秀吉が家中臣下の輩は安き心更になく、いかゞ成り行く事やらんと、額をあつめ膝をよせ、衆議區々なりけるに、是に引きかへ筑前守秀吉、少しも患ふる色もなく、猿樂

勝家秀吉と争て
心ざしを曰

詞をも出さず、默々として居たりけるを、勝家心中に是を怒り、秀吉に問て、「足下最前より無言にして、我諸將の勞を謝すといへども、其返答もなく、不興の有樣大きに快からず。是必ず足下内心に不快を懐くと覺えたり、明かに語候へ」と云ふ。秀吉答て、「今日の集會我も甚だ心よからず。足下北國七州の藩鎭として勇名海内にあふれ、其名を聞て嬰子も啼を止む。然るに上杉謙信當國に亂入せると聞き、未だ敵の旗をも見ず、猥に援兵を乞ひ給ふは何事ぞや。惟任は丹波征伐を承り、惟住は江州を預り守り、瀧川は勢州、佐久間信盛は攝州、某も播州の番手を承り、皆大切の役目あり。たま／＼手空なる氏家、安藤、稻葉等迄當國に下りて、君の旗本甚だ空虛なり。是を伺ひ變を發す者あらば、何を以て防ぎ給はんや。近くは武田四郎、長篠の恥辱を雪んと折を窺ふ。我屢此事を君に申すといへ共、足下援兵を乞ふ事急なる故、旗本の空虛を厭ひ給はず、我々を當國へ下し給ふ。某是を思うて心更に安からず、何ぞ笑談して宴をなさんや。足下これを思ひ給へ」と云ふ。勝家益憤り、「汝が言理有るに似て甚だ非なり。君此越前を切鎭んと、數年の間力を用ひ給ひしを、自然上杉の爲に奪れなば、年來の功空きのみならず、君の御爲甚だ大事なり。是を思召ればこそ早速諸將に命じ、我を助けしめ給ふに非ずや。然るを汝一人これを拒み目にも見えぬ變を恐れ、當國に大敵の向ふを厭ざるは、不忠不信の所

繪本太閤記　二篇卷之九

○勝家與秀吉爭而曰志

一葉落るを見て年の暮なんとするを知り、瓶中の氷を睹て天下の寒を知る。智者は禍の徵にして、いまだ不發端を察し恐る。其頃越後の國主上杉入道謙信、大軍を引率し越前へ亂入し、上方迄切つて登るの由專ら風聞し、越前大に騷動す。柴田勝家勇將なりといへども、上杉の大敵を防ぎ支る事能はず、又々此旨信長公に言上し、「加勢與力の軍勢を賜るべし」と訴へければ、信長も安からず思し給ひ、謙信上洛せばゆゝしき大事なるべし、先豫め備をなさんと、惟任五郎左衞門、瀧川左近將監、羽柴筑前守、稻葉伊豫入道、氏家左京亮、安藤伊賀守等、數多の軍勢を以て越前へ差向給ひ、柴田と力を合せ、上杉を防せ給ふ。羽柴筑前守、思ふ仔細あれば、此援兵を無用なりと止めぬれども、信長公更に用ひ給はず、心ならずも諸將と共に越前へこそ赴きけれ。既に大軍北の庄に著到すれば、柴田勝家大に悅び、城中に迎入れ、さま〴〵饗應し遠路の勞を謝しけるにぞ、諸將各答禮し、談話頗る濃なり。中に羽柴秀吉、不快の體にて、つや〳〵

繪本太閤記 二篇第九之卷 目錄

旨委細に注進しければ、信長公、秀吉が遠計をかへすぐ〵も感じ給ひけるとなん。

蓬萊三萬里仙境　留與寛仁永保顔

城郭全く成就しければ、信長公爰に移り給ひ、嫡男勘九郎信忠卿を岐阜の城に留め給ふ。時に同年秋八月、加賀國の一揆蜂起して、大聖寺の城を攻む。城主戸次右近、手勢を引て屡戰ひ、勝利を得る事度々なれども、一揆原大勢なれば、討ども切ども事ともせず、新手を以て向ひ來れば、戸次右近、柴田勝家に加勢を乞ふ。勝家いかゞ思ひけん、兎角に事寄せ、此催促に隨はず。爰において右近安土の城に急使を馳て、信長公に援兵を乞ふ。信長使者を召して事の次第を尋聞き、勝家が加勢を出さざるを怒り給ひ、諸將を召て評議し給ふに、羽柴筑前守進み出て申けるは、「柴田匠作戸次を助ざる事は、右近に功を立てさせじと思ふ故なり。加賀の一揆を鎮んには、匠作が甥佐久間玄蕃盛政を以て大聖寺の城に遣し、右近に代しめ、柴田に命じて加勢をなさしめば、忽ち一揆平定すべし」といふ。信長暫く默然として思惟し給ひけるが、良有て點頭給ひ、秀吉が計議妙なりと、直に玄蕃盛政に五千餘人の逞兵を與へ、大聖寺へ差向らる。玄蕃元來萬夫不當の勇士なれば、大によろこび、急ぎ越前に赴き、叔父匠作に信長公の命を傳ふれば、秀吉が遠察に違はず、柴田勝家、盛政と力を合せ、一揆原を討ちける程に、いかんぞ是に敵すべき、只一戰に粉のごとく散亂し、終に加州も平均せり。勝家、盛政使者を安土に奉り、此

信長安土山に城を築く

とす。されば奥州大守内膳太夫輝宗も御味方に參り、飛彈の國主姉小路中納言頼綱、播州の別所小三郎長治、同山城守賀相等參著して、信長の幕下と成る。爰において信長帝都近き所に城を築き、天子を守護し奉らんと、要害の地を選み給ふに、江州蒲生郡安土山こそ究竟の城地にて、西北は聞ゆる琵琶の湖水、比叡山、如意嶽遙に見え、湖中に竹生島の勝地あり。南は村里平遠として、三上山の風景云はん方なし。東は觀音寺山にして、麓に帝都の街道有て、晝夜行人の絕る時なし。誠に近江第一の景地なればとて、天正四年春正月、惟任日向守光秀に繩張を仰附けられ、惟任五郎左衞門を奉行とし、城普請を始め給ふ。近國の大工左官石切鍛冶の人夫共、一萬餘人集りて、晝夜を分たず營む程に、其功空からずして、二重の石垣、七重の天守、巍巍行々と雲を凌ぎ、金銀を梁にのべ、珠玉を以て陛に鏤め、城下には棟をつらね軒を竝べ、數十萬の人家所せく建つどひ、織田の繁昌人の目を驚かしむ。美濃の玄興和尙、信長の命を蒙り、安土山の記を作れり。其詩に曰く、

六十扶桑第一山　老松積翠白雲閑
宮高大似阿房殿　城嶮固於函谷關
若不唐虞治天下　必應梵釋出人間

悉く切殺し、寺院僧坊は打潰し燒崩し、蟻蜂鼠蠅を殺す如く、根葉を絶して押行く程に、道路に横たはる死骸は壘々と丘の如く、實に一國の人民爰に斷果なんと、聞く者魂を失ひ、見る人肝も消し、舌を縮めて恐怖しけり。今月十五日より同廿五日まで、討取る首數坊主七百五十人、鄕民二萬三千人、切捨たる男女老少は幾千萬と云ふ數を知らず。信長是を見て、快然として大に喜び、宿怨少しくは散じたりとて、九月三日、新に令を下して、柴田匠作勝家を北國七州の藩鎭として、越前一國を下し賜り、北の庄に城を築て籠らせ給へば、勝家が威勢日來に十倍して、實に織田の長臣、信長の肱股なりと、勇々しくぞ見えたりける。其外加越の境大聖寺の城には、戸次右近、佐々權左衞門、島彌左衞門等に守らせ、敦賀の城には武藤惣左衞門、大野の城は原彦治郎、金森五郎八、府中の城は前田又左衞門、佐々内藏介等籠城せしめ、同月廿三日、大軍越前を立て、美濃國岐阜に歸城し給ひける。

○信長安土山築城

信長公北國の一揆を誅戮し、上洛ありて參内を遂られければ、天氣殊に麗しく、正三位右大將兼權大納言に任ぜられ、程もなく内大臣に昇進し給ひ、其威名海内に響き、大業既に成りなん

て此旨信長公へ注進す。稻葉伊豫入道一徹は、鉢伏の城へ押寄けるが、當城に籠し杉浦壹岐法橋幷に福善寺、眞宗寺等、杉津、河野の落城に驚き、一戰にも及ばず、寄手のいまだ至らざるに、城を捨てぞ落行ける。爰に於て稻葉一徹、手をぬらさずして城に入り、是も同く城に火をかけ、落城の次第を信長公へ注進す。かくて織田の惣軍十萬餘騎、利刀の竹を破るが如く、府中まで押寄するに、諸方の城々砦々、皆八方へ逃失て、敢て敵する者一人もなく、纔に龍門寺の城に三宅權兵衛尉、小勢ながらも名を惜み、持こたへて籠城す。織田の大軍四方より取圍み、鷄卵を押が如く踏崩し、將卒ともに斬殺せば、下間法橋、杉浦法橋が輩も、加賀國へ逃さりて、越前一圓に向ふ者曾てなし。朝倉式部太輔景鏡、同孫三郎景健、同小三郎景胤等は一揆に組し、此時迄もながらへて有りけるが、再信長公に降を乞ひ、府中の本陣へ來りけるを、信長深く惡み給ひ、三人共に首を刎ね、獄門にかけられけり。扨も本願寺門徒の輩、諸國に滿々て、動れば一揆を起し徒黨を結び、國主郡主を蔑如にし、我意をふるまふ事大方ならず。信長是を憤り、越前の門徒等、僧俗男女の差別なく悉く斬捨よとて、柴田、佐久間、羽柴、惟任、惟住、稻葉、氏家、安藤等、數萬の軍兵を率し、國中の四方に別れ、城郭砦を攻潰し、民家村里を燒盡し、老少貴賤のきらひなく、當國の者とし見れば、山林幽谷樹蔭藪の中までも扒し求めて

門守も戰ふべき術もなく、是も同く士卒に紛れ、這々に逃れ出たり。秀吉下知して、城に火をかけ燒立れば、彼討て出でたりし新五郎、右衞門尉兩人、散々に討なされ、城に入らんと引かへすに、早落城と見えて黑煙高く立登れば、進むに道なく、退くに衜を失ひ、七顚八倒して狼狽るを、羽柴が勇兵片端より切立つれば、遁るゝ者一人もなく、皆悉く斬れける。此日暫時の戰に、切取る首三百餘、生捕四百人なり。秀吉勝軍を納め、直に信長公に注進す。

○惟任稻葉攻₂落鷹打嶽鉢伏城₁

木之目山、鷹打ヶ嶽の城には、和田の本學寺、石田の西光寺等三千餘人にて籠りけるが、惟任日向守光秀手勢一千五百人堀際へ押寄せ、叫き喚んで攻立ける。城中多勢なりといへ共、杉津口の落城を聞おぢし、元より一揆原の集り勢なりければ、恐怖の心なき事能はず、防禦の備全からず、只騷動のみして有りける所に、又河野口の火の手を遙に見て、これも落城せしと罵る程こそあれ、早臆病なる一揆原、我も〳〵と落行にぞ、光秀嚴しく下知して攻立て〳〵、終に城戸を乘破り、城中へ亂れ入り、散々に切て廻ば、討るゝ者數を知らず。大將本學寺、西光寺の兩坊主を生捕にし、討取る首五百餘級、此城も其儘火をかけ、落城を諸方へ知らせ、早打を以

り。此城の大將は、若林長門守、嫡子新五郎、兩人ともに勇武の士にて、持口を堅め、矢石を飛し、嚴しく防ぎ戰へば、雙方勝負の色見えず、暫く時を移しける。時に巽の方より一手の勢、砂煙を立て押來る。兩陣何處の勢ならんとこれを見るに、南無不可思議光如來の九文字を記したる大旗を眞先に押立て、羽柴が陣へ後より無二無三に切て掛る。羽柴勢大に驚きたるありさまにて、備を立てかね、城を捨て此勢を防んとす。城中より是を見て、「本願寺宗門の助勢なるぞ。此方より切て出で、差挾んで打崩せ」と、若林新五郎、安井右衛門尉四百餘人、城戸を開いて、羽柴が陣へ面もふらず切つてかゝれば、秀吉が軍勢一支も支へず、右往左往に散亂し、我先にと敗走す。城兵勝に乘て迯るを追ひ、十町ばかりも來りし所に、忽耳下に鐵炮響き、秀吉が伏勢蜂須賀、堀尾、加藤、福島、片桐、脇坂五百餘人、一同に噇と發り立ち、城兵を中に取圍み、あますまじと揉立ければ、討るゝ者麻の如し。此時彼南無不可思議光如來の旗をさしたる一手の勢、城に向つて眞一文字に馳來る。城將若林長門守は、味方救ひの勢なりとのみ思ひ、更に怪む心なく、油斷して眺め居るを、彼勢ひた〳〵と城戸口に走り寄り、忽九字の大旗を取て捨て、五色の吹貫千生瓢箪の大馬印、桐の臺の旗をさつと靡せ、我先にと城中へ亂れ入り、當るを幸に切倒せば、城兵等周章ふためき、防んとする者更になく、崩れ立つて搦手より迯出づれば、大將長

丁計追ふ所に、忽ち右の方より柴田が養子伊賀守二百餘騎を引て切て出づれば、左の方より勝家が甥佐久間玄蕃二百餘騎、噇と喚て突立るに、僞り負たる勝家が勢、同時にどつと返し、三方より揉立れば、中務大きに驚き、狼狽騷ぎ迯出すを、佐久間玄蕃馬をつゝと駈寄せ、中務が上帶摑んで宙に提げ、本陣さして引行くを、中務が郎等十餘人、主討せじと、切先を揃へ討てかゝる。玄蕃大太刀を片手に引拔き、車切に薙倒せば、只一打に三人五人、ばら〳〵と切倒され、恐て近寄る者もなし。此中務、もと朝倉の家臣にて、勇猛の聞ありし壯士なれども、玄蕃が怪力に敵する事能はず、おめ〳〵として生捕れぬ。大將かくのごとくなれば、殘兵ども右往左往に散亂し、只粉のごとく迯たりける。柴田勢勝に乘り、直に城の四方を十重二十重に取圍み、鐵炮を打かけ火矢を飛し、息をもつがず攻たりければ、城兵神並七兵衞、三園采女、とても籠城叶ふまじと思ひけるにや、大將圓光寺を討殺し、首を取て降參しければ、柴田匠作城に入りて軍を休んじ、使者を以て此旨を信長公へ注進す。

○羽柴秀吉攻₌落河野口城₋

此時羽柴筑前守秀吉は、手勢三千五百騎を引率し、河野口の要害に構へたる新城へこそ押寄た

等と申合せ、大軍を以て攻圍み、富田、毛谷、增井が輩、一人も殘さず悉く討殺し、終に越前一國又本願寺の領と成り、心々の仕置を建て國政を執行ふ程こそあれ、暫くも靜ならず、國中上を下へと騷動す。此時信長諸方の敵徒大概平治し、暫く手空の節なりければ、越前の一揆、本願寺の門徒等を誅戮すべしとて、天正三年秋八月、十萬餘騎の大軍を起し、敦賀の津へと進發し給ふ。守護代下間法橋これを防んと、鄕民どもを招き集れ共、信長の大軍大浪のごとく押寄たれば、甚恐怖して、敢て一人も下間が下知に隨はず、皆山林へ迯隱る。下間筑後いかんともすべきやうなく、わづかなる武士に坊主浪人などかり集め、要害の地によつて敵を待しむ。信長の先陣柴田匠作勝家手勢五千餘騎、十五日の早天に杉津口の城へ押寄せ、鬨を作つて攻掛たり。當城に籠りたる大將には、大鹽の圓光寺といふ惡僧にて、これを助る勇士堀江中務、神並七兵衞、三園釆女等嚴しく防ぎ戰へば、勝家が士卒死傷の者甚多し。是によつて柴田匠作一計を出し、俄に後陣より軍勢を引上げ、城を捨て退散す。城中これを見て、「寄手軍をまとめて退くは、內變の出來たる者ならん、追かけて打取べし」と、堀江中務手勢を引て駈出るを、圓光寺これを止め、「是敵方僞の計略なり、誤て其陷穴に入事なかれ」と、遮て制すれども、血氣の中務更に聞入ず、城戶を開て眞一文字に切てかゝれば、柴田勢散々になつて敗走す。中務勝にのりて五

の人々等、參集して見物し給ふ。氏眞祕術を盡し、さま〴〵に妙なる手ども蹴出しければ、見る人感稱の聲堂に充り。氏眞あはれさばかりの妙を武道に得なば、膝を屈して信長が幕下に辱めを蒙る事あるべからざるに、武門に要なき技藝に耽り、軍學兵書に暗きこそ、疎ましき仕業かなと、嘲る者のみ多かりける。

○柴田匠作攻₂落杉津口城₁

去程に天正元年、信長公越前を討て朝倉義景を亡し、一同悉く織田家の有となれども、容易に平定し難きを察し、秀吉が謀略に任せ、降參の徒を以て一國を守らせ置き、江州勢州を征伐し給ふ所に、秀吉が先見に違はず、富田、毛谷、増井等鄕民を集め、桂田、魚住を攻殺し、式部太輔景鏡、孫三郞景健等と同心して、國政を執行ふ。爰に加賀國本願寺宗門の徒一揆を起し、領主富樫助を殺し、其所領を本願寺へ獻じ、家老下間筑後法橋、杉浦壹岐法橋兩人、加賀國へ下向して、恣に勢をふるひけるが、鄰國越前の朝倉義景滅亡し、其家人等主人を賣て國を奪ひ、權威を爭ひ、國中を騷動せしむる條、惡き事なりとて、彼下間杉浦兩人をはじめ、加賀の鄕民等怒り憤り、且本願寺の新門跡は義景の聟君なれば、旁以て捨置がたしと、越前の門徒

信長奏聞して
蘭奢待を切る

日野大納言輝資卿、飛鳥井中納言雅教卿、勅使として南都へ下向し給ひ、命じて蘭奢待を切らせ給ふ。信長謹で拜領し、則其香を三分になし、一分を自ら藏め、二分を臣下の銘々に分ち與へ給ふ。此事を傳へ聞き、大名小名或は羨み又は恐れて、信長に屬せん事を願ふ者少からず。同五月、信長大きに軍勢を發し、勢州長島の一揆を討ち、秋九月に到り悉く誅戮し給ひ、翌天正三年の春は、三河國長篠にて武田勝頼が大軍を切崩し、いよ〳〵威名を天下に震ひ、其年の夏は家人等を受領なさしめ、木下藤吉郎を筑前守になし、氏を羽柴と改む。明智十兵衛を日向守に任じ、是も氏を惟任と改む。其外柴田勝家は修理進匠作と號し、丹羽長秀は惟住五郎左衛門、塙九郎右衛門を原田備中守と稱し、其餘の家人、加階の輩猶多し。此時先の駿河の國守今川義元の男上總介氏眞、先年武田信玄が爲に領國を奪れ、五畿内に漂泊して有けるが、今川家の名物百端帆と云る花器、高麗國の名器千鳥の香爐を信長に呈し、改めて織田の幕下に屬す。此千鳥の香爐は天下に雙なき器なり、さま〴〵の奇特有りて、尋常の器物に非ず。後秀吉これを獲て祕藏し、朝鮮征伐の時、肥前國名護屋の陣中又渡海の船中において奇瑞を顯はし、秀吉危急の事どもをのがれ給ふ事度々なり。（委しくは後の篇に記す）扨も此氏眞は、蹴鞠の達人なりとて、信長公是を所望し給ひ、在京の節、相國寺において蹴させ給ふ。されば堂上の公卿殿上人、此道に堪能

るは「いかに久秀、三好義次が最期の一言よく承はれ。汝人面獸心、故修理太夫長慶が大恩を蒙りて、奴僕より經上り、數ヶ國の主と成り、伯父安宅攝津守を讒害し、家兄河内守を毒殺し、我幼年を勸め、義輝公を弑し奉り、今信長に追從して、主家の我に刃向ふ極重惡人、見よや天罰廻り來て、五年を待ずして汝が一家滅亡せん。其時思ひ知れや」とて、五百餘人どつと喚いて突崩せば、さしもの松永、其理にや屈しけん、さん〴〵に掛立てられ、四方へぱつと引たりける。筒井順慶入替つて相戰ひ、火ばなをちらし、討つ討れつ時移りて揉合しが、信長の大軍八方よりとり圍み、あますまじと惣がかりに成りて攻たりければ、義次心は猛しといへども、數ヶ所の手を負ひ、今は合戰かなひがたく、腹掻切つて死たりける。是を見て從兵共、一人も殘らず刺違へ〳〵悉く討死し、終に若江の城は落にけり。

○今川氏眞屬二信長幕下一

天正二年春三月、信長上洛ありて、從三位參議に昇進し給ひ、且奏聞して、南都東大寺に納らるゝ蘭奢待の名香を、舊例に任せ、方一寸八分切取給ふ。此香は、先に東山殿御所望ありてより以來、數代の將軍家拜領の事もなかりしに、信長公武德權勢盛にして、頓に勅許なし給ひ、

ども、義次忠義の心深く、始終將軍家に隨身し奉り、義昭公野心を企て給ふ時も、一端御味方に參し、室町に籠城せしかども、御和睦の後居城若江に引退き、籠城してありけるに、程なく將軍眞木島に籠らせ給ひ、又々義次を召されけれ共、さすがに人心のやる方なさは、迚も將軍家の時運爰に究れりと思ひ、此たびは御味方に參らず、居城に籠り居たりけるに、はたして將軍家御軍利あらずして、眞木島を退去ましく、信長が計として、義次が方へ送り參らす。是信長が人を試る所にして、義次將軍家に組し、重て旗を若江の城に揚や否やを探糺す底意なり。義次早くも其心を察し、直に將軍を毛利家へ移し參らせ、暫く信長が疑念を免れしが、もと此義次は將軍義昭公の御妹聟にして、しかも勇武絶倫の兵なれば、信長かねて踈ましく思ひ給ふに、松永彈正久秀、義次が將軍に忠あるを忌きらひ、叛逆の企ありと信長に讒言しければ、兼うしろめたく思しつる義次なれば、とかく糺明にも及ばず、同年十二月、松永彈正、筒井順慶が兵を催し、大軍若江の城を取圍み、息をもつがず攻られける。義次籠城の士卒四千餘人、敵きびしく防ぎ戰へば、左右なく落城すべしとも見えざる所に、城中に藤四郎友忠といふ者、敵將佐久間信盛に内應し、織田勢を城中へ引入れたり。義次今は是迄なりと、逞兵五百餘人を率し、松永久秀が一千餘騎の中へまつしぐらに切て入り、大太刀を眞向にかざし、大音にて呼りけ

あり。秀吉悉く對面し、問て曰く、「先又外面にありて琴の音を聞きしが、定て是此息女の彈ずる所なるべし」高次答て云く、「然り」秀吉大きに感じ、頗る興に入り、杯を取て一座に廻らし、又乞うて琴を彈しむ。彼女辭する事を得ず、調べ合せ、春鶯囀といへる俗曲を、心をこめて彈すましたりければ、勇猛無雙の秀吉も、是ぞ仙境のたのしみなりと、しばし聞きとれ居たりける。時に木下が郎等加藤、福島等、「早夜も二更に近く候へば、御歸城ありて然るべし」と催すにぞ、秀吉實もと盃を納めさせ、暇を告て立出る。高次兄弟門前迄送り出で、「信長公の御前、よろしく執成し願ひ奉る」と、懇に賴み聞ゆれば、秀吉其趣を許諾して、別れて小谷へ歸りける。其後事の序を以て、信長公へ高次兄弟が零落を言上し、家名相續の儀を願ひければ、信長早速高次、高知に目見仰附られ、江州にて所領を賜り、再び京極の家系を興しけるも、皆秀吉が力なり。されば高次兄弟、身命にかへ秀吉の恩を報はんと、悅ぶ事限りなし。高次が妹は、後に秀吉が部屋に召仕ひ、松風殿と呼で、寵愛肩を竝ぶる者もなく、妬む女も多かりけり。

○三好義次最期

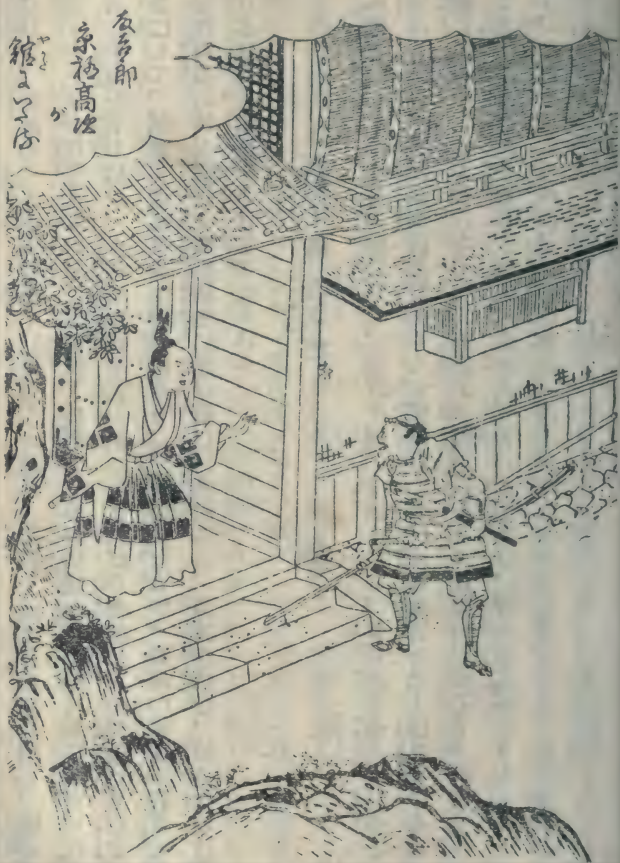
爰に河内國若江の城主三好左京太輔義次は、故三好長慶が猶子にして、元來足利家の怨敵なれ

む。此時内より二十餘の武士立出で、「左宣ふは何人にや」と問ふ。木下が從者答て曰く、「是は當國小谷の城主木下藤吉郎秀吉、國中巡見の爲、山林幽谷を經て爰に到れり。早く汝が姓名を名乘り、誤つて城主の疑を蒙るべからず」と云ふ。彼武士是を聞て、謹で禮を恭しくして、秀吉を客殿に請じ、座定つて扨答て申けるは、「某は先の近江の國主京極武藏守高義が子高次といへる者なり。家人淺井が爲に國郡を押領せられ、零落する事既に十餘年、あはれ父の家名を起し、再び京極の氏を繼んと、日夜朝暮是を思へ共、時至らずして今日に及べり。然るに淺井長政父子も、合戰利なくして織田の爲に滅亡し、終に泉下の鬼と成れり。時運の然しむる所、豈人力の及ぶ所にあらんや」と、歎息して不止。秀吉是を聞て、高次に向ひて曰く、「我主織田信長新に淺井朝倉を亡し、其勢東國に敵する者なく、天下の權柄七八分を握れり。足下信長にたよりて京極の家再興あらば、忽ち事成就すべし。此所に獨閑居して、時節の到るを待ぬるは、槌を磨きて針と成すよりは猶難かるべし」高次再拜して、「我元來此願ありと雖も、緣拙く信長公に拜謁せず。今幸に織田の功臣木下殿の來臨を蒙る。希くは我をして信長公に謁せしめ給へ」と云ふ。秀吉快く此事を諾ひければ、高次斜らず喜び、酒飯を出し饗應し、弟治郎高知、又一人の妹十六歲になれるを、兩人ともに呼出して秀吉に謁せしむ。此女容顏美麗にして、傾國の色

を聞し召ければ、許容ありて秀吉が幕下に屬せしめ給ふ。甚内も木下が才智に服し、謹んで是を畏り、是より木下が臣下となれり。爰に於て信長公、小谷の城を木下藤吉郎に賜り、江州にて二十萬石の朱印を下し給ひ、多年の勳功を賞し給ふ。されば年來織田家の怨敵たる朝倉、淺井一時に滅亡して、越前、近江信長の御手に入り、御悅大方ならず。長政の室家小谷方と稚き兒とは、尾州清須の城主織田上野助信包に預け給ひ、九月六日、諸陣を拂ひ、岐阜の城に凱陣なし給ひけるは、目出度かりける事なりけり。

○藤吉郎到二京極高次館一

木下藤吉郎秀吉は、此時小谷の城に住し、近江半國の守護と成り、專ら民を保んじ耕作をつとめさせ、猶淺井の殘徒等此國中に忍びあらんも覺束なしと、山林幽谷を悉く巡見しけるに、觀音寺山の麓に至りて、廣く住みなしたる館あり。門塀いと高く建連ねたれども、軒の瓦半は落損じ、何さま故ある者の住居ながらも、亂れたる世にしあれば、營み作る事なきならんと思ひ廻らしつゝ、門内を見入るれば、蔀の門簾かけ渡し、ゆゑづきたる奧の方に、琴の音のしめやかに、妙なる女の聲して、曲のはし〴〵も聞えたり。秀吉從者に命じ、何者の住居なるやと尋し

友五郎
京極高次が
館に入る

運拙く柴田と丹羽が手に生捕れぬ。今一人脇坂甚内安治といへる強勇無雙の兵あり、元より思ひ設けし事なれば、只討死せんものと、深く敵中に切入て、數多の武者を切立て薙立て、三時餘戰ひしが、更に近寄る敵一人もなく、其身に少しの手疵も負ず、愈進んで戰ひける。此時木下藤吉郎は、虎御前山の合戰に、脇坂が勇は知りたり、「あたら兵、討死させんも本意なし。いかにもして生捕來れ」と下知すれば、木下が籏本より加藤虎之助、福島市松、片桐助作三人等く馳寄て、前後より討てかゝり、脇坂が乘たる馬の太腹を我一にと突通せば、さしもの甚内馬上に暫もたまり得ず、眞逆に落たる所を、加藤が郎等木村又藏、井上大九郎走り寄つて、難なく繩をかけたりける。かくの如く淺井の兵士殘なく討れぬれば、信長城中に入て、討取る首ども實檢し、降參生捕の將卒を召され、夫々の仕置仰せ渡されける中に、三田村左衛門尉、小野木佐渡守兩人、鍔際の降參比興とて、首を刎らる。淺井石見守、赤尾美作守は、淺井の家老職として長政父子が野心を諫めず、ともに敵對して朝倉を助けし事、言語同斷の曲者なりとて、これも同く誅せらる。此時木下藤吉郎は、件の生取脇坂甚内を連れ、御前に參じ申けるは、「此者生得大剛にして、百萬の兵といへども群りたる小兒を見るがごとし。一命を扶け御内に召れ候はゞ、何樣大事の御用も勤むべき者に候」と訴へければ、信長もかねて脇坂が武勇の譽ある

繪本太閤記　二篇卷之八

○淺井長政最期

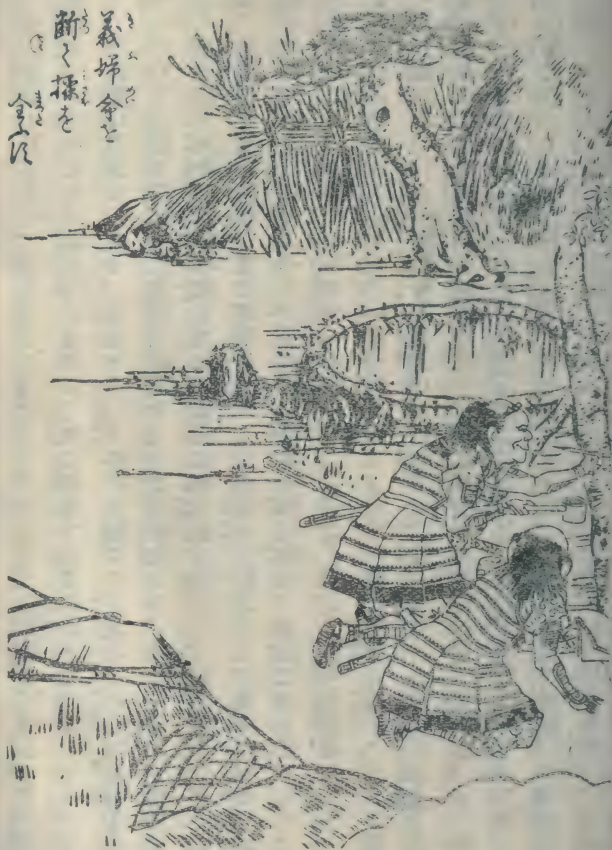
扨も淺井長政は、いかにもして父久政の命を助け、其後に生害すべしと、信長の言信を待居たるに、久政に附添居たりし小姓、織田の攻口少しゆるみたるに乘じ、本丸へ忍入り、長政の前に至り、久政生害の次第を詳に演舌し、そのまゝ腹かき切て死たりければ、長政大きに驚き、深く信長を恨み憤ると雖も、今は妻子殘らず人質に取れ、何面目に生て二度人と面を對すべきと、鎧脱捨て、腹十文字に掻切て、二十九歳を一期とし、終に空くなりにけり。是を見て長政の勇臣淺井石見守、赤尾美作守、脇坂甚内、木村太郎次郎、淺井縫殿介、中島九郎次郎等百五十餘人、城戸を開き切て出で、村雲立たる織田の大軍を事ともせず、縱橫無盡に切て廻れば、丹羽、柴田、池田が勢、死傷の者數を知らず。淺井勢元來討死と覺期したりければ、一足も引く心なく、追つ返しつ二三度計揉合しが、或は敵と組で落ち、刺違て死するもあり、又は亂軍の中に切死し、命全き者とては更に一人もなかりける。其中に淺井石見守、赤尾美作守兩人は、

繪本太閤記 二篇第八之卷 目錄

の因を以て助命給はる條、生前死後の悦び何事か之にしかんや。謹で令に隨ひ只今送り遣すべし。就ては父久政、是又助命願ひ奉る所なり。某に於ては、當城にて心よく生害を遂べく間、此旨執成賴入る」由慇懃に演られければ、三河内守是を聞て即答しけるは、「某不肖には候へ共、信長の使として當城に至り、主將たる貴殿を生害せしめ、何の面目有て信長に對面すべき。貴殿強に生害し給ふならば、只今預り參らせし君達姬達をさし殺し、我も切腹致すべし。此旨信長へ申入れ、兎角の再報候迄、生害を待せ給へ」と、理に當りたる言葉を番ひ、四人の兒達、小谷の方を引具して、暇乞して立出づれば、長政も理に伏し、生害の時剋を延し、藤掛三河守、木村小四郎兩人を添て、妻子を信長の陣へ送らしむ。小谷の方は途方にくれ、泣に淚なく、叫ぶにも聲出でず、長政の活命を信長に願んものと、それを心の力にて、侍女婢女に助けられ、城外へこそ出でられける。

渡守、此大軍に勇氣を失ひ、忽ち降參して持口を開き、織田勢を引入ければ、木下小市郎、竹中半兵衛軍を引て城中に陣を取り、長政が本丸と久政が出丸との間を斷切り、相救ふ事能ざらしむ。長政父子深く是に迷惑し、いよ〳〵氣勢を落しけるに、廿八日の早天に、信長下知して息をもつがせず嚴しく攻附け、微塵にせんと揉だりければ、久政今は籠城叶ひ難く、諸軍に命じ敵を防せ、心靜に生害して死たりける。日頃久政が惠を受し鶴松太夫といふ能師、此時まで側に附添ひ居たりしが、甲斐々々しく介錯し、其身もそこに腹搔切り、潔く死しければ、籠城の勇士千田采女正、井口越前守、西山丹左衛門等、討て出て大に戰ひ、一騎も殘らず討死し、此構も落たりける。淺井長政は父久政の最期を知らず、士卒を下知して防せけれど、いかんぞや此大軍を凌ぐべき、今は早落城とこそ見えたりける。爰において信長、不破河内守を使者として城内に至しめ、長政に申達しけるやうは、「信長先に妹を以て足下に嫁せしむ。足下の子は我甥なり、今日に至て緣類の情なきにあらず。速に城を開き降參あるにおいては、一家悉く助命すべし」となり。長政さしも名を得し勇將なれども、人木石にあらざれば、恩愛の情なきにはあらず。此時信長の妹於市の方を小谷の方と申しける御方の腹に一男三女あり。いと愛らしく生立ち給ふを近く招き、河内守に向て申されけるは、「是なん信長の甥某が愛子なり。信長類緣

全く調ひて後、誅伐し給ふとも、遲き事ある可らず。其故いかんとなれば、義景亡び、越前一國君の御手に屬すといへども、國人の心を得ず、急に靜謐する事難るべし。これを全く平治せんと欲せば、君此國に滯留まし〳〵、二三ヶ月乃至半年も國中の仕置を執行ひ、政道を糺し給はずんば叶べからず。然るに江州に淺井長政ありていまだ平定せず、君日を重ね、當國に留り給ふ事難し。爰を以て兩全の計略を案ずるに、式部太輔景鏡を始とし、越前降參の將士に悉く領地を與へ、此國を守らせ置き、君は軍勢を引具し江州征伐し給ふべし。其内に彼等互に威を爭ひ、內變を生じ、同士討に及ぶべし。是此國の騷動を彼に讓り、靜に江州を平治して、扨兎も角も罪を正し給はゞ、兩國全く平定すべし」と云ふ。信長手を打て、此計を奇なりとし、先前波九郎兵衞を桂田播磨守と改名し、一乘が谷の城主とし、一國の仕置を司らしむ。又富田彌六郎を府中に在城せしめ、魚住備後守を鳥羽の城に籠らせ、溝江大炊介を金津の城番とし、式部太輔景鏡は以前のごとく亥の山の城を守らせ、別に明智十兵衞、津田九郎次郎、木下助左衞門三人を目代として北の庄に殘し置き、豫め一國の仕置調ければ、同廿六日、軍勢を引上げ、江州虎御前山の陣にかへり給ふ。扨此勢に長政を亡んとて、惣軍九萬五千餘騎、小谷の城を十重廿重に取圍み、暫時に攻落すべき勢なり。小谷の城外構の大將三田村左衞門尉、小野木佐

義婦命を断て操を全ふす

自らが夫はきのふの戰に討死し給ひ、母姉の行方さへ知り侍らず。某の所にと心あたりの方も候へば、あはれ一筆の消息を母姉に送り、我身の無事を知らせ參らせたし。君達此事をよく計り候はゞ、心ゆりて隨ひ侍らん。硯やある、取出で給へ」といふに、雜兵ども、さらばとて、矢立てふあら／＼しき墨納に、ちびたる筆取添て與へければ、女悅び、何事かさら／＼と認め、「そこ／＼の所へ送り屆給はるべし」とて、つい立つやうにて、傍にありける古井の中へ眞逆に身を投じ、旦の露と消たりける。雜兵共あわてふためき、井の內へ飛入て抱き上げたりけれど、早事切れてせんすべなし。書殘したる消息をひらき見れば、餘の言葉はなくて、

世に經なばよしなき雲も覆ひなんいざ入りてまし山の端の月

心なき雜人ばらも、そゞろに淚を催して、鎧の袖を濡しけり。

○信長大軍圍㆓小谷城㆒

去程に朝倉式部太輔景鏡は、主人義景が首を持て信長に降參す。此時織田の諸將等、景鏡が不義不忠を惡み、「首を刎て法を正し給へ」と口々に申けるを、木下藤吉郎制して信長公に言上しけるは、「式部太輔其罪其不義誅戮を免れずといへども、暫く是を宥して味方の益に備へ置き、其要

透し、「義景を討て信長に降參せるにおいては、莫大の褒稱あるべし。若籠城して敵對せんとの事ならば、大軍一同に押寄せ攻潰さんに、人馬とも生る者あるべからず。思慮を極め返答すべし」と申送りければ、景鏡不當の勇士なりといへども、防禦叶べしとも覺えざれば、忽心を變じ、平泉寺の衆徒を誘うて東雲寺を取圍み、情なくも義景を討て織田に降參したりけるを、聞く人つまはじきして惡みける。時に義景四十一歳なり。

○義婦斷﹅命而全﹅操

朝倉義景、東雲寺にて討れければ、宗徒の殘兵或は討れ又は落失せ、兜を脱て信長に降るもあり、七顚八倒、越前の騷動大方ならず。取譯大守の貴族、名ある武士の妻妾兒女、魚の水に離れし如く、東西に走り南北に轉び、何處をあてと知らずして迯迷ふを、心なき雜人下部ども奪取て操を失はしむ。其外國中の貴賤、老たるを助け幼きを抱き、泣惑ふ有樣は、目も當られぬ次第なり。中にも哀なりけるは、故ありげなる女房の、年はまだ二十にたらぬ麗しき美女を、雜兵七八人集りて、手取り足取り人なき荒家に引入れて、いとはしたなう戲るゝに、彼女淚をとゞめ云やうは、「かくなる上は力なし、兎も角も和主達の心に從ひ參せんに、我一言も叶へてたべ。

けるは、「諸將の異見尤に覺え候。併淺井に於て心配の事決してこれなし。其故は、長政勇なりといへども、父久政其外從卒等、皆此程の合戰に英氣を失ひ、押寄て戰はん者一人も有る可らず。我に豫め其備を成し、虎御前山に竹中半兵衞尉重治を殘し置き、大嶽丁野の城に淺野彌兵衞、中村孫平次等を籠置き、竹中が下知を守り、小谷の城を押へ置たれば、長政父子は是網裡の魚、籠中の鳥、何ぞ恐るゝ事あらんや。一刻も早く一乘ヶ谷へ押寄せ、義景が首を得んこそ、信長公の賢慮に叶ひ、且我々が忠功なり」と、さも勇ましく語りければ、信長をはじめ參らせ、諸將一統に此議に同じ、其翌日敦賀を立て府中に至り、龍門寺に本陣を居られ、義景がありさまを伺せらる。扨も朝倉義景は、からうじて一乘ヶ谷に歸城せるといへども、一族郎從宗徒の勇士悉く討死し、織田の大軍を引受け防ぎ戰はん事覺束なく、式部太輔景鏡が居城大野郡亥の山さして落行けるが、東雲寺といへる所に身を忍び、使者を以て平泉寺の衆徒を招き候へども、此輩も今は信長に一味して、結句敵對の色をなせば、家老魚住備後守、朝倉三郎景胤、同孫三郎景健等も、皆信長に降參し、賴み少く成りければ、いとゞさへ勇氣おくれし義景、身の置くべき所なく、恐れをのゝき居たりける。此事信長聞し召れ、さらば亥の山を攻討べしとて、稻葉伊豫の入道一徹齋を先手とし、惣軍跡に續いて押寄する。一徹齋計を以て式部太輔景鏡を

ける程に、越前の勇士朝倉土佐守、同掃部助、同治部太夫、同彦四郎、神並宮内、溝口左京、久保田將監、細呂木治部少輔、長崎大乘坊等踏止つて討死しければ、此隙に義景は辛うじて一乘ヶ谷へ迯歸りぬ。朝倉家累代武勇の家なりければ、當時義景暗弱なりといへども、先代の遺風今に失せず、急に臨んで義を重んじ、忠戰して屍を戰場の塊となす輩、かくのごとく數多なり。あはれ義景、武に心を用ひ、士を重んずるの良將なりせば、豈一朝一夕に滅亡せんやと、惜まぬ人こそなかりける。

○朝倉義景最期

扨も信長の軍勢、勝に乘りひた切に追討ち、十四日の未の刻に、敦賀の津へ亂入す。此戰、大概江州大嶽の陣場より、敦賀まで十一里の間、一晝夜の內に討取る首數、三千八百餘級と記せり。信長諸將を集め「此勢に乘じ、一乘ヶ谷へ押寄せ、義景を斬べし」と議せられけるに、丹羽、池田が輩、進み出て申けるは「御計至極に覺え候へ共、淺井長政小谷に籠城して、軍勢以前に減ぜず。當國征伐に日を累ば、兵を發して本國の無勢を討んに、味方の進退難儀なるべし。宜く計を定め、後の患なき手段こそあらまほしう候」と言上す。時に木下藤吉郎、席を進んで申

要蔵
龍眞
討死

其二

思ふ程戰ひ、残るまでも、百騎が十騎に成るまでも、思ふ程戰うて、力盡きなば刺違へて死すべしとて、命を塵芥の如く思ひなし、此所彼所にて討死し、残少く成りけるを、織田の士卒八方より彌が上に取圍み、一人も餘さじと、火花をちらして揉だりける。哀むべし、朝倉譜代の勇士、山崎を始めとし、一人も殘なく、皆亂軍に討れけり。此時木下、氏家の兩將は、刀根山を駈拔け、義景の籏本に間近くぞ追附けたり。朝倉の勇臣等、軍勢を引分け、備を立て戰はんとす。木下藤吉郎が自ら鎗を取り、眞先に進んで敵にあたれば、加藤、福島、片桐、蜂須賀、堀尾の剛兵ども、我おくれじと敵中に駈入て、分取高名數を知らず。朝倉方に名ある勇士、是が爲に數多討死す。爰に齋藤右兵衛太輔龍興は、今度義景が出陣に誘引れ、此所まで引取りしが、朝倉方に名譽の勇士悉く討死を遂げ、今は越前滅亡と覺えければ、又此國をのがれ出で、いつまで人に後指を指れんや、我討死の期なりと、從兵纔に十餘人、氏家左京亮が三百餘騎の其中へ、面もふらず切て入り、前後左右に切廻れば、氏家が軍兵ども齋藤一人に切立てられ、四方へばつと引きたりける。龍興主從更に退く心なく、猶も進んで戰ひしが、其身金石にあらざれば、數ケ所の深手働き難く、鎧脱捨て、腹掻切て死たりけり。十餘人の從兵も、皆刺違へて死しけるこそ、勇々しかりける次第なり。木下、氏家愈勇んで討

增井五郎左衛門等、必死の逞兵五百餘人、備を固めて待かけけり。織田の先勢前田又左衛門、佐々内藏助、下方右近、戸田半左衛門、津田金兵衛眞先に馬を馳て、刀根山に追登る。山崎等の勇士待ちまうけたる事なれば、何か暫しもためらふべき、一同に鬨を作り、電光のごとく突落せば、織田の軍勢忽坂中よりまくり落され、疵を蒙る者數を知らず。朝倉の勇士得たりかしこしと、大山の崩るゝごとく喚き叫んで突立るに、織田勢坂中にたまり得ず、麓の方へ敗走す。前田利家、佐々成政、口惜き事に思ひ、鐵炮の兵三百餘人眞先に備へ、一同にどつと打かくれば、朝倉勢ひし〳〵と打倒され、鎗を伏てためらふ所を、すはやすゝめと、佐々、前田、猛虎の勇を顯して一番に駈向ふを、鰐淵將監、前田利家と鎗を合せ、祕術を盡し戰うたり。前田無雙の勇兵なれば、おつと喚て一突に鰐淵を突落す。佐々成政も和田三郎左衛門と戰ひけるが、佐々が勇武や勝りけん、馬より下に切つて落す。織田勢之に氣を得て、木下、柴田、明智、佐久間、蜂谷池田が輩、鬨を作つて攻登れば、必死と定めし朝倉勢も、思はずさつと引上げけるを、佐々、前田の兩將、喰附て坂の上まで追登り、平場に出でて戰うたり。木下藤吉郎は此戰を見向もせず、大將朝倉義景を討取んと、手勢を率し、軍場を無二無三に突破て、眞一文字に追行きけり。氏家卜全が子左京亮、木下が駈拔たるを見て、これも手勢を引具し、同じく續て馳たりける。扨

參日頃の勇氣に似合ず」と、言捨て馳行き給ふに、先に一群の軍勢我劣じと進み行く。信長聲をかけて、「先に進む輩は誰々なるぞ」答て曰く、「木下藤吉郎、前田又左衛門、佐々内藏助、福富平左衛門、戸田半左衛門、高木左吉、湯淺甚助、赤尾七郎左衛門等」と申す。信長是を稱して、「今宵の先陣汝等なり。進め〳〵」と下知し給ひ、短兵急に追ふ程に、田神山に引殘りたる朝倉勢を追つめ〳〵切捨にして、中河内と引田との別路まで追行きける。

○朝倉家勇臣等討死

敦賀へ通ふ道二筋あり、所謂中河内と引田との兩道なり。信長の大軍此所に到て、何の道へか退きたらんと猶豫してありけるに、木下藤吉郎諸軍に向ひて申けるは、「朝倉の軍卒多く中河内を走るとも、義景を始とし宗徒の輩は、引田の切所を足溜とし、防ぎ戰はんと計るなるべし。中河内へ追ふ事なかれ」といふ。爰に於て惣勢引田口を一文字に、息を切てぞ追ひたりける。山崎長門等父子は、織田勢の追來るを見て、刀根坂の切所に敵を喰止め、大將義景を恙なく引取せんと、討死と定めたる同志の輩、和田三郎左衛門、同く淸左衛門、鰐淵將監、神波九郎兵衛、臂田圖書、山内彌六左衛門、三段崎六郎兵衛、淸水三郎左衛門、岩崎惣左衛門、不田惣兵衛、

月ヶ瀬、三方、賤ヶ嶽の要害ども、戰はずして悉く織田に降參し、今は田神山の義景が本陣と小谷の淺井長政のみ殘りて、淺間にこそは見えたりけり。朝倉義景元來おくれたる大將なれば、此體を見て大きに恐れ、淺井の與力も此方の命ありてこそ、今は織田の大軍を引受け、いかでか合戰の叶ふべき、片時も早く敦賀に退き、切所に支へ防がんと、早退陣の用意をなせば、勇臣山崎長門守も、此程より味方變心の者數知れず敵に降り、諸方の城々一時に破れ、今は陣中とても油斷ならずと思ひければ、義景が計に任せ、今宵月の明きに乘じ、陣を拂うて退くべしと、其用意區々なり。爰に於て義景が陣中騷動する事大方ならず、落行く者過半なり。其夜子の刻、大將義景一族郎從を引具し、田神山の陣を去れば、諸軍我一に先を爭ひ、越前さして引退く。山崎長門守、同小治郎殿して、柳ヶ瀨まで退きける。信長豫め此體を察し給ひ、宵の間より陣觸ありて、朝倉勢引退かば追討に打崩さんと、間者を入れて伺ふ所に、「すは朝倉勢引行くぞ」といふ程こそあれ、大將信長眞先に馬を驅出し、揉に揉で追給ふに、地藏山に至て後をかへり見給へば、軍兵追々馳來る。信長大音にて、「續く者は誰々なるぞ」と問ひ給ふに、「柴田勝家、佐久間信盛、丹羽長秀、明智光秀」と答ふ。信長嘖て、「義景を討得ん事今日の一戰にあり。汝等が遲

○朝倉義景田神山退陣

天正元年十月八日、朝倉義景漸と出陣の催有りて、自ら三萬餘騎を引率し、淺井長政與力のため、江州柳ケ瀬に著陣す。同十日田神山に陣を移し、幕下の將卒は地藏山、余湖庄、木本邊に陣取し、別に大獄の砦には、三重の曲輪を構へ、嚴重に備へければ、淺井父子これに力を得て、合戰の用意さまぐなり。信長卿是を見給ひ、朝倉家降參の將前波九郎兵衞、富田彌六郎、毛谷猪之助、增井甚内、池田隼人等に三千餘人を屬せしめ、大獄の城を攻させ給ふ。此城の三の曲輪燒尾の構を守る大將は、淺見對馬守といふ者なりしが、前波、富田、增井等敵方に降參し、攻寄來ると聞えければ、何さま此戰始終利あるまじと思ひけるにや、忽ち織田に降參し、前波と心を合せ敵を引入れ、直に二の曲輪に攻かゝる。爰は井口越前守、千田釆女正等籠居て、防ぎ戰はんとする所に、詰の丸に籠りたる小林林左衞門、齋藤式部、豐浦の西光院等、忽心變して城門を開き、後より二の丸に攻かゝり、寄手と一つに成りて戰ふほどに、井口、千田が軍勢、前後の敵を防ぐ事不能、這々のがれ小谷の城へ入りにけり。爰に於て大獄一時に落城しければ、信長前波等を厚く稱し、直に其勢を以て中島惣左衞門、玉泉寺寶光院等が籠りたる丁野の城を

「我運命未だ盡ず、思はざるに此軍勢を得たり。今は眞の討手向ひたり共、打破て退かんに何の難き事あるべきや」と、勇み勇んで江州さして走りけり。時に同年十月六日、淺井備前守長政、五千餘騎の軍兵を率し、織田の足溜にかまへたる虎御前山の砦手に押寄せ、試みに戰を始めける。木下藤吉郎秀吉、城門を押開き、手勢三千五百餘人一同に切て出で、どつと喚て前後左右に薙廻れば、淺井勢四途路に成て引取り行く。爰に淺井の旗本より、緋に縅たる鎧に鹿の角の前立打たる兜を著、連錢葦毛の馬に跨り、鎗を捻て取つて返し、近寄る武者七八騎矢庭に突伏せ、猶も進んで戰うたり。木下の旗本より片桐助作躍り出で鎗を合せ、勇を振うて戰ひしが、勝負の色更に分らず。福島市松續て駈出し、横合より突てかゝるに、彼武者猶も疲ず、左右に當て精神益加り、飛鳥のごとく働くにぞ、さしも勇氣にあふれたる片桐福島の兩雄、汗をながして戰ふ有様、誠に此敵尋常の武者ならずと、兩陣鳴を靜めて見物す。加藤虎之助が郎等木村又藏、井上大九郎、飯田覺兵衛一時に切つて入り、彼武者に討てかゝれば、今は叶はじとや思ひけん、かいふつて迯たりけろ。福島市松聲をかけて、「戰場の姓名はいかに」と問ふ。彼武者馬の首をかへして、「脇坂甚内」と答ふ。木下藤吉郎遙にこれを見て、急に令を傳へて彼武者を追しめず。爰において兩陣戰を止め、鉦を鳴して士卒を收め、皆陣々に引入りける。

虎御前山合戦

まじく候へば、我々四人手勢を引具し、諸方の道筋へ手分をなし、追懸て搦捕り申すべき間、討手を免じ下さるべし」と申ければ、義景大きに怒り、「悪き前波が振舞かな、望に任せ手勢を引具し、片時も早く捕へ來れ」と下知しければ、四人一同に畏り、退きて用意をなし、手下の勢都合五百餘人にて、揉にもんで追たりける。

○虎御前山合戰

前波九郎兵衛は、足に任せ道を急ぎ、二里計も來りけるに、跡より討手の勢四五百計、砂煙を立てて追來る。前波今は是迄なり、向ふ討手は誰なるらん、刺違て死せんものと、一村茂りし森の内に身を忍び、太刀拔そばめ待居たり。程なく近附く追人の軍勢、眞先に進み來るは富田彌六郎、增井甚内、毛谷猪之助、池田隼人の四人なり。前波九郎兵衛大きに怒り、討手に向ふ大將は何者なるとおもひしに、富田、增井が輩なるぞや、己一人も活置べきかと、大太刀をひらめかし、森の内より躍出で、一文字に切つてかゝれば、四人の軍將等く馬より飛下り、「我々謀を以て大守を透し、討手を乞受け向うたりしは、足下と共に織田家に降り、大業をなさん爲なり。一足も早く信長の陣所へ急ぐべし」と、馬を引せて前波を乗せ、一散に駈出せば、前波大に喜び、

らしむ。早く此國を去て生命を全くすべし」といふ。前波大きに驚き、「主人義景、さほどまで某を惡み、齋藤を愛し給ふは、安からぬ事にこそ侍れ。謹で足下の詞に随ひ、他國に走て身を保くすべし」といひも終らざるに、國守義景使者を以て前波を招き、軍事の談ずべき旨ある間、即刻登城いたすべきよし聞えければ、前波九郎兵衛怒に堪兼ね、使者に立ちたる男を取て引伏せ、大の眼を見ひらき、聲を勵し罵りけるは、「汝僞なく我尋る事を明に申すべし。國守の我を召るゝは、軍事を談ずるにはあらず、返て我を殺さんとの事なるべし。今僞を申すものならば、一刀に刺殺すべし」と、差添引拔き、心もとへ押當てければ、彼使者大きに恐れをのゝき、義景、龍興兩將計をかまへ招き寄せ、力者を以て殺さん手配なりと、委細具に語りぬれば、前波怒ます〳〵堪難く、まづ其使者を一刀に突殺し、扨諸士に向ひ、「今は大事身の上にせまれり、一刻も此國に足を止めがたし。織田の陣中大澤治郎左衛門は、我と元來因あれば、彼にたよりて信長に降參すべし。旁も跡より我を尋て來り給へ」といひ捨て、近江路さして走りける。富田、増井、毛谷、池田の四人計を定め、急ぎ大守義景の前に出でて訴へける樣は、「只今前波九郎兵衛、眼色をかへ只一人城外へ走り出候故、何とも其樣不審く、前波が家に行きて見候程に、御使者に立ちたる何某を一刀に刺殺し、其身逐電せしと覺え候。未だ遠くは行く

○前波九郎兵衛降參信長

さる程に前波九郎兵衛は、齋藤龍興を深く恨み、時日を過さず討果すべしと、折を伺ひ居たりけれど、龍興も前波が所存覺束なく、堅固に用心したりける。されば不覺に事を仕出して、討損じては無念なりと、口來むつまじくかたらひたる朋輩に、富田彌六郎、增井甚内、毛谷猪之助三人を招き、密に始終を物語り、龍興を討べき計や有ると尋けるに、三人等しく申けるは、「足下齋藤龍興のみを恨み給ふは、未だ其理くはしからず。國守義景情弱にして、國の柱石たる足下をして、亡國の將齋藤龍興に及ざらしむは、これ主人義景が誤なり。つら〳〵當家の有樣を見るに、忠臣は退き佞臣は經上り、終には信長の爲に滅亡せん事、日をかぞへて待べし。かゝるたのみなき大將に仕へ、あたら命を失はんよりは、爰を去て他國に走か、又は信長に降りて、織田の手を借て齋藤を討んに何の難き事の有るべしや。足下心を決し給はゞ、我々も倶に此國を去べし」といふ。前波手をこまぬきて更に詞を發せざる所に、池田隼人といふ者、是も前波と心合たる朋友なりしが、あわたゞしく馳來り、前波を招きて申けるは、「國守義景齋藤龍興が勸により、足下を召寄せ誅せんとす。某只今此事を承り、聊心友の情をのべて此事を告知

み、朝倉家にて一方の將をも命ぜらるゝ某なれば、敗國の弱將我國の食客たる齋藤といかで見替へ給ふべき。汝かならず女を出す可らず。我國守に此次第を申上げ、明かに我方へ迎へ取るべし」とて、其儘登城し、近習の士を以て申けるは、「大野作右衛門、女が終身の事をかねて某に頼み聞え候程に、組下の足輕にて候へば、見捨る事なりがたく、夫婦の契約致し置き候へども、いまだ其事を大守へ申上げず、然るに此度、女を以て齋藤龍興が妾に指出し候へとの御諚、臣が面目を失ふ所に候。あはれ君恩を以て龍興が戀慕を制し止め給ふものならば、臣等夫婦、死を以て恩を報い奉らん」と、詞を盡し訴へければ、朝倉義景大に怒り、「前波が申條こそ言語同斷、惡き事かな。我幕下にある大小の士、婚姻をなすには悉く我に訴へ、而後に夫妻の緣を究む。前波私に大野が女に通じ、我をして龍興に信義を失せしめんとす。其儀ならば後ともいはず、彼女を只今引連れ來るべし。異議に及ばゞ前波、大野も討捨よ」と、力者三十餘人大野が家に押寄せ、上意なりと呼つて、女を引き立て歸りければ、作右衛門も君命辭する事を得ず、前波は深く此事を恨み、元の發りは、齋藤龍興が戀慕より斯くなり行ば、己龍興、一刀に切捨て、この恨を晴さんものと、牙を嚙でぞ憤りける。

義秀荼波が妾を奪ハしむ

きかまほし」と語りぬれば、義景大に興に入り、「實に我城中の女なりせば、其女を尋糺し、足下に與へて枕席の伽とせんはいかん」といふ。龍興頭を席に附け、悦んで恩を謝す。義景即時に人を走らせ、其女が親を尋問ふに、頓て使馳歸り、「御尋候ふ女は、前波九郎兵衛が組下の足輕大野作右衛門と申す者のむすめにて、城中第一の美女にて候」と申す。義景直に大野作右衛門を召し寄せ、しかぐのよし物語り、女を差出すべき條嚴重に命じければ、作右衛門畏り、「委細承知奉る。しかし娘儀今朝より風の心地にて打臥し罷りあれば、平癒次第直に御宮仕に指出し申べし」と、言上して退きける。此作右衛門が女艶色あるを以て、去年より組頭前波九郎兵衛深く戀したひ、組下の足輕なれば、白地に作右衛門にさる事を語りて思ひものとなし、末の松山浪はこさじと、行末かけて契りけるを、親作右衛門も組頭の前波なれば、とかういなむべき事にもあらず、其まゝにさし置けるが、今度大守義景の命を蒙り、齋藤龍興が妾に差出すべき旨領承して退き、先前波に此事を語り、いとまの證を取て齋藤へ仕へさせんと、組頭前波九郎兵衛が許に至り、具に此事の次第を物語りければ、前波大に驚き、いかゞはせんと心を苦しめけるが、良有て申けるは、「元來汝が女と我が深き語ひ有る事を大守義景しろし召ざるゆゑ、齋藤が望むに任せ、汝を召て命じ給ふと覺えたり。我物の數にあらずといへども、人並の軍功を積

繪本太閤記　二篇巻之七

○義景令二前波奪一レ妾

賢を賢として色に替よとは、聖人の教なりけり。朝倉義景は淺井長政がたのみにしたがひ、援兵を出さんと用意しけるに、不思議の騷動出來て、心ならず出陣延引しぬ。其始終を尋ぬるに、濃州稻葉山の城主齋藤右兵衞太夫龍興、美濃沒落の後、所々に身を寄せ、此頃は朝倉にたより、義景の扶助を得て遊客と成り居たりしが、ある時義景と酒宴の席にて、龍興申けるは、「此城中に天下無雙の美人あり、國主これを知らせたまふや」義景おどろきて、「我城中にさる美人のあるべしとも覺えず、是は足下の見誤なるべし」といふ。龍興此時顏色を改め、「我未だ年老たるに非ず、眼既に明かなり、いかんぞ見誤り申すべきや。昨日城中上坂の邊を通りしに、足輕體の家居とおぼしきあやしの戸口に、二十ばかりの女、いろよきくゝりぞめの絹をしどけなく著なし、女の童の十ばかりなるに、籬に咲る萩の小枝を折て與へぬる其姿、此界の人とは思はれず。我一日彼女を見しより、心神恍惚と成りて、更に忘れがたし。いかなる者の娘なるらん。

繪本太閤記 二篇第七之卷 目錄

けびけるが、次第に聲もかすかに成り、終に空しくなりにけり。荒木村重軍を引て高槻に押寄せ、無二無三に攻たりければ、城を守りし從兵ども、主將討れぬる上はいかでこれに敵すべき、悉く降參し、高槻落城したりけり。軍散じて後、人々中川に問けるは、「足下高札に名を記し置き、和田を討しは、いかなる思慮ありてその言の誤らざるや」と。中川答て、「是他の思慮あるにあらず、和田を討ずんば我討死すべし。彼と我との中一人死せば、何ぞ高札の姓名をあやまるべき。これ我常の心得なり」と語りければ、聞く人其勇壯を感じあへり。去程に荒木攝津守村重は和田伊賀守を討ち、勢漸く近鄕に響き、池田の城を攻て池田筑後守を追ひ、伊丹に迫て伊丹兵庫頭を殺し、今は攝津一國に刃向ふ者更になく、石山の本願寺と度々合戰に及びぬれ共、はかぐ〵しき戰もなし。織田信長公は此時益威勢盛にして、遠近の諸侯ふるひ恐れ、招ざるに降參し、討ざるに落城す。されば此勢に淺井一家の根を斷べしとて、同年秋八月、大に軍を發し、虎御前山に城を築き、淺井長政が小谷の城を一息に踏潰んと計ける。長政防戰叶まじと思ひければ、又々越前へ急使を以て加勢の事を賴けるに、義景早速領承し、助力の兵を出さんと、其用意區々なり。

清秀といふ勇士あり、此高札を見て、自ら筆を取て、中川清秀討之、と其高札に書添たり。扨も兩陣鬨を作り、金鼓を鳴し攻寄て、はや合戰を始けり。和田の郎等郡兵太夫といふ剛の者、眞先に進み戰ふに、敢て敵する者なく、荒木が兵左右に分れて引たりける。是を見て伊賀守惟政、諸卒を下知して喚て懸り、自ら鎗を追取て、群る敵中人なき所を行くが如く、四方八面に突て廻ば、荒木が勢さん〴〵に成て敗走す。惟政勝に乘て只一騎、迯るを追て駈行く所に、中川瀨兵衛清秀小高き丘の陰より駈出で、聲をかけて向うたり。和田伊賀守尻目に急度見てけるに、大なる指物に、中川瀨兵衛討二和田伊賀守一、と大文字に記したり。惟政大に怒り、猛虎の如く突來るを、中川聞ゆる剛兵なれば、鎗を合せ半時計人交もせず戰ひしが、和田惟政此時病全く癒たるにあらず、數刻の戰に身神勞れ、中川が勇に敵する事能はず、終に瀨兵衛に討れけり。永井隼人、郡兵太夫これを見て、中川目がけ討てかゝれば、荒木村重味方に下知し、「瀨兵衛討すな、續け〳〵」と、呼はり捨てかけ出せば、荒木が從兵一同にどつと喚て、永井、郡を中に取りつめ、餘さじとこそ揉だりけり。隼人勇を震ひ、敵を討つ事二十餘人、終に亂軍の中に討死す。郡兵太夫も眞向を切割れ、眼眩んで倒れける。從者走り寄り、肩に引かけ迯行を、兵太夫大聲あげ、「我揚卷を敵に見せ、きたなくも迯る法やある。元の所へつれ行け」と三町計さ

○中川瀨兵衞討二和田伊賀守一

和田伊賀守惟政は將軍家隨一の功の者にして、然も勇剛の武士なれば、義昭公も深くたのみに思召しけるに、眞木島籠城の節は病に臥て立つ事能ず、高槻の城に籠居たり。然に將軍一戰に利を失ひ沒落し給ひければ、伊賀守口惜き事に思ひ、病少しく癒たれば、五六といへる要害の地に砦を構へ、軍勢を集め合戰の用意をなす。荒木攝津守村重は攝津一國を切取の約をなし、國中の敵を切鎭んと計りければ、此五六の要害におしよせ、度々合戰に及びけれども、荒木方利を失ひ、退て計議をなす。和田惟政勇に驕り、荒木勢を討崩さんと、逞兵八百餘人引率し、五六の要害を離れ、糠塚といふ所へ打出たり。此時和田が遊客たりし永井隼人といふ老功の武者、惟政を諫めて申けるは「敵の勢を味方に競ぶれば四五倍に猶過たり。小を以て大にあたらんには、よろしく要害の地によつて戰ふべし。切所を離れ平場の合戰こそ、敗を取るの端なり」と、再三とゞめけれ共、伊賀守更に聞ず、「荒木が弱兵、何條事を仕出すべき、一當に打崩さん」と恐るゝ色更になし。荒木攝津守村重は三千五百餘騎を引率し、馬塚に陣を取り、和田伊賀守を斬たる者には五百石の地を與べしと書て、高札を立てたりける。爰に荒木が甥に中川瀨兵衞

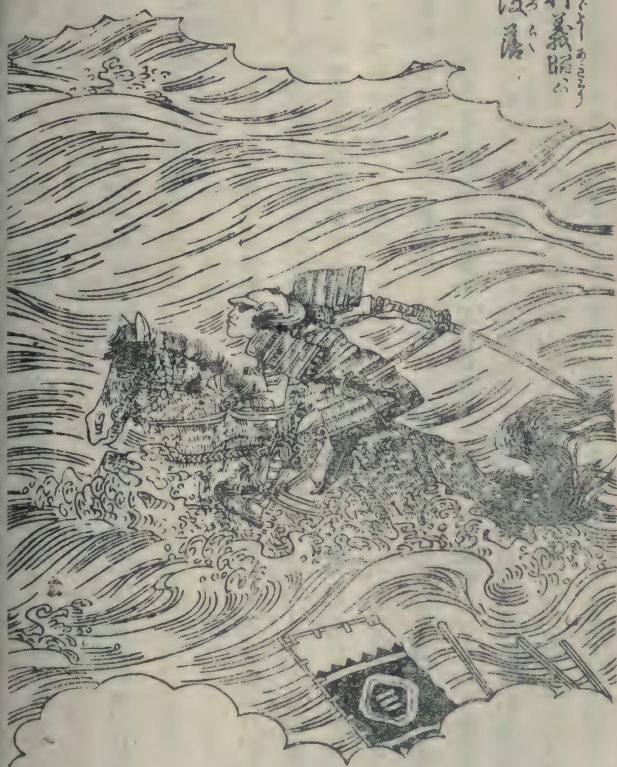
一聲、耳元に響きければ、二手の伏勢一千餘人、左右より鐵炮を雨のごとく放ちかけ、鯨波を作て切て出づれば、木下、細川等しく大返に取てかへし、三方より切崩せば、岩成勇を震うて戰へども、十分死地に入りぬれば、士卒大半討なされ、散々に成つて淀の城へと走りける。爰に細川刑部太輔が郎等下津權內助と云ふ大功の兵あり、岩成と組んとて、只一人大橋の上に待けるが、主稅亮ちかづく敵を突きおとし討殺し、難なく爰迄引取つて、大橋に渡り掛るを、待設たる下津權內助、聲をかけて岩成に組附たり。主稅亮大に怒り、只一つかみになしくれんと、金剛力を出して捻合ひたり。權內助岩成が勇力に叶べくも覺えざれば、俄に謀計を構へ、組附ながら橋より下へどうと落ちたり。此權內助は竝びなき水練の達者なれば、つき放して深く水底に沈み、短刀を拔持ち、水裡にありて岩成を刺す。岩成剛勇大力の壯士なれ共、水心を知らざれば、敢て是に敵する事能はず、終に力盡て權內助に討ける。權內助水中にて首を取り、逆まく川水押切て陸に上り、彼首を太刀に貫き「鬼神と呼れたる岩成主稅亮を下津權內助が討取たり」とよばはつて、惣勢一度に淀の城へ攻寄れば、大將討死したりぬれば、今は戰ふ氣勢もなく、諏訪、番頭の兩人城を開いて降參し、淀の城も落たりけり。

○岩成主稅亮討死

將軍眞木島退去し給ふと聞えければ、御一味の武士等悉く降参し、洛中漸くしづまりける。爰に三好の三人衆岩成主稅亮祐道は、將軍家の御方と唱へ、信長を討んとて、番頭大炊助、諏訪飛驒守と二千餘人にて淀の城に取籠る。木下藤吉郎秀吉、細川刑部太輔藤高兩人、信長の命を蒙り、討手として淀の城に向ひける。木下藤吉郎下知を傳へ、惣勢三千餘人を三手に分ち、切所切所へ埋伏せしめ、一手の勢を以て淀の城に押寄せ攻たりける。岩成元來剛勇無雙の兵なれば、一千餘騎を引率し、城戸を開いて討出たり。木下藤吉郎迎へ合して支へ戰ひ、僞り負て退けば、細川刑部太輔入替て鎗を合せ、暫し戰ひ打負て引取り行く。木下秀吉透間なく入替り、鐵炮少し放ちかけ、鬨を作て切つて掛り、半時計も攻合しが、又崩立て敗走す。細川藤高直に掛合せて木下と替り、追つ返しつ合戰す。斯の如く兩將互に入替へ〳〵、敵を誘うて思ふ圖へおびき行くを、岩成主稅亮軍に馴たる勇將なれば、木下、細川が謀計を構へ誘き出すと心附き、透を見合せ引上げんと思へ共、日本無雙の木下藤吉、軍事功者の細川藤高、相互に透間なく喰附て戰へば、退く事も叶はずして、心ならずも六七町敵に引れて戰ひ行く。此時相圖と思しき鐵炮

郎に使者を指添へ、織田の陣へぞ遣り給ふ。此下郎は今朝宇治川の先陣なりし梶川彌三郎宗重なり。兼て木下藤吉郎が下知によつて一番に川を渡り、先に松井が勢に紛入て城中にしのび、將軍の害を止め奉り、信長に弑逆の罪なからしめんとする藤吉郎が謀計なり。信長上使を請じ、將軍家の口上具に承り、直に城の圍を解き、御退去あるに於ては、毛頭隔心是なき旨を申給へば、上使よろこんで城にかへり、其趣を言上す。爰において將軍ふたゝび蘇生たる御心地にて、翌日眞木島の城を出でさせられ、普賢寺に入らせ給へば、信長の命を受け、木下秀吉、明智光秀の兩將深く勞り奉り、郎等に警固させ、河内若江なる三好左京太輔義次が方迄送り奉らせける。後に毛利輝元が方に移り給ひ、剃髮して昌山居士と號し、秀吉天下一統し、關白職に任じ給ふ時、常に茶湯の御相伴にて、五千石を扶持せられける。嗚呼今日はいかなる日ぞや、足利高氏卿曆應の昔、將軍に任ぜられ給ひしより以來凡二百有餘年、天下の武將と仰れ給ひしも、十四世の今に至りて其家忽ち亡び、其主は遠境僻地にさまよひ給ひ、英名爰に斷絶せるは、天なる哉、命なる哉。

に五ヶの庄の方よりも、柴田、佐久間、丹羽、池田、木下、明智、蜂谷、細川、荒木、蒲生等が輩、我も〳〵と打渡すほどに、さしも早き宇治の川瀬、流れ淀みて見えにける。將軍御味方の武士等、兼ては川中にある敵を打崩んと、川岸に構へたりしも、雲霞のごとき大軍に膽をちらして、戰はずして眞木島の城へ迯入たり。されば、織田の大軍一騎も損ぜず押渡り、惣勢中島を西へむかひ、足輕を攻たりけり。これを見て眞木島の城中より、松井山城守康之と名乘り、僅に五百餘人、城戸を開いて切て出で、稻葉勢と火を散て戰うたり。信長の大軍一息に乘入やと、柴田、佐久間、木下、明智一時に切つてかゝれば、松井が軍勢數多討れ、山城守も亂軍の中に討死せり。信長の大軍透間もなく、大手搦手より揉立て〳〵、惣構を打破り、鬨を作つて攻たりけるは、大石を以て鷄卵を押に等しく、只今此城微塵にならんと見えたりけり。城中今は是までなりとて、武士ども將軍の御前に出て御生害をすゝめ奉る。將軍も詮方なく思めし、御自害と見えたる所に、雜兵一人馳來り、「將軍御生害とは勿體なき次第なり。今信長大軍を以て將軍に迫るといへども、矢一筋も射かけざるは、君を重んじ奉る故ならずや。將軍御生害を止り給ひ、城を開き退去なし給ふならば、信長何ぞ君を弑し奉るべき。試に上使を以て此旨信長へ仰入れられしかるべし」といふ。將軍を始め參らせ、並居る兵士軍卒も尤とや思ひけん、彼下

足利義昭公没落

押破り、闖入つて見てあれば、支る敵一人もなく、大將三淵大和守を始とし、從卒下郎に至る迄腹搔切り、一つ所に死たりけるは、哀にも又いさぎよかりし有樣なり。信長城に入りて暫く休息し、細川藤高に命じて三淵主從が死骸を厚く葬らせ、直に軍を整へ宇治郡へ押寄せ給ふ。

○足利義昭公沒落

頃は天正元年七月八日、信長の軍勢五萬餘騎、山城國宇治郡五ヶの庄に本陣を居られ、旌旗天を覆ひ鎗刀雲を凌ぎ、軍威壯んに見えにける。將軍義昭公は、仁木、大館、吉良、上野、飯川、松非が輩を始とし、甲賀の武士等狩集め、其勢都合六千餘騎、眞木島の要害に籠らせ給ひ、聞ゆる宇治の大河には大橋を切落し、川岸には思ひ〳〵の旗馬印川風にひるがへり、竹策の蔭には鐵炮の武者千騎計、筒先を竝べて敵の渡すを待居たり。信長の先陣稻葉伊豫入道一徹齋、同右近、同彥六郎陣を川端迄くり出せば、信長の近侍梶川彌三郎といふ剛の者、かねて先陣を心にかけ、稻葉が手に加りけるが、只一騎川中へ馬をさつと駈入れ、「宇治川の先陣梶川彌三郎宗重なり」と高聲に呼はつて、艮の方へ眞一文字に渡しける。是を見て伊豫入道、續け〳〵と下知をなせば、誰か暫も猶豫すべき、一同にどつと馬を駈入れ、ゑい〳〵聲して渡しける。是と同時

に聞えければ、信長又々大軍を引率し、七月五日佐和山より船にて湖水を打渡り、直に二條へ押寄せらる。三淵大和守は今日を最期と思ひ定めたれば、目にあまる大軍を物の數とも思はず、士卒を集め酒宴をなし、謠舞てぞ有りけるが、早寄手城近く押寄せ、鬨の聲を揚たりければ、さらば討て出づべしとて、三百餘人城戸を開て切て出で、村雲立たる大軍の中へ、會釋もなく突て入り、當るを幸ひ四方八面に切て廻れば、織田勢大軍なりと雖も、三淵が死戰に當り難く、左右へばつと開きける。大和守は一足もひく心なく、右の備に割て入り、左の陣所を打崩し、七八度迄かけたりければ、三百餘人の兵五十餘人になりけれど、少しも退く心なく、又敵中へ馳入たり。信長遙に此形勢を御覽じ、「城中の勇將は何者なるぞ。見て參れ」と、荒木攝津守に命じ給ふ。村重かしこまり、馳行てよく見れば、三淵大和守高秀なり。急ぎ立歸つてしか〳〵と申上る。信長頓て細川刑部太輔藤高を召れ、「汝が弟三淵大和守今日の勇戰は、討死せんと思ふなるべし。あたら兵、討死をとゞめ、落ばおとせよ」と下知し給へば、藤高畏つて馬に打乘り、三淵を目がけ馳出せば、大和守きつと見て、「細川藤高が爰に來るは我に降參を勸むる者ならん。問答も無益なり」と、急に從卒を引上て、城中にこそ入りたりける。此時兵士僅に十六人なり。細川藤高三淵が城に引入たるを見て引返し、本陣に參りしか〳〵と申すにぞ、先手の軍勢早城門を

雲霞のごとく見えたりければ、將軍家御味方の人々は、此軍威に恐れおのゝき辟易し、はや落支度をぞしたりける。其翌日信長の大軍洛中に亂入り、火を放つて町家を燒立て、二條室町の御城を十重二十重に取圍み、鬨の聲天地を震動し、只一息に踏潰んず形勢に、城中肝を散し魂を失ひ、防がんとするもの一人もなく、惘れはてゝぞ見えにける。將軍もやたけにはおぼしめせども、外に助の勢もなく、和睦すべき由上使を以て仰遣はさる。信長いとう笑はせ給ひ、「將軍がかる思召ある上は、いかでか麁意を存ずべき」とて、下知を傳へて諸軍を遠く退しめ、大隅守信廣を以て和睦の御受け申奉り、「向後は政道を糺うし、御行跡を改め給ふべし」と言上し、直に軍勢を引きて本國へ歸り給ふ。

○三淵大和守討死

愚は愚にしてます〳〵愚なりとかや。將軍義昭公、又々五畿内の軍勢を催促し給ひ、今度は要害に寄て敵を待つべしとて、七月上旬、宇治郡眞木島へ動座まし〳〵、三淵大和守に二條の城を守らせらる。大和守此事を深く諫め奉るといへども、將軍更に用ひ給はず。今は足利家の滅亡、我討死の期なりと、僅に其勢三百餘人、城門を固め、敵の寄るを待かけたり。此事早く濃州岐阜

ず候。國々の大名小名、織田家の繁榮をそねみ惡み、將軍を勸め參らせ、かゝる企に及び候は、なんぼう悲き事に候はずや。臣等屢々諫め奉るといへ共、姦佞の臣下ありて、敢て諫言を用ひられず。君軍威を示して諸國の敵徒を誅伐あるに於ては、將軍一人いかでか野心をさしはさみ、敵對の儀あるべきや。君も又なんぞ深く將軍を恨ませ給はん。只伏望らくは、天下の人の誹謗なき御計ひ、仁義の御政道こそあらまほしう候」と、淚を流し言上すれば、信長卿、細川が降參は將軍家の助命を希ん爲なるべしと深く感じ思召し、點頭て默し給ふ。時に荒木村重言上しけるは、「攝州十三郡分國にして、敵徒かず〳〵城を構へ兵士を集む。あはれ某に切取を仰附られ下さらば、身命を抛ち切鎭め申すべし」と申上る。信長莞爾として答をなさず。折節烏杯に饅頭をうづ高く盛て有りけるを、腰刀引きぬき、切さきに三つ五つ刺貫き、「荒木村重我芳志なり。食せよ」とて、目の上へ差附給ふ。一座の人々大きに驚き、顏色を失ひ、息をつめて控へ居る。村重少も騷がず、「有難し」と捻り寄り、大の口をくわつと開き、切先に貫たる饅頭を只一口に喰んとす。信長大きに笑ひ給ひ、「汝實に大丈夫なり。望の如く切取て、攝津守たるべし」と仰せければ、荒木面目を施し、直に上洛の御供にぞ加はりける。扨も信長卿は東山智恩院に本陣を居られしかば、諸軍は白川、粟田口、祇園、淸水、六波羅、鳥羽、竹田の邊に充滿し、

信長上洛して室町の城を圍む

を追ず、城戸を固め、鳴を鎭めて居たりける。扨も丹羽、蜂谷の兩將は、思ふ程敵をおびき出し、時分はよきぞ返せよと、鯨波を作つて大返に切つてかゝれば、城兵討るゝ者數を知らず、這々にて迯來り、城に入らんとする所に、忽ち城中水淺黄に桔梗の紋の籏をさつと立並べ、鐵炮を雨のごとく打出せば、伊勢、渡邊大きに驚き、後をかへりみれば丹羽蜂谷の兩將、勝に乘て追討す。今は遁れがたしとおもひ、袖印をかなぐり捨て、雜兵に打交り、京都さして迯たりしは、見苦しかりき有樣なり。

○信長上洛而圍二室町城一

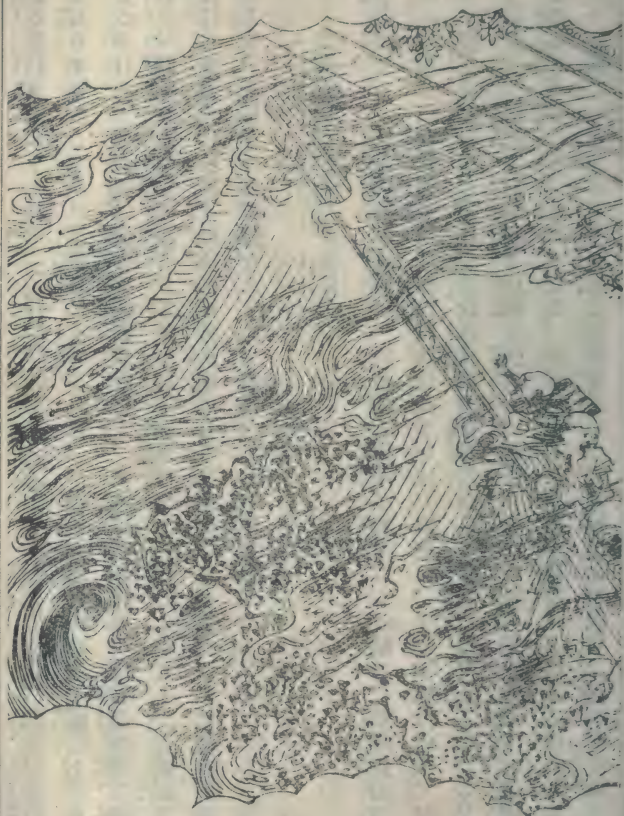
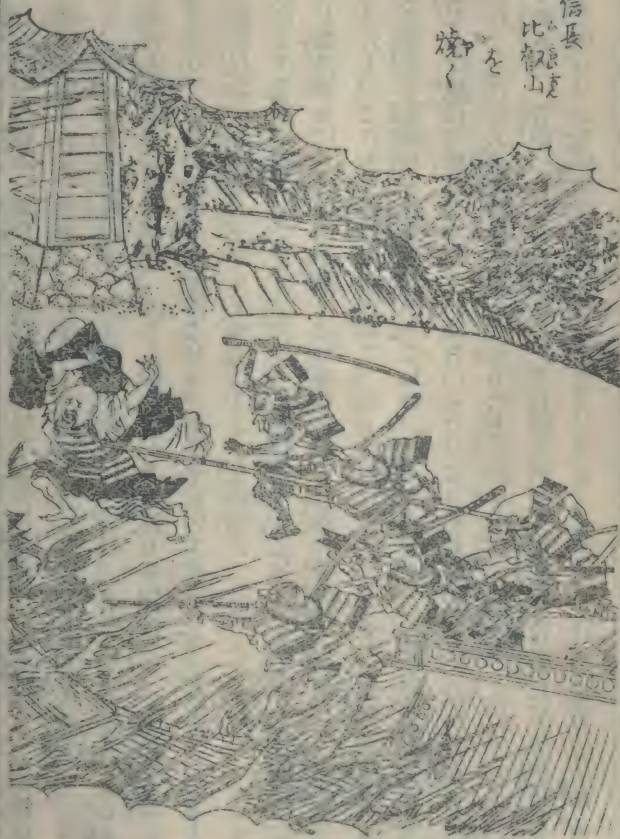
此年四月、甲斐の武田信玄陣中に病發し、卒に死たりければ、信長大によろこび、急ぎ上洛して京都の騒動を鎭んとて、四月廿五日、三萬五千餘騎を引率し、都をさして進發ある。爰に將軍家の功臣細川刑部太輔藤高は、深き思慮ありて、佐久間信盛に寄て信長に降を乞ふ。又茨木の城主荒木村重も將軍の柔弱を惡み、是も同く佐久間に附て降參す。信長兩人を召して對面し、「神妙の降參大悅少からず」とて、御盃を下し給ひ、細川藤高に向て將軍御野心の次第を尋ね給ふ。藤高謹んで申けるは、「今度將軍家軍馬を動し君と御敵對の事、强ち將軍獨の思召にもあら

は三井寺の淨光院、磯貝新左衛門を大將として、甲賀の武士八百餘人籠城したりけるが、織田の大軍四方を取卷き、短兵急に攻討ば、城將敢て戰ふ事能ず、降參して城を開きければ、柴田勝家三千餘人にて籠城し、京都の押と成り、丹羽、明智、蜂谷の三將、七千餘騎、三手に分れて攻寄せたり。城中より渡邊宮內、伊勢九郎左衛門、一千餘人にて切つて出で、丹羽が備に突入れば、寄手の勢僞り負て、五町あまり引退く。城兵のがすまじと追ふ所へ、蜂谷兵庫頭入替て戰ひしが、これも同じく崩れ立て敗走す。城兵等彌々勝に乘り、備を亂して追ひたりけり。此時明智光秀は、十餘艘の兵船に、一千餘人取乘て湖水を渡り、城の搦手へ近々と漕寄せ、俄に鬨をあげたりければ、城中には曾我兵庫介五百餘人にて殘り留りしが、士卒を下知して防ぎ戰ふ。光秀が家の子に明智彌平治といふ者、「此城の一番乘は我なり」と呼つて、塀に取附き登りける。是を見て明智が勇兵一時に、「彌平治討すな、續け〳〵」といふ程こそあれ、我先にと塀に取附き、喚叫んで乘入ける。城將曾我兵庫介矢倉に登り、きびしく下知して防ぎけるを、光秀船端に立出で、鐵炮を以て是を討に、手練のねらひ少しも違はず、兵庫介が胸板を打拔ば、眞さかさまに倒れたり。明智が勇兵彌々氣を得て、難なく塀を乘越て、我先にと切つて廻れば、城兵は大將を討れ、さん〴〵に成つて、大手の城戸を押開き、都をさして迯たりける。光秀敢てこれ

討亡さんと、三萬五千餘騎、參州まで出張す。將軍此事を聞せたまひ、信玄かくの如くなる上は、信長を誅せん事何の難き事あらんと、譜代の武士仁木、大舘、上野、吉良、和田、尼子、飯川、松原等の諸士を集め、石山と堅田の兩所に城を構へ兵士を籠らせ、同年三月、既に敵對の色を顯はし給ふ。爰において信長四方八面悉く敵國と成り、織田家の安危此時なりと、柴田、佐久間、木下、明智、池田、瀧川、蒲生が輩、合戰の用意區々にて、將大亂に及びけり。抑此騷動の發を尋ぬるに、足利家滅亡の期至けん、義昭公生得惰弱にまし〳〵、政道に心を用ひ給はず、美女を愛し酒を好み、日夜遊樂にのみ耽り給へば、恨むる者少からず。これによつて信長、折々上洛して政事を執行ひ、權勢自然に信長にありて、將軍は有て無がごとく、義昭深くこれを恨み給ひ、扨こそかゝる企を計り給ふ。將軍家の功臣三淵大和守、細川刑部太輔等、屢是を諫め奉るといへ共、更に用ひ給はず、いよ〳〵我意につのり給ふを、心ある武士は、足利家時運爰に究れりと、密に歎き悲みける。時に織田信長より、使者として村井民部、島田所之助に日乘上人を相添へ、上洛して將軍に謁し、信長に於て毛頭隔心これなき旨、誓紙を以て申宥めまゐらすといへども、將軍一向諾はせ給はず。さらば大軍を以て打破り、軍威を諸國に示さんとて、柴田、丹羽、蜂谷、明智の四將に一萬餘騎を與へて、先石山の城を攻さしむ。此城に

桓武天皇勅を傳教大師に下し給ひ、王城鎭護の爲とて草創ありし御山なるに、衆徒等僣行を勤めず、我意に募る事年久し。されば佛意にも叶ざりけん、信長が爲に山門忽ち滅亡しけるを、歎かぬ人はなかりける。信長卿は去年來の鬱憤を散じ、坂本に城を築き、志賀郡を併て明智十兵衛光秀に賜り、諸軍を下知して淺井が領地を樣々亂暴なさしめ給ひしかども、長政敢て出づる事なく、徒に日を重ねければ、織田の軍勢漸退屈して見えにける。信長いまだ淺井を討つべき時にあらずとて、十月廿一日軍勢をまとめ、本國へこそ引取り給ふ。

○義昭公與信長不和

天正元年春の頃より、室町の將軍義昭公、信長卿と御中不和にならせ給ひ、甲州武田信玄、越後の上杉謙信、越前に朝倉義景、江州に淺井長政等をはじめとし、毛利、嶋津の輩、其外諸國の武士どもに盡く内書を通じられ、信長誅伐の儀を仰含めらる。依之國々の大名小名、將軍の台命なりと申立て、信長を討て天下の權を握んと、我も〳〵と合戰の用意をなす。就中甲州の武田信玄は無雙勇將なりければ、信長、將軍をさしはさみ、威を天下にふるひぬるを心惡く思ひけれど、合戰にいとまなく、等閑に打捨置けるが、將軍の命を承り、此時を失はず信長を

信長比叡山を燒く

等を、爰の岩根彼所の谷陰に突殺し、追詰め〳〵討ける程に、死人の山を築にける。大將信長勇みいさんで東坂本大鳥井より攻登り、坂中に至り給ふ。爰に山門第一の惡僧金剛坊といへる強弓の精兵あり、怨敵信長を討取んと、谷を隔てゝ樹陰にしのび、一尺二寸の鏃すげたる大矢の十五束なるを五人張の弓に打つがひ、忘るゝばかり引きしぼり切つて放に、矢頃遙に遠かりければ、ねらひ下りて信長の馬の太腹射通したり。信長早業の大將なれば、馬よりひらりと飛下り、傍なる岩に尻かけて、猶も士卒を下知したまふ。金剛坊は大事の矢を射損じ、心いらちて二の矢を射んとする所に、後の方より大音にて、「金剛坊暫く待れ候へ」と聲をかけて切つて放つ鳥銃、どうど響て聞えけり。金剛坊驚てこれを見れば、杉谷の善住坊去年信長を打損じ、重る恨みをはらさんと、これも木陰にしのび居て、ねらひ打にぞしたりけり。幸運に乘じたる信長卿、さしも名を得し金剛坊、善住坊が矢玉なれ共、悉くねらひ下り、左の股を打かすつて、御身は更に恙なし。織田の從兵是を見て、「此谷のそなたにこそ曲者の籠りたるぞ、打殺せよ」と云ふ程こそあれ、三百餘人鳥銃の筒を揃へ、繁りたる木の中へ霰の如く打入れば、兩人の惡僧、天なる哉と歎息し、谷間づたひに遁去りぬ。されば山門三千の衆徒或は討れ又は落行き、堂塔殘らず灰塵と成り、比叡の靈場一時に岐と成りけるこそ、悲しかりける次第なり。抑當山は

繪本太閤記　二篇卷之六

○信長燒比叡山

去ほどに信長卿は、岐阜の城に有りて、暫く兵士の勞を休められけるが、元龜二年八月十八日、淺井長政を討べしとて、五萬餘騎を引率し、江州志村の城、小河の城、金崎の城を攻落し、瀬田にしばらく滯留ありて、九月十三日、俄に惣勢を以て比叡山を取圍み、只一息に攻崩さんと、四方より攻登る。是はさいつころ比叡山の衆徒、淺井、朝倉に同心し、信長卿に敵對せし恨を報い給ふなり。山門の衆徒等思ひまうけぬ事なれば大に驚き、谷々嶺々の切所に支へ防ぎ戰ふといへども、僅に三千人の衆徒なれば、信長が大軍に攻立られ、防ぐ事能はず、道をもとめて遁れ去る。織田勢勇み進んで、金鼓を鳴し、鬨を作りて攻登り、山中の寺々に火を放てば、折節魔風烈しく吹發り、火炎天を焦し、黒煙一山に充ち、さしも建連ねたる山王二十一社をはじめとし、大殿、佛閣、經藏、鐘樓、寺々院々に火移り、年久しき靈像作佛、唯一片の烟と成り、山門破滅のありさまこそ、言語に絶し次第なり。信長の大軍烟の中より駈登り、迯のこる僧徒

繪本太閤記 二篇第六之卷 目錄

桑原右近等、主人の死骸を肩にかけて退かんとする所を、郷民ども四方より取圍み、道をふさぎて戰ひければ、西尾、桑原其外の郎等共悉く討死す。此時氏家入道が小姓弓削修理亮といふ者あり、卜全が討死を知らず、釣尾村といふ所迄退きしが、爰にて主人の討れたるを聞き、大に驚き取つて返し、太田村に馳來り、引行く敵を呼返し、四人迄切落し、自害して死たりける。時年わづかに十八歳、いさぎよかりし若者なり。信長卿は恙なく岐阜に歸城し給ひて、味方の損亡、氏家入道卜全が討死を歎き給ひ、其上柴田勝家も手負たりと聞しめし、これ全く味方に構へたる計なく、要害の地へ深入りせしは我誤なりと後悔まし〳〵、木下藤吉郎を召連なば、かゝる不覺は取るまじき物をと、繰返して宣ひけるを、並居る將士兵卒も一言のいらへもなく、默然として居たりける。

任せ給へ」と云捨て、兜をぬぎ袖印かなぐり捨て、只一人一揆の中へ駈入りけるが、難なく山口藤太夫が傍に馳寄り、一刀に切倒し、馬印を取かへし、又一參に馳かへれば、一揆原五六十人のがすまじと追來るを、大太刀を引抜き、片手なぐりに薙倒せば、ばら〳〵と七八人算を亂して切られける。勝家遙に是を見て、「毛受討すな、勝助を救へよ」と、しきつて士卒を下知すれば、柴田が勢百騎計どつと喚いて切つて入り、終に勝助を救ひて退ける。勝家大によろこび、毛受が功を稱し、是より勝助家照と名乘らせ、寵愛日頃に十倍せり。扨も此退口の軍思ひの外むづかしく、柴田勝家も手負ひたれば、安藤伊賀守入替つて殿し、且戰ひ且退き、一揆の軍兵雲霞のごとくおつとり卷き、餘さじと附したへば、安藤が士卒數多討死し、防ぎかねて見えければ、氏家入道卜全又入替りて戰ふに、日も西に入果てゝ、目ざすも知らぬ暗き夜に、折節大雨篠を亂して降來り、合戰いとゞ難儀なるを、案内知つたる一揆原、畔道を馳ぬけて、前後より揉立れば、氏家入道勇猛の武士なれ共、備を立つべきやうもなく、さん〴〵に成りて太田村迄引取りける。此所にも一揆の鄕民三百計兼てより埋伏し、氏家が勢を取圍み、鬨を作つて攻立れば、卜全入道自ら鎗を取て敵にあたり支へ戰ひしが、暗夜なれば馬を深沼へ打入れ、あをれども鞭打ども、進退更に自由ならず、終に此所にて一揆の爲に討れける。氏家が郎等西尾勘兵衞、

かるべし、たとへ戰勝ちたり共詮なき土民どもなれば、戰はずして退くにしかじと思慮し給ひ、其儘軍をかへし給ふ。去程に長島の一揆共、信長大軍にて向ひ給ふと聞しより、銘々必死の戰をなし、天下に敵なしと思ふ織田勢に汗かゝせんと待居たりしに、信長一戰にも及ばず退き給ふ體なれば、何にもあれ、敵の退くを追討ぬ法や有る、あますまじと、門徒の鄉民五六百、跡をしたうて追たりける。信長兼てかくこそと察し給へば、織田家隨一の功臣柴田修理之進勝家を殿に備へ給ひけり。勝家一揆原の追討すると見てければ、士卒を下知し、一當的ては引退き、突しらましては繰引にし、二十餘丁退きけるに、敵方に兼て手配やしたりけん、早船五十餘艘大田川を押のぼり、柴田が勢の正中へ鐵炮を放す事雨のごとし。勝家も左の太股を打拔れけれど、少しもひるまず馬上にこらへて戰ひけるが、いかゞしたりけん、金にて作たる幣の馬印を敵に奪れ、一揆の中より山口藤太夫といふ男、彼馬印を高く差上げ、「鬼柴田と呼たる勝家を我々が手に討取たり。殘兵共早く降參せよかし」と、同音にどつと笑ふ。勝家安からず思ひ、此馬印取返してんとて馬の頭を立直せば、勝家が小姓に毛受勝助といふ强勇の壯者あり、勝家が馬の口を取て引留め、「君一揆の中へかけ入り給ふ物ならば、すはこそ織田家の大將柴田殿なるぞ、討取て高名せんと、大勢一度に馳へだて、御戰難儀なるべし。不肖に候へども、某に

毛受勝介
馬印を

切てかゝれば、「すは敵の助勢なるぞ。取巻て討取れ」と、箕浦の誓願寺四千餘人の郷民を下知して戦はんとする所を、加藤、福嶋、片桐、堀尾、蜂須賀なんど世に聞えたる勇士ども、面白き事に思ひ、あたるを幸に切り廻れば、何かは是に敵すべき、四方へぱつと逃散たり。是を見て城中より堀野が勇臣多羅尾右近、樋口三郎兵衛五百餘人、城戸を開いて切て出れば、寄手多勢なりと雖も、法令もなき集勢、負色になりぬれば何の用にか立つべきや、我先にと敗走し、討るゝ者數を知らず。暫時に軍靜りて、討取る首四百餘級、悉く耳鼻を斬て岐阜の城に送り、軍の次第を言上す。

○毛受勝助返₂取馬印₁

去年長島の一揆共、古木江の城を襲うて織田彦七郎信興を討し事、信長深く怒り給ひ、此ごろ軍事暫くいとまあれば、長島を討べしとて、元龜二年五月十日、二萬餘騎を引率し、長島表へ出張し給ひけるが、彼一揆多くは本願寺の門徒にて、近國近在は云に及ばず、東國北國の門徒共悉く寄集り、七八萬の大軍にて、しかもさまぐ\と奇兵を構へ、信長を計討んず有様なり。信長軍になれたる名將なれば、此一揆容易に誅伐なしがたし、力を以て攻討なば、味方損亡多

門にかけたりける。是より淺井の旗下に屬せし勇士悉く長政の不仁を惡み、大尾の城主中島惣左衞門、朝妻の城主新庄駿河守等、皆淺井家を離散して信長の幕下に屬しければ、更に織田家の勢を增しにける。依レ之長政父子いよ〳〵憤り、此恨をはらさんとさま〴〵工夫を凝しけるが、一計を案じ出し、攝州石山本願寺を賴み、江州の寺々を催しけるに、生死知らずの門徒等なれば、本願寺よりの御催足なりと馳集る坊主達には、箕浦の誓願寺、新庄の金光寺、朽木の常願寺、上路の順慶寺、由須木の淸願寺、益田の眞宗寺、唐崎の超照寺、下坂の福照寺等、鄕民共をかり集め、其勢都合二萬餘人、蜂のごとく群つて長政に與しければ、淺井父子大に悅び、織田方に與力せし小城どもを悉く切り崩し、其勢に信長を攻べしとて、堀野治郎が籠りたる鎌の刃の城へ押寄せ、無二無三に攻たりける。城中の勢矢石を飛し防戰すれ共、寄手は日に餘る大勢なれば、新手を入替へ攻ける程に、既に落城に及んとす。此時秀吉は橫山の城にありて此合戰を聞ければ、手勢一千人を引率し、旗指物を隱し、何れの勢とも見わけがたく出立で、寄手の勢の後よりちか〴〵と進みよれば、門徒の一揆、敵か味方の兵なるかと猶豫して有ける所に、藤吉郎下知して千生瓢簞の馬印を高くさし上げ、「織田の勇臣、日本一の剛の者、木下藤吉郎後詰の爲に向うたり」と大音に罵つて、稻麻竹葦のごとく集りし一揆の中へ、面もふらず

敷といへる所に丹羽五郎左衛門長秀を置れけるに、長秀元來磯野と面會の交ありて、折ふしの音信、書翰の往來などねんごろに聞えければ、長秀折を伺ひ磯野を信長に降しめんと、心中に含み居けるが、此頃勅命によりて織田、淺井和平の議とゝのひぬれば、よき折なりとて、使者を以て云はせけるは、「主人信長、足下の勇壯を感じ、慕ひ給ふ事年久し。今淺井と織田と和睦ありて、互に隔心をさしはさむ事なく、昔時の如く親族なり。然れば足下信長に隨順あるとも、何の憚る事あらんや。信長かねて足下を將軍へ吹擧し、足利の直參たらしめんとす。陪臣同前に長政の幕下に屬し、徒に過し候は、本意なき事にあらずや。早く心を決し將軍に降順し、英雄の志を顯し給へ」と勸めければ、磯野かね〴〵信長に降參せばやと思ふ心なきにもあらず、今長秀のすゝめによつて心定り大に悦び、「不肖の某將軍の直參と成り、あはれ諸侯の數にも加へられなば、日ごろの本望何事か是にしかんや。長秀よきに執成給ひ、信長公の御前宜く吹擧たのみ入る」由、謹んで返答しければ、長秀急ぎ此旨を信長公へ言上すれば、信長も悦び給ひ、丹波守を江州高島の城主となし、丹羽五郎左衛門を佐和山の城主たらしめ、磯野を降參なさしめたる功を顯はし給ふ。丹羽、磯野有難く領承し、各居城に籠りける。淺井長政此事を聞き大に怒り、磯野が老母、先に人質として淺井が方に有りけるを引出して首を刎ね、獄

給ひ、翌十五日、戰將等に御暇たまはり、銘々持城へ退きける。十六日に事なく岐阜に入らせ給へば、淺井朝倉も、十五日壺笠山及び五ヶ所の陣を引拂ひ、長政は小谷に入り、義景は直に越前へ歸國しける。扨いかにして此度の對陣、禁廷より御扱ありけるやと其謂を尋るに、木下藤吉郎が計なりけり。元來藤吉郎京都の守護代たりし時、堂上の方々と親しく交り、就中日野殿は取わけ心解て睦じくなし給ひぬれば、密に此日野殿にたよりて和睦の儀を奏聞し、終に勅を下し賜り、三家勅諚にそむく事能はず、事なく歸國なさしめたり。此對陣九月下旬より今十二月中旬にいたり、嚴寒面を裂くが如く、兵士苦んで病に臥す。淺井、淺倉は比叡山の切所によつて陣を張ば、信長進んで戰ふ事叶はず、又退いて國に歸らんとすれば、織田の英兵爰に廢す。實に進退共に究り、終には敗軍の祥現然と顯れたれば、所詮一先歸國なし、重て計略を以て兩家とも討破らん木下が智謀なりけり。

○磯野丹波守降ニ信長一

其年も暮れ元龜二年の春なりけり。佐和山の城主磯野丹波守貞滿は、淺井長政が幕下に屬し、去年姉川の合戰に目醒き勇戰をなし、敵も味方も驚歎せし壯士なり。是を押の爲とて、百々屋

明智十兵衛光秀が手に討取る首　七十八
氏家常陸介入道卜全が手に討取る首　三十四
不破河内守時重が手に討取る首　二十七
其外の首數二千餘級、諸軍みな〳〵勇み悦び、元の陣所へ立歸り、旗指物を立て連ね、軍威以前に十倍し、欣然として控へける。

○依勅命三家和睦

同十二月十日、禁廷より勅使として日野大納言殿並に將軍家の上使二階堂駿河守、三井寺に入らせ給ひ、織田淺井朝倉の三家和睦をなし、軍民の苦しみを救ふべし。就中王城近く對陣をなし、干戈を動す事其恐れなきにあらず、早く軍陣を引拂ひ、領國へ退くべき旨綸旨を下され、將軍家よりも御書を賜ふ。爰に於て、信長、長政、義景の三將、早速三井寺に參じ、謹んで命を領承し、互に盟約の神文をとりかはし、三家和平調ひければ、勅使甚だ喜悦まし〳〵、足利の上使と共に、同十三日、京都にこそ歸らせ給ふ。翌十四日の曉、織田信長志賀宇佐山の陣及び味方の諸將悉く陣拂ひし、信長公は船に召れ湖水を渡り、瀬田の山岡美作守が館に入らせ

引上ぐれば、朝倉義景は常々おくれたる大將なれば、此時もいまだ山を下り得ず、打出んとする所に、此體の敗軍なれば、味方を救ふ勇も出ず、這々山へ迯歸り、兩勢十分に切崩され、散々に成りて落失たり。信長下知を傳へて「山に登る敵は追ふ事なかれ」とて、勝鬨を三度あげ、宇佐山に本陣を居られ、討取る首を實檢有り。其時首帳に記したる略、左のごとし。

に取圍れ、既に危く見えけるほどに、赤尾美作守勇をふるうて助け出し、辛じて山上へ

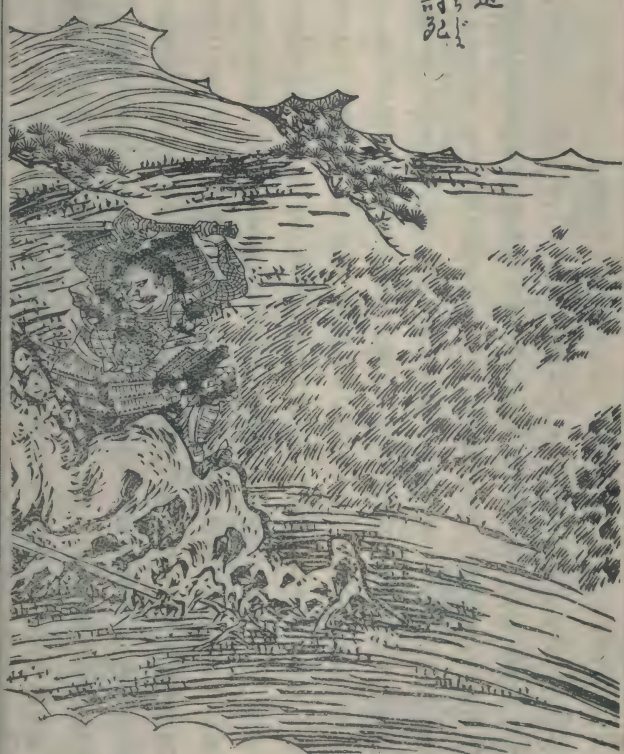
柴田修理之進勝家が手に討取る首　三百十一
池田勝三郎信輝が手に討取る首　二百四十三
佐久間右衞門尉信盛が手に討取る首　百九十一
丹羽五郎左衞門長秀が手に討取る首　百八十七
蜂谷兵庫頭頼隆が手に討取る首　百八十六
前田又左衞門利家が手に討取る首　百十四
佐々内藏介成政が手に討取る首　九十五
木下藤吉郎秀吉が手に討取る首　九十四
稻葉伊豫守良通が手に討取る首　七十八

て出でんと構へたり。淺井長政、朝倉義景は此體を見て、「敵は長陣に勞れ寒氣に堪兼ね、今宵陣拂して引退くと覺えたり。早く追駈け打崩せ」とて、兩家の軍兵、山上の衆徒數を盡して山を下り、織田の陣中に入りて見れば、空く篝のみを焚捨て、敵一人も有ざれば、謀とは思ひもよらず、偖は早く引退きたる物ならん、急に追詰め討取れと、彼三井寺へ引取り行く松明を目的に、息をも繼ず追たりける。木下藤吉郎は大將の本陣に殘り、相圖の役を蒙り居たりしが、淺井、朝倉の兩勢大半山を下りぬと見てければ、用意の狼烟を高く揚る程こそあれ、埋伏したる織田の大勢皆一同に發立ち、山谷も崩るゝ斗鬪の聲を發し、竪横のきらひなく鐵炮を打かけ、鎗ぶすまを作り、思ひ〳〵に突開き、叡山より宇佐山のほとりまで取續たる淺井、朝倉が大勢を、七八段に斷切て、切倒し薙倒し、敵を討つ事數を知らず。淺井、朝倉、山門の兵士等狼狽騷ぎ、我先に山上へ引入らんと、押合へし合ひ、踏倒し押殺し、味方の大勢却て退く妨と成り、網にかかりし魚の如くうごめく中へ、織田の勇兵會釋もなく切立つれば、實に死人の山をなし、川のごとく血を流し、見るもいぶせき有樣なり。是を見て大將信長、三井寺より遉兵勝つて七千餘騎、宇佐山より木下藤吉郎三千餘人、一度に喚いて切て廻れば、いとゞさへ狼狽騷ぐ困兵ども、前後をかへり見る者なく、寢鳥を打より安かりける。淺井長政は一番に山を下りけるが、敵中

朝倉の勢退散し、坂井主從悉く討死しければ、すべきやうなく、そのまゝに引返し、此旨大將に言上しければ、信長深く惜み給ひ、「我股肱を失へり」と紅涙を流し歎き給へば、一座の勇士强卒も、共に袂を絞りける。

○藤吉郎智破二淺井朝倉勢一

さても信長公は、淺井、朝倉と對陣數月に及べども、敵は勞れたる色もなく、味方の兵士は寒氣に堪兼ね、さらぬだに比叡山おろしの烈きに、野陣を構へける事なれば、病臥す者少からず。その上此のごろは打續き味方の勇士討死し、何となく陣中愁にしづみ物がなしく、皆故鄕をしたひける。信長此體を御覽じ、かくては味方難儀なるべしとて、木下藤吉郎を召れ、「汝先に申せしごとく、一軍はなゝしく合戰をなし、退陣せばやと思ふ間、よろしく手配致すべし」と仰せければ、藤吉郎謹で、「臣もさこそ存候へ。いで敵味方の眠を覺させ申さん」とて、謀計を信長公へ言上し、十一月二十七日、諸陣に令して軍ををさめ、退陣の用意をなさしむ。二十八日の夜に入て、陣々へ皆謀計を申含め、勞たる兵士に松明を持せ、三井寺の方へ退しめ、信長公は間道より是も三井寺に移り給ひ、其餘の諸將盡く陣を開き、所々に埋伏し、相圖を見て切

坂井右近討死

敵の勇士堀平左衛門、中野杢之丞、淺井新七、田邊平内等、皆々亂軍の中に斬れけり。坂井右近は此時迄も勇氣たゆまず、切り廻つて戰ひけるが、味方の兵士悉く討死しけると見えて、續て來る者一人もなし。よき敵もがな、討死せんと、四方を白眼で控ふる所に、朝倉の勇士前波藤右衛門と名乘り、右近を目がけ討てかゝる。右近鍔元まで血に染たる大太刀を打振つて、「やさしき敵のふるまひかな。信長が家の子にさる者ありと知られたる、坂井右近正尙が最期の道伴、相手はえらばぬ、いざ來れ」と、人まぜもせず唯二人、半時計戰ひけるが、坂井が切込む太刀先に、前波が鎗を切折られ、太刀に手をかけ拔んとするを、右近たゝみかけて切附れば、兜の眞向三寸計切割れ、目に血かゝつて開く事能はず。されども前波聞ゆる勇夫なれば、大手をひろげ組附て、上に成り下に成り、力限と揉合ひしが、前波大事の手負なれば、組しかれて、右近に首を取られけり。右近も今は力勞れ、再び戰ふ事かなふまじとおぼえければ、鎧脫捨て、靜に腹をかき切て、堅田の浦に屍は肆せど、名を今の世に殘しける。此時信長公は、坂井右近敵の兵粮を襲ひ取り、堅田浦に宿陣せしと聞召し、大に驚き、「佐久間信盛、稻葉一徹齋兩人五千餘人、坂井を救ひ歸るべし」と命じ給へば、兩將畏つて船に取乘り、堅田をさして急ぎけるに、はや淺井、

なりといへども、いまだ陸にも下立ず、備も更になかりければ、さんぐに突崩され、死傷のもの數を知らず、四途路に成つて漂ふ所に、後陣の勢大浪を押切り馳來り、坂井が勢の右手より岸上に下立ち、横鎗に突立ければ、坂井が勢勇を震うて戰ふといへ共、敵は惣勢五千餘人、味方は僅に五百餘人、ばたくと突崩され、思はず跡へ一町ばかり、迯るとはなく引たりける。右近怒つて士卒を勵し、自分眞先に馳出て、鎗を捻て敵にあたり、北へ追なびけては東へめぐり出で、南に駈入りては西にあらはれ、必死に成て戰ふにぞ、坂井が郎等同苗十介、浦野源太郎、同源八、何かは暫もためらふべき、我劣じと多勢の中に突て入り、主討せじと戰へば、堅田の勇士馬場、猪飼、居初の三人も、坂井主從討すなと、續て是も馳通れば、淺井朝倉が大勢、僅の兵士に切立られ、右往左往に散亂す。されども大軍新手を入替へ、次第々々に攻詰ければ、坂井が勢勇なりといへども、其身金石にあらざれば、人々數ケ所の手負となり、今はかうとぞ見えたりける。中にも居初又治郎は、淺井の家士赤尾勘助と鎗を合せ、半時計戰ひしが、居初終には力盡き、勘助が爲に突殺さる。是を見て猪飼甚助走り來り勘介と戰ひけるが、勘助居初を討し時、右の腕首をしたゝかに突通され、戰心に任せざれば、いざや組んと鎗投捨て、甚助に組附たり。互に劣らぬ壯士なれば、暫く勝負も見えざりけれど、勘介痛手を負ぬれば、終に

も射ざりければ、本意なき事に思ひ、いかにもして功を立ばやと、さま〴〵工夫を廻らしけるに、越前より運び來る兵粮米、悉く堅田の浦に積貯へたり。右近此兵粮米を奪ひ取らんと、堅田の住人猪飼甚助、馬場孫次郎、居初又治郎といふ力者三人をかたらひ、案内者として、十一月二十五日の夜、手勢五百餘人密に船に取乘り、堅田の浦に押渡り、不意に鬨の聲を發し、あたるを幸に切立つれば、思ひがけなき朝倉勢、一人も戰ふ者なく、皆ちり〴〵に迯たりける。右近心のまゝに粮米を船に積み、信長公の本陣へ送遣し、其身の取乘べき船も悉く兵粮を積たりければ、五百人の士卒とともに、堅田の浦に陣を取て、船のかへるを待居たる。時に堅田の浦に兵粮を守居る北國勢、朝倉義景の本陣へ這々の體にて迯來り、しか〴〵の事にて兵粮を敵の爲に奪はれぬるよし告たりければ、義景安からず思ひ、淺井長政にも告知らせ、卒に式部太輔景鏡、山崎長門守、前波藤右衛門に北國勢三千人を與へ、堅田浦の敵を討べしと下知をなす。三將命を受て、二十六日の曉天、早船に取乘り、堅田をさして馳て行く。義景猶も心ゆかず、淺井の家臣赤尾美作守、同勘助、淺井七郎等に二千餘人を屬せしめ、後陣に續て打立しむ。坂井右近物馴れたる勇士なれば、敵方の兵船を見るよりも、備を立てて待けるが、朝倉勢の岸に上らんとする所を、會釋もなく切つてかゝり、無二無三に湖水の中へ斬込ければ、朝倉方多勢

の本陣へ、兩人の使者を送り遣しければ、兩使よろこんで東山に到り錦帛を獻じ、義秀承禎が麁意を訟ふ。秀吉先達て將軍家へ計を申上げ置ければ、義昭公兩人に對面し給ひ、佐々木一家の降參、神妙に思召すよし上意有りて、且「江州の鄕民ども猥に一揆を起し、村里を騷動せしむる條、安からず思召るゝ處なり。江州は悉く佐々木の領國なれば、一揆靜謐の儀は義秀承禎に任さるべく間、歸降の證に早速騷動を鎭むべし」と命じ給ひ、御盃など下されければ、兩使有難く頂戴し、頓て暇を申上げ、此趣を義秀、承禎に申聞すれば、承禎甚だ悅び、老臣等に命じて國中の一揆原を鎭けるに、皆年久しき佐々木の民共なりければ、忽ち一揆平治して、所々の騷動しづまりける。是秀吉が寸謀のなせる所なれば、信長公も深く稱美ましく〳〵、はじめて心を保じ給ふ。

○坂井右近與₂淺井朝倉₁戰₂堅田浦₁

織田、淺井の兩陣、九月より十一月の末まで、露ばかりの戰もなく、にらみ合ひて居たりけるが、信長の功臣坂井右近は、姉川の合戰に兩度まで備を割られ、今度淺井との合戰には、目ざましき働をなし、前の恥辱を雪がんと、兼て工み居たりけるに、六十餘日の對陣に、矢一つ

べし。先夫より前に所々の一揆を鎭め、世上靜謐ならしめんこそ肝要に候へ」とて、信長公に其計を申上げ、直に自ら從兵五十餘人を隨へ、石部の城に赴き、佐々木義秀、同承禎に對面し、說て申けるは、「去る永祿十一年、義昭公御上洛の砌、信長使者を以て申入らるゝ旨これ有りといへ共、義秀、承禎承引なく、剰へ足利家の怨敵たる三好に與力し、將軍に弓引き候は、無道の振舞にあらずや。爰において信長止む事なく、當國に軍を發し、領地とも悉く信長が有となれり。然るを兩公いまだ悟り給はず、力を以て信長に敵對し、數多の領地を取かへさんと計られぬるは理に當らず。今にも先非を改め、將軍家に降參し、信長と心を合し、國々の敵徒を切鎭め給ふものならば、以前のごとく江州の大守と成り、繁榮昔に增ん事、某が詞を待ずして明白なり。兩公此所に思慮を用ひ給はず、徒に身力を費し給ふが故に、某これを見るに忍びず、昔時御屋形義秀、某が卑賤を惡み給はず、名の一字を賜はりし厚情今に忘れがたく、聊愚意を演て國家長久ならしめんとす。希くは兩君、是をよく察し給へ」といふ。爰において義秀、承禎大に喜び、頓て三上伊豫守、三雲新左衛門兩人に錦帛を持せ、秀吉諸共信長の陣へ遣し、「向後先非を改め、將軍家の御味方に參り、寸忠を勵み申度し。よろしく執成賴み存ずる」由、叮嚀に演ければ、信長も大に滿足し給ひ、則ち秀吉を案内者として、東山將軍

繪本太閤記　二篇卷之五

○佐々木承禎與二信長一和睦

去程に三好一家の輩は、信長江州にて淺井、朝倉の兩家と對陣の由聞えければ、急に攻登り、さし挾んで討取べしと評議しけれども、木下藤吉郎いまだ中島に在陣して更に動かず、其上伊丹兵庫頭、池田筑後守、茨木佐渡守、荒木攝津守、三好左京太夫義繼等、攝津の城主郡主皆信長の味方と成り、三好の徒攻登らば、途にて支へ妨んと、銘々其氣色を露しぬれば、其評定も徒に成りて、無益の長陣要なしと、殘らず四國へ引取りける。爰に於て秀吉も中島の陣を引拂ひ、早々坂本の御陣へ參り、信長に謁し右の次第を言上す。信長甚だ喜び給ひ、藤吉郎が勞を稱し、扨此程の心配を物語り、計を問給ふ。藤吉郎謹んで承り、「臣つら〳〵淺井、朝倉兩家の運を考ふるに、此度の戰にて滅亡すべしともおもひ侍らず。今無謀の戰をなさば、頗る味方損亡多かるべし。さればとて一戰もなさずして退陣あらんも、是又味方の英氣を減じ、敵の勢を增すべし。よく〳〵折を見合せて、一軍に敵を打拉ぎ、其汐合にかろく引取り給ふ

繪本太閤記 二篇第五之卷 目録

我意に募り、殊更朝倉家は代々檀越の好も有れば、見捨がたきよし返答す。爰に於て信長も深く山門を恨み給ひ、終には此山を焼拂ひ、思ひ知らすべきとぞ憤られける。此對陣に數日を送る程に、勢州、江州の鄕民ども、爰かしこに一揆を起し、亂暴する事大方ならず。就中勢州長島の一揆ども、信長公の令弟彦治郎信興の城を攻て、信興を討取り、殆ど狼藉多かりしか共、軍務暇なく、制し正すべき樣もなく、信長ももて扱うて見え給ふ。

の恥辱をすゝぎ、藤吉郎を三好、本願寺の押に殘し、同九月廿三日、信長卿中島表を御立ありて、江州坂本へこそ向はせ給ふ。

信長攝州中島出陣より、三好一黨、本願寺門徒等との合戰、詳には繪本石山軍鑑に載せて追て板行す。故に讓りて爰に略す。

淺井、朝倉兩家の大軍は、卒に比叡山に取登り、鉢が峯、壺笠山、靑山などに陣を張ば、信長は志賀の城に本陣を居られ、山の麓なる香取屋敷、穴太の附城、田中村唐崎西の麓古城の跡なんどに、諸の軍將を分ち陣を取しめ、織田の惣軍勢、都合三萬五千餘騎、比叡山を取圍み、不日に攻登るべき有樣をなせば、足利の將軍義昭公も、東山將軍塚まで御出馬ありて陣を張せ給ふ。此旨越前へも早く注進したりければ、朝倉義景自ら三萬餘騎を引率し、江州の上坂本に陣を取る。朝倉家の前後の勢、山門の衆徒、惣勢合せて六萬餘騎、各切所に寄て陣しければ、織田勢勇氣にはやれども、左右なく攻上る事不ㇾ能。淺井方も信長の強兵に恐れけるにや、敢て山を下りて戰はず。兩陣相守て、徒にこそ過しける。信長、佐久間信盛、稻葉伊豫守兩人をして山門に登らしめ、一山の大衆等、朝敵に等き淺井、朝倉を扶助し、足利の將軍に敵對する罪を責め、「先非を改め、淺井、朝倉の兩勢追退け、義昭公に謝すべし」と申遣しければ、衆徒等彌

信長と對陣

中には主將九郎信治、三百餘人にて籠られけるが、遙に森が討死を見て、今は何をか期すべきとて、靑地駿河守諸共に、城戸を開て討て出で、勝誇りたる朝倉勢に會釋もなく突て入り、追つかへしつ半時計戰ひしが、小勢を以ていかでか大敵に當るべき、將卒ともに戰ひ勞れ、大將信治も亂軍の中に討れ給ひければ、靑地駿河守も是迄なりと思ひ、偃たる太刀を踏直し、群る大軍を事ともせず、西になびけ東に追ひ、思ふ程戰うて、これも討死したりけり。大將かくのごとくなれば、誰か一人も生殘るべき、爰かしこにて討れぬれば、朝倉、淺井の兩勢、大に勝鬨を揚げ、物はじめよしと勇み喜び、夫より大津の邊を放火亂暴して、愈軍威を震ひける。

○淺井朝倉與信長對陣

去程に信長卿は攝州中島に出陣して、三好一家と對戰有りけるに、宇佐山にて信治、森三左衞門討死し、淺倉、朝倉が輩威勢を震ひ、やがて都へ攻登る由聞えければ、是等の敵京都に攻登らば勇々しき大事なりとて、上落の用意せられけれ共、三好の一黨、本願寺の門徒等と度々の合戰に、軍士數多損亡し、織田方は敗軍のみなりければ、信長深く憤り給ひ、横山の城にありし木下藤吉郎を召れ進退を問ひ給ふに、藤吉郎計略を以て本願寺の門徒を討破り、漸く先敗

千餘人、後陣中務丞景恒三千餘人、河野村より押寄せ、一息に攻崩さんと、もみにもんで馳たりける。森三左衛門五百餘騎、町口まで出張して、朝倉勢と暫くいどみ戰ひしが、僞り負て引退く。式部太輔景鏡勝に乘て追ふ所に、相圖と見えて耳元に鐵炮の音たかく響く程こそあれ、森が伏勢左右より一同に發り、鎗ぶすまを作て朝倉勢を突しらます。三左衛門きびしく下知して取てかへせば、森が郎等道家淸十郎、同助十郎、尾藤源内、同又八等の勇士、鎗を揃へて突立れば、朝倉方散々に成つて迯行くを、追詰め〳〵首を取る事數を知らず。三左衛門味方の小勢なるをかへり見て、追捨にして早く城へ引入んとする所へ、朝倉の後陣中務丞景恒、魚住、山崎等附入にせんと追來るを森三左衛門取て返し、猛威をふるうて相戰ひ、勝負の色も見えざる前に、淺井長政横合より鐵炮を打かけ、どつと喚て討てかゝれば、僅なる城兵前後の大軍に取圍れ、討るゝ者數を知らず。三左衛門勇力なりといへども、續く味方も非ざれば、今は是迄と思ひけん、郎等尾藤道家を左右に隨へ、追來る多勢の中にかけ入り、敵を討つ事廿餘人、其身も痛手數多負ぬれば、郎等に防矢射させ、鎧脫捨て腹十文字に搔切て、終に空く成りにけり。時に行年四十八歲なり。爰に於て尾藤道家を始として、森が郎等十餘人、敵の中へ駈入り〳〵、差違へて死するも有り、亂軍の中に切死せるもあり、一人も活る者なく、皆討死をしたりける。城

りて、互に隙なしと聞えければ、此虚に乘じて信長を討亡し、義昭公をも失ひ奉らんとて、三好日向守、同下總守、同山城守、岩成主稅之助、松山彥十郎、篠原左京、安宅甚太郎等、其勢一萬六千餘人、元龜元年七月廿七日、四國の地を發船して、津國野田福島に著陣し、同國東成郡石山本願寺をかたらひ、要害の地に砦を構へ、合戰の用意をなす。依之畿內の騷動大方ならず、此旨京都より追々信長へ注進ありければ、さらば此賊徒等を誅伐すべしとて、美濃、尾張、近江、伊勢の軍勢三萬五千餘騎を引率し、信長自八月廿日に岐阜を立て、津國中島に陣を取り、三好が輩と合戰に及びける。時に淺井備前守此事を聞て「時こそ來れ。信長の後を討て姉川の恨をはらさん」と、又越前の朝倉と申合せ、同九月十四日、坂本に陣を取り、叡山をかたらふに、此山の衆徒等、元來朝倉家は檀越にして其因深きその上、信長に恨を含む事既に年久しければ、大に悅び、兩家の軍勢をさま〴〵もてなし、ともに力を添て、信長を伐べしと勇みければ、其軍威甚だ強く、京都の貴賤ふるひ恐れ、上を下へと騷動す。其頃江州宇佐山の城には、信長の令弟九郎信治を大將とし、森三左衞門可成を後見に差添へ、森が組下靑地駿河守、武藤五郞左衞門、肥田玄番、同彥右衞門等、二千餘人にて籠ける。淺井長政評議して「上洛の途筋なれば此宇佐山の城を攻べし」とて、長政自身三千餘人、唐崎より押寄せ、朝倉勢は先陣式部太輔景鏡三

勇士の聞えありし武士なれども、眼前大野木が討死に恐怖して、皆一統に降参し、城を開きて渡しけり。秀吉城に入つて一人も害する事なく盡く免しければ、皆よろこびて小谷をさして出行きける。爰に於て横山の城事なく落著し、此旨使を以て信長公に注進す。信長公は此勢に乘じ、小谷の城を攻め、長政父子を討取べしと、其用意をなし給ふに、四國三好の一黨、又々軍勢を催し、都を攻んと攝津まで出張せし由風聞しければ、是又勇々しき大事なれば、一先歸陣をなし、時宜に從ひ、重て計議有るべしとて、横山の城は越前よりの咽首なれば、尋常の士の守りがたき場所なりとて、木下藤吉郎を以て城代となし、木下が居城長濱の城には、竹中半兵衞重治、淺野彌兵衞兩人に守らせ、猶佐和山には淺井の剛將磯野丹波守居城すれば、押の勢なくては心元なしとて、百々屋敷といふ所に城を構へ、丹羽五郎左衞門を籠らせ置き、萬の手當濟ひければ、六月廿九日江州を立ちて、美濃の岐阜へぞ歸城せられける。

○淺井朝倉攻宇佐山城

爰に三好の一黨岩成主稅之助等は、去年足利の將軍を討奉らんと、京都本國寺に押寄せ、合戰に及びけれ共、敗軍して四國へ迯下り、折を見合せ居たりけるが、信長淺井朝倉と度々合戰あ

者なりと思ひ、信長の仁心をおしひろめ、退城せば助けくれんと思ひしに、日本無雙の臆病者にてありけるよな。今城を開き退參せば、城外にて害せらるべしと思ふなるべし。誠勇ある丈夫なりせば、詮なき城を守らんより、開城して主人を助け、若敵に害心あらば、蹴散して捨んに何のかたき事あらんや。わづかなる小城を守り、味方の後詰をたのみとし、網にかゝりし魚のごとくに、居ながら死を待つ不覺者には、言葉戰も更に益なし。いかに城中の軍士兵卒、慥に我言をうけたまはれ。城將大野木佐渡守、愚にして忠義を知らず、此城にて自滅せんとす。皆々主將にかゝはらず、心次第思ひ〳〵に落行べし。信長公の御下知にて、途中において少しも妨あるべからず。只一人の臆病にさへられ、城中殘らず餓死せん事、更に便なき事なれば、態々命を傳ふるなり」と、生れ得たる大音にて、響きわたつて演たりける。是を聞て、いとゞさへ勇氣たるみし士卒ども、塀をこえ堀を渡り、降參々々と呼はりて、我先にと落行く程に、大野木佐渡守大きに怒り、さま〴〵下知し制すれども、耳にも更に聞入ず、終に大手の城戸を開き、五十騎百騎落行くにぞ、大野木今はこらへ難く、手勢僅に二百餘人、眞一文字に秀吉目がけ切つて出たり。待設けたる木下勢、四方より取圍み、一騎も殘さず斬捨たり。無殘なるかな、大野木佐渡守、亂軍の中に討死す。此體を見て、城に殘りし野村、三田村、さしも

こたへ難くぞ見えにける。此城を押の大將は、三十郎信包、丹羽五郎左衛門、不破河内守等、三千餘人にて圍みける。木下藤吉郎秀吉新に又二千餘騎の勇兵を引率し、大手の方へ攻來り、都合六千餘人の軍勢、大山も崩るゝ斗鯨波の聲を發し、攻かゝらんず勢をなせば、城兵ども恐れをのゝき、落支度のみしたりける。大將大野木佐渡守大きに怒り、士卒を勵し防戰の用意をなす。時に木下藤吉郎追手の堀際に馬を乘出し、大音にて申けるは、「淺倉、淺井の兩軍、粉の如く成りて迯失たれば、今は誰をたのみに籠城せるや。信長公は仁愛を以て天下を征し給へば、汝等が忠志を感じ給ひ、城を開き落行ならば、命は助け給ふべし。はや〳〵開城致すべし」と罵りければ、城將大野木佐渡守矢倉にあらはれ、大に怒り答へけるは、「心得ぬ敵の一言かな。淺井父子滅亡あらば、詮なき城を守る共いふべし。軍の勝敗は剛臆によるべからず。長政敗軍せりといへども、現然として小谷の城を守れり。我々長政父子の命なくして、いかんぞや城を開き、おめ〳〵と落行くべき。汝等假初なる勝利にほこり、猥に大言を吐くこそをしけれ。見よ〳〵長政英氣を養ひ、信長に泡吹せんに、其時汝等我々にたより降參を願ふべし。よろしく執成得さすべし」と、傍若無人に罵りける。木下が從兵大に怒り、「憎き敵の惡言かな、一踏に蹴散せよ」と、一同にどつと駈寄るを、木下制し、大に笑ひ申けるは、「我汝等を忠勇の

遠藤喜右衛門討死

るを、信長公床机に腰掛け、悠々としておはしげる。遠藤遙に見て嬉しき事に思ひ、一參に馳せ來る。大將の御側に有ける竹中久作といふ者是を見て、つつと走り出で、「遠藤喜右衛門、大將の御前なるぞ。推參なり」と聲かくれば遠藤、「見顯されし、殘念なり」と、持たる首を信長にはつしと投附け、竹中と引組だり。雙方聞ゆる勇者なれば、上に成り下に成り組合しが、遠藤勇なりと雖も年既に六十に餘り、其上今朝より數ケ度の戰に勞れぬれば、血氣壯んの竹中に敵する事能はず、久作終に遠藤を組しき、首を取てさし上たり。嗚呼遠藤、忠勇才略兼備へし武士なりしに、數度の諫言用ひられず、空しく姉川の露と消たりしは、痛ましかりし次第也。此竹中久作は竹中半兵衛重治が弟なりしが、常々人に語りて申けるは、「淺井の臣遠藤喜右衛門は天晴功の武士なり。我必ず彼が首を取べし」といひけるが、果してかくの如くなりければ、剛の者の志はおそろしき物なりけりと、人々感じあへりける。

○横山落城

淺井朝倉の兩勢、信長の爲に討崩され、朝倉は本國へ、淺井勢は小谷の城へ引取りければ、横山の城に籠し大野木佐渡守、野村肥後守、三田村左衛門尉等、今は後詰の勢もなく、力を落し、

り。向坂兄弟、こは口惜しと一世の勇をふるひつゝ、蹈込々々切むすべど、大勇無雙の眞柄なれば、兄弟とも數ヶ所の深手を負ひ、既に討れつべうぞ見えたりけるに、眞柄が運や盡たりけん、誰が射るとも知れぬ流矢ひとつ飛來つて、左の目の上にぐさと立てば、さしもの十郎左衞門、急所なれば暫しもたまらず、眞さかさまに馬より落るを、向坂兄弟をり重り、押へて首を取たりけり。北國に竝なき眞柄すら斯くの如くなりければ、朝倉勢いよ〳〵魂を失ひ、さん〴〵に成て長政の本陣さしてなだれかゝれば、いとゞさへ亂れ騷ぎし淺井方、立足もなく小谷をさして引行くを、信長勢勝に乘て追討つ事數を知らず、討取る首一千餘級、日も西山に傾けば、勝鬨を三度揚げ、悅び勇み姉川に本陣を居ゑ、首實檢せられける。

○遠藤喜右衞門討死

長政の功臣遠藤喜右衞門は、今日を限りと思ひ定めし事なれば、一足もひかず、勇威盛に戰ひしが、終に味方敗軍に及びければ、今は戰ひてもよしなし、あはれ信長に近附寄り、さしちがへて死せんものをと、亂髮を面にばらりとかけ、首一つ提げて織田勢に紛込み、「よき首取て候程に、大將の實檢に入奉らん。大將は何方におはします」と呼り〳〵、なんなく旗本迄來りけ

此新手に討崩され、討るゝ者數を知らず、ちり〳〵に成て敗走すれば、織田の軍將氏家安藤、等、いよ〳〵力を得て、短兵急に攻討にぞ、池田、佐久間も勇氣を益し、長政が旗本を切散せば、後の方より木下藤吉郎大いに鬨を作りかけ、もらすまじと揉んだりけるに、淺井の陣々備備、悉く打破られ、右往左往に散亂し、惣敗軍とぞ成りにける。今朝此合戰はじまる時、同時同剋、越前より淺井の與力を朝倉孫太郎景繼一萬餘騎、織田援兵の三河勢五千餘人と、江北の姉川にておつつかへしつ戰ひしが、朝倉勢大軍なりといへども終に討まけ、惣崩れにぞ成りにける。此時朝倉の勇臣眞柄十郎左衛門といふ不當の兵有けるが、敗軍を無念に思ひ、五尺三寸の大太刀を眞向にかざし、群る敵を切崩し、刃向ふ者は鎧も兜もたのみならず、太刀風につれ切倒され、命生る者とては更に一人もなかりける。爰に三河勢の內より向坂式部と云へる大剛の勇士、手鎗提げ名乘かけて向うたり。眞柄尻目に白眼み「やさしき振舞かな。冥途の門出覺悟せよ」と、件の大太刀ひらめかし、二打三打戰ひしが、向坂いかに敵すべき、持たる鎗を切落され、二の太刀に兜の吹返を八寸ばかり切割られ、馬より落ちて死たりける。是を見て式部が弟同苗五郎治郎、同六郎五郎、郎等山田宗六、主從三人、切さきを竝べて切つてかゝる。眞柄少しもひるまず、先太刀をのべて、山田宗六が兜の天邊より脇腹まで、切先下りに斬破た

軍使馬を馳せてかけ來り、大音にて、「味方を助くる戰將は誰人なるぞ。姓名を報じ給へ」と呼はつたり。此時彼勇士磯野が從兵島田權右衞門と太刀打して戰ひけるが、戰ひながら答けるは、「加藤虎之助が郎等木村又藏なり」といひも終らずたゝみかけて島田を切る。軍使此戰を見果ずして引返して、秀吉に斯くと報ず。又藏なんなく島田が首を取りて引かへせば、加藤虎之助大によろこび馬をかけ出し、「木村又藏天晴勇戰感稱するに言葉なし。加藤淸正是にあり」と呼はれば、又藏謹んで畏り、「某が老母三日以前に空しく成り、跡の弔かたの如く執り行ひ、御目見のため參りし所、合戰の眞最中、奉公はじめの手土產漸に仕候」と、腰に附けたる首三つ四つ差出しければ、淸正いよ〳〵悅び、伴うて秀吉に謁せしむ。秀吉木村が武勇を殊に感じ、「軍終つて厚く褒稱有るべし」とて、惣兵を一所になし、長政の旗本を後より攻附たり。

○淺井勢惣敗軍

織田淺井の大軍入り亂れ〳〵討つ討れつ戰ひて、いまだ勝敗知れざる所に、信長が後陣に控へし明智十兵衞光秀、前田又左衞門利家兩人二千餘人、今朝より曾て戰はざる新手の勢を以て、淺井の先陣赤尾、中西が手へ横鎗を入れ、無二無三に突崩づせば、最早戰ひ勞れし軍勢ども、

木村又蔵勇力

て雲間を照し、馳せちがふ人馬、喚叫ぶ鯨波の聲、上天に聞え坤軸に徹し、恐しかりし戰なり。木下が兵士には蜂須賀小六、堀尾茂助、加藤虎之助、福島市松、片桐助作等の勇士、我劣らじと切つて廻れば、磯野が從兵にも荻野彌太郎、上村新吾、宮本彦治郎、飯森三太夫、島田權右衛門なんど、皆一人當千の勇夫なれば、右にあたり左に支へ、鎬を削り攻合て、勝負の色も見えざる所に、忽然として礎野が備後より亂れ立ち、左右にさつと開きなびき、裏崩れして騷ぎければ、敵も味方も何事にやと驚きて見てあれば、六尺有餘の大男、黑き毛綿の絲にて威したる具足を著し、鍬形打たる兜を猪首に著なし、兵器は持ず、大手をひろげて群がる敵を片端より取つては投のけ打倒し、童のつぶて打をするごとく、荒にあれて馳巡れば、此者只一人に薙倒され、磯野が勇軍備亂れて見えたりける。木下藤吉郎大きに勇み、「味方を助くる勇士を討すな、續けやつゞけ」と下知するにぞ、加藤虎之助眞先に馬をかけ出し、村雲立つたる敵の中へおつと喚てかけ入れば、新參の郎等、井上大九郎主より先へ走り出て、大薙刀を打ふつて、切立て薙立戰へば、片桐、福島、蜂須賀、一統、堀尾、中村の輩、我も〳〵と切り廻れば、磯野が從兵さん〴〵に成つて敗走す。件の勇士猶も磯野が殘兵を追散らし、一足も引かず戰ふありさま、秀吉はるかに是を見て、「味方を助け勇戰するは何者なるぞ。名を尋ねよ」と下知すれば、

はぬ物を、いかに狂ひ給ひて討死を急ぎ給ふぞや。既に御手勢戰ひ勞れ、今は用に立ちがたし。早く勢を引上て、始終の勝負を御覽ぜられ、其後にこそ兎も角も御計の有るべき」とて、あながちに引きかへせば、右近其理に屈服し、涙をふるうて退きける。

○木村又藏勇力

坂井右近ふたゝび勢を引上げければ、淺井方是に氣を得て、佐久間、池田が兵を切破んといどみ戰ふ。前に敗せし磯野丹波守、後陣に控へて有りけるが、此ありさまを見て備を立直し、長政が勢と一所に成り、戰を助んとす。木下藤吉郞秀吉、以前戰半にして、左右へ分れて休らひ居けるが、磯野が勢惣がかりに攻討と見えければ、急ぎ士卒を下知して、長政の後、磯野が前に喚いてかけ入り、前後にあたつて戰ひける、此合戰の有樣こそ只ならね。東の方は信長公の旗本にして、氏家、安藤の二將淺井の先手赤尾、中西等と戰ひ、其次は佐久間、池田が輩、長政の旗本と合戰をなし、長政の後に木下藤吉ありてこれといどみ戰へば、其後は磯野丹波守、木下が軍と合戰す。信長駿州今川義元と桶挾間に戰ひしより已來、かくのごとき烈しき戰なし。矢叫び鐵炮の音は、大空に響きわたりて鳴神よりも冷じく、打合す太刀の輝は、電光に似

に面を合すべき、死すべき期こそ來つたれと、郎等わづかに五十餘人引具して、迯る味方に目もかけず、長政の旗本へ一參にこそ切入つたり。中にも嫡子久藏は血氣壯の若武者にて、十文字の鎗引提げ、長政目がけ馳行を、續く味方もなかりける。長政の旗本、かけへだてゝ支へ戰ふを、久藏元來勇力無雙の若者なれば、右と左へ突倒し、近寄る者は取つて投のけ、暫時が内手負死人數十人、長政の前三反計に成りければ、早川右馬之丞馳寄てわたり合ひ、二打三打戰ひしが、早川も手だれの勇士なりけるが、如何したりけん、久藏が突く鎗を受損じて、綿嚙を突通され、あつと叫で死たりける。是を見て長政の近士百餘人、各筒先を竝べ、一度にどつと打放せば、むざんなる哉、坂井久藏、胸板に玉四つ打的られ、其まゝ倒れ死たりける。此久藏十三歳の時初陣なりしが、建部源八郎を討て信長公の感狀を賜り、今年わづかに十五歳、末たのもしき若者なりしを、此戰場を枕とし、討死を遂けるを、惜まぬ者こそなかりけり。假令韋駄天をして久藏に代しむとも、味方を離れ只一人、かくまで深く切入りなば、などか活て歸るべきと、信長公も惜しみ歎かせ給ひける。父の右近正尙は、此時淺井掃部、同半助等と火をちらし戰ひしが、久藏が討死の由を聞ければ、共に死せんと群る敵の中へかけ入るを、郎等數多かけへだて、轡にすがつて諫けるは、「此軍味方敗北するにもあらず、大將の御大事とも覺え候

淺井半助、早川右馬之丞等、皆究竟の逞兵を勝立て、會釋もなく切つてかゝる。此時秀吉敵の英氣をくじき、味方損亡なからしめんと、俄に兵を左右へ引分け、中を開きて通しける。淺井勢向うをきつと見てあれば、是ぞ信長の旗本なり。長政諸軍に下知して、一息に切崩し、信長と雌雄を決せんと、まつしぐらに喚いてかゝるを、信長は藤吉郎も敗軍せしと御覽ぜられ、いらつて左右を下知し給へば、氏家常陸介、安藤伊賀守各二千餘人、横ざまに淺井が先陣へ切つてかゝり、赤尾中西等と火をちらして戰うたり。長政是を見て旗本の勢を急にすゝめ、自ら采配おつ取て、進めや〳〵と下知をなせば、はやり雄の兵士得物々々を提て、惣がかりにかゝつて、氏家、安藤を切崩さんとす。織田方の將坂井右近、池田信輝、佐久間信盛等、先に敗軍して引取けるが、此戰を見て、一文字に長政が本陣へ切つてかゝれば、蜂谷兵庫、森三左衛門は信長の御手に加はり、兩將互に鎬をけづり、切先より火花をちらし、追つかへしつ戰ひしは、すさまじとも中々いはん方こそなかりける。遠藤喜右衛門、淺井半助兩人は、今日の軍に討負なば、活て二度人に面を合せじと、命を塵芥よりも輕くなし、向ふ敵の選なく、竪ざまに切開き、横ざまに薙廻り、當るを幸に切立つれば、此兩人に切立てられ、坂井が手の兵ども四途路に成て見えにける。右近父子は一番の合戰に敗北し、今又爰を破られては、何面目に君

丹波守いよ〳〵怪しみ、八方に眼を配り、敵の謀計を危みながら、しばらく支へ戰うたり。軍は將の心にありとは宜なるかな、磯野が從兵あまたの軍を切崩し、勢さかんなりしも、主將かくのごとくなれば、勇氣たゆみて、何となく色めきて見えけるにぞ、木下藤吉郎時分はよしと、相圖の鐵炮を響す程こそあれ、左の方より蜂須賀小六、同又十郎、稻田大炊、中村孫平次、右の方より木下小市郎、加藤虎之助、福嶋市松、片桐助作、堀尾茂助、兩勢合して二千餘人、鐵炮の兵八百人、筒先を揃へ打倒せば、忽ち磯野が勢三百餘人打殺され、疵を負ふ者數を知らず。「すはこそ敵の謀計に落されたり、早く退けや」といふ程に、大將の下知をも聞入ず、亂れ騒ぎて敗走す。木下方三方の勇士等、勢に乘じて馳出せば、さしも猛かりし磯野丹波守、さんざんに討なされ、後陣の味方と一手に成んと、元來し道へ走りけるを、木下が三手の勢三千餘人、追詰め〳〵攻討つ程に、討るゝ者數を知らず。磯野丹波守自ら殿して、取て返しては戰ひ、戰うては引退き、漸く後陣の勢に近附たり。淺井備前守長政は、先陣勝に乘て信長が旗本迄切入たりと聞ければ、跡に續て備を繰出し進む所に、忽ち先手の軍破れ、磯野丹波守亂れ騒ぎて迯來れば、木下勢跡に喰附き、少も緩めず追來る。長政是を見て丹波守を後陣と成し、自ら旗本の勢三千餘人、新手を以て木下と迎へ戰ふ。此手の先陣赤尾美作守、中西日向守、遠藤喜右衞門、

繪本太閤記　二篇卷之四

○藤吉郎破二磯野丹波守一

孔明街亭に破られて、琴を彈じて仲達を去らしめたるは、孔明が才智仲達が上にありて、仲達が才を使うて仲達を去らしむ。信長の五段備、磯野が勇にあたりがたく、悉く破れ、今は旗本の一備のみなりければ、誰か是を勇まざらん、破竹の勢にて惣がかりにすゝみけるが、磯野丹波守馬をとゞめ、味方の兵士をかへり見て申けるは、「心得ぬ事かな、此敵こそ信長が旗本の先手なれば、大勢にて尤も堅固に構ふべきを、わづか一千計の兵卒にて、しかも隊伍とゝのはず、備も立てず、まばらに陣を構へたるは、奇計をなして味方を討ん手段なるべし。其上瓢簞の馬印を立てたるは、織田家の謀士猿面冠者木下藤吉郎なり。此者正成、孔明を欺く智略ありて、尋常の將にあらず。猥にかゝりて小猿めが謀計に陷り、不覺を取る事のあるべからず」と、猶豫してすゝみ得ず。木下藤吉郎是を見て、「扨は我備の全からざるを、却て恐るゝものなるべし。此方より急に押寄せ打崩せよ」と、隊伍揃はぬ士卒に下知して、無二無三に討てかゝれば、

繪本太閤記 二篇第四之卷 目錄

取候べし。別に必勝の計略こそこれあり」と申送りければ、森が勢此時火花を散し戰ひければど、所詮勝べき合戰にあらざれば、木下が詞にしたがひ、繰引に左右へばつと退けば、磯野が軍勢、只一突に木下が備を破り、信長を討取べしと、勇みに勇んで備をすゝむ。

間が軍卒、主を討せじと掛寄り、喚き叫んで切結ぶ。佐久間右衛門勇なりといへども、此大敵を凌ぎがたく、負色に見えければ、戰を次の備にゆづり、左右へばつと引きたりける。五番備森三左衛門二千餘人、佐久間に代つて鎗を合すに、磯野が勢は織田の備四番まで打破り、勝にのつたるするどき鋒先、あたりがたく見えにけり。森三左衛門大にいらち、「此陣を破られなば、御大將の旗本なるぞ。爰を破られ、何面目に活て人に面をあはさん。討死せよ人々」とて、自ら眞先に鎗を合せ、一足もひかじと戰うたり。磯野丹波守鐙ふんばり、はるかに敵の陣を見るに、はや次備は信長の旗本と見えて、南無妙法蓮華經の大旗、風にひるがへつて見えければ、味方の諸勢をかへり見て申けるは、「此備を破るや否や信長の旗本なるぞ。銘々力を盡し一突に切崩し、高名せよ人々」と、惣勢合して五千餘人、まつしぐらに森が備突入りたり。信長はるかに此體を御覽じ、大に驚き給ひ、「旗本の勢を繰出し、森が備を扶助すべし」と下知し給へば、木下藤吉郎御前にまかり出で、「君少しも心を惱し給ふべからず、藤吉郎秀吉是に控居候ほどに、いかなる大敵强將といへども、いかでか御旗本まで亂入いたさせ申すべきや。今來る敵は某討破つて、君の御心を保んじ奉らん」と、手勢二千餘人合戰の備をなし、森三左衛門に軍使を立て申させけるは、「御戰あやふく見え候ほどに、味方損亡これなき内、はや〱御引

磯野丹波守、すはや勇戰今なりと、自ら鎗をおつ取て、どつと喚て突立れば、坂井が陣さん〴〵に破れて、右往左往に散亂す。是を見て信長の二番備池田勝三郎二千餘人、坂井に代つて鎗を入るゝ。磯野が兵士少しも躊躇はず、池田が陣へ面もふらず突て入り、切立薙立て、其烈しき事電光のごとし。池田勝三郎あしらひかねて、左右へさつと引取つたり。三番備蜂谷兵庫頭二千餘人陣をすゝめ、鐵炮を打かけ向うたり。磯野何かはしばしもためらふべき、鯨波一聲、おつと喚いて鎗先をそろへ、無二無三に突立れば、蜂谷が備も突きしらまされ、是も左右へ引上げける。四番備佐久間右衛門尉二千餘人、備をくり出し、鬨を作つて、自ら陣前に馬を乘出し、味方を下知して戰うたり。磯野丹波守は勝ほこつたる破竹の勢、軍扇を開き左右をまねき、鋒先するどに突かゝれば、佐久間備亂さじと、自身鎗を以て敵にあたり、眼下に五六騎突伏たり。磯野丹波守、「憎き敵の振舞かな、いで物見せん」と馬をかけよせ、聲をもかけず突懸れば、佐久間獅々の怒をなし、忽ち髪髯さかしまに立ち、勇を震うて戰ふありさま、雙方聞ゆる猛勇勵士、上段下段、透間なく馳ちがうて突合けるが、尋常の軍なりせば、見物して勝負を分てど、是は目さへふる間なき烈き合戰なりければ、淺井方の大將高宮三河守、大宇大和守、赤田信濃守、山崎源太左衛門四人の勇將、「磯野討すな、續や」と、一度にどつと突かゝれば、佐久

姉川合戦の始末

す。淺井備前守長政は、父久政に三千五百人を添へ、小谷の城に殘置き、其勢都合一萬餘騎、先陣磯野丹波守員滿を大將として、高宮三河守、大宇大和守、山崎源太左衞門、赤田信濃守等、都て五千餘人、後陣は備前守長政自分五千餘人を引率し、二十七日の早天に、三田村表姉川において、兩陣端なく出合ひたり。淺井の先將磯野丹波守、勇猛無雙の剛兵なれば、附したがふ士卒悉く勝り立つたる兵にて、其勢猛虎の如し。丹波守はるかに信長勢の段々に備へたるを見て、諸士に向ひて申けるは、「此敵を破るには、長蛇に備へ、たゞ一筋に突入て、更に左右をかへりみず、正面を切崩し、信長の旗本まで押詰め、勝負を一擧に決すべし」と下知を傳へ、自身眞先に馬をすゝめ、勇にいさんで押寄れば、信長の先陣坂井右近二千餘人、しづ〳〵と繰出し、兩陣矢頃に近寄ぬれば、先備へたる鐵炮をつるべ放ち、はや合戰をはじめける。

○姉川合戰之始末

信長の先陣坂井右近、淺井の先陣磯野丹波守、雙方互に鎗を合せ、喰附て相戰ふ。磯野丹波守時分はよしと、かねて左右に備へ置きし鐵炮備を下知してさしまねけば、忽ち兩方より數百挺の鐵炮を、雨より繁く打かくれば、坂井の兵士面をむくべき樣もなく、漂うて見えたりける。

ひあはされけり。

○信長長政三田村張陣

其夜木下藤吉郎、信長公に言上しけるは、「某今宵淺井朝倉の兩陣へ斥候を遣し、敵のありさまを伺ふ所に、宵のほどは何の變りたる事もなかりしに、先刻より兩陣とも、俄に兵粮の用意いたすと見えて、煙おびたゞしく立のぼり候。これは明曉朝駈の合戰を企てんず敵の結構に必定せり。早く諸軍に御下知なし給ひ、合戰の御手配有りて然るべし」とぞ申ける。信長尤なりと思しめし、夜中卒に諸將を召れ、備配りを下知し給ふ。先一番備は坂井右近正尙二千餘人、二番備は池田勝三郎信輝二千餘人、三番蜂谷兵庫頭頼隆二千餘人、四番佐久間右衛門信盛二千餘人、五番森三左衛門可成二千餘人、其次は信長公の旗本也。旗本の先手木下藤吉郎秀吉三千餘人、一番手は安藤伊賀守左に備へ、氏家常陸介右に備ふ。次は大將自ら旗本の勢四千餘人、跡備は明智十兵衛光秀、前田又右衛門利家各三千餘人、後陣は菅谷九右衛門、川尻與兵衛、福富平左衛門等三千餘人、横山の城の押には、御舍弟信包殿を主將として、丹羽五郎左衛門長秀、不破河内守二千餘人、手分すでに定まりければ、夜いまだ明ざる内に、はや姉川へと押出

晝夜をわかたぬ防戰に苦しみ、小谷の城淺井長政へ後詰を乞ふ事頻なり。長政俄に越前へ使者を立て、朝倉義景に加勢を乞ふ。義景軍代として、朝倉孫三郎義紲を大將として、其勢都合一萬餘騎、同月廿六日江州に著し、大寄山に陣を取る。爰において長政横山の後詰をなし、信長と雌雄を決すべしとて、明朝越前江州の兩軍を野村、三田村へ出陣し、爰にて備を固め龍ヶ鼻へ向ふべしと、朝倉勢とも申合せ、其用意をぞしたりける。爰に長政の功臣遠藤喜右衛門は、忠勇智謀かね備へし名士なれども、長政が父久政、愚にして其計を拒み用ひず、計議悉く圖をはづしぬれば、喜右衛門今は心を定め、淺井の運も是迄なり、死おくれて主人の滅亡をながめ居らんも口惜し、此合戰こそ我討死の期なりと覺悟を究め、其夜は朋輩の勇士を數多己が家にあつめ、酒宴を設け、快く酌交し、諸士に向うて申ける、「明朝味方の勢野村三田村の邊へ陣をうつさば、氣早き信長忽ち姉川の方へ出迎へ、直に合戰に及ぶべし。某はいかにもして信長が籏本へ紛れ入り、信長とさしちがへ死せんと思ふなり。若仕損じなば討死して、名を永き世に殘すべし。旁も志を一致にし、忠戰を勵み、死後の榮名をねがひ給ふべし。此酒宴こそ遠藤が長きかたみに候へ」とて、快く酒宴を催しければ、より集りし諸勇士も、遠藤が我々をはげまさんと、かく勇ましき物語は常の事なりとて、怪しむ者もなかりけるが、後にはおも

水瓶を打砕きたる勇氣、尋常の士の及ぶ所にあらずとて、其勳功を稱し、手づから感狀を賜りける。是より世の人勝家を稱して、瓶破柴田と呼なせり。

○信長江州發向

元龜元年夏六月、織田彈正忠信長公、數萬の軍兵を引率し、江州へ發向し、淺井久政、長政を討破んと、虎御前山に陣を取り、長政が居城小谷の近邊をさまぐ放火亂暴すれども、長政父子敢て出て戰はず。かくては事ゆくまじとて、虎御前山を引拂ひ、横山の城を攻んと、惣軍陣替しける所に、淺井方の勇將丁野播磨守六百餘騎にて追討ち、織田の剛士佐々内藏介、中條將監、簗田左衛門尉等後殿して防ぎ戰ひ、雙方死傷の者數百人、終に淺井勢戰ひ屈して退散しければ、信長の大軍漸〻陣を龍ヶ鼻に移し、其翌日六月廿三日、惣軍三萬餘騎、横山の城を十重廿重に取圍み、息をもつがず攻たりける。此城には淺井の勇士三田村左衛門尉、大野木佐渡守、野村肥後守を將として、强勇の士千餘人籠城せしかば、大軍を少しも恐れず、持口を固め、矢石を飛し防戰すれば、信長勢大軍なりといへども、急に落す事能はず。信長大にいらち給ひ、諸軍に下知して、短兵急に、三日三夜汗水に成りて攻られける。城中も爰を最期と防ぎけれど、

刀の石突にて三つの瓶を突碎き、馬引寄せてうち乘れば、六月三日の曉、ひんがしの空しらみたり。惣勢八百餘人、城門を大に開き、山も崩るゝばかり鯨波を作り、寄手の陣へ眞一文字に切つてかゝれば、寄手の陣中大きに騷ぎ、まだ東雲の明やらで、敵味方さへ分ちかねたれば、防ぎ戰ふ者一人もなく、炎暑に堪かね、素肌にて居る武者もあり、たま〳〵甲冑帶せしは、鎗も刀も持ずして、東へ走り西へなびき、四途路に成て敗走す。城兵は今日を限りと思ひ定めたれば、日ごろの勇氣百倍し、切伏突ふせ薙廻れば、さながら木偶を倒すがごとく、屍の山を築にけり。大將承禎、三雲新左衛門、吉田出雲守等士卒を下知し、「敵は小勢なるぞ、廣野にかけ出で、備を立てて戰へ」と、はせ廻つて制する所へ、鯰江の城に殘し置たる鯰江相模守、高瀨刑部、木下に城を乘取られ、士卒諸共さん〴〵に成りて迯來り、軍の始終を物語れば、承禎今は足なえ身もしびれ、三雲、吉田に助けられ、石部をさして迯行ば、大將かくのごとくなりしかば、誰か蹈止つて戰ふものの有べきや。いとゞさへ周章騷し士卒鄕民、風に木の葉の散る如く、行方なくぞ迯失たり。勇みにいさみし城兵ども、備を亂して追討つ程に、首を取る事三百餘級、十分の勝利を得て、勝鬨を數度揚げ、勇み悅び城中へ引入りけり。やがて其首どもを持せ、信長公へ注進し、軍の次第言上しければ、信長卿大に感じ給ひ、勝家が勇壯今に初めずといひながら、

み、病に臥す者多し。大將柴田勝家、貯へ置し水を點見するに、今ははや水瓶三つのみ殘りて、其餘の水とては一滴もなし。勝家此水瓶を廣緣に居させ、上下の兵士を悉くあつめて申しけるは、「我信長公の命を受け、當城を守る所、今大軍に圍れぬれど、一度も敗北の恥辱を蒙らず、猶よく防戰する事、皆汝等が命を輕んじ、忠戰をはげむが故なり。今水の手を斷切られ、既に城中渇死せんとす。所詮心を一致にして討て出て、討死せんと思ふなり。汝等日ごろの信義を全うし、我と死を作になさば、生前の面目、死後の本望、何事か是にしかんや。されども老たる父母、稚き小兒など持たらん者は、心まかせに城を出て落行べし。更に恨とは思はず。我と死を同じくせんと思ふものは、此水瓶のもとへ立寄り水を飮み、此程よりの渇をうるほし、勇氣をまして戰ふべし」と、柄杓陶器を數多出させ、床机に尻かけ控たり。士卒共大に勇み、「此城中にて水に渇し死せんよりは、討て出て討死せんは我々が望む所、閻魔の廳にても、水に渇したる餓鬼なりと呼れんも口惜し。いでや思ふまゝに水を飮み、心よく討死し、武士の鑑となれや」とて、一人も落行く者なく、三つの水瓶に立寄りて、汲出して呑ほどに、暫時に水を飮ほしたり。勝家大に喜び、「いさぎよし、賴もしゝ。鎗も刀も折るまで切死せよ、兵ども」と、大音に呼つて、つゝと立てかの水瓶の元へ立寄り、「討死と定むる上は水の貯も無益なり」と長

水瓶を碎て
勝家兼頼と
戰ふ

御事なれば、先此人質を城中へ入られ候へ」と申ければ、刑部松明の光によく〳〵見れば、一揆の郷民に相違なければ、下知をつたへて門を開き、人質を請取らんとす。此時郷民の中にまじへ置たる木下が郎等、城門に到や否や、聲をもかけず城兵を七八人切倒し、一同に城にかけ入り卒に鬨を作り、爰かしこに切つてまはれば、城中不意の事なれば、誰か防戰ふ者もなく、うろたへまはり騷動す。木下が勇兵一千餘人、加藤福島の銘々續て馳來り、四方八方にかけ巡り、騷立ちたる城兵を片端より切まくれば、大將鯰江高瀬等も、防戰すべき思案も出ず、途を失うて迯さまよひ、城門の開きたるを幸に、這々遁れて迯出るを、木下勢は「にぐる敵を討つ事なかれ、只城外へ追出せとて、向ふ者は切つて捨て、にげば迯せとかけ散せば、城兵等我さきと爭うて木戸を出で、長光寺の陣所へと走りければ、半時ばかりに、何の手もなく鯰江の城を乘取り、本丸に入りて休息し、此旨長濱の城へ注進す。

○碎二水瓶一勝家戰二承禎一

此時長光寺の城中には、數日水に渇し、今は貯へ置し水瓶も空しく成り、天水をたのみ一日一日と籠城すれど、時は六月上旬、草もゆるがぬ炎暑にて、一滴の雨も降らず、士卒等渇に苦し

略にて、わざと水の多きありさまをなし、寄手の軍を欺きし一時の計略なり。

○木下藤吉郎襲二取鮎江城一

此時木下藤吉郎は長濱に在城して、承禎長光寺の城の水の手を斷切り、攻る事急なりと聞けれど、勝家尋常の將にあらざれば、承禎いかに攻る共、容易く落城する事ある可らず。此隙に承禎入道が居城鯰江の城を攻取ば、長光寺の圍もおのづから解け、勝家も命全く、兩全の計なりと、長濱の百姓百餘人に、兵士の勇壯なるを五十餘人まじへ、六月三日計策を教へ、鯰江の城へ到らしめ、其跡より加藤福嶋等の勇兵一千餘人、しのびやかに打立ける。時に鯰江の城には、鯰江相模守、高瀬刑部、兩大將にて一千餘人、承禎の留主を守居たりけるが、くれ過る頃城外に人音かまびすしく「長光寺の陣所より、大將の命を受參り候程に、早く門を開かれ候へ」と呼りけるにぞ、高瀬刑部急ぎ櫓に上り見おろせば、百姓と見えて、てん手に松明をともし三百人ばかり、小具足著たる兵士五六騎、堀際に立ちて大音に申けるは、「長光寺の城の水の手を斷切し程に、城中甚だ困窮し、今日降參の由を申により、人質として郷民等二百人請取ぬれど、猶實否分明ならざれば、今宵先當城へ入置き、明早朝に長光寺の落去により、いかにとも計ふべしとの

を以て彼懸樋どもを切落し、一滴も城中へ水を入れず。爰に於いて柴田の軍兵大きに苦み、折節夏月の事なれば、數日雨なく炎暑燒がごとし、皆々渇に悶え臥し、今は大敵をふせぐべき力もなく、爰やかしこに打伏ける。承禎此體を暗に察し、平井甚助といふ者を使者となし、「勝家城を開き退城せるに於ては、城中の士卒悉く命を全し、事なく本國へ歸らしむべし。異儀有るに於ては、忽ち大軍一度に攻詰め、落城目前にあるべし。多勢の命を思ひ、早く退居然るべし」と演ければ、勝家大の眼を見ひらき、聲を勵して申けるは、「我いやしくも當城の主にえらばれ、佐々木家の鼠輩に圍れ、何おそろしとて城をひらくべきや。城中矢玉いまだ盡ず、軍兵既に千人に餘れり。元より籠城の士卒兼て必死と定めたれば、死を見る事は其元へかへるが如し。あはれ承禎勇氣を出し、我軍勢と死を爭はゞ、忽ち粉の如くなさんものを」と、以ての外氣色を損じ、席を蹴立て入ければ、使者に立ちたる平井甚助、はふ〳〵座を立ち、歸らんと次の間へ出けるに、數多の軍兵廣庭にて沐浴し、面をあらひ、足をひたし、城中水の澤なる事常のごとし。甚助是を見て大きに驚き、味方の案こそ相違なれと、いそぎ陣所に立ちかへり、承禎にしかぐ〳〵と物語れば、承禎も甚だ驚き、城中に井やまうけぬらん、又は天より一道の水路を通しけらしと、たゞあきれにあきれて居たりけるは、つたなかりける大將なり。これは勝家が智

產、父は農家にて佐五右衞門と申し、某は佐吉と呼候」と答ふ。藤吉郎深く此佐吉が容儀才智を愛し、住僧に乞て長濱につれ歸り、小姓となして其寵愛竝ぶ者なし。後立身して石田治部少輔三成とて、五奉行の一人なり。

○佐々木承禎長光寺城斷二水之手一

去程に江州の佐々木入道承禎は、先に信長の歸路をさへぎり討取ん結構せしに、却て敗北せしを憤り、又々軍勢を集め、鄕民をかたらひ、五千餘人にて、信長が勇將柴田勝家が籠りたる長光寺の城へおしよせ、四方を圍み、息をもつがず攻たりける。時に元龜元年五月廿一日なり。此長光寺の城は要害も堅固ならず、元より軍兵わづかに八百餘人にて籠城したることなれば、更にこらへつべうも見えざりけり。されども名を得し勝家なれば、寄手の大軍を事ともせず、持口を堅め、矢石を飛し、防ぎ戰ふほどに、左右なく落城すべしとも見えず。結句佐々木方の士卒ども、死傷の者多かりければ、大將承禎、家老三雲新左衞門と計て、城中の水の手を取切り、渴水させせんとぞはかりける。元來此城中井水なく、城外より樋を以て水を通じければ、勝家も水の手には心を附け、數多の兵士を守らせ、猶大瓶に多く水をたくはへけれども、承禎大勢

石田三成秀吉に仕ふ

從の約をなせ。二士の誠情にまかせ、今より虎之助が郎等なるぞ。我に隨ひ長濱に來るべし」と申ければ、兩人ともに大によろこび、大九郎はそのまゝ虎之助に隨身し、又藏は「老母の病旦夕にせまりぬれば、兎もかうも見果て後直に參じ仕へ奉らん」と、虎之助、大九郎は長濱へ、又藏は舊里へこそは歸りける。

○石田三成仕₂秀吉₁

長濱の城主木下藤吉郎、軍務のいとまある日、領内を狩して終日馳ありきけるが、咽喝しておほえければ、觀音寺といへる山寺に入りて、客殿と思しき方の緣側に腰かけて、茶の所望したりければ、住僧罷出で謹んで禮をなし、小童に命じ茶を點ぜしむ。此童、容貌美麗にして神童のごとし。やがて爐前にいたり、大きなる天目に一杯茶をぬるく點て臺に居ゑ、巾紗をそへて奉る。藤吉郎一息に吞ほし、「きみよし〳〵、今一服」と乞ぬれば、彼童子又點じて奉るに、初よりは少し熱く、茶の分量もなかばに足らず。藤吉郎此童子の才智を心に感じ、試に又一服を所望するに、件の童子、此度は小茶碗の筒形なるに、いかにも熱き茶を少しばかり點て奉れば、藤吉郎殆どこれに感心し、近く招きて姓氏を問ふに、童子謹で申けるは、「小童は江州石田村の

に謁し、某が日ごろの願ひ既に足れり。若捨て給はずんば、今より後の命を君にさゝげ、犬馬の勞を盡し仕へ奉らん」といふ。時に一人の小男も、同じく虎之助が前に頭をさげ、「某は防州の浪人井上大九郎と申す者なり。父は井上五郎兵衛とて、大内義隆に仕へたりしが、大内家滅亡の後、毛利家より度々召るゝといへども、父五郎兵衛節を守つて敢て仕へず、山林に身を隱し、世事のいとなみを心とせず。其時某幼稚にして、倶に山野を住家とし、年積つて二十一歳、三年以前兩親を失ひ、諸國を武者修行して經廻りしに、浪々の身のならひにて、一身を蔽ふべき衣服なく、腹を滿たすべき美食なし。此所へ來かゝりしに、是なる木村又藏熟醉に睡眠の體、身には麁服をまとへども、腰に帶せし二刀を見ればあつぱれ逸物、此奴殺して兩刀をうばひ取んと、刀に手をかけたりしが、人相骨柄由緒ありげなる浪人、寢込を切んも便なしと、喧嘩をしかけ只今のありさま、はからずも君に拜謁したてまつり、日來の本望何事か是にしかんや。某が不能をきらひ給はずば、一命を君にさゝげ、主君と仰ぎ奉らん」と、頭を大地にすり附て屈伏して見えければ、加藤虎之助大きに喜び、「二士の厚情、感嘆少からず。然りといへども我も若年小身にして、汝等を扶持すべき力はあらねども、豪傑の心は利の事に非ず、只義によつて生命をも重しとせず。今日の會合豈私の事ならんや。然るべき宿縁ありてこそ主

りの役目なれば、非常の者を恐くとらへ、糺明なすは我職分なり。申譯の筋により、取計ふ手段あり」と、刀提げ、松の木蔭に挾箱を立させ、勇々と腰打掛け、兩人が申條によりて引捕へて決斷せんと、暫く時宜を見合せける。

○木村又藏井上大九郎仕ニ清正一

此時一人の大男、加藤が前に踞り、謹で申けるは、「我幼稚より力業をこのみ角力を嗜み、成長て國々を武者修行し、普く人と力量を競べぬれど、君の如くなる勇威なる人に出合ひし事なし。我は木村又藏と申す浪人にて、當國の山林に住し、年月を過侍る。先祖を申すもをこがましけれど、宇多天皇の末流、佐々木の一族なれ共、時移り世變りて、佐々木の家は榮え、木村家は衰微し、民間に星霜經る事數百年、姓氏更になきが如し。開運の期もあらば、絕たる家名を興さんと、日夜朝暮是を思ふ。今戰國の時なれば、君をえらび仕ん事かたきにあらず。我に一人の老母あり。此日病に臥て、死せん事旦夕にせまれり。今小谷の町に行きて醫を迎へんとすれども、彼醫師他國に行きて家にあらず。老母の病は醫師の歸を待ものかはと、心神甚ものうく、酒店に入りて酒をのみ、かたの如く沈醉し、此男と爭論に及べり。さりぬべき宿緣にや、思はず君

公用にて巡見の時なれば、見迯て去ん事能ず、「兩人共に召捕れ」と士卒に下知して取まきたり。彼浪人ども大きに氣色し、「我々兩人此所にて勝負をなすに、何のさまたげありて捕んとするや。其儀ならば汝と我が勝負を延し、先此者を打殺し、妨げを拂うて後ゆる〳〵と戰ふべし」と兩人ともに試合を止め、加藤が手下を相手とし、縱横無盡に切立れば、三十餘人の士卒ども、右往左往へ迯散たり。虎之助これを見て大きに怒り、「惡き奴原、いで我手並を見すべし」とて、三尺七寸ありける長光の大太刀拔はなし、兩人目がけ立むかへば、二人の浪人彌々怒り、「こは惡さけなる野郎かな」と、兩人一度に切先を並べ討てかゝれば、虎之助右へかはし左にはづし、或は附入又はすかし、二時計戰ひしが、三人ともに精神益加はり、飛ちがふありさまは猛虎の怒るがごとく、身をかはして切込む勢は飛龍に似たり。三十餘人の士卒ども、此戰を物見して、茫然と醉るがごとし。時に一人の大男、いかゞ思ひけん飛退て詞をかけ、「暫く戰を止め給へ、一言申したき事の候」といへば、又一人の小男も刀をそばめ引退き、「我も申上げたき一事あり、暫時戰をゆるし給へ」といふ。爰において虎之助兩人を嘖て申けるは、「汝等何れの守に仕る者とも知れず、みだりに當領內を鬧し鬪諍に及ぶ事、見遁すまじき狼藉にあらずや。我は當長濱の領主木下藤吉郎秀吉が臣、加藤虎之助淸正といふ者なり。主人の仰を蒙り、領分見廻

加藤虎之助
長濱領巡見

境に、浪人の喧嘩あり。其發り、一人の浪人身の長六尺餘、色白く髭青く、身に破れたる衣をまとへど、腰にはいかめしき大小を帶し、亂醉して樹の根を枕とし、前後を知らず臥たりける。一人の浪人は身のたけ五尺に滿ず、色黒く、眼圓く、是も同じく破れ衣を著し、酩酊として一歩は凸く一歩は凹く、彼男の臥たる傍に步行よりしが、いかゞしてつまづきん、眞うつ向にたふれたり。さて兩人ともに起上り、大に怒り、かの小男まづ罵て申けるは、「汝往來を憚らず、手足を伸て平臥をなし、人をしてつまづかしむる事奇怪なり。我と勝負をなして、討勝て後心のまゝに臥べし」といふ。又大男大きに怒りて申けるは、「汝何者なれば我うまく寢たる所を會釋もなく土足にかけ、熟睡の夢をさまし、剩へ我をさして、言葉をかへし、過言をなすは何事ぞや。我前に頭をさげ、あやまちを詫して通らば宥すべし。さもなくば一摑に殺してくれん」と、大手をひろげて立向へば、件の小男ます〳〵怒り、太刀引拔て向うたり。雙方たがひに白刃を拔持ち、上段下段打込切込、入違ふ刃尖の光は秋の夜の稻妻の如く、すれ合す鎬の音は帛を裂くに似たり。雙方劣らぬ剛勇なれば、勝負の色更に分らず、半時ばかり戰うたり。此時加藤虎之助、例のごとく領內地方檢分として、士卒三十騎引具し、此所へ來けるが、兩人が戰ふありさま、虎のごとく狼のごとく、其するどき事いふ計なし。虎之助心中に其勇壯を感じけれど

繪本太閤記　二篇卷之三

○加藤虎之助長濱領巡見

心合ふときは呉越親しみ、合ざる時は骨肉寇敵と成る。此時淺井備前守長政は、信長直に歸國すべしとおもひけるに、左はなくて暫く京都におはしければ、朝倉と申合せ、濃州岐阜の城を攻取り、勢にのりて上洛せんと、度々朝倉方へ申しつかはしけれど、義景は敦賀表の合戰、木下藤吉郎に十分に討破られ、進み戰ふ氣勢もなく、長政が計に合體せず。長政腕を撫てあせれども、勢たらずして終に大事の圖をはづせり。されば信長卿恙なく美濃國に入らせ給ひ、上方押へのためとて、長光寺の城に柴田勝家を籠らせ、安土の城に中川左馬介、同八郎左衛門に守らせ、長濱の城には木下藤吉郎をぞ居られける。木下藤吉郎彼地に入部せし日より、領分の百姓町人をなつけ親み、新に法令を定め、邪正を糺し、曲直を辨じ、政道明かなりければ、長濱領の百姓町人、よろこぶ事限りなし。されば敵國の亂暴狼藉を戒めんと、藤吉郎が旗本加藤虎之助・福島市松等、日毎に村里を巡見し、惡徒の者を捕へ正す。ある時江州小谷と長濱の鄕

繪本太閤記 二篇第三之卷 目錄

ふに、佐々木が勢三千計、切所を塞いで待かけたり。信長かくと見給ひ、坂井、池田、前田、佐々木に命じ「追散せよ」と下知し給へば、かしこまつて我一に會釋もなく、佐々木勢の眞中へ一文字に切て入り、縱橫無盡に薙立れば、集り勢の郷民原、何かは少しも支ふべき、四方へばつと迯散つたり。佐々木承禎あせつて下知すといへども、返し合すものもなく、這々のがれ、總江へこそ逃入りける。織田勢は迯る敵を追すてにして、徐々と退ける。爰に日野の城主蒲生右兵衛太夫秀賢、御迎として參上し、本道は一揆ばら蜂起して、往來隙どり難儀なるべしとて、自ら案内して、千種越の山路より進みける。此時山門の善住房、姿をやつし織田勢の跡に附てしのび來りしが、千種越の間道より退き給ふよしを聞き、嶮岨の山を先へ越え、九折なる切所の深き木陰に身を忍び、今や〳〵と待ちたりける。程なく前備の諸士軍卒、だん〳〵に行過ぎて、大將信長陣羽織を著し、黑き馬にまたがり、彼九折にさしかゝり給ふ。善住房待まうけたる事なれば、よくねらひて切て放つに、信長の運や強かりけん、羽織の袖を打かすつて、主は馬上に恙なし。信長卿の籏本これを見て大に驚き、「曲者ござんなれ、搦捕て骨を挫ん」と、てん手に得物追取て、そこよ爰よとひしめきけるを、信長大に是を制し、「其儘に打捨置よ」とて、見かへりもせず歩行給ふ。善住房これを聞き、舌を振はせ迯たりける。

以て山門と牒じ合せ、信長が歸路を討んとす。山門も兼て信長を惡み思ひぬれば、朝倉が催に附いて信長を亡さんと企てけれども、信長尋常の敵にあらず、猥に事を曳出し、永く當山の破滅とならんも詮なしと、衆議更に一決せず。爰に叡山杉谷の善仕房といへる惡僧あり、鐵炮の妙を得て、翔島を落し柳葉を貫く。此席に有て評定を聞けるが、進み出て申けるは、「今一山の大衆に、淺井、佐々木の與力を以つて、信長と戰ふとも、信長を討得ん事おぼつかなし。自然討もらして信長無事に歸國せば、限りなき患を當山に殘し、終には信長が爲に山門退轉に及ぶべし。我ひそかに思ふに、要とする所は信長只一人を殺すにあり。彼一人を討んとて、なまじひに五百七百の法師武者が向ひたりとて、信長が首を見ん事心もとなし。左ある危き計議を成さんより、我一人鳥銃を提げ山を下り、信長が歸る道に埋伏して、只一炮に打殺さんに何の仔細かあるべきぞや。若仕損じ生捕るゝとも討死すとも、是又我一人なれば、當山に於て信長が怨なし。これ兩全の謀にあらずや」といふ。一山の衆徒是を聞て大に悦び、「此謀極めて妙なり。若かくのごとくならば、當山の幸何事かこれにしかん」爰において善仕房、衣の下に腹卷をしめ、鳥銃を携へ、不敵にも只一人山を下り、信長卿の歸路を伺ひ居たりける。時に同月十九日、信長歸國の用意悉くとゝのひ、京都を立せ給ひ、船にて湖水を渡り、野洲河原に掛り給

連れて京都に歸りければ、信長大に悦び給ひ、藤吉郞を召出され、軍の始終を尋給ふ。藤吉郞承り、「朝倉義景自ら二萬五千餘騎を引率し、君の御跡を追奉らんと、金ヶ崎へ向ひ候へども、一戰に打破り、討取る首八千餘、味方の士卒一人も死傷の者なく、無事に引取り候事、是全く君の洪福に依る所なり。依て北國の土產、少々賢覽に入れ奉る」と、拾ひ集めし駿馬二十三疋、鐵炮三百七十挺、其外鎗太刀兜鎧等おびたゞしく御前に積置控ふれば、大將をはじめ參らせ、一座の諸士等大に感じ、「大事の退口を手勢にて向ふさへあるに、小勢を以て大敵を打破り、味方の士卒一騎も損ぜず、剩へ武具馬具兵器をかく迄多く奪取る事、古今未曾有の高名なり」と頻に感稱し給ひける。扨同五月九日、信長卿本國美濃國へ一先歸り給はんとて、其用意を催し給ふ。爰に近江の國司たりし佐々木六角入道承禎は、先年信長が爲に本城を追落され、石部の城に隱れ居けるが、織田淺井親族の因忽ちにきれ、合戰に及ぶを聞ければ、いかにもして信長を討ち、舊恨をはらさんものと、佐々木家譜代の浪人、近鄕の鄕民等を語ひ、鯰江の城に楯籠り、信長が歸路を支へ討取んと計りける。又叡山の衆徒等もかねて信長を恨み居ければ、信長滅亡せん事をしきりに思ふ所に、此度信長越前に亂入して朝倉を攻る事、是又山門の安からず思ふ其一つなり。朝倉は元來延暦寺の檀越にして、一山の衆徒悉く義景と親しければ、義景使者を

く、總敗軍と成りて、思ひ〳〵心々に落行けり。木下勢二千五百人、前後より指挾み、當るを幸に切崩し、二里計進んで引かへせば、夜はほの〴〵と明たりける。此戰敵を討つ事八千餘人、味方の手負一人もなく、勝鬨を揚げ、敵の捨たる馬武具拾ひあつめ、是なん越前の土産なりと勇みよろこび、惣勢合せて三千餘人、威風あたりを拂ひ、しづ〳〵と引取りしは、古今例少き後殿やと、稱ぬ人こそなかりける。

○信長歸城於岐阜

此時信長卿は恙なく京都に入らせ給へば、本道の軍勢、柴田、池田、森、明智等追々に京著し、君臣ともに無事を悅び、道々合戰の次第つまびらかに言上しければ、信長卿夫々に褒詞恩賞を下し賜ひ、其功勞を稱し給ふ。扨も木下藤吉郎、敦賀表の後殿に殘りとゞまり、今において音信も聞えざれば、信長殊に案じ給ひ、坂井右近、前田又左衞門兩人に三千餘騎の湜兵をさしそへ、木下をむかひの爲、本道より向はせ給ふ。坂井、前田命を令し、軍勢を引率し馳せたりけるに、江州坂本にて、木下藤吉郎勝軍を引きて歸國せるに出合ひたり。三將互に恙なきよろこびを述べ、信長卿の命を蒙り、迎ひの爲參りたるよし申ければ、藤吉郎君の厚情を拜謝し、打

字に切入りければ、朝倉勢、「すは敵の夜討するぞ、備を立て突崩せよ」と、中務景恒士卒を下知して戰ふ所に、木下藤吉郎時分はよしと相圖の狼煙を揚ると等しく、左右の峯々谷々に埋伏したる木下勢、一同に鬨を作り、構へ置きたる松明に悉く火を附けければ、其光白日のごとく、幾數十萬の軍勢一時に發しと見えて、貝鉦の音山谷に響き、すさまじき事云ふばかりなし。朝倉勢此體を見て仰天し、いとゞさへ寢惚えて戰ふ氣勢もなき上に、織田勢野に滿ち山にはびこり、一時に向ひしと驚きぬれば、ふせぎ戰ふ者一人もなく、我先にと逃げ出て、主討るれども敢て助けず、親圍るれど是を餘所に見なし、さん〴〵になりて敗走す。木下が軍兵、我劣らじと切立つる。中にも加藤虎之助、福島市松、片桐助作等を始めとし、群る敵を薙まはれば、討るゝ者數を知らず、血は流れて川を成し、屍は積で岡の如し。されども朝倉景鏡、同景恒、前波、黑坂が輩、物馴たる勇士なれば、味方を下知し、「夜討は極めて小勢なる者なるぞ。心をしづめ敵を防ぎ、同士討して味方を損ずな」と、呼り〳〵馳廻れど、大勢の崩れ立つたるくせなれば、勇氣ある輩も働く事心に任せず、右にたゞよひ左に泥み、四途路に成りて備も立てず。時に後陣の方に火の手を揚げ、卒に鬨の聲山谷をならし、木下が勇將蜂須賀兄弟一千餘人、左右に分れ、本陣を切り崩せば、大將義景大に驚き、馬を打て迯出す。今は防んとする兵一人もな

し」淺野彌兵衛命を領し、これも士卒を引率してうつ立ける。木下藤吉郎は城中に旗差物數多立てならべ、自ら一千餘人麓の方に陣を取り、旌旗鎗刀をきら〳〵しく立竝べ、時刻の至るを待たりける。

○藤吉郎破二朝倉義景一

扨も朝倉左衛門督義景は、淺井父子が内意により、信長を差挾んで討取んと、一族朝倉式部太輔景鏡、同中務太輔景恒、前波九兵衛、黑坂備中等、都合三萬五千餘騎、一條ケ谷よりもみにもんで敦賀表へ發向す。時に四月二十八日暮過る頃、朝倉の先陣遙に金ケ崎のありさまを伺ひ見るに、暗夜に物のあやめはわかねども、城中左右の山々谷々に、信長の軍勢夥しく陣を取り、篝の光空を照し、籏指物風にひるがへり、六七萬の軍勢屯せりと見えければ、「扨は信長いまだ退かず、此所に在とおぼゆるぞ。今宵は爰に陣を取り、味方人馬の勞を休め、明日かならず信長は退くべし、其時に追討せん」と、金ケ崎より十町計あなたに野陣を構へ、長途の勞を休めける。木下藤吉郎は朝倉勢の野陣せしと聞いて、我が計略成れりとよろこび、夜半過るころ、一千五百人悉く金ケ崎を發し、朝倉が陣前に至り、卒に鯨波を發し、鳥銃を轡せ、眞一文

友吉郎
後殿軍配

備中守御供にて、夜中松明をてらし、熊川を經て江州朽木谷を通りたまふに、朽木信濃守出迎へ、城中に招じさまぐ〜饗應なし奉り、同三十日京都に著給ひける。扨も木下藤吉郎は、僅に手勢三千餘人にて金ケ崎に止り、諸勇士を集め、自ら額を撫て申けるは、「我此所にて朝倉の大軍を引受け、希代の功を立て、味方の諸士が眠を覺すべし。斥候を以て朝倉が軍勢を伺ふに、今宵戌刻ばかりに此所に著すべし。我れ奇計を以て大軍の形勢を成さば、柔弱の義景猥にすゝまず、城外に陣を取り、長途の勞を休むべし。陣取に法あり、城を去る事或は十町、又十二三町にして宿陣すべし。是軍家に於て、大概定りし法令なり。義景究めてこれに寄ん。味方の兵一千人、城より十餘町去て、左右に分れ埋伏すべし。相圖の火をあげば、かやう〜に戰ふべし」と、蜂須賀小六兄弟を大將と成し、命を下せば、小六、又十郎兵卒を引て打立ける。「扨又、堀尾茂助、稻田大炊、青山新七、同小助、長江半之丞、川口久助、日比野六太夫等五百人の兵を率し、四方の山々谷々に分れ散じ、樹木の枝に松明をあまたくゝり附け、相圖の火をあげなば、一同に其松明に火を附け、紙にて旗指物を拵へ置き、これを持て火かげを徘徊すべし」堀尾以下の勇士下知を承り、軍卒を引きてうつ立ちぬ。扨淺野彌兵衛を召て、「汝五百人の士卒を引連れ、金ケ崎の左右の山所々に篝を多く焚き、大軍陣せし模樣を成し、敵の軍卒を疑はせしむべ

に及ばず、銘々手勢をまとめつゝ、思ひ〳〵に退きける。

○藤吉郎殿軍配

同月二十八日の申の剋、藤吉郎が軍配にまかせ、大將信長卿、森、佐久間、前田、佐々等三千餘騎にて、山越に間道を退き給ふ。本道は柴田、坂井、明智、池田、蜂谷、福富その外外樣の軍勢都合六萬餘騎、信長卿の御旗を押立て、長柄の鎗をたてつらね、備を亂さず引たりける。淺井備前守長政は、本願寺の門徒をかたらひ、其勢一萬餘騎、道の切所に待受け、鳥銃を飛し鬨を作りて支へたり。柴田勝家、坂井右近、明智光秀、池田信輝、何かは少しも猶豫べき、どつと喚て突立れば、淺井勢あしらひかねて、右往左往に逃たりけるが、本願寺の門徒等、土地案内の者なれば、爰を馳拔け彼所に顯はれ、鐵炮にて打すくめければ、さしも勇みし信長の軍卒、ためらひて進み得ず。此時淺井長政は、信長の旗本へ切込み、雌雄を決せんと、高き岡より伺ひ見るに、此軍中に信長はあらず、空しく籏のみ立たれば、扨は信長は他の所より退し物ならん、今は戰も無益なりと、軍勢をまとめ引取りければ、信長勢も又戰を好ず、しづ〳〵と坂本まで引取りける。信長卿は木下が軍配の如く、支る敵一人もなく、若州左柿に著し給へば、栗谷

ば、信長卿の心を悟り、言下に答へけるは、「君御威光強くして、手筒金ヶ崎の兩城忽ち陷り、北國恐く振ひ恐る。是を以て此たびの勝利に備へ、一刻も早く歸國成し給ふべし。前後に敵を受け候ては、合戰難儀なるべし」と言上す。信長莞爾として、老人の軍議尤なりとて、歸國の用意し給ひける。時に斥候馳歸り、「朝倉勢三萬計、義景も出馬と見えて、もみにもんではや府中迄來れり」と告ければ、信長の軍兵大に騷ぎ、朝倉が勢を迎へて戰はんといふもあり、早く退いて敵に前後を塞がれなと罵るもあり、陣中更に靜ならず。藤吉郎進み出て申けるは、「朝倉大軍にて後詰なさば、暫くも此所に止り給ふべからず。君の御旗ばかりを惣勢の中に押立て、本道より退くべし。君は旗本の勢を引率し、密に間道より御引きあるべし。淺井勢君の御旗を見る物ならば、喰止て戰ふべし。其隙に早く歸國し給はんに、何條事の候べし。某手勢を以て此所に止り、朝倉勢何十萬押寄候とも、是より先へは一人も通し候まじ。若此後殿仕損じ候物ならば、再び君に謁し奉らじ。一命にかけて戰ひなば、たとへ項羽、樊噲を將として向ひ來るとも、など二日三日はこらへでや候べき。御こゝろ安く思しめされ、しづかに歸國し給ふべし。御側の旁も後に心を用ひずして、君を守護し退くべし」と、さも勇ましく下知をなせば、信長卿をはじめ參らせ、並居る諸軍一同に、皆木下を讃美して、事鬧しき折なれば、とかうの論

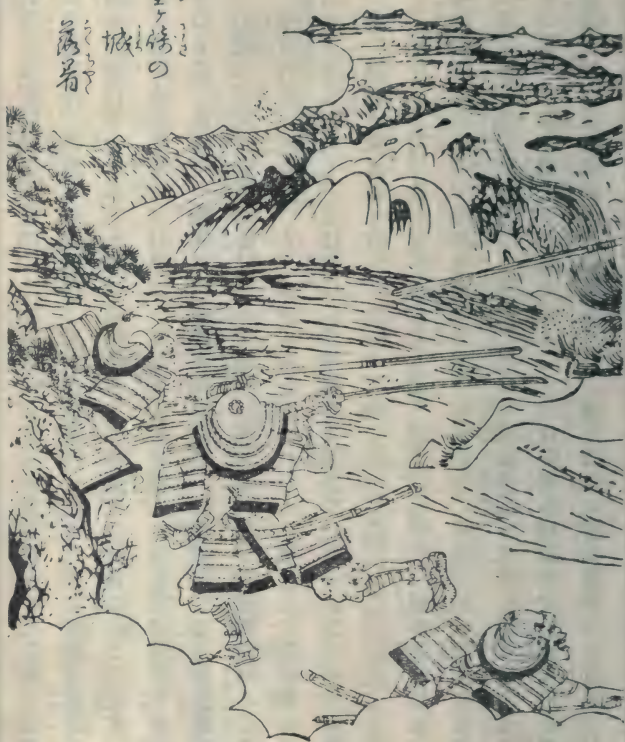
べき盟約あり。故に去る永祿十一年、信長長政緣者の睦びありし時、信長朝倉に對し、地をおかし軍を入るゝ事ある可らざる誓紙を、淺井父子に贈れり。然るに信長將軍をさしはさみ、台命と稱し猥りに軍を動し、越前へ亂入せる事、限りなき表裏なりと、長政其外淺井一家の輩皆信長を討て、朝倉の盟約にそむかじと罵りける。此時淺井の功臣遠藤喜右衛門、是を深く歎き、「此故にこそ先年佐和山の菩提院にて盟會の時、信長を討取るべしと再三言葉を盡し勸め參らせしに、御父子ともに許容なく、今信長の威勢强大に成り、數十萬の大軍を領し、將軍家の台命を頭に頂き、普く天下を征伐するは、龍の雲を得たるがごとし。此時に至て當家わづかに半國の兵を以て信長に敵對せん事、自ら滅亡を招き給ふにあらずや。信長に因を深くむすび、朝倉の盟約を變じ、當家長久のはかりごとこそあらまほし」と、さま〴〵諫め止むれど、長政父子曾て承引なく、軍勢を催促し、信長が歸路を討か、早く進んで後にせまるべしと、其用意區々なり。去程に信長卿の陣中、淺井父子朝倉に力を合せ、差挾で攻るよし、とり〴〵に評議し騷しかりければ、信長卿松永彈正久秀を近くまねき、進退の計を尋ね給ふ。是は松永信長に隨ひ陣中にありといへども、信長曾て心をゆるし給はず、今淺井後に發て信長卿難儀の合戰なれば、態と松永に進退を尋問ひ、久秀が本心を探り見給ふ。松永元來邪智深き老功の武者なりけれ

を得給ふべし」と申ければ、信長此議に同じ、使者を以て開城を勧めけるに、城中も所詮籠城叶ふべしとも思はねば、先城を開いて命を全くし、重て計議を成さんものと評議一決し、開城すべき旨返答に及びければ、信長卿下知を傳へ、四方の攻口を退かしめ、瀧川彦右衛門、山田三郎左衛門兩人を城中に遣し、改めて城を受取しむ。中務景恒、慇懃に城を渡し、士卒を引具し、府中をさして退きける。爰において手筒ケ峯、金ケ崎、二日の内に落城しければ、信長の軍勢物はじめよしと、勇まぬ者はなかりける。

○信長勢敦賀表退去

越前第一の要害、手筒ケ峯、金ケ崎の兩城、二日の内に落城しければ、信長卿御よろこび限りなく、諸軍勢勇み進んで、直に奥へ亂入し、義景を討滅さんと議せられけるか、忽ち禍後に起り、北征心に任せがたし。其故は、江州小谷の城主淺井下野守久政、同備前守長政父子信長卿に親族の因をなすといへども、去年將軍の御所造營の期より、互に隔心ありて、動不快の模様なりしが、今度信長上洛ありて、不意に越前へ出馬せられければ、朝倉と相挾んで、信長が後を討んとす。此計議少しくは其謂なきにあらず。もと朝倉と淺井とは、兩家互に相扶く

朝倉家の勇士三段彈七郞、同四郞左衞門、上田兵部、眞木五郞左衞門、中村兵庫、富田中務、石田新左衞門、前波藤五郞、菅野六郞左衞門、岩井彥左衞門、鷲尾三郞右衞門、水間大八郞、山本權左衞門、萩原十左衞門等を始めとして、名ある勇士五百餘人、城戶口にて討死す。其隙に惣軍城中に引入れ、城戶を固めて防ぎければ、信長勢も終に附入る事あたはず、兵を引上退きける。此時信長方にも森三十郞、三輪與市郞、桑原源左衞門、仁羽藤藏、柴田源五郞など、聞ゆる剛士三百餘人討死し、其日の軍は止にける。明れば四月廿六日、信長卿惣軍を引率し、金ケ崎を追取卷き、喚き叫んで攻られける。城中も爰を破られじと、きびしく防ぎ戰へども、きのふの戰に名ある勇士悉く討死し、今は僅に二千餘騎にて籠りたれば、いかんぞや信長の大軍を防ぎ支ふべき、既に落城と見えたりける。此時木下藤吉郞、信長卿の御前に出でて申けるは、「今は早此城こらへつべうもおぼえ侍らず。此時君城中へ使者を以て開城を勸め給はゞ、城兵皆九死を出て一生を得し心地にて、即日此城味方の手に入るべし。若力攻に攻附給はゞ、城將中務景恒、死地に入て防ぎ戰ひ、一兩日も支へなんに、朝倉義景、大軍にて後詰を出さば、頗る落著隙どるべし。又一つには君北國を征し給ふに、殺伐を好み給はず、仁惠を以て將士人民を撫育し給ふと風聞せば、是又北征第一の計略なり。義景後詰の勢を出さざる前に、早く當城

金ヶ崎の城落着

ひなく、ゑい〳〵聲して攻寄れども、元來此手不勢なれば、防ぐ者一人もなく、一同に乘入つて、はや火を掛て燒立れば、三方の寄手も悉く城戸を破り、塀を越え乘込たり。大將寺田采女、津浪甚四郎も、手いたく防ぎ戰ひけれど、今はいかんぞ敵すべき、皆自害して死したりける。殘る兵ども、或は討れ又は落失せ生捕れ、四時計に手筒ヶ峰落城しければ、信長深くよろこび給ひ、諸士の働を稱し給ふ。

○金ヶ崎城落著

さる程に中務少輔景恒は、手筒ヶ峰の後詰して、木下が勢と戰ひしが、織田勢金ヶ崎を攻むる由を聞き、大に驚て取てかへす。其道にて、佐久間信盛、森三左衛門、池田信輝五千餘人、景恒が勢を取圍み、のがすまじと戰うたり。中務少輔景恒、敵の計に落入たりと思ひ、士卒を一手に成し、勇を震うて血戰し、一方を切崩し、圍を出て味方を見れば、一千斗に討成されけれど、勇氣を落さず、自ら殿して金ヶ崎へと引取りける。佐久間、池田、森の三將、跡に附て追駈け、附入にせんと進む所に、金ヶ崎の城中よりこれを見て、城戸を開き討出で、景恒をたすけ相支へ、兩家の勇士互に命を輕んじ名を重んじ、必死に成りて戰へば、死傷の者數を知らず。

がず、矢頃に敵を引うけ、弓鳥銃を打出し、きびしく防ぎ支へければ、木下が勢態と猶豫て進まず。此時金ヶ崎に籠りたる中務少輔景恒、敵手筒ヶ峯を圍たると聞ければ、さらば後詰して敵を駈散さんと、二千餘騎を引率し、揉にもんで押來り、木下が勢の後より、どつと喚て切立ければ、木下忽ち後陣を先陣と成して、景恒が勢をむかへ相戰ふ。城中の兵等、後詰の勢木下が後を討と見てければ、疋田右近、九岐左介五百餘人を引率し、城戸を開て一文字に切て出て、木下が勢をさし挾で攻立ければ、木下勢さん〴〵に亂れ敗走す。此時佐久間右衛門尉、森三左衛門、池田勝三郎五千餘人、卒に起りて金ヶ崎の城を攻む。中務景恒是を聞て大に驚き、木下を打捨て、自後殿して金ヶ崎へ引かへす。城兵はかゝる術ありとも知らず、勝に乘て木下が勢を追ふ所に、坂井右近一千餘人にて城兵の跡を斷切り、柴田勝家二千餘人大手の方を攻上れば、南の手より松永彈正二千餘人、北の手より和田伊賀守、是も同じく二千餘人、同時に鬨の聲をあげて、唯一もみと攻立たり。これを見て僞り負たる木下が勢、大返しにかへし、坂井右近とさし挾で切立る。其急なる事眉に火の附きたるごとく、疋田、九岐が軍勢討るゝ者麻のごとし。疋田、九岐も亂軍の中に命を落し、二百餘人討死し、殘兵はちり〴〵に成て落失たり。時分よしと信長卿、丹羽五郎左衛門、明智十兵衛、佐々内藏助五千餘人、搦手へ攻來り、彼廣沼を猒

一の勇士朝倉中務少輔景恒を大將として、逞兵勝つて三千餘人籠城し、又同郡手筒ヶ峯に新に城を築き、寺田采女、疋田右近、津浪甚四郞、九岐左介等を大將として、是も剛兵一千五百餘人楯籠り、金ヶ崎とたがひに相扶けて信長を防んとす。信長其備あるを見て、諸將を集めて軍の評議有けるに、明智十兵衞光秀申けるは、「某曾て朝倉が家に客たりし時、つら〳〵彼家の有樣を見るに、義景柔弱にして諸士も又智勇の者なし。今此金ヶ崎に籠りたる中務少輔景恒は、越前隨一の勇將ともいふべし。此者を討取る時は越前を征するに甚だ利あり。先手筒ヶ峯に押の勢を置き、大軍を以て金ヶ崎を攻べし」といふ。木下藤吉郞進んで申けるは、「中務景恒智勇の將にして、金ヶ崎の要害を守らば、容易に落城すべからず。先手筒ヶ峯の城を今日一日に攻落し、敵の勇氣をくじくべし。其計策はかやう〳〵に攻べし」と、光秀にさゝやきければ、光秀打諾き、「其計甚だ妙なり。早く行ひ給ふべし」とて、明智、木下兩人、信長卿に計略の次第を言上し、手分を定めて、思ひ〳〵に手筒ヶ峯の城へぞ向ひける。抑此手筒ヶ峯といへるは、三方は平地にして、搦手は廣沼にて、人馬の駈引自由ならず。城中切所を賴んで、搦手にははか〴〵しき備もなく、皆外の手を固めける。時に木下藤吉郞、三千餘人二手に備へて、大手の方より攻寄せ、鬨を作り鐵炮を放ち、無二無三に攻かゝる。城中兼て期したることなれば、少しも騷

繪本太閤記　二篇卷之二

○藤吉郎計略陷二手筒ケ峯城一

永祿十三年、年號改元ありて元龜元年と成る。此時信長卿勢州を平定し、其威名鄰國に震ひ、敢て敵對する者なし。爰において越前の朝倉義景を誅戮せんとて、二月下旬、上洛して將軍に謁し、朝倉征伐の台命を申受け、暫く在京して京都の仕置等を沙汰せられけるに、三好松永が惡政をあらため、邪を正し直を勸め、もつぱら仁政を行ひ給ふ。彼惡政に久しく馴たる町人百姓、俄に政道改まりければ、悅ぶ者半にして、よろこびざる者も又半なり。たとへば病る者に艾灸するがごとし、病根を治するといへども、其苦惱を苦しむ。いかなる者かしたりけん、信長卿の本陣半井蘆菴が門柱に、落首して押たりける。

ながらへばまた信長や忍ばれんうしと三好ぞ今は戀しき

さるほどに信長卿、畿内東山の軍勢十萬餘騎を引率し、四月廿日京都を出馬ありて、廿五日越前敦賀の府に著したまふ。朝倉義景兼て防戰の備を成し、當府金ケ崎の城には、越の前州第

繪本太閤記 二篇第二之卷 目錄

を以て恨を殘す事なし。仔細なく親しむべきを、剰へ本願寺に屬するこそ奇怪なれ。よしよし、己正具、本願寺諸共に粉のごとく成し捨てん」と怒り給ふを、柴田、丹羽、木下、明智さまざま宥め參らせ、惣軍をまとめ、先京都へ上り給ふ。國司父子も半途まで送りまるらせ、目出度入洛し給ひ、同十一月十三日、本國美濃に歸城ありける。

扶助も之なく、剰へ御悦の使者をだに到來せず。是將軍家を蔑如にし奉り、三好に同じきふるまひなりと、信長に令して當國を征伐し給ふ。爰を以て信長が軍馬を當國に加ふる事、私の事にあらず。然るに聊も無道不義の合戰をなし、軍民を苦しめん事是あらんや。退て思慮を加ふるに、數日の對陣、軍民の歎き少きにあらず。國司將軍家へ出仕をだに成し給ふ者ならば、信長と和睦ありて一國の民を保んじ、北畠の家を治め、長久の計をなし給ふべし。右領承あるにおいては、圍を解て歸國すべし。又信長と勢を爭はん所存に候はゞ、大軍直に攻討ち、台命の旨に任すべし。此兩條よく〳〵思惟これあり、返答承り候べし」と演ければ、具教入道、一族宗徒の者に相議して、「信長の子息の內一人、信意の養子に賜らば、以後親族と成りて、兩家の榮を祈らん」と返答しければ、不破、菅谷の兩士城を出て、信長に此旨を達す。依之信長の次男茶筅丸を、北畠の養子として城中へ送り、兩家の和平調ひしかば、四方の圍を解て、歸陣の催しとり〳〵なり。爰に四國八田の城主楠七郎左衞門尉正具は、先に謀計を以て信長が大軍を退しめ、事は前編に見えたり。此度も夜討を成して本陣を閙しければ、國司と信長と和睦調ひしと聞く、信長われを深く惡み給はん事を恐れ、八田の城を捨て、攝州石山本願寺にぞ赴きける。信長是を聞て大きに怒り、「楠正具我軍を騷す事度々なれども、國司と共に降參せば、合戰の習、勝敗

○藤吉郎智伊勢國平定

木下藤吉郎、國司父子其外一族等が妻子どもを生捕り、本陣へ參りければ、信長卿大に喜び給ひ、藤吉郎を近く召され、勢州平定の謀を問ひ給ふに、藤吉郎謹で申けるは、「北畠と力を以て爭はんに、實に是勞して功なきなり。今生捕る所の婦人三十餘人を悉く城中へ送り歸し、此序に威を示して和平を說ば、國司を始め北畠一家の者、皆君の寬仁に服し、忽ち勢州平治すべし」と。信長是に隨ひたまひ、不破河內守、菅谷九右衞門兩人を使者として、彼生捕を召連れ、大河內の城へ遣しける。勢州の國司具教入道父子其外の一族等、多藝谷の妻子を敵に奪はれ大きに驚き、城中騷動大方ならず。此時信長より生捕の婦女を送り來り、「國司に對面して一言を申さん」と呼りければ、具教入道再び驚き、先妻子どもの無事に歸る事をよろこび、城門を開きて使者を招き、對面して信長の趣意を聞く。不破菅谷申けるは、「昨夜味方の將士多藝谷を襲ひ、國司一家の妻女を生捕り、人質と成して戰はんとす。是信長が心にあらず。故に今悉く是を送つて、信長が本心を國司に告ぐ。抑信長、北畠の一家に對し私の恨なし。賤くも將軍家の台命を領じ、三好を討て足利を再興せんと欲す。然るに國司父子居ながら勢州を領し、將軍御上洛の

ねば、城兵悉く此手にあつまり、味方を助け防ぎける。此時淺野彌兵衛、堀尾茂助、追手の方に鬨の聲響きわたれば、時分はよしと、五百人を二手にわけ、堀尾茂助二百五十人を引て搦手より城中に亂れ入るに、支る兵士一人もなく、たま〳〵出合ふものとては老人婦女の類にて、物の川に立つ者なし。茂助が勢本丸に馳入り、國司父子の妻子、其外一族共の女房をこと〴〵く生捕ける。淺野彌兵衛は、堀尾が搦手へ亂れ入たるを見ると等しく、彼繁りたる樹木へ一時に火をさしければ、折節朝嵐きびしく吹て、黑煙城中に吹下し、すさまじき事云はん方なし。城兵これを見てあわて騒ぎ、本丸へ入らんとすれば、堀尾茂助本丸を堅め、鐵炮を雨の如く打出せば、いとゞさへ周章騒ぐ城兵、肝をちらし魂を失ひ、手のまひ足の踏所をわきまへず。木下藤吉郎持口より此の火の手を見て、「すは今こそ一息に乘入よ」と采配追取下知すれば、二千餘人の軍卒、大きに鯨波を發し、旋風のごとく攻上り、城戸を破て亂入り、周章ふためく城兵を、切伏薙ふせ追まくれば、主將大河内宮内少輔、森本飛彈守、はふ〳〵道を求て迯出ける。木下藤吉本丸に入りて生捕を算ふるに、老若婦人都て三十七人、藤吉郎淺野、堀尾に城を守らせ、自ら生捕を引つれ、信長卿の本陣へこそ急ぎける。

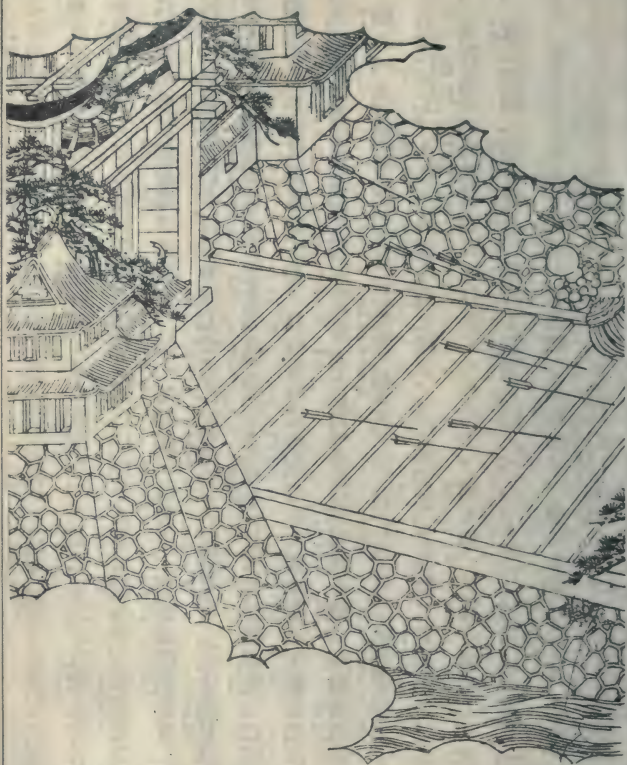
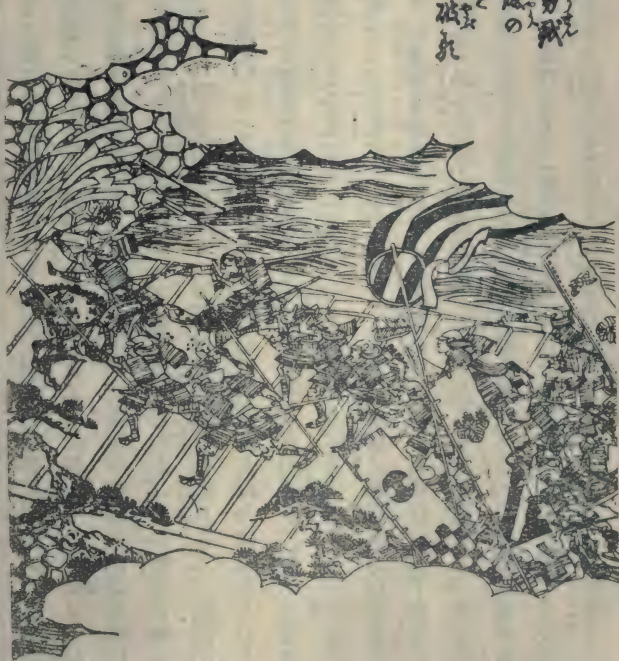
滿々として、沖のかもめ、飛かふ千鳥、さながら畫きなせる如く、右は峨々たる岩壁に、松柏いや深く生繁り、猿鹿の啼く音に腸を斷つ。勢北第一の景地なれば、國司入道不知齋遊山の別業なり。しかも要害堅固にして、防ぐに便ある城地なれば、國司父子は、妻女一族宗徒の女房達、小兒老人を此城に籠置き、大河内宮内少輔、森本飛騨守兩將、二千餘人にて是を守護す。木下藤吉郎此城を襲ひ落し、國司父子一族の妻子を奪ひ取んと、十月二十三日の夜、淺野彌兵衞、堀尾茂助に究竟の兵士五百人を引率せしめ、間道より進んで、彼城の右手に繋りたる山あるに忍び登り、燒草を用意して、時刻の至るを待置き、其身は手勢二千餘人、本道よりすゝみ、龍藏庵山の尾前より、自ら眞先に進んで上りけるが、二十四日の曉、城の追手の堀際に至り、一度に鯨波を上げたりける。元來此城嶮岨を頼み、防戰の備もはかぐ\しからざりけるに、此程織田勢も退屈して、墓々しき合戰もあらざれば、いよく\怠り、城中うまく寢入けるに、俄に鬨聲山谷に響き、敵はや枕上に攻寄せければ、「すはこそ敵の寄たるぞ。防矢射よ、鐵炮に玉をこめよ」と、うろたへ騷ぐ事大方ならず。大將大河内宮内少輔、森本飛騨守等、士卒を制し持口を固め、弓鐵炮を打出し、爰を破られじと防ける。木下藤吉郎、態と急には攻上らず、空鐵炮を鳴し鬨を作り、大軍一度に攻上る形勢を成しけるに、朝霧深く立蔽ひ、寸尺の間も見えわか

悉く搦捕り、密に首を刎にける。信長卿、今度の城攻、木下が武勇衆に越しを大に感じ給ひ、「秀吉が阿坂の惣門を打破りし勇壯は、いにしへ朝比奈三郎義秀が、鎌倉御所の南門を破りしにもおとるまじ」とて、深く稱美し給ひける。

○藤吉郎取二多藝谷一

扨も信長の大軍、國司の本城大河内に押寄せ、十重二十重に取圍み、息をも繼ず攻たりける。元來此城究竟の要害に、國司北畠具教入道不知齋、息男左中將信意、次男長野次郎長教を主將として、一族郎等三萬餘人、堅固に籠城したりければ、左右なく攻落すべきやうもなかりける。されど共寄手大軍なれば、新手を入かへ、晝夜隙なく攻ける程に、池田勝三郎信輝が攻口、搦手の方を乘崩し、終に惣軍城の外廓を攻取り、國司の軍勢は二の丸に楯籠り、きびしく防ぎ戰ふ程に、爰にて數日勝負の色も見えざる所に、八田の城に籠りたる楠七郎左衞門尉正具、奇計を以て信長の本陣を夜討し、大きに織田の軍を騷しければ、寄手も今は攻あぐんで見えにけり。爰において木下藤吉郎一計を施し、多藝谷の城を乘取んとす。抑此多藝谷といへるは、大河内の本城より東南に當つて嶮岨の山あり、其山の半腹に城を構へ、絕頂に觀をまうけ、左は滄海

亂れさわぎ、討るゝ者麻の如し。本丸へ引籠り、二の城戸を固めて防ぎ戰ふ。信長これを見て、明智光秀、坂井右近、森可成等に命じ、急に四方より攻討しむ。是によつて城中大きに苦み、大將含忍齋一族を集め計議しけるは、「最早この城こらへつべうも覺え侍らず。所詮死を究めし合戰、いたづらに士卒の手に命を落さんより、僞つて信長に降參し、對面の時飛かゝつて指ちがへ、冥途の供に召つれなば、いかばかり嬉しからん、汝等いかに所存ありや」と尋ければ、皆一同は此計を善とし、九兵衛爲之矢倉に上り、降參のよし呼りけるに、信長、「先に山路彈正が僞つて降參せし如く、これも又僞なるべし。只一もみに攻潰せ」と、惣軍勢に下知し給ふを、諸老臣皆諫て云く、「城將力盡て降を乞ふ。君是を宥し給はずんば、勢州一國の城は皆降參する者なく、必死と成て戰ふべし。然る時は容易に征伐成難からん。只仁慈を以て謝宥あるべし」と申ければ、信長卿も是に同じ、大宮が降參を寛し給ふ。時に藤吉郎、信長卿に私語て申けるは、「君御賢察のごとく、大宮父子の降參眞實にてはあるべからず。君も僞つて降をゆるし、大和の國にて所領を與へ、直に彼國へ送り遣し、道にて誅戮し給ふべし」と申ければ、信長卿、「我も左こそ思ふなり」とて、大宮父子一族十餘人、信長卿の對面なく、直に大和へ赴くべしと、送りの武士是を催促す。大宮入道案に相違し、すご／＼大和へ赴ける道にて、力士數十人大宮を待受

秀吉部勇戦
阿坂城の
搦門を
破る

渡守、島田所之助等五人を上洛させ、藤吉郎に代らしめ、召つれて出陣し給ふ。其日は桑名に著し給ひ、同廿六日阿坂の城へおしよせ、鬨を作つて攻たまふ。此城を守る大將は、勢北第一の勇將大宮入道含忍齋、嫡子大之丞景連、次男九兵衞爲之等、僅に一千餘人籠城し、織田の大軍を防んと、矢石を備へて待居たり。信長の先陣木下藤吉郎、ひたかぶとの勢八百餘人、どつと喚て堀際へ押寄せ、無二無三に攻上る。城將大宮大之丞は近代無雙の精兵にて、惣門の櫓に上り、近よる敵をさしつめ引詰め、矢つぎばやに射たりけるに、更にあだ矢はなかりけり。さしも勇みにいさんだる木下が勢、死傷の者數を知らず。大之丞一人が矢さきに射しらまされ、進みかねて見えたりける。藤吉郎是を見て大にいかり、あぶみふんばり大音にて、「弓射る敵は敎經なるか、爲朝なるか、唯一人の矢先に恐れ、見苦しくも攻口を退く事のあるべきや。かゝれやかゝれや、進め〳〵」と、扇を開き味方を招き、まつ先に馬をかけ出せば、木下が士卒此下知に勇氣をまし、ゑい〳〵聲にて攻上れば、今は此城こらへがたくぞ見えにける。大將大之丞安からず思ひ、大の尖矢きり〳〵と引しぼり、木下が胸板を的に切て放つに、藤吉郎が運や强かりけん、弓弦ふつつと切てねらひ下り、藤吉が高股に中る。藤吉郎事ともせず、其矢を取つてかなぐり捨て、項羽樊噲が勇を露し、なんなく城戸を打破り、一同に亂入す。城兵さん〴〵に

父母の詫言に免じ、穏便に濟し給へかし」と、とも〴〵に執成つゝ、からうじて事濟たり。扨も新左衛門夫婦は、市松が不敵のふるまひに心を苦しめ、此兒の生立とても桶屋など業とする者にあらず、武家に事て人とならば、自然高名譽をなす事もあらんとて、夫婦相談を定め、彼藤吉郎、年頃市松を愛し訪ひ來れば、此人を賴まんと、其來るを待けれど、此時木下藤吉郎須股に砦城を築き、自他の事に附ていとまなく、新左衛門方へも來らざりければ、市松を伴ひ須股の城へ赴き、藤吉郎にあひてしか〴〵のよし物語り、武家の奉公を賴みければ、藤吉兼々市松が勇氣あるを懇望しければ、大に喜び市松を城中にとゞめ置き、是も竹中半兵衛が弟子と成し、劍術兵學を教へけるに、出藍の才ありて、終に福島左衛門太夫正則とて、豐臣家の柱礎となり、藝州廣島の大守と成れり。

○藤吉郎勇戰破₂阿坂城惣門₁

永祿十二年秋八月廿日、信長卿勢州を征伐せんと、大に軍を發し、尾濃の勢七萬餘騎、伊勢路をさして進發す。木下藤吉郎は、去年より帝都の守護代として、都に留り居たりしが、信長卿、今度の合戰、木下にあらずんば勝利覺束なしとて、織田御長丸、佐久間信盛、村井民部、林佐

○福島市松之傳

木下藤吉郎、いまだ足輕にてありし時、或村里を往けるに、貧しげなる桶屋の内に、二歳斗の小兒の腰に太き索を附け、石臼の大なるをくゝり附たりけるが、彼小兒此石臼を物の數とせず、ひきずりて這まはりけるを見て、其怪力を愛し、常に此家に訪ひ來りて此小兒をいたはり、折節の贈り物なども心をこめて送りければ、彼桶屋新左衛門夫婦、藤吉郎を厚くうやまひ、主人のごとくもてなしける。此小兒名を市松と呼で、其力あくまで強く、骨太く長高く、大食にて酒をこのみ、大膽不敵の荒童子なりければ、近鄰の男女大に恐れ、何さま是は世にいへる鬼子なるべしとて恐れあへり。市松七歳の時、同じ村なる小兒といさかひをなし、おのれより四五歳も長ぜし者を大地へ打附け、足を上て踏附ければ、頭よりおびたゞしく血ながれ、喚きさけぶを、拳を以ていたく叩き、打殺さずんば止まじと罵りけるを、父母聞つけあわてふためき、漸に伴ひ歸り、歳に似合ぬ大膽の行狀なりと、さまぐ\折檻なしけるところへ、相手の方には以ての外に憤り、「此まゝにては濟すまじ。地頭役人へ訴へ、急度糺明成すべし」と怒りければ、新左衛門夫婦大に心を痛め、いろぐ\と申宥め、詞を盡し詫けるに、鄰家の者寄集り、「小兒の事なり、

信長卿に忌惡まれ、一刀に切殺せり、我命を返り討ぞ、我命此場にて返り討ぞ、我命

征し、終には天下を呑んと計給ふ。其臣下たる木下藤吉郎に、天下を知るべき相貌ありと、信長卿の聞し召さば、よろこび給ふべきか、悪み給ふべきか。終には主人木下殿信長卿に忌惡まれ、立身の妨と成るべし。我是を思ふ故に、七太夫が舌の根をとめんため、一刀に切殺せり、私の恨ありて殺したるにはあらず。されども我を敵なりと思はゞ、此場にて返り討ぞ、我命は主人の爲にこそ捨るなり、汝がためには捨てざるぞ」と、刀おつ取立揚れば、助作大きに感心し、「至極の格論、我甚だ誤れり。君の爲に身を捨るは、我も足下におとるまじ。相互に隔心なく、諸ともに忠義を盡すべし」と、兩人ともに心とけ、打伴はれて須股の城へ歸りけり。日を經て藤吉郎此事を聞き、虎之助、助作兩人を近く招き、「汝等はまだ少年の身として忠勇の志深く、我において滿足せり。兩人が生先こそたのもしけれ」と、かへすぐ〳〵感稱し、扨、「此後は某をいかに噂する者ありとも、其儘に打捨置べし。死生命あり富貴天にあり、我實に天下を知るべき福あらば、いかに云ひさまたぐる者ありとも、志を遂でやはあるべき。一小人の舌頭にさゝへられ、中道に廢れるに天下を知る器にあらず、以後心を廣く持つべし」とさとしければ、兩人其大量を感心し、愈〳〵心服したりける。

りたれ」と云ふ。助作怪しき事に思へども、押かへして問べきにもあちず、師に逢て聞ば知べしと思ひ、助作は七太夫が方へ急ぎ行き、虎之助は須股の方へ歸りける。此時虎之助十六歳なり。扨助作は何心なく、七太夫が方へ來り見れば、こはいかに、師匠七太夫肩さきよりけさにかけ、兩段に切はなされ、鮮血床にあふれ、朱に成りて死したりけり。助作大きに仰天し、是必虎之介が所爲なるべし、遠くは行くまじ、追かけて只一討と表へ出て見てければ、加藤虎之助、以前の村口に二王だちにぞ立居たり。助作さればこそと、手をあげてさし招けば、虎之介悠々とたち戻り、七太夫が家に來る。助作虎之助に向ひ、「汝今我師に逢て物語せしといひしに、爰に來て見れば此ごとく刃殺せられ、既に事きれたり。何者の所爲なるや、汝しらずと言ふ事あるべからず。思ふに是必ず汝が仕業成るべし。いかなる恨ありて七太夫を討たるや、其仔細を申すべし。師匠の敵其席を立すまじ」と、刀に手をかけ詰よせたり。虎之助助作をはつたと白眼み、「敵討とはをこがましゝ。七太夫を殺したるは、推量のごとく某がしわざなり。心をしづめ我言をきくべし。汝も我も等しく木下が家臣なれば、忠義を思ふ心も又等しかるべし。今天下悉く亂れ、國々の武將互に爭ひ、剛は弱を征し、小は大に役せらる。其專とする所は皆天下を掌に握り、四海の主たらん事を欲す。就中織田信長卿、義昭公をさしはさんで國々を

滅亡し、助作も當歳にして父におくれ、母に抱れ深き山林に忍び居たりけるが、年經て後、木下藤吉郎須股在城の節、彼母子を見て不便の事に思ひ、城中に伴ひ歸り養育するに、其小兒生得尋常ならず、才智衆に越しかば、末たのもしくいたはりけるに、果して藤吉の眼力に違はず、後東市正且元とて、豐臣家柱石の臣となれり。人は其弱冠の行狀を見て、後年の忠勇を知るべし。助作が軍學の師は、須股川のかたほとりに獨住する七太夫といへる叟なり。此七太夫は元來明の潁州の人なりけるが、事ありて日本に來船し、毛利家へ仕へたりしが、不幸にして用ひられず、樣々漂流した美濃の國に來り住す。此人軍學兵書の旨に委しく、助作是が門に入て兵書を聽き、陣法をならふ。或時七太夫助作に語りけるは、「汝が主人木下藤吉郎、眼中重瞳ありて其光人を射る、今小身卑賤なりといへども、つひには天下を掌にすべし。汝忠を盡して後榮を待つべし」といふ。助作この時十四歳なりけるが、此言を聞てうれしき事におもひ、須股の城に歸つて、加藤虎之助に此事を物語す。虎之助是を聞て、さる事もあんなれとて強て問ず。其翌るあした、助作例のごとく彼七太夫が許に往んとて、其村口に至りけるに、加藤虎之助に行あひたり。助作詞をかけ、「いかに虎之助、何方へ赴きたるや」虎之助答へて、「汝が師七太夫が許に行きて、きのふ汝が物語せし事の、實なりや僞なりやを尋ねにこそ參

加次田隼人

松原内匠

堀尾茂助

浅野長政

片桐助作

豐臣家與業
勇士之像
長江半之烝
日比野六大夫
河口久助
青山新七
蜂須賀小六
稲田大炊
加藤虎之助
福島市松

山新七、同小介、河口久助、日比野六太夫、長江半之丞、加次田隼人、松原内匠、堀尾茂介、淺野彈兵衛等、みな一人當千の勇士なり。就中其名天下に高く響き、遠く異邦に鳴ものは、加藤虎之助、福島市松、片桐助作等に並ぶ者なし。抑加藤虎之助淸正が素姓を尋るに、大職冠鎌足公の苗裔左大臣魚名公、利仁將軍の後胤民間に零落する事數代にして、是も尾州愛智郡中村に住居しける鄕士五郎助が一男にて、秀吉の母方の重從弟なり。秀吉の母は持萩中納言保廉卿の息女なれども、其母は獵師治太夫が娘なり。虎之助が父と秀吉の母とは、民間にての親しき從弟なり。先に藤吉郎須股に城を築き、夫の城主と成し時、父母親族を招きけるに、彼五郎助が一子虎之助、そのとき十三歲、生得剛勇大膽にして少細の事に拘らず、木下藤吉郎が出身を常にうらやみ、いかにもして武家に仕へ、勇々敷働をなさんものと、日頃月ごろ願ひ居りしに、此時須股より藤吉郎が招くをうれしき事に思ひ、五郎助夫婦は中村に留りぬれども、虎之助は藤吉郎が招きに從ひ、須股にぞ赴きける。藤吉郎、虎之助が生質勇にして直なるを愛し、城中にとゞめ、美濃の浪人竹中半兵衛重治を師として、軍學劍術を學ばせけるに、其才智群に秀で、竹中も是を讚し、我及ばざる事遠しとて、感歎する事度々なり。又片桐助作といへる者あり、其先淸和源氏にして、美濃の國主土佐賴藝の流なりしが、齋藤が爲に氏族こと〴〵く

繪本太閤記　二篇卷之一

○加藤虎之助之傳

君子の身は小にすべく、大にすべし。丈夫の志はよく屈し、能伸る。韓信胯下の辱を受け、張良は履を進むる謙あり、衞青は猪を牧するの奴なり、樊噲は狗を屠る輩なり。人を用ふるは木を用ふるがごとし、寸朽を以て連抱の材を棄る事なかれ。されば織田彈正忠平信長、人を用ふる大度ありて、尾州中村の住人筑阿彌が子木下藤吉郎を用ひて、今川義元が大敵を桶挾間の一戰に破り、美濃國に亂入して齋藤龍興を討亡し、將軍家を扶けて佐々木承禎を追ひ、三好の剛敵を碎き、其外勢北にむかひて安濃津神戸を降し、其身尾濃の兩國を鎭め、兼ては帝都の守護として天下の政務を攝行ひ、英名を海内に振ふ事、悉くみな木下藤吉郎が方寸より出でたり。理なるかな、秀吉公終には四海を併呑し、天下を掌握し給ふ洪福の備り給へば、誰かよく敵對して頸を爭はんや。向ふ所悉く天の助けありて、瓦のごとく解け芥のごとく散じ、草に風を加ふるごとし。其興業をたすくる臣は誰々ぞや。蜂須賀小六、同又十郎、稻田大炊、青

繪本太閤記 二篇第一之卷 目錄

寛政十年戊午夏六月

方廣殿吏伊丹上總介

賀茂宜顯撰

繪本太閤記二篇序

古之爲圖畫者。必寫聖賢形像。往昔事實。以指鑒賢愚。發明治亂興廢之故。不徒麟閣雲臺勸勲績而已。漢武以周公輔成王之圖。賜霍光。班婕妤觀古畫。辭同輦。明德皇后見娥皇女英圖。自恨不如。唐德宗行西宮。感老臣遺像。非若後人任意師心。動輒托之寫意也。若此編。寔可謂得古人爲圖畫之旨矣。在昔豐臣氏起于布衣。提三尺。平定天下。以翼亮王室。遂奮餘勇於異域。其動業奕々乎其大哉。然而傳聞訛舛。野乘失信。于是詳質其實。又圖而擬諸其形容。乃可以指鑒賢愚。可以發明治亂興廢之故。則其裨益于人。不亦殘々矣。書肆某已刻其初編。行于世。今復刻二編。徵序於余。因書圖畫之說與之云。

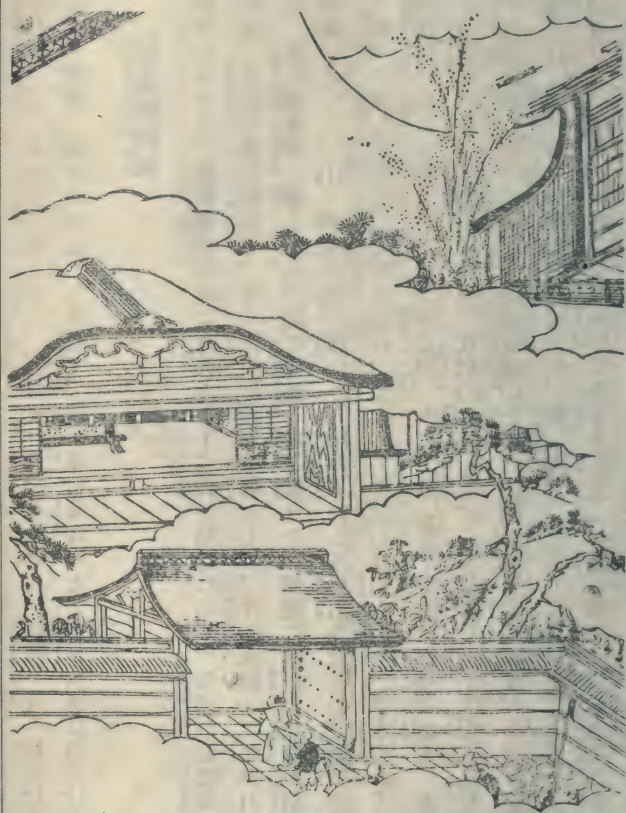
海舶之所ㇾ載。演義小說之類。往々圖ニ故事一。使三人易ニ觀感一焉。語言之不通。隔土之遼絕。所ㇾ觀之益猶然。況於ニ其近者一乎。余友法橋玉山子。善ニ繪事一工ニ寫照一。諸著已行ニ于世一。此頃應ニ書肆之需一。圖ニ豐公一世之事業一。附以ニ小傳一。匠心之所ㇾ至。應々可ㇾ觀。較ニ之於ニ尋常里巷之小說。及濫刻之惡詩文一。其優劣如何哉。余大阪之人也。固仰止之感不ㇾ已。若夫使三攬者一起ㇾ情鞭ニ懶一。玉山子之苦心爲ㇾ不ㇾ虛。故余於ニ此卷一。特拭ㇾ目見ㇾ之。丁巳秋題ニ于浪華舟中一。

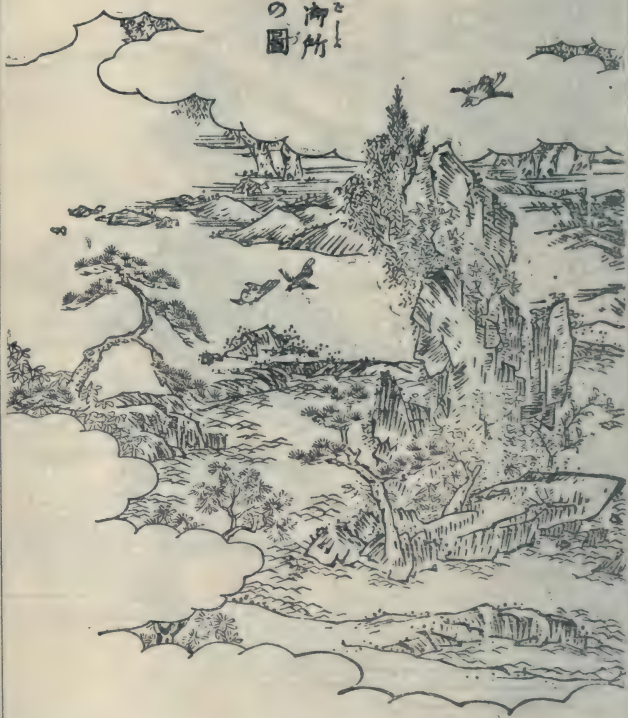
長島文學十時賜

背請すべしとて、先の奉行に命じ下知せられければ、堂上一統に悅び給ひ、是偏に木下藤吉郎、希代の智計を以て諸方の金銀を集めし故によれりとて、爰にては木下が智を感じ、彼所にては藤吉郎が計を稱美し、貴賤上下おしなべて、皆悅服をぞしたりける。扨も同五月十一日、信長卿御歸國の催ありて、今度は伊勢國北畠を征伐すべき志おはしければ、藤吉郎御伴に召連れ、歸國すべき由御沙汰ありけれど、將軍家强て藤吉郎を懇望し給ひ、「今暫く世上靜謐に及ぶまで、內裏守護、當家の輔佐、木下に過たる者ある可らず」と止め給ひければ、信長卿も詮方なく、藤吉郎を京都に殘し置き、翌十二日京都を發馬ありて濃州岐阜へ歸城し給ひける。

れ、謹んで平伏す。爰において兩家の諸士、互に士卒をいましめて、役所々々へ歸りける。此時藤吉なくんば、織田、淺井の因忽ちきれて、將爭亂の基なりと、人々大きに恐れけり。

○信長卿歸國

扨も此室町御所と申すは、義政將軍の時より代々こゝに住せ給ひたるが、先年三好松永等、義輝公を弑逆の時、兵火の爲に燒失し、暫く室町の御所退轉せしに、今年永祿十二年四月六日、御造營事終り、瓦に畫き梁に縫ものし、誠に善盡し美を盡せり。御庭には東山慈照院殿祕藏し給ひし九山八海といへる大石、細川が館に居たりし藤戸といへる名石をはじめ、國々の奇樹怪石數を盡し、種々に麗しき花どもの咲き亂れ、さまぐ\の珍しき鳥を放ち、手をこめて作られければ、蓬萊蓬城の仙宮も斯くやと思ふ計なり。かくて將軍義昭公、御機嫌麗しく新御所に入せ給ひ、その翌日信長、長政をはじめ、在京の大小名悉く御移徙の悅を演べ、御祝の能興行あり。終日宴を成し給ひ、御所の造營成就の上は、諸國の武士歸國致すべきよし令せられ、淺井長政には、別に數日の勤勞を謝せられ、御暇賜りぬれば、長政やがて手勢を引具し、本國へこそ歸りける。信長卿は暫く在京ありて洛中を巡見し、續て攝家、淸華諸卿の御居所を

其二

室町御所の圖

田村佐左衛門が手下の人夫に、丹羽五郎左衛門が士卒と口論に及びけるを、彼三田村佐左衛門、日頃織田方の惡口忍へ難く思ひ居たりければ、此口論を幸に、江州者の勇力を見すべしと、士卒に下知して、彼丹羽の家人をさん〴〵に薙倒し打擲しければ、織田家の者ども、「すは狼藉よ、あますな」と、面々太刀を抜はなし、三五人切倒せば、淺井方も抜つれて切て掛り、討つ討れつ戰ひける。是を見て織田方の將佐久間信盛、福富平左衛門、手勢を下知して討て出づれば、淺井方にも中村日向守、高橋忠左衛門、山本甚六馳出て防ぎ戰ひ、兩家の死傷數を知らず。爰において信長、長政の兩將も、口論の趣意は知らね共、かく騷動に及びぬれば、豫め用意なくば有べからずと、左右方鎧を著し、合戰の用意したりける。木下藤吉是を見て、此騷動尋常にては制しがたしとて、禁中へ馳參じ、しか〴〵の由奏聞し、勅定を以て靜め申度よし謹んで願ひければ、禁廷にも殊に驚き給ひ、即時に綸旨を下賜ひ、早々騷動を靜むべき旨命ぜられければ、木下藤吉有難く命を令し、馬に鞭打ち彼爭論の場に至り、織田、淺井の兵卒入亂れ戰ふ中を、少しも恐るゝ氣色なく、眞一文字に馬を乘入れ、「勅定なるぞ、雙方ともに戰を止よ。皇居近きを憚らず、刃傷に及ぶ事、恐れありと知らざるか、靜り候へ〳〵」と、數里に響く大音にて呼はり呼はり、東西へ乘廻し、南北へ馳ければ、さしも勇みし兩家の兵士、忽ち左右へさつと分

將軍家も甚だ喜び思召し、厚くもてなし給ひける。信長諸士を集め下知し給ふは、「此度の造營徒に日數を重ねなば、三好の逆徒又々京都へ亂入し、普請殆ど難儀なるべし。諸卒志を一致にし、晝夜怠りなく勵むべし。是將軍家への忠功、戰場の交戰も替る事ある可らず」とて、自ら赤き裝束を著し、士卒を勵し下知し給へば、織田の勇士柴田、佐久間、坂井、木下、丹羽、前田を始めとし、自身木石を運び土砂を荷ひ、普請成就を急ぎければ、淺井家にも是に勵され、家老用人諸士の輩、織田の家臣と打交り、倶に出精したりける。然るに去年將軍御上洛の時、途に佐佐木征伐ありしを、淺井曾て援兵をも出さず、畢竟將軍家の御味方と申す計にて、運を兩端にはかり、旗色の能き方を見繼べき所存にて、知らず顏に詠め居たりしに、信長卿の勇猛を以て、佐々木を始め三好の一家悉く退散し、將軍入洛ましくし、今更面皮厚く御扶助をなす事、辱を知らざる犬侍なりと嘲り、事によせ折にふれて、淺井の人夫を恥しめけれど、淺井の士卒信長の武威に恐れ、萬に愼み聞ぬ顏にて有ければ、織田の人夫彌圖に乘り、さまぐ我意をふるまひける。信長卿は長政を緣者の因ありとて、厚く親しみをなし、日々淺井の陣所へ贈物ありけるに、使者の兵士是を憎み、「命の危き戰場へは面も出さず、貰ふ事には遠慮なき江州者のつらの皮こそ厚けれ」と、是聞がしにつぶやけば、淺井の士卒今は堪忍成がたく、長政の臣三

べき謂なしといへども、石山上人汝等を憐み、數度の命乞、是又默止捨べきにもあらず。尤今度の罪科、堺の町人共一同の議なりといへ共、汝等其中に主將たるを以て囚置く所なれば、町人一統首代として二十萬金を差上げ、助命を願ふべし。此節禁裏並室町の御所御造營の折なれば、萬分が一も御助成とも相成らば、汝等罪を免るゝのみならず、將軍家へ對し一つの功を立るといふべし。早く金子を調達致すべし」と申渡しければ、元來福祐の町人共、二十萬金は容易しと、三拜九拜悅び勇み、直に堺の町人中申合せ、彼首代の二十萬金、外に御恩拜謝の爲なりとて、焰硝百斤鐵炮五十挺、永く信長卿の御下知を守るべしと、皆々悅び歸りける。木下が寸謀にて、禍を除き福となし、兩御所の御造營共賄十分に足り、追日成就しければ、信長卿感悅限りなく、「實に萬全の計策とはかやうの事をや申すべし」と、藤吉郎を褒稱限りなかりけり。

○室町御所造營

去程に信長卿禁裏仙洞の修理、室町御所造營、日々に出精有ける間、江州小谷の城主淺井備前守長政、造營中京都の守護の爲上洛ありて、信長卿に力を合せ、人夫を出し扶助せられければ、

萬民の歎を救ふ基なれば、御辭退の儀あるべからず」と、辯舌を振うて演ければ、上人も否みがたく領承あり。扨先より頼み聞えし堺の町人ども助命の事、宜く頼み給ふよし申させ給ひければ、其儀兼て心中に含みあれば、「上人の御願反古にはなし申さず」と互に詞をつがひつゝ、藤吉郎は京都さして歸りけり。

○令藤吉郎以首代償罪科

去程に、石山本願寺より、國々の門徒へ廻文を以て、御造營御手傳の用金を下知有ければ、洛中洛外近國近在は言に不レ及、東國西國北南の遠國より、身分に應じ金錢を調進し、木下が屋敷へ持來る事引もきらず。是は何國何郡、或は何町何某と呼はり〳〵捧呈しける程に、幾萬金といふ數をしらず。就中本願寺よりも若干の金子を捧げ給ひぬれば、さらば堺の町人を詮議すべしとて、士卒に命じ呼出しけるに、此程より五人の者の親族妻子、日毎に來りて命乞を願ひけれど、其儘に捨置き有しが、一時に呼出し申渡しけるは、「汝等今度牢獄に繫れ苦みを受る事、己が罪科のなせる事、助命の筋更になし。聖德太子十七ケ條の刑法を定め給ひし中に、罪の決し難きは財寶を出し、其罪を償ひ罰を免ず、是を首代と號す。今汝が罪は既に決し、財寶を以て遁る

を始め參らせ、町人の妻子家族、涙を流して欣びける。扨も木下藤吉は、石山の上人より取扱ひありければ、心中密に悦び、我計策成就せりと、信長卿へ具に言上し、上人に對面し計策を行んとす。先使者を以て石山へ申入れけるは、「京都守護代木下藤吉郎、將軍家御代參として住吉社參の序、上人に謁見し、密に談じ申度き心事の候ふ間、下向の砌御坊へ推參仕べき程に、慇懃を省き對面給るべし」と案内し、而して石山に至けるに、兼て用意したりければ、下間頼廉出迎へ、客殿に伴ひ饗應す。程なく上人藤吉に對面し給ひ、互に叮嚀の禮儀を演終て、藤吉郎申けるは、「某今日當院に推參致す事、別して御頼み申入れ度き仔細是あり。主人織田信長將軍義昭公を護立て上洛し、逆臣三好を追退け、足利家再興の志頻なりと雖も、應仁已來、天下暫くも靜ならず、國々困窮して、禁中の修理、將軍の御所をさへ造營するに違らず。去に依て逆徒透を伺ひ、良もすれば兵亂を起す。是信長が深く歎き思ふ所なり。此度禁裏を修復し、將軍の御所を造營せんとすれども、其賄全からず。某京都の守護代として罷あれば、此一事に寢食を忘れ、さまぐ\工夫を凝し見るに、當宗門の門徒には福祐の者甚だ多し。天下國家の御爲なれば、上人の御加判を以て、諸國の門徒へ金子調達の儀御下知下さらば、忽ち兩御所御造營全く調ひ、上下安堵の思ひをなすべし。是私の事にあらず、上は帝の玉體を保じ、下は

以の外に強く、只今事を救ひがたし。殊に上意の趣、一つとして理にあらずといふ事なし、汝等も身の誤を知るべき事なり」とて、悉く索をかけ、獄屋にこそは引立ける。

○石山上人救二町人等罪科一

扨も信長卿の御怒り甚しく、紅屋、能登屋が輩、五人悉く禁獄せられ、助命の筋是なきよし、堺の津へも聞えければ、又々騷動大方ならず。取譯け五人の妻子從類、其歎き謂ん方なく、身上を拋つても命乞をなさんものと、さまぐ計議をなしけれ共、信長は聞ゆる强氣の大將なれば、いかに願ふとも容易く赦免有べしとも覺えず、所詮我々が宗旨石山御堂の御門主顯如上人に謁し、助命の筋もあらば御救ひに預るべし、活如來の御力にも及ばせ給はぬ命なりせば、前世の因緣と思ひ諦め、後世の佛果を祈るべしと、衆議一決して、攝州東成郡石山御堂に至り、上人に謁し奉り、委く仔細を申上げ、御慈悲を以て救ひ給へと歎きければ、上人も不便の事に思しめされ、使者を以て守護代木下藤吉が許へ助命の事呉々頼み給ひければ、藤吉も上人の命乞殊勝の事に思ひ、「今度の罪科、禁中及び將軍家の御憤り強く、急には落著有べからず。然れども上人の御願も黙止がたければ、助命の筋を工夫なし、某宜く計ふべき」よし答へければ、上人

ひ、近習數多左右に候し、嚴重に座に直れば、五人の者共大きに驚き、茫然と醉るが如く蹲踞て控居る。藤吉更に詞を發し、「汝等が趣意既に聞けり。是より信長卿の御本陣東福寺へ參り、決斷の御下知に任すべし」とて、士卒數多に守護せしめ、東福寺へと急ぎける。此時東福寺は、京都守護の武將信長卿の旅館なれば、數多の軍兵所々に陣し、役所々々に數多の武士、甲冑を帶び弓箭を負ひ、其嚴重言語に絶えたり。五人の町人膽を失ひ魂を散じ、何なる咎を蒙らんと、生たる心地は更になく、慄惶き大庭に蹲踞る。信長遙に町人共を御覽じ、大に憤り宣ひける、「己等町人の分際として家業を勤めず、兵具を調へ、一揆を起し、上を恐れざるふるまひ、奇怪なり。其上去年將軍家御上洛の砌、御召に應ぜず、剩へ將軍家の怨敵たる三好の逆徒に力を合せ、其罪萬死に中といへども、我仁惠の心を以て其儘に許置く所に、此度の騷動、武士に非ずして刀劍を帶し、匹夫にして綾羅を身にまとひ、逆徒を助け我意を奮ふこと、朝敵とや謂ん國賊とや云べき。言語同斷、憎き奴原、悉く誅せずんば國法正しかるまじ。五人の者を獄に下し、殘る者共皆々召捕り、一々首を刎べし」と、以の外に怒り給ひ、座を立て入り給へば、五人の町人大に恐れ、頭の上に雷の落るが如く、面色土の色をなし、藤吉に向ひ手を合せ、「只御慈悲に救はせ給へ」と、聲をあげて歎きければ、藤吉も笑止の體にもてなし、「君の御憤り

將軍を守立て、天に代て不道を誅し、專仁惠を布施し給ふ名將なるに、汝等如き町人を相手とし、軍勢を動し、刀劍を用ひ給はんや。然るに世の空說を信じ、徒黨を結び兵器を携へ、天子將軍を愕し奉りし事、汝等が罪輕きにあらず、云譯あらば申し謝すべし」と、其辯說流水の如く、理を責て述べたりければ、町人ども惣身に汗を流し、低頭平身して「段々の麁忽申上ぐべき詞もなし。就中三好見繼の爲なんどとは、神以て存がけなき事、只智惠淺き町人の我々、燒殺さるゝ悲しさに、責ては遁るゝ事もやと、斯る企に及びたるは重々の心得違ひ、偏に赦免下さるべし」と、淚を流し詫ければ、藤吉郞打笑ひ「左なくては叶まじ。申さば云甲斐なき町人、何ぞ嚴き御咎あらんや。而れども右心得違ひの段、人傳又は書附等にては濟むべきやうなし。魁頭の者四五人我と共に守護代の屋敷に至り、直に申譯致すべし。我も宜取成し遣すべし」と、惣名代として紅屋、能登屋、油屋が輩五人を引具し、京都さしてのぼりける。

○泉州堺町人所ㇾ爲㆓禁獄㆒

扨も藤吉郞、堺の町人五人の者を屋敷の白砂に控させ、其身は奧に入りけるが、良あつて守護代の御出ぞと內外ざゞめき、木下藤吉已前の出立引替て、大紋烏帽子太刀刀、態と美々敷搔繕

藤吉郎計略
堺の町人
を誑く

十四五人召出し、嚴に申けるは、「今度勅諚の趣は、堺の津代々西國著船の地にして、町人多く交易を事とし、專家業を勤るの外、他事有べからざる所に、所謂なくして騷動し、偏に籠城の體を顯し、合戰の用意をなすは何事ぞや、町人不相應の刀劍を携へ、誰を敵に戰ばんとするや。其趣意を承れとの勅命によつて、京都の守護代木下藤吉郎、某を以て其旨を尋ねらるゝ間、汝等委細に其來由を申上ぐべし」と演ければ、町人ども返答に迷惑せしが、中にも紅屋、能登屋兩人罷出で、詞を揃へ、「仰の如く我々町人の身として、何を望みに合戰の結構を致すべき。頃日世上の風說に、信長卿當津の町人を憎み給ひ、一圓に燒亡し給ふとの事なる故、罪なくして誅せられんよりは、さび矢一すぢ射參らせ、快く討死仕るべしと、堺一統に申合せ、扨こそ斯の仕合に相成り候。外に趣意はこれなき」由申しければ、藤吉大に愕きたるありさまにて、「汝等が申條は全く天狗狐狸の所爲と覺えたり。信長卿專仁政を天下に布き、兵亂を鎭め、上は帝の宸襟を保じ奉り、將軍家を再興し、下は庶民の塗炭を救んとす。然るに罪なき百姓町人を誅伐し給ふ事これあらんや。今度故なくして當津の町人合戰の用意をなすは、逆臣三好等に組し、將軍家へ仇し奉らん爲ならんと、將軍義昭公御怒り甚しく、木下に命附られ、事の實否を糺明し、三好合體に究らば、卽時に大軍をさし向け燒殺すべしとの嚴命なり。信長卿は

繪本太閤記　初篇卷之十二

○藤吉郎計略說ニ堺町人ヲ

亂を治る藥石は刑罰を重とし、平を興す粱肉は德教を先とす。誠なる哉、亂世の民百姓、國主郡主の命に隨はず、良もすれば黨を結び、一揆を起し、國中を騷動せしめ、己が業にすさみ、農人は耕を忘れ、町人に交易を事とせず。此時刑罰を以て是を征し、德教を以てなつけ訓へずんば、何を以て國家を平治する事を得ん。木下藤吉郎は、堺の町人合戰の用意頻なりと聞ければ、我謀計成就せりと悅び、下部三人召具し堺に至り、先使を以て云せけるは、「今度當津の町人共、故なく騷動に及び、合戰の結構仕るよし叡聞に達し、禁中より御下知として、京都守護の役人木下藤吉郎に仰附られ、何故の騷動ぞや、實否を糺し候へとの御事にて、木下が下役人此所へ參りたり。麁忽の無禮なきやう、其謂を申上ぐべし」と述ければ、大將分紅屋、能登屋が輩、矢倉に上り見廻せども、軍兵は一人もなく、平衣の役人只一人、供人兩三人のみなり、外に怪しき事もなし。さらば召入仔細を聞とて、門を開きて招きければ、藤吉頓て大將分の者

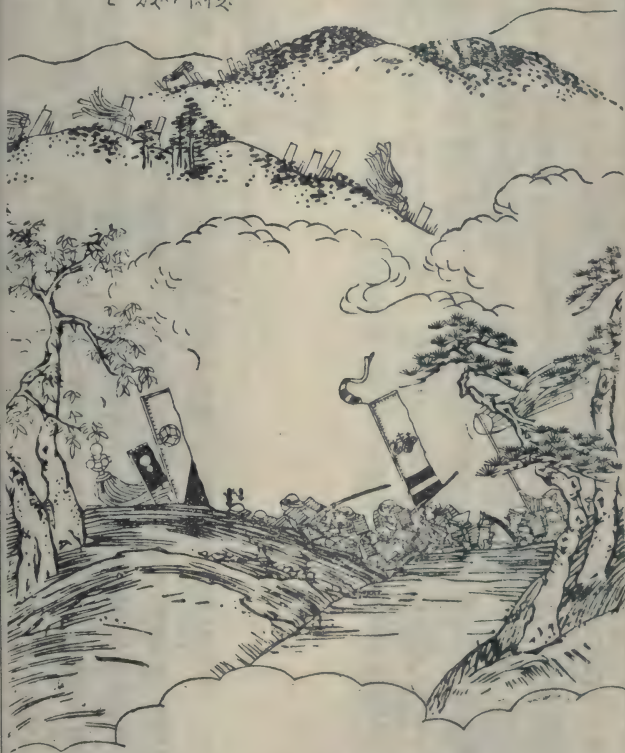
繪本太閤記 初篇第十二之卷 目錄

藤吉郎計略説堺町人
堺町人所爲禁獄
石山上人救町人等罪科
令藤吉郎以首代償罪科
室町御所造營
信長卿歸國

の津一圓に火をかけ、人馬鶏犬に至る迄、燒盡すべし」と下知し給ふを、木下藤吉大に是を諫め奉り、「今度室町の新御所造營、就中禁裏修復の入用金若干の儀にて、當時諸國ともに兵亂打續き困窮の時なれば、其調達甚だ難儀の秋也。堺の津に福裕の町人數多住しぬれば、罪を寛して今度の御所造營の用金を仰附られ、仁智を以て兩全の御計こそあらまほしう候なり。諸事某に御任せ下さらば、宜く計ひ奉るべき」由言上しければ、信長卿も今度の大營、容易の事にあらずと兼て心を苦め給ふ折なれば、萬事藤吉に任すべきと仰渡されければ、藤吉甚だ悅び、直に座を立ち、淺野彌兵衛、小六等に命じて、信長卿堺の町人を甚だ憎み給ひ、大軍を以て四方より火をかけ、人馬鶏犬に至る迄、殘りなく燒盡し給ふよしを流言させければ、堺の町人大に驚き、庄屋年寄を始め、紅屋、能登屋、天王寺屋、油屋なんどいへる其頃豪富の町人ども寄集り、「所詮居ながら燒殺されんよりは、町口を固め、弓鐵炮を以て織田の軍勢を防ぎ、命限り戰はゞ、犬死するには勝るべし、さらば其用意をすべきなり」と、銘々所持する武具兵器を取出し、鐵炮矢石を堅く備へ、柵を結ひ、逆茂木を引き、敵寄ば討て出んと、片唾を呑で待居たり。

散して、京都靜謐に及ぶよし注進有ければ、信長大に安堵し給ひ、瀬田にて一日人馬の足を休め、同七日京著し、本國寺に至り將軍に謁し、合戰の勝利を賀し給へば、將軍にも信長早速の上洛御滿悅に思召れ、取譯木下、竹中が才謀を感じ給ひ、一々御物語ありければ、信長悉く恩賞の沙汰に及び、且將軍家要害もなき寺院に偶座し給ふが故に、かゝる禍も有なれとて、二條室町に地面を選み、あらたに將軍の居城を造營すべしとて、村井民部之丞、島田所之助兩人を普請奉行と定め、永祿十二年正月より、手斧初を營みける。

○將[二]信長怒燒[二]泉州堺町人[一]

去程に三好が一族家門の輩、敗軍を集め、又々攻上るよし企てけれども、信長卿大軍を率し上洛し給ひ、京都の備堅固なりと聞えければ、迚も叶ふまじと思ひけるにや、靑龍寺の城を引拂ひ、四國へこそは引きたりけり。信長卿も三好が殘黨追討べしと、其手配を成し給ひけれども、最早敵勢遠く退きければ、重て罪を問べしと、其儘に捨置き給ひける。爰に堺の津の町人ども、去年將軍家御上洛の砌も御召に應ぜず、剩へ將軍家へ敵對の色を露し、此度又三好を扶助し、堺の津にて勢揃をせし事、重ね〴〵罪科許しがたしとて、信長卿大に憤り給ひ、「堺

下野守が兵士さん〴〵に成て迯來り、岩成が勢の中へ人なだれに連て敗走すれば、木下、竹中、野村、二階堂が勢、勝に乘て追來る。爰に於て岩成が勢俱に崩れて、思ひ〳〵に落行く程に、はじめ一萬餘騎と聞えしも、四角四方へ散亂し、漸宗徒の者一千餘人、青龍寺の城へ引入たり。藤吉郎最早軍は是までぞと、迯る敵を追捨にし、鬨を揚げ本國寺へと歸りける。彼五色の吹貫を押立て奇兵なせしは、木下が下知を受け、小幡伏見の百姓共、紙を以て旗吹貫を作り、山々峰峰に打散て、敵の心を奪ける藤吉が謀略なり。

○信長再上洛

扨も今度の騷動、其聞え高かりければ、將軍家御味方の武士、追々本國寺へ集りけれど、敵早く落失て京都既に靜りければ、皆々將軍に謁し、凶徒退散の儀を賀し奉りければ、將軍も御氣色麗しく、銘々に祿を賜り、御襃詞に預りければ、皆々悅び退出す。時に織田信長は美濃岐阜にて越年あり。正月五日、京都より飛札到著し、三好の逆徒大軍を以て本國寺を攻討つ事急なり、急ぎ上洛して平治あるべき由聞えければ、信長甚だ驚き、直に岐阜を打立ち、翌日江州高宮に著給へば、又々京都より使節至り、凶徒一旦御所に押寄攻討と雖も、諸將の勇戰により悉く退

切て出で、勇を震て戰うたり。美濃浪人赤座、奥村等六人の勇士、野村が手に加り居けるが、銘銘鎗を捻て突崩し、敵を捕へてねぢ首にし、分取高名さま〴〵也。されども三好方大勢なれば、入替々々戰ふにぞ、互に死傷の者數をしらず。時に三好勢の後より、五色の吹貫をさつとなびかせ、木下藤吉が先手小六政勝、稻田大炊、大澤主水、堀尾茂助等五百餘人、どつと喚て突かかれば、前後の敵に三好が勢さん〴〵に敗走して、岩成と一つにならんと、加茂川の流水に添ひ、備を亂して迯たりけり。小六、堀尾、稻田が輩、短兵急に追討し、打取る首五百有餘、狐川まで追詰たり。

○凶徒等敗₂走狐川₁

去程に岩成主税は、狐川にて三好義次と渡合ひ、兩勢互に火花をちらして戰ひけるが、元より岩成拔群の勇者なれば、士卒を勵し、無二無三に戰ふ程に、義次が勢討るゝ者數をしらず、既に敗北の體に見えたる所に、川上の山路傳ひに、五色の吹貫數百流川風に飜り、數萬の軍兵押寄來れば、岩成が兵大きに驚き、敵の軍勢味方の後を取切なば、合戰頗難儀なるべし、備を分ち戰ふべしと、軍勢をさつと引分け、二手に備を立べしと下知する所へ、三好山城守、同

合戰に及び給はば、當寺において大慶是に過ぎず」と、辯舌を震て述ければ、智慮淺き岩成殆ど是に服し、「且將軍遷座し給ふ道にて討奉らば、猶々容易かるべし」と攻口を引退き、陣を取て控たり。依之寺中の軍兵暫時は心保んじ、竹中が才智を感じあへり。

○本國寺合戰

爰に若江の城主三好左京太夫義次は、故三好長慶が猶子として、松永及び三老臣の吹擧によつて出身せし者なれ共、前將軍義輝公を弑せし事、松永等が手裏にありて、己が所行にあらざれば、當將軍義昭公の御方に參り、共に三好を誅せし故、將軍の思召厚く、若江の城に安堵しけり。今度三好の三老臣等、將軍を襲ひ奉る由聞と等しく、軍勢を率し、將軍家後詰の爲狐川に陣を取り、伊丹池田の兵を待居たりけるゝ凶徒是を聞き、先後詰の勢を討散せよとて、岩成主税之助、本國寺を三好下野守、同山城守に攻させ、自三千餘騎を引率し、狐川へと急ける。去程に三好勢は寺僧等に欺れ、將軍の御遷座を今や〱と待けれど、寺中一統靜りかへつて音もせず。早日も西に傾けば、三好山城守大きに怒て、士卒を下知して攻けるに、寺中の軍勢かねて用意はしたりけり、鐵炮矢石、雨のごとくに放ちかけ、ひるむ所を野村越中守七百餘人、鋒先を竝べ

書たりける。爰において將軍を始め參らせ、上下の諸士も暫く安堵の思ひをなし、急ぎ竹中半兵衛を御所へ召よせ、味方の手分仰附られ、四方を堅めて待かけたり。かゝる所へ美濃の浪人赤座七郎右衛門、同助太郎、森彌五八、奥村平六、渡邊勝右衛門、坂井與左衛門、將軍家の助勢の將とて御味方に加りければ、人々是に氣を得て、敵の寄するを待居たり。岩成主税之助、去年敗軍の恥辱を雪んと、五千餘人本國寺を取巻て、鐵炮を打ちかけ攻たりければ、將軍家の勇士野村越中守、二階堂駿河守、切て出んとひしめきけるを、竹中半兵衛制して曰く、「敵は外に助けの勢なきを以て、戰を一時に決せんとす。味方は戰はずして敵の英氣をくじき、諸方後詰の勢集るを待て、一戰に討散すを專要とす。某が一つの謀計あり、是を行うて今日の戰を延引すべし」とて、寺中の僧三人を召出し、計策を云含め、岩成が陣へ遣しける。彼僧等竹中が謀計を領承し、岩成に對面して申すやうは、「當寺は日蓮宗旨の惣本寺にして、三好家代々尊敬ありし大地なり。然れば公等將軍へ敵對の事ありとも、當寺に於て遺恨有べしとも覺えず。今要害もなき寺院に、僅の勢にて籠らせ給ふ將軍なれば、大軍を以て嚴しく責給ひなば、寺に火をかけ、將軍生害し給ふべし。然る時はかゝる靈場一時の灰燼と成なん事、寺僧一統何ほどか是を歎き、將軍へ訴へ、居を他所へ移し奉らんとす。暫時攻口を退け給ひて、將軍遷座の後

智略によれり。かく軍事のみにあらず、政事にも才智深き木下なれば、藤吉郎を以て京都守護の奉行となし、兼ては將軍補佐の爲め殘し置れ、同年十月廿四日、大軍京都を引拂ひ、目出度岐阜へ歸城し給ふ。此時將軍義昭公、信長が忠勤を歡び給ひ、自筆の感狀竝に二つ引輌の御旗を賜ひければ、信長家の面目也と、祕藏成し給ひける。

○凶徒等襲本國寺

扨も將軍の假御所、要害堅固ならざれば、藤吉が計ひにて、六條本國寺に移り住せ給ふ。時に永祿十二年正月四日、四國へ退散の三好が一族、岩成主稅之助、三好山城守等將軍を襲ひ奉らんと、其勢一萬餘騎、本國寺へ押寄たり。是より先、藤吉郎公用ありて江州に至り、在京せざれば、京都の騷動大方ならず、早打を以て藤吉郎へ告しらせ、早く上洛して凶徒を防ぐべきよし御下知ある。藤吉郎、將軍家の舊臣細川右馬頭へ書翰を呈し、言上しけるは、「三好が輩幾萬騎襲來るとも、更に御心慮惱し給ふに及ばず。恐ながら信長の下知を受け、内裏將軍補佐の役目たる木下藤吉郎、かくて候上は何條事の候べき。某が本陣留主代として殘し置たる竹中半兵衛重治を召され、凶徒の防禦仰附られ下さるべし。明日申の刻には某京著仕るべし」と

るを、面白き事に思ひけるにや、種々の惡行を成し、酒店に入りて酒を呑み、醉狂して器物を打破り、或は脇差等の拵を成す家に至り、調難き道具を好み、是を否ば樣々に惡言を吐出し、家內の者を打擲し、往來を罵り步行き、忍びがたき狼藉をなせ共、信長卿の權勢に恐れ、敢て咎る者もなく、すは藤五郞よといふ程こそあれ、家々に門戶を閉ぢ、又は酒肴を出して詫るもあり、さながら疫神のごとく恐れ悸きける。此の時木下藤吉が郞等淺野彌兵衞、堀尾茂介、二十餘人の士卒を引具し、町々を順見し、非常を禁め、法令を正しけるが、町人共藤五郞が狼藉に迷惑し、事の次第を訴へければ、淺野、堀尾の兩士大に驚き、信長卿の足輕に、さる狼藉者ありて、いかんぞや政道を糺すべしと、士卒に命じて捕へしむ。藤五郞は例のごとく酒店にて亂醉し、皿鉢を打碎き、罵り喚き居たる所へ、上意也と組子の士卒ばら〳〵と馳寄て、なんなく繩をぞ掛たりける。淺野、堀尾直に藤五郞を本陣へ引立て、糺明の上三條河原において三日三夜面體を肆し、死罪に行はるべき高札を立られければ、京中の町人百姓、いやが上に重りて見物し、信長の政道明らかなるに服し、洛中漸しづまりける。是は木下藤吉郞が計略にて、鶴見藤五郞に申含め、先のごとく狼藉をなさしめ、死刑と號して密に金錢を與へ、尾州へこそは歸されける。さればこそ今迄恐れ悸きし京中の町人共、信長卿の政事に服し、靜謐に治りしも、木下が

京都に參上し、將軍家に謁し、信長に對面し、怨敵追伐の嘉儀を祝し、信長の下知にぞ隨ひけるゝかくのごとく諸國の大名小名、我も〳〵と歸順する程こそあれ、信長卿の威勢朝日の登るごとく、草に風を加ふるに似たり。

○義昭公將軍宣下信長卿任官

去程に織田上總介信長卿、威名遠近に震ひ、近國近鄕に刃向ふ敵一人もあらざれば、芥川の陣を引拂ひ、義昭公を守護して入洛まし〳〵、故細川氏綱が宅地を造營して、義昭公の假御所と成し、其身は東山清水寺に本陣を居ゑられ、永祿十一年冬の始、禁廷に參內し、義昭公は征夷大將軍に任ぜられ給ひ、信長卿は從五位下彈正忠に補せられ、洛中洛外の政事を授り給ふ。京中の町人百姓、兼て信長卿は鬼神のごとく恐しき大將なりと聞ければ、未だ政道の善惡は辨へねども、恐怖の色を成し、三好の時こそ勝りけめと、眉をひそむる族もありけり。爰に織田の足輕に、鶴見藤五郎といふ者あり、身の長七尺に餘り、頰髭繁く生ひて、骨太く色黑く、さながら二王の生るがごとく、惡相限りなき者なるが、信長卿の威勢に誇り、相印の羽織を著し、長き刀を橫たへ、京中をうそぶき步行に、信長卿の相印に恐れ、行違ふにも身を縮めて走りけ

安堵すべきよし、御下知有りければ、筑後守深く信長卿の大度を感じ、恩を謝して退きけり。

○松永彈正降參

池田の城主池田筑後守勝政、將軍家の御方に參りければ、是を聞て河州高野の城主畠山次郎重春、若江の城主三好左京太夫義次なんど、召さざるに參上し、御上洛を賀し奉る。依ㇾ之將軍家御氣色麗しく、悉く本領安堵したりける。爰に松永彈正久秀は、先に三好等と共に將軍義輝公を弑せしが、三好一家と不快にして、合戰度々なりけるが、和州多門の城に楯籠り、近國に威を震ひ、筒井順慶と地を爭ふ事數年に及べ共、互に牛角の戰ひにて、はかゞゝしき合戰もなし。此時松永、信長卿を敵と成しては、忽筒井が爲に攻討れ、防戰難儀なるを計り、三好家と不和なるを申立て、義輝公を弑せしも悉く三好等が計なりと陳じ、好言令色して信長の御方に參りけるを、信長卿松永が舊惡を憎み、今又彼が追從せるを忌給へども、其罪を糺し死を賜ふ時は、三好の一黨恐れをなして、降參する者なからん事を計り、僞て欣びの色をなして對面あり。是も所領安堵すべきよし令せられけるにより、松永も信長が心に入らんと、さまゞゝ心を盡しける。筒井順慶も松永と同じ所存にて、信長と不快にては萬に附て便あしと、是も同じく

切て出て討死せんと、名殘の盃取かはし、暫時酒宴を催しける。時に大手の塀際に、寄手の大將明智十兵衞光秀馬を乘居ゑ大音にて「城將池田筑後守に一言申すべき事あり」と高かに呼はりければ、兩軍互に鳴をしづめ、城主筑後守矢倉に顯はれ、兩將遙に對面す。其時光秀申けるは、「信長將軍家を守護し上洛するの所に、隨ふ者は榮え刃向ふ者は亡ぶ、是天將軍家を助るしるし也。今足下弑逆の三好を助け、天命に背き、將軍の義兵に對し弓を引といへども、既に爰にせまり、落城旦夕の間にあり。我足下の勇猛を感ず、故に土木のごとく亡ん事を惜み、先に金丸を緩め、馬を討て汝を助けたり。汝義を守りて、逆臣の爲に命を輕んじ難儀の籠城するといへども、三好の輩誰有て是を救ふ者なく、見捨て諸方に散亂す。今は誰が爲にあたら命を失ふぞや。速に逆を捨て順に附き、城を開いて降參せば、某宜く執成すべし。自然菽麥の辨なく、歸降すまじき者ならば、眼前積置し柴薪に火をかけ、人馬城壁悉く灰燼と成すべし。思慮を定めて返答すべし」と、言語分明に、滔々と水の流るゝごとく、理を盡して演ければ、筑後守大に先非を悔み、光秀が辯說に感じ、直に門を開き、甲を脫て降參しければ、光秀大に悅び、頓て筑後守を伴ひ芥川の本陣に至り、合戰の次第、筑後守が降參を言上に及びければ、信長卿厚く光秀が功を稱し給ひ、筑後守が降參、神妙のよし御詞を下し賜り、本領無相違

下に徹す。涼まじとも中々いはん方こそなかりけり。

○明智光秀說ニ池田勝政一

明智光秀は高き岡に上り、戰を見居たるに、敵將池田筑後守、天神のごとく勇を震ひ、人なき所を行くに似たり。光秀其勇威を心に感じ、此者を討ずんば戰勝つ事難かるべしと、自ら鐵炮を取て、筑後守が胸板をねらひ、既に切て放んとしけるが、かゝる勇將を無下に討殺さんは情なきに似たるべしと、ねらひを外し、馬の平首を打拔たり。暫しもたまらず、人馬ともに、音に應じて倒れたり。敵も味方も、筑後守討れたりと見てければ、寄手は是に氣を得て、大きに鬨を作つて責立れば、城兵は主將討れたりと思ひ、備も亂れ、さん〴〵に成て敗走するを、池田筑後守嚴しく下知し、漸く軍士をまとめ、辛うじて城中へ引入けれど、外郭は乘取れ、本丸にこそ籠りける。此とき光秀、士卒に下知して、本丸の四面に柴薪を夥しく積重ね、松明を數多燈しつらね、一時に火をかけ、城郭ともに燒捨んと、其用意をぞしたりける。城中には是を見て、さすが命は惜かりけん、落行く者少なからず、始七百餘人と聞えしも、漸く腹心宗徒の者、百餘人にぞ成りにける。されども主將筑後守、更に恐るゝ色なく、所詮籠城叶がたし、

ひ思ひに船に取乗り、四國の地へぞ落行けり。其中に池田の城主池田筑後守勝政只一人、足利家に隨はず籠城して有ければ、信長卿、明智光秀に命じて池田が城を攻討しむ。光秀畏り、福富、簗田、梶川を引連れ、其勢都合三千餘騎、池田の城へ押寄せ、鬨を作つて攻懸り、惣構の柵一重乘入けるを、池田筑後守五百餘人の逞兵を引て、眞一文字に切て出で、勇を振うて戰ひければ、光秀が軍勢柵外へ追出され、鐵炮を以て打竦めんと、雨の如くに放ちければ、池田も左右なく進み得ず、馬を立て控へける。爰に織田の軍將梶川平左衛門、池田筑後守を討取り、高名を備へんと、鎗を捻て馳むかふ。池田筑後守、三尺五寸の太刀抜かざし、人交もせず只二人、火花を散し戰ひけるが、勝政手練や勝りけん、梶川が突く鎗を脇の下へ受流し、柄の中程を切て落す。梶川退つて太刀を抜んとする所を、かけよつて兜の眞向微塵になれと打ちける程に、梶川勇なりといへ共、いかんぞや是をたまるべき、仰向にどうど倒るを、勝政が郎等走りよつて首を取る。是を見て、光秀が勢の中より、明智彌平治、同治郎作、三宅、奥田が輩、切先を揃へて、「筑後守を討取れ」と喚き叫んで切結べば、城中より池田丹波守三百餘人、勝政を討じと、鬨を作て討て出で、兩軍互に入亂れ、火水に成て戰ふ形勢、入違ふ太刀の光は秋の夜の稻妻の如く、打合す鳥銃の音は百千の雷動に等し。喚き叫ぶ鯨波山川を動し、上天に響き地

繪本太閤記　初篇卷之十一

○明智光秀攻二池田城一

沸羹に懲るものは冷齏を吹き、弓に傷るゝ鳥は曲木に驚くとや。晉の謝玄賊を討て是を追ふ、賊兵ども、八公山の樹木風に動くを、謝玄が軍兵ぞと恐れて走り、平家の大軍、水鳥の羽音に驚き、都迄迯上りしも、皆同日の談也。三好の一黨、攝河兩國の城々に楯籠り、敵對の色を成ども、信長の大軍、野に滿ち山に漫り、諸方の城々へ軍勢を差向るよし、取々の風聞有ければ、三好の將士更に安き心もなく、落支度のみしたりける。夫のみならず、尼崎に籠城したる荒木攝津守村重、伊丹の伊丹大和守親興、兩人ともに將軍家の御方に參り、信長の下知に隨ひ、兵庫より須磨、明石の邊に兵船を數多浮め、中國、西國の諸侯將軍の召に應じ、三好誅伐の爲上洛するよし流言せしめ、或は武庫川の邊在々を放火し、海陸ともに攻上る勢を成しければ、三好大に恐怖し、布引に籠たる細川掃部介、三好彦次郎は將軍義榮公を守護し、阿波國へ迯下り、諸方の城々これを聞て、俄に周章敗亡し、海路を敵の塞がぬ内にと、我先に城を開き、思

繪本太閤記 初篇第十一之卷 目錄

猛勇の壯士なれば、一方を切拔け、からうじて芥川の城に落行きけり。

引布の城には京都の將軍義榮公を守護し、細川掃部之助、三好彦次郎三千餘騎、其外池田に池田筑後守、伊丹に伊丹大和守、尼崎に荒木攝津守籠城し、河内國飯森に三好下野守政康二千餘人、同國高野に三好山城守康長入道笑岩二千餘人、いづれも勇武の將士、攝河兩國に散在して、信長の大軍を防ぎ支んと、手配を定めて待かけたり。扨も信長京都著陣の日、はやり雄の兵士等足輕を狩催し、其勢一千餘騎、岩成主税介が籠たる青龍寺へ押寄せ、無二無三に攻たりける。岩成は三好が三老臣の隨一にて、智勇兼備の良將なれば、少しも騷がず、鐵炮を雨の如く打かけ、暫防ぎ戰ひけるが、搦手より五百人の軍勢を密に出し、敵の後より急に攻寄せ、差挾んで切崩せば、織田の軍兵さん〴〵に打なされ、はふ〳〵京へ迯のぼりけり。明れば二十九日、織田信長の先陣柴田勝家、佐久間信盛三千餘人、青龍寺へ押寄せ、惣軍跡に附て進發し、只一息に攻崩さんと、四方より揉立ければ、岩成防ぐべき力盡き、城を開き退去すべき間、士卒の助命を乞願ひければ、信長其旨許容し給ひ、柴田、佐久間攻口を退き、陣を取て控へけり。岩成主從一千餘騎、城を開きて退出し、芥川の城へと急ぎける。早芥川も程近しと、備も亂れ馳ける所に、木下が郎等小六又十郎、稻田大炊、堀尾茂助、二千餘人にて埋伏し、左右より討つて出で、洩さじと突かゝれば、岩成が勢五百餘人討死し、さん〴〵に成て迯たりけるが、主税介

く、取物も取あへず、津の國さして引取りける。されば信長上洛の街道、敢て遮る者一人もなく、二十八日、恙なく入洛ましく〳〵、公方義昭公の御座は清水寺に定め、信長は東福寺に本陣を居られ、非常を戒め狼藉を制し、洛中洛外の町人百姓を保じ給へば、鬼神の如く恐れ畏たる信長卿、寛仁の政道に心を安んじ、諸方の大小名、郡主、城主を始めとし、百姓町人に至る迄さまく〳〵の捧げ物を持參し、東福寺に市をなし、御上洛を賀し奉る。其中に連歌師紹巴法橋、末廣の扇子を二本獻じければ、信長御覽じ、御たはぶれに、

二本手に入る今日のよろこび

と仰ければ、紹巴とりあへず、

舞ひつるよ千代萬代のあふぎにて

と祝し奉りければ、信長御感少なからず、祿數多下賜りける。

○柴田佐久間攻ニ青龍寺城ー

去程に、三好家の一族郞等、京都を退き、青龍寺の城に岩成主稅介祐道、一千餘騎にて楯籠る。高槻には入江右近八百餘騎、芥川に三好日向守長緣二千餘騎、淸水には篠原左近進一千餘騎、

紹巴法橋
連歌

詰射たりければ、此矢先に向ふもの、命活る者一人もなく、暫時に寄手十五六騎、算を亂して倒れければ、さしも勝誇たる柴田勢、暫し猶豫控へける。爰において勝家、力戰にては味方死傷の者多からんと察し、前田孫四郎利家を使者と成し、城中に入て利害を說き、義昭公の味方を勸めければ、蒲生父子其理に服し、終に城を開いて降參し、日野の城事なく落著したりければ、勝家使者を以て信長卿へ注進し、暫く城中に入りて休ひける。

○信長上洛而再ニ興足利家一

信長卿既に和田山、箕作をはじめ、觀音寺、森山、日野の城々を二日の內に攻落し、破竹の勢にて攻登る由聞えければ、長光寺、草津、宇佐山、堅田の城々、或は城を開いて降參し、又は夜に紛れて退城し、佐々木の枝城すべて十八ヶ所、悉く平治し、同月二十五日は三井寺に著し給ひ、前後の軍勢、大津、馬場、松本、山科、醍醐、宇治の邊に充滿し、威を遠近に震ひければ、三好等兼ては宇治、勢田に兵士を備へ、戰を挑むべしと定めけれども、其手配いまだ調はざる內に、信長佐々木を征伐して上洛ありければ、三好の輩大に恐れ、何樣信長は天魔鬼神にてやあらんと、防戰の備も散亂し、落行く者多かりければ、今は京都にて戰はん事覺束な

たり。日野の城主は當國名譽の勇士、蒲生下野入道快軒、同息右兵衛太夫秀賢父子、堅固に籠城したりければ、鐵炮矢石を雨のごとくに放ちかけ、少しもひるまず戰ひしは、流石名にあふ蒲生かなと、敵も味方も感じあへり。されども織田の臣下隨一の勇士柴田權六郎勝家、命を受て向ひ、就中度々の合戰、藤吉に功を奪はれ、頗面皮を失ひぬれば、此城を藤吉郎同時に攻落さずんば、生て二度面を人に合さじと心に誓ひ、數千の鐵炮一時に打かけ、自眞先に馬をすすめ、采配追取り下知して曰く、「身を捨てこそ浮むべき瀬もあれ。前に行く者は楯をかづき、後に進む者は鎧の袖をかざし、錣を傾け、天邊の穴を射ぬかれな。進みて命を戰場の塵と成すとも、退て卑怯の名を敵に呼れな。死や人々、我々も活まじ」と、いさみに勇で馳たるありさま、天神の威を顯はし、鬼神の勇を逞うして、荒にあれて進みたりしは、實に織田の身内にて、鬼柴田と呼れたるも、理なりと見えにける。城中心は猛くふせげども、勝家が強勇に色めき立ち、大手の攻口既に破れなんとす。城主右兵衛太輔秀賢、櫓に上り大音にて、「往昔正平の兵亂に、相馬將門を射て名譽を露したる俵藤太藤原秀郷が後胤、數代當城に主たる蒲生秀賢、最期の一矢受て試み給へや」と、五人張に十四束、滿月のごとく引きしぼり切て放てば、先に進みし鎧武者の胸板をぐさと射通し、後に控たる雜兵を餘る矢にて射倒し、是を手並の始めとし、指詰引

田信輝三千餘人、関を作て切てかゝる。種村が勢狼狽騒ぎ、我さきにと逃出すを、陣の左右より木下が伏勢一千餘、一同に起て城兵を中に取籠め、さんぐ〵に薙立れば、討るゝ者數をしらず。大將種村大藏は、當國無雙の勇士なれば少しも騒がず、群る敵を切拔々々、道を開き落行けるを、池田信輝鎗提げ、「きたなし返せ」と追かけたり。大藏馬の口を引かへし、太刀眞向にさしかざし、互に聞ゆる武勇の壯士、右に拂ひ左に受け、精神を勵し戰ひけるが、信輝鎗投すて、大手をひろげて組合たり。池田が郎等片桐半左衞門、太刀拔きはなし、種村が馬の前足を切放す。種村何かはしばしもたまるべき、馬より下へどふと落つ。信輝も同じくおり重り、終に種村を取て推へ、首かき切て立上れば、いとゞさへ亂れ立たる城兵ども、大將討れぬれば皆降參をぞしたりける。此戰の最中に、小六黨の兵士八百餘人、城中へ亂れ入り、當るを幸切廻れば、思ひよらざる城兵ども、防ぐ手立もあらばこそ、或は討れ生捕れ、終に森山の城平治して、いまだ寅の刻は過ざるに、木下、池田城中に入りて休息し、使者を以て此旨信長卿へ注進す。

○柴田勝家攻二日野城一

同日同刻、柴田、佐々、蜂谷が輩、一萬餘騎を引率し、日野の城へ押寄せ、四方を圍で攻かけ

禎御味方に參らざるを以て、和田山、箕作の要害一時に踏潰し、承禎父子甚だ恐怖し、向はざるに城を捨落失たり。然るに今此小城に、僅の人數籠城して、織田の大軍と戰はん結構あるは、石を抱て淵に入り、薪を負て燒野を行に同じかるべし。速に降參あるに於ては、全く助命の沙汰に及ぶべし。若降參遲退に及ぶ時は、忽城壁粉のごとく、滿城血と成すべき間、木下藤吉是を痛み、某に命じて使節たらしむ。思慮を加へて返答すべし」といふ。種村、上坂、使者の口上傍若無人なるを怒るといへども、事に附て謀計を成んと密に悅び「明日城兵を引つれ御陣へ參り、降參仕るべし」と使者をかへし、軍兵を手分して、今宵木下が陣を夜打すべしと用意を成し、日の暮るを待居たり。

○池田信輝討二種村大藏一

扨も城將種村大藏降參のよし聞えければ、木下が軍勢一丁ばかり陣營を退け、兵士等甲冑を解て酒宴をなし、用心の氣色更になく、十分誇て見えにける。其夜子の半刻ばかり、種村、上坂各三百餘騎、木下が陣へ押寄せ、俄に鬨を作て馳入りたるに、陣中更に人影なし。種村大きに驚き、「敵の謀計に落たるぞ。速に退け」といふ程こそあれ、忽耳元に鐵炮響き、木下藤吉、池

と評議の最中、織田家より使者到來せしかば、呼入て其口上を聞に、降參せば所領安堵たるべき條、理を盡して申述る。承禎卒に思慮する事不能、「跡より返答に及ぶべし」とて、使者を返し、取定めたる思案もなく、周章狼狽へ、調度財寶そこ〳〵に取持せ、妻子一族引連て、夜中に石部の城へ落行しは、見苦しかりける有樣なり。

○木下藤吉郎攻二森山城一

承禎父子、「觀音寺の城退去の由きこえければ、信長惣軍を引て入城し給ひ、さらば勢に乘て佐々木の附城を悉く攻落すべしとて、日野の城へは柴田勝家、佐々内藏介、蜂谷兵庫頭三人、其勢一萬餘騎、森山の城へは木下藤吉郎、池田勝三郎兩人、五千餘人、九月十二日巳の刻、同時に觀音寺を進發し、左右に分れて馳たりけり。森山の城には種村太藏太輔を大將として、上坂主馬助一千餘人、少しも屈せず、矢石を備へ待ちかけたり。藤吉郎謀を定め、嚴しく四方を取圍み、未戰を催さず、堀尾茂助吉晴を以て使者と成し、城中へ赴かしむ。城兵敵寄ば命限り防戰すべしと、拳を撫て待ちけるに、戰は始めずして、使者一人、甲冑を帶せず、平衣にて入來り、種村に對面して、「今度織田信長、義昭公を守立て大軍上洛するの所に、佐々木承

○六角承禎退二去觀音寺城一

箕作の城攻、光秀が謀は城兵をおびき出し、僞り負てよき圖に引附け、大軍一度に攻上る時は、敵周章て引退くべし。其時物馴たる勇士を敵兵にまじへ城中へ入置き、續て急に攻寄るに、城中より火を放ち、或は主將を切殺し、城戸を開かせ、攻入べき方便なり。然れども新參といひ、腹心の郎等も少なく、此時城中へ紛入りしは、從弟明智彌平次、同次郎、奥田、三宅等四人のみにて、しかも見顯されん事を恐れて、卒忽に手を下し得ず。藤吉郎も光秀と謀略は同じけれども、兵士は小六黨の强盜にて、しのびの達人三十餘人、其上去る永祿三年、織田今川桶挾間の合戰の時、佐々木家より借り請し具足武具袖印までを貯へ、敵兵に紛れ城中に入置たれば、見咎らるゝ事曾てなく、三十餘人四方に散て切廻れど、城兵これを見分る事不能、終に藤吉が手に落城す。これ木下が臨氣應變の才智なり。信長卿は木下が計略にて、和田山、箕作兩城を半日の内に攻落し、其勢破竹の如く、直に觀音寺の本城を攻らるべしと、評定區々なりけるが、木下藤吉郎が計にて、觀音寺の城へ使節を立て、承禎父子に降參を進む。扨も佐々木承禎入道は、和田山、箕作只一時に落城しければ大に驚き、恐怖周章大方ならず、いかゞはせん

箕作落城

に呼はつて、同音にどつと笑ふ。城兵は云に及ばず、味方の勢も大に驚き、其故を曾て知らず。光秀も怪しみながら、藤吉我謀を推察して、かくのごとく罵らしめ、城兵を疑はしむる計策ならんと、猶豫て城中を見るに、中沼隼人といふ功の者、櫓に上り士卒を下知し居る所へ、一人の大漢子傍より顯出で、中沼を一刀に切殺す。爰に於て城中大に周章騒ぎ、謀反人よと呼はる所に、忽五色の吹貫を城中に高く指上げ、「木下藤吉郎箕作の城一番乘」と銘々に呼つて、小六を始め、稲田、堀尾、加次田が輩三十餘人、四方に散て切廻れば、城中上を下へと騒ぎ亂れ、何れを敵、何れを味方と見定めがたく、右往左往に逃たりける。是を見て森、坂井、明智が輩、すはや進めといふ程こそあれ、一千餘人、追手の門を押破り、一同に亂入り、當る者を切廻る。城兵今は防ぐべき手立なく、本丸へ逃籠り、主將出雲守必死に成て戰うたり。明智光秀は、思ひもよらず藤吉に功を奪れ、此本丸を攻落さずんば、何面目に人と面を合すべきと、勇氣日頃に十倍して、自ら眞先に進んで、息もつがず攻ければ、さしも必死と定めたる城兵も大きに苦しみ、降參の由聲々に呼りけるにぞ、光秀此旨信長卿へ伺ひければ、「望に任せ城を請取り、軍兵どもは追拂ふべし」と下知し給へば、出雲守大に悦び、殘兵引つれ、觀音寺の本城へ退きける。光秀本丸に入りて、諸軍の勞を休めける。此時既に巳の刻は過たりける。

の諸將敵兵をおびき出し、戰うて敗走せり。是某が謀にて候」と云ふ。木下早く其手段を悟り、「至極の計略、頓て落城仕らん。併足下手勢少なく、計略十分に行ひがたからん。某が勢を合せ、此度は大勢にて向ひ、能謀事を行ひ給へ」と。光秀其詞に隨ひ、藤吉が勢を我勢に合せ、都合一千餘人、又々城へ責寄ける。城兵坂井、森が兵を切立々々、勝に乘て追ひ來る。光秀が勢入替つて戰ひ、「鐵炮をつるべ放ち、敵兵をおどろかし、引上させんと謀りけるが、案のごとく城兵ども、長追をして過すなと、鐘を鳴して引取ける。此時光秀士卒を下知し、急に城際へ押寄せ、謀事を行はんとす。城兵附入せられじと、必死に成て防ぎければ、光秀も敢て戰を好まず、城の四方を取圍み、鐵炮を放ち矢を射かけ、城中の變を待居たり。

○箕作落城

此時城中固く守り、矢石を飛し、防戰す。光秀は我計略既に成りぬ、此城今や落城せんと、息を詰て控へける時、木下が兵の内より、一人馬を堀際へ乘出し、鞭を揚て城兵をさし招き、大音にて申けるは、「當城既に此方の有と成れり。然るをいまだ悟らず、何を賴に防戰するや。早く降參して生命を全くせよ。猶豫するに及んでは、城壁ともに粉の如く成すべしぞ」と、高らか

語りければ、孫四郎其趣意を具に信長卿に申上げ、恩賞を下し賜べしと希ければ、信長卿坂井久藏、塙長八郎兩人を召され、戰の次第を尋給へば、長八郎謹で久藏が働委細に言上に及びぬれば、久藏も長八郎が救ひによつて戰死を遁ぬと、始終詳に申上げけるにぞ、信長卿始て久藏が功を稱し給ひ、感狀を賜り、更に五百貫を下し給ふ。長八郎が働、是又稱すべしとて、武士に取立て、名を塙團右衛門正尙と賜りければ、兩人深く恩を謝して、頓て御前を退きける。

○明智光秀攻ニ箕作一

去程に明智光秀計策を定め、坂井右近、森三左衛門に下知して、重て城を攻討さしむ。城中暫く矢石を飛し防ぎ戰ひけるが、はじめより寄手の兵、兎角進みかねて見えければ、城兵甚侮り輕んじ、今度も城戸を開て討て出で、さんぐ\にかけ立追まくれば、坂井森の兩人、暫し支て戰ひしが、備を立かね、四途路に成て敗走す。此時藤吉既に和田山を攻落し、信長卿の命を受け、箕作は要害堅固にして等閑の城にあらず、落城延引せば妨あらんとて、光秀を見繼の爲、手勢五百餘人を引具し、明智が陣へ來り、光秀に其計略を問ふ。光秀、藤吉が和田山を攻落せしを見て甚だ心を苦め、答て云く、「某が計略大半成就し、既に落城のきざし顯れたり。今味方

信長卿の馬添に、塙長八郎といへる大剛の者あり、先より木陰に立て久藏が働を感じ居たりしが、城中より多勢の討手出るを見て、太刀拔かざし走出で、久藏に力を添へ、進で敵を待つ所へ、城兵は源八が首を取かへさんと、どつと喚て切てかゝる。長八會釋もなく、先に進む武者三騎忽に切倒し、右に當り左に支へ、多勢を恐れず、勇を震うて戰うたり。坂井主從も長八郎が救ひに力を得、爰を先途と切廻れば、城兵ども僅三人に切立られ、進みかねて見えたる所に、遂に光秀が大軍、鬨を作つて攻登ると見えければ、城將吉田出雲守、軍使を馳て戰を制し、士卒を城中へ引入れけり。塙、坂井も敢て戰を好ず、敵の引取を幸に、麓を差て下りける。軍勢の攻寄ると見えしは、塙、坂井を救ふにはあらず、光秀が奇兵にて、城兵をおびき出さん計策なり。坂井久藏は建部源八が首を以て大將の實檢に備へけれど、信長卿、久藏が小腕には不相應の高名なりと疑ひ給ひ、つやつや御褒詞もなかりければ、久藏本意なげに退きけり。塙長八郎是を見て、前田又四郎に附て申けるは、「坂井久藏、年稚しといへども勇猛衆に越え、敵の勇將建部を討し有樣、某其場に有合せ、始終不殘見物したり。然るに君其功を疑ひ給ひ、褒賞の御沙汰なし。久藏重ての戰に、必ず討死すべし。足下此事をして宜敷執成し遣さるべし。軍中剛臆の沙汰詳ならざる時は、兵士悉く勇を勵まず。早く言上して久藏が功を顯はし給へ」と

血氣盛の若武者なれば、門を開き只一人馳出で、「黄口の小兒、猥に惡言を吐く事なかれ。城中へ具し奴と成して召使ん」と大手を廣げて飛かゝるを、久藏飛鳥の如く馬を躍らせ、鎗を捻りて突かゝる。源八も太刀引拔き、一往一來祕術を盡し戰ひしが、久藏鎗の鋒先三尺計切落され、源八にむずと組附たり。源八莞爾々々打笑ひ、「天晴汝は果報者かな、いで城中へ召つれん」と、片手にて引抱へ、しづ〳〵と立歸る。久藏が郎等二人、主を討せじと拔つれて切てかゝる。源八片手なぐりに一人を討はなし、又ふり上て切附る。此時久藏兼て覺悟やしたりけん、短刀を拔出し、源八が鎧の透間を力に任せて突通しければ、何かはしばしもたまるべき、馬より下へどうど落る。久藏得たりかしこしと、押へて首を打落し、莞爾と笑うて立たりしは、目ざましかりける働なり。

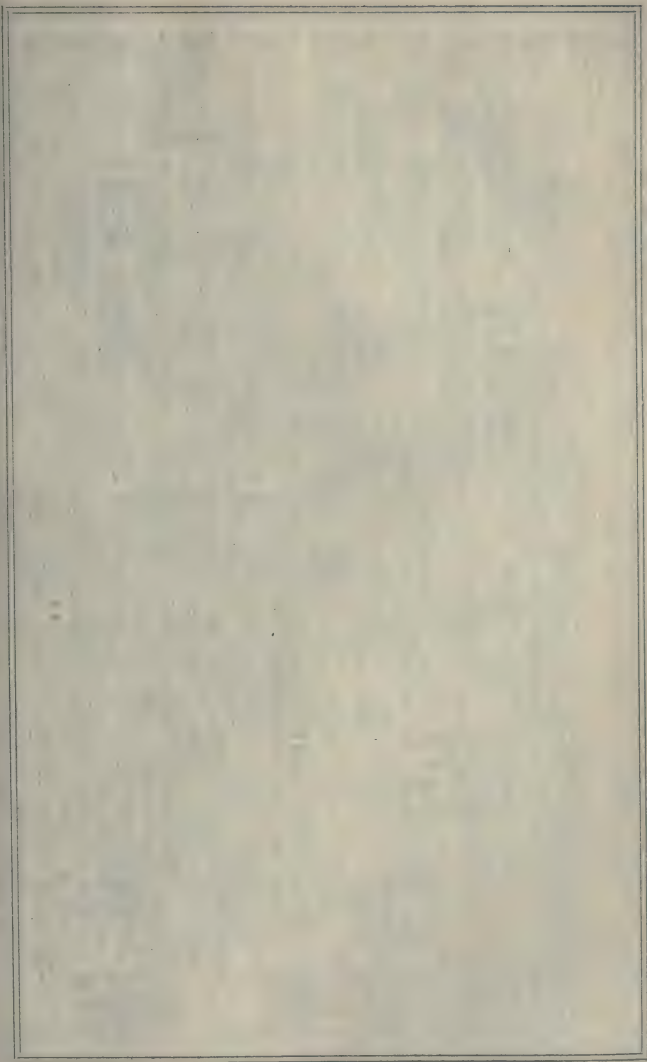
○塙長八郎顯坂井久藏功

此時城中鳴をしづめて、源八と久藏が戰を見物して居たりけるが、終に源八討れければ、安からず思ひ、はやり雄の兵又十騎計城戸を開きて、久藏主從を討取んと、拔つれて馳いづる。久藏主從は最前の戰に力勞れければ、所詮多勢を引うけ合戰叶がたく、討死せんと向ふ所に、

繪本太閤記　初篇卷之十

○坂井久藏斬二建部源八郎一

和論語に云く、「後醍醐天皇御年四歳の時、內裏に夜更て後、身の長三尺計の小男いづくともなく來りて、四歳の宮に向ひて守り居たり。諸卿是を見て、皆興さめて、何者と言ひ出すべき人もなき所に、皇子これを強く白眼給ふ。にらまれて彼男あくびして、「明日は雨降なん」といへば、皇子心得給ひ、「鴻雁は風を厭ひ、野干は雨を愁ふとあれば、汝必ず狐ならん」と仰給ひしかば、此小男こう〳〵と鳴て、狐になりて失たりける。皆人是を見まゐらせ、「雉子は百歳なれども今年の鷹に取られ、頻伽鳥は卵の內にて啼聲諸〳〵の鳥に勝れたりと聞り。此君の生長、さばかりにこそ」と感じ合ひけるとなん」實に好堅樹は芽出ざる已前に其根八十餘里に蟠り、栴檀は二葉にして香しとや。坂井右近が嫡子久藏、此時いまだ十三歳、大膽不敵の荒童子なりけるが、只一騎堀際に馬を乘出し、扇を揚て城兵を招き、樣々廣言を吐き罵りければ、城兵始は、小冠者なり、論ずるに足らずとて、返答もなく捨置しが、餘りの惡口聞捨がたく、元來建部源八郎、

繪本太閤記 初篇第十之卷 目錄

城中殆勞れ草臥れ、勇氣たゆんで見えにけり。搦手へ廻りたる加次田、稻田が勢五百餘人、後の山三ヶ所に井樓を築揚げ、城中を眼下に見おろし、鐵炮火矢を射る事雨よりも繁し。城中かねて五百人の勢を以て搦手を堅めけるに、思ひもよらず、中天より凉じき矢玉降來り、幾許の人馬を打殺し、役所陣所に火燃出で、城中鼎の涌がごとし。大手の寄手是を見て、一時に鬨を作り、どつと喚て攻登る。城中前後の敵に度を失ひ、兼て備へし防戰の用意も徒に捨置て、二の丸さして迯入たり。木下が大手搦手の兩勢、一度に城中へ亂入り、當るを幸切て廻る程こそあれ、今は二の丸にもこらへかねて見えにける。藤吉城主山中山城守へ使者を差越し、利害を說て降參を進めければ、山城守其下知に隨ひ、自縛して降人に出ぬれば、木下即時に城中をしづめ、鬨を揚て饒に下り、本陣へこそ歸りける。此時未辰の上剋一時餘りに、和田山の城落著しければ、信長其功を稱し給ふ。此時明智十兵衛光秀は、箕作の城へ押寄せ、鬨を作て攻かゝれば、城代吉田出雲守、鐵炮矢石を打出し、きびしく防ぎ戰ひ、明智が勢進みかねて見えたる所に、物頭建部源八郎、江州無雙の勇力なるが、五百餘人城戸を開いて討て出で、さん〴〵に突立ければ、明智方の兵士、僞り負て引退く。城主吉田出雲守鐘を鳴して軍をまとめ、徐々と引取ける。

時に木下藤吉郎、和田山、箕作兩城とも、明子刻より攻懸り、卯の刻に至り、三時が間に攻拔べきよし、言上に及びければ、明智光秀謹で申上げけるは、「某君の御惠を以て先手の中へ加へられ、今度手合の合戰に勤功なきも口惜く候へば、兩城を木下と某兩人に命ぜられ、攻戰を許し給はゞ、互に三時を限り攻落し申すべし」と願ひければ、信長其旨に任せられ、「和田山は藤吉郎、箕作は光秀、各三時を限に攻落すべし」と仰渡され、兩人畏り座を立て用意をなす。光秀も新參なれば、手勢等もこれなきにより、信長卿より五千人を與へ給ひ、就中柴田、佐久間の輩、兼々藤吉が才略勝れしを偏執しければ、新參の光秀に力を添へ、藤吉が勢をくじき、已後さし出ざるやうに計はんと、柴田、佐久間の兩人とも、光秀の加勢と成り、箕作へ赴きける。去程に藤吉郎は和田山へ向ひ、加次田隼人、稻田大炊、青山新七、同小介、長江半之丞、河口久助、堀尾茂助七人を大將として、野武士の輩五百人、和田山の嶮岨をつたひ、城の搦手へ廻らしめ、計を行はしむ。其の身は惣勢三千餘騎、子の刻より大手の方へ攻かゝり、關を發し空鐵炮を放ち、徒に攻上るべき勢をなし、而も輕々敷は攻寄ず。城中は山中山城守、嚴敷防戰の備を成し、大木大石を積重ね、敵近寄ば打かけんと、片唾を呑で待けるに、唯鯨波、鐵炮の音のみ涼じく、敢て一騎も近よらず、夜半より明近き頃まで、氣を張り心を配り、

木下藤吉郎和田山の城を抜く

藤吉進み出て、「和田山、箕作の兩城は、佐々木家の咽首にして、賴みとする所なり。此兩城陷りなば、江州平治せんこと掌を指がごとし」柴田、佐久間等是を拒んで、「和田山箕作は枝城にて、觀音寺は根城なり。根を切ずして、枝を枯しめん事覺束なし。先本城を責落しなば、其餘の城々は攻ずして落著すべし」信長心中未決斷せず、光秀を召して計を尋ね給ふ。光秀は最前より軍の評定、口を閉て聞居たるに、此時言葉を發申けるは、「新參の某、舊臣の評定を異論すべき謂なしといへども、御尋の上は申上げざるも不忠なり。此度の合戰、木下殿の手段、甚だ尤に存候なり。其の故は、觀音寺へ向ひ攻給はゞ、和田山、箕作の兩城より首尾相討ち、進退を自由させじと構へたりし砦なれば、たとへ押の勢を以て防ぎ給ふとも、本城の合戰はかばか敷事有るまじ。和田山、箕作を攻討ち給ふ時、觀音寺の城より、助勢決して出る事有るまじく候。是大將の本城なる故に、猥りに出て戰に及ばず。されば藤吉の計議、江州忽平治すべき要論にして、甚感心にたへず候。はやく和田山、箕作を攻かゝり給はん事肝要なり」と詳に言上しければ、衆議是に一決して、明朝未明に攻かゝるべしとて、其用意さま〴〵なり。

○木下藤吉拔二和田山城一

信長上洛の出陣ありて、先江州六角承禎御味方に参らざれば、是を征伐ありて、直に京都へ攻上るべしと定め給ひ、美濃、尾張、三河、伊勢の軍兵を都て四萬八千餘騎、旌旗一天を覆ひ、鎗刀雲を突き、人盛に馬強く、整々と備を亂さず、先陣既に江州平尾に至れば、後陣は未だ濃州垂井、赤坂に支へたり。此時佐々木六角入道承禎、同苗右衞門佐義弼、三好松永に組しければ、織田勢を防んと、其の身は觀音寺の本城に楯籠り、和田山、箕作の要害に砦を築き、本城と鼎の三足に比し、相助けて長蛇の勢を成さんと、吉田出雲守の三千餘騎、和田山を守らせ、山中山城守同三千餘騎箕作に楯籠り、其外日野の城には蒲生下野守八百餘騎、森山の城には種村大藏太輔一千餘騎、水口の城には遠藤山城守一千五百人、石部の城にも伊庭出羽守一千餘騎、草津の城には馬淵治部太夫七百餘騎、長光寺の城に上坂兵庫介一千餘騎、其の外佐山、堅田、大溝の城々、都て十八ヶ所、各要害に楯籠り、防禦の備嚴重なりければ、いかに大軍を以て攻來るとも、容易平定すべしとは見えざりけり。

○信長大軍討二三好一

扨も信長卿は佐々木防禦の備あるを御覽じ、諸將を召され、軍の評定あられけるに、木下

このとき木下藤吉郎
危急を救ふ

ぴしく守りけり。遠藤、淺井かゝる防禦の備ありとは思ひもよらず、揉に揉で馳たりけるが、先手の士卒馳かへりて、何れの勢とも知れず二千餘り、寺の四方を堅く固め、嚴重に守護するよし、注進したりければ、遠藤自菩提院に至り伺ひ見るに、織田の兵士きら星のごとく並居ければ、遠藤甚驚き、かゝる思慮深き良將を、我々いかに思ふとも討取る事叶べきや、終には我國織田の爲に亡ぶべしと、歎息して退きける。

○明智光秀謁二信長一

扨も信長卿は、木下が防禦にて恙なく歸國ましく〳〵、上洛の用意頻なり。去程に明智十兵衞光秀越前を退去し、木下藤吉郎に寄て織田に仕ん事を需む。藤吉對面して光秀を考るに、度量衆に秀し英雄なれども、殺氣面に顯はれ、反逆の相貌あれば、後患を恐れ、兎やせまじ、角やあらせじと思慮しけれども、兼々光秀が事は足利義昭公を織田へ進め、動座なし奉り、就中義昭公の吹擧を以て、信長も光秀を見ん事を願ふ時なりければ、止む事なく言上に及びけるに、信長急ぎ光秀を召出し、其骨柄尋常ならず、秀麗たる威風あるを悦び、「今度の上洛三好誅伐の先手に加ふべし」と甚だ氣色宜しかりければ、光秀恩を謝して欣びけり。扨も永祿十一年秋九月、

○木下藤吉救二危急一

信長卿、其夜は菩提院といふ寺院を本陣として宿り給ひ、何の用心もなく、快く酒宴を催し、暫休息せられけるが、木下藤吉少も油斷なく、今日佐和山にて、遠藤がふるまひ怪しければ、暫も眠らず、御側に附添守護しける。遠藤喜右衛門は馳走役人に命ぜられ、此菩提院に至り、始終信長の氣色を伺ひけるに、更に用心の體もなくおはしけれど、側には猿冠者の木下藤吉、四方に眼を配り守護しければ、猥に手を動す事不能、密に小谷の城へ馳行き、再久政、長政に信長を誅すべき旨、頻に申しすゝむれども、長政父子敢て諾せず。遠藤今はすべき樣なく、所詮軍兵を率し、菩提院へ押寄せ信長を討取り、主人父子の怒を受け切腹するとも、國家の爲なれば厭ふ事なしと心を定め、淺井掃部と申合せ、五百人の逞兵を引率し、菩提院へと急ぎける。此時藤吉は遠藤が席にあらざるを怪しみ、左右の人に尋るに、先刻遠藤只一人あわたゞしく馬に打乘り、何處ともなく出行たりといふ。藤吉、扨は奇怪の事なり、備なくんば危かるべしと、兼て手配やしたりけん、狼烟を揚て相圖をなせば、摺針、柏原の在々に埋伏したる木下勢、小六兄弟、稻田、堀尾、加次田が輩二千餘騎、暫時の内に集りて、菩提院の四方を堅め、用心き

然として顯れければ、急ぎ小谷に參じ、長政が父久政に告て、信長を殺んと計る。久政其不義を恐れて、猥りに遠藤が詞に隨はず。遠藤事の果ざるを見て、所詮國家の爲なれば、身を捨て以て己が所意にまかせ、信長を討取べしと心を定め、又佐和山に至り見るに、信長用心の景色さらになく、打解て笑談し、入輿の體なりければ、遠藤折よしとつゝと入て、「織田、淺井始めて見參に侍ふ程に、某酌を取て御酒を奉らん」と誂子を取て信長に酌んとす。藤吉、信長卿をかこひ進で曰く、「足下の姓名はいかん」遠藤驚き答へて曰く、「小臣は是遠藤喜右衛門春元にて候」木下笑うて曰く、「酌人は小姓女子の勤る役なり。足下は是淺井の老臣、何ぞ自ら酌を取給ふに及ん。席に著て兒女に命じ給へ」といふ。遠藤は信長に近附寄り、一刀に殺害せんと計しに、藤吉に見咎められ、首尾あしゝと思ひければ、微笑して答て曰く、「稀に貴族の光臨、饗應なき事を恐る。責て某御酌に參りて、一時の興を添奉らんとす」藤吉の曰く、「足下は勇猛の兵、酌人の任にあらず。小臣酌を取て、御肴に猿舞一曲笑覽に入るべし」と、銚子を取て信長に進め、扇をひらき立あがり、兵の交、賴み有る中の酒宴かなと、舞かなでければ、一座大に興に入り、どよみ笑て、遠藤が計空しく成り、信長卿やがて暇を告げ、旅館へこそは入り給ふ。

秋を唱へ萬歳を呼び、共に大業を起すべしとて、脣歯の國と成りにけり。同八月上旬、信長と長政と、江州佐和山において、始て對面を遂んとて、兩家互に用意をなす。織田家老臣等諫めて曰く「淺井長政新に當家に因縁と雖も、心底を計しらず。猥りに他國へ入り給ふは、遠慮有べき事なり」と申けるに、木下藤吉すゝみ出で、「君長政と緣を結び、對面なくては親しからず。殊に始めての謁見なれば、武器武具を携へず、平和の威を示して、淺井一家を歸伏せしめんにはしかず。臣不肖なりといへども、君を守護し奉り、江州に赴かんに、更に危き事有るまじく」と申上ぐれば、信長其儀に同ぜられ、供人纔に百五十人、悉く平衣を著せしめ、近習には木下藤吉唯一人、大勇不敵の信長卿、智謀不思議の木下藤吉郎、百萬の敵中たりとも、恐れなくぞ見えにけり。

○織田淺井謁二佐和山一

永祿十一年八月二十日、江州佐和山において、織田信長、淺井長政始めて謁見あり。互に慇懃心切を演べ、頗和順を結びける。淺井の功臣遠藤喜右衛門は、智慮人に越え勇武衆に秀たる剛士なりければ、前刻よりつらく信長が言語容貌を考へみるに、終に天下を併呑すべき猛威粲

明智光秀

義昭も兼て信長を頼み聞んとおぼしける折節、光秀が勸めによりて一向信長を慕ひ給ひけるに、信長使者を以て請待申すにより、急に用意を調へ、美濃國へ入らせ給ふ。

○於市之方嫁㆓淺井長政㆒

信長卿足利義昭公を守護し、不日に都へ攻上り、年來の大志を遂んと、其手配りさま〲なり。爰に江州小谷の城主淺井備前守長政は、大職冠鎌足公の後胤にして、江州京極家の臣下たりしが、父久政と共に江北に武威を輝し、智勇兼備の良將なり。信長上洛の志しきりなるにより、江州の諸大名と和順せざれば上洛の道路難儀成べしとて、妹於市の方を以て淺井長政に嫁せしめ、内縁を結び、力を合せて上洛せんと、不破河内守を使者と成して、淺井家へ縁談の儀に及びけるに、淺井の老臣安養寺三郎左衛門、遠藤喜右衛門など、意見まち〱なりしかども、終に織田の乞に任せ、熟緣の返答ありて、永祿十一年四月、吉辰を選み、於市の方を淺井長政に嫁す。於市の方、此時春秋二十二、其容貌を物にたとへば、楊柳の風になびくごとく、顏色の艶に麗しきは、芙蓉の露にいたむともいひつべし。東國無雙の美人にして、和歌に巧に絲竹に委し。されば長政が最愛限りなく、偕老の契細なり。爰において織田、淺井兩家千

○明智光秀見二殺氣一

此時永祿五年の秋なりけるが、加賀國一向宗門の徒一揆を起し、越前へ攻入しに、朝倉土佐守景行、數千の軍兵を以て是を防ぐ。明智光秀越前の長崎といふ所に住居しけるに、閑を得て一揆の戰を見んと、御幸塚の軍場に至り見るに、早暮過て戰も止み、互に篝を焼て對陣す。光秀適に御幸塚の東を見るに、一道の赤氣空にたなびき、朝倉の陣營を犯す。是一揆の徒、夜討をかゝる表氣なりと見てければ、無縁ながらも土佐守に斯くと告るに、朝倉勢さる事もあんなれとて、用心堅固に敵を待つ。一揆の輩、光秀が云し如く、亥の剋計に夜討しけれど、兼て用心密なりければ、さんぐ\に打散し、十分の勝利を得たり。爰において土佐守、光秀が凡ならざるを感心し、義景に勸め仕へしむ。光秀も暫く爰に足をとゞめて、義景が容體を見るに、柔弱の小人にして、共に事を計るべき器量にあらず。然るに足利義昭公越前に入らせ給ひ、義景と計て三好松永を誅伐せんと議し給へども、義景愚にして事を果さず。光秀密に義昭公に謂て曰く「義景暗弱の愚將なり、足利再興の任に中ず。普く天下の英雄を考ふるに、尾州織田信長にしく事なし。君早く彼所に動座し給ひ、信長に命じて怨敵を平治し給ふべし」と勸め奉る。

明智光秀が素生

致すべきよし、謹で言上に及びければ、義昭公甚だ喜悦ましく〳〵「足利再興の儀、偏に信長が誠忠にあり、宜敷頼み思めす」由、上意ありければ、信長謹で領掌し、我家の面目何事か是にしかんと、益〻尊敬したりける。元來義昭公織田家へ動座あらせられし趣意は、朝倉家新參の家士、明智十兵衛光秀が勸め奉りし事なり。此光秀は其先清和の末流にして、美濃の國主土岐藝頼の一族、明智の城主土岐光綱が子なり。幼少にして父におくれ、齋藤義龍が爲に濃州を追放せられ、武者修行と志し、普く六十餘州を徘徊し、主を選んで仕んとす。周防の山口に至りて、毛利元就の臣桂能登守に寄て、毛利家の臣たらん事を乞ふ。能登守光秀が智辯容貌衆に越たるにめで、藝州に伴ひ、元就に是を吹擧す。元就光秀を召して、數日其度量を試し見るに、才智明敏にして勇氣餘りあり。元就は聰明伶悧にして、人の心根を見る事掌を指がごとし。光秀が相貌狼の眠るに似たり、喜怒の骨高く起り、其心神常に靜ならず、所謂外寛にして內急なるを以て、元就後患を恐れて、金銀を多く與へ、光秀を國に留めず。光秀更に樂まず、心不快なりといへ共、すべきやうなく、餞別の品を受拜して、藝州を出て豐後より薩摩へ赴きしに、此國の用心大にきびしく、他國の者猥に往來を許さず。止事なく四國へわたり、紀州伊勢路を經て越前に至り、暫く爰に止りけり。

義昭公も竊に越前を出て他の國へ移るべしと、よりよりく其用意を催し給ふ。爰に木下藤吉間者を入れ、此趣を聞たりければ、信長に委く言上し、「朝倉義景柔弱にして、義昭公他國に動座ましまさんと計給ふ。是天我君を助て事を成就なさしむる時なり。早く義昭公を當國へ迎給ひ、義兵を發し上洛し給はゞ、兼ての本懐一時に達し、天下平治の大功を成し給ふべし」と勸めければ、信長甚喜悅ありて、密使を越前の一乘が谷義昭公の御座所へ遣し、信長が誠忠を委細に言上に及びければ、義昭公兼て信長の器量衆に勝たるを慕給ひぬれば、甚だ滿足し給ひ、義景に告て、昵近の武士細川藤孝、上野秀政等數人を具し、美濃國へ移り給ふ。義景も本意なき事に思ひ、さまぐ〳〵止め參らせけれども、强て其旨命ぜられければ、すべきやうなく、朝倉中務丞恒景に二千餘人の軍卒を相添へ、路次の警固をつとめけり。

○明智光秀素性

去程に、義昭公は濃州に入御ましく〳〵ければ、信長兼て不破河内守、菅谷九右衛門等三千餘騎、半途に出て迎へ奉り、美濃西の庄立政寺を御本陣と定め、警固の武士一萬餘人、晝夜非常をいましめ、嚴重に守護し奉り、信長參上して御目見首尾よく調ひ、不日に軍勢催促し、怨敵誅伐

仲秋の月高くさし登り、金波江上に瀰漫たり。渡の舟もがなと、遙に江上を見渡せども、釣する海士の篝より外に、一葉の舟もなし。いかゞはせんと猶豫ほどに、後の方に人馬の音喧しく、松明を照し、義弼が勢追付たり。伊賀守、今は是までなり、敵追附ば討死せんと、君を圍て立たる所に、傍なる入江の中より、小舟一艘漕出し、武者一人顯れ出で、聲を揚て、「和田殿にては候はずや」と問ふ。伊賀守、「左云ふ汝は誰人なるや」彼船中の武士、船端に禮をなし、「六角義秀、君の急難を救ひ奉らん爲、某に命じて江を渡し奉らんとす」爰に於て覺慶主從大に悦び、急に舟に乘移り一丁計漕出せば、追人の軍勢岸の邊へ馳附き、そこよ爰よと扒せ共、小船に乘て江を渡給はんとは思ひ儲ぬ事なれば、湖上には心もつかず、岸を傳ひに尋行く。覺慶は虎口をのがれ、曉に朽木谷といふ所に著給ひ、民部少輔經綱が許に暫く隱れおはせしが、爰にて細川、三淵が輩集會し、永祿十年、越前へ赴き給ひ、國主朝倉左衛門太輔義景が館に入給ひければ、義景大に悦び、軍勢を集め上洛すべき由、御答へ申すにより、覺慶もはじめて安堵し給ひつゝ、同十一年四月、還俗まし〱、御諱を義昭公と申し奉る。此時義兵を揚て、三好、松永が輩を討伐あり度旨、度々義景へ催促まし〱けれども、元來義景勇なき愚將なれば、兎角に寄て事を果さず、頃日幼稚の兒を失ひ、愁傷に他事を忘れ、上洛の心更になかりければ、

屋形護し箕作へ赴きけり。承禎其子義弼諸共に、饗應應對丁嚀を盡し、頗る佳境に入にけり。伊賀守義秀、今日の宴會必ず謀計あるべしと、心を附て伺ふに、妻戸の蔭に力者を伏置たりと見えて、鎗刀の光池水に映じ、輝々ときらめきければ、密に席を立て和田伊賀守に此事を告ぐ。伊賀守覺慶の御前につゝと居寄て、「兼て命ぜられし御衣服、只今持參候間、御召替然るべし」と申て、吃とめくばせしたりければ、覺慶其心を悟り、諾きて座を立給へば、伊賀守御耳に口を附け、承禎が計を言上し、搦手の塀を越え、君を守護して落行ける。時に三淵大和守、細川藤高兩人、義秀、承禎が前に出で、「主君覺慶、卒に腹痛甚しく、宴席に連りがたく、觀音寺の城へかへり候。臣等に命じ、此旨を申置しむ。猶他日の參會多罪を謝すべし」と、謹で述ければ、承禎心中大に驚き、ひそかに息男義弼に命じ、覺慶の跡を追しむ。義弼三百人の逞兵を引率し、湖水の邊へ馳行けり。是によつて此夜の宴會既に破れ、義秀、三淵、細川も、觀音寺の城へ歸りけり。

○義昭公美濃國動座

扨も和田伊賀守は、覺慶を誘ひ參らせ、搦手より忍出で、嶮難を凌ぎ、湖水の邊へ出でければ、

伐の計策調ひがたく、武田義滋を頼み給ひ、若狭國に赴き給ふ。此所も分内狹く、大義を發起すべき地理にあらずとて、再び江州に歸り給ひ、六角義秀、同承禎入道に足利家再興の儀を談ぜられければ、義秀畏りて領承し、觀音寺の城に迎へ奉り、深く勞り疎意なく仕奉れば、君も暫く安堵し給ひ、よりよりゝ義兵の計を廻し給ふといへども、義秀多病にて國政に與らず、權勢悉く叔父承禎が手裏にありて、未だ事成就せず。此時京都三好の三老臣、覺慶の南都を落させ給ひ、其在所を知らざれば、晝夜心を安ぜず、松永が先見のごとく、諸侯をかたらひ上洛せば、此上の恥辱はあらじと、石山の上人へ申上げたりし誓紙の旨に違ぬれど、身の上には代難く、國々へ間者を入れ覺慶の在所を尋ね、密に失ひ奉らんと計けるが、江州佐々木家六角義秀が館におはす由慥に聞えければ、義秀覺慶を扶け上洛せば、勇々敷難儀なるべしと、執政承禎入道へさまざま音物金帛を送り、「覺慶を討て我々に力を合せば、奏聞して天下に管領たらしむべし」と申送りければ、承禎入道忽ち惡心を發し、三好に組し覺慶を殺さんとす。されども屋形義秀此事を察し、晝夜守護し奉れば、承禎入道敢て手を動す事不能、徒にこそ過しけれ。日月矢の疾きに過たりとかや、早く夏も去りて仲秋の最中なれば、月を賞して宴をなさんと、承禎が居城箕作へ、覺慶君を請招す。義秀不慮の禍有らん事を恐れ、自ら病を助けて覺慶を守

繪本太閤記　初篇巻之九

○六角承禎謀レ害ニ覺慶一

「さして行笠置の山を出しより天が下にはかくれ家もなし」是なん後醍醐天皇、笠置の城御没落のとき、梢を拂ふ松の風を、雨の降ぞと聞しめし、木の陰に立寄せ給ひたれば、下露のはらはらと御袖にかゝりけるを御覽ぜられて、詠せ給ふ御歌なり。時の不肖にあはせ給へば、一天の君の御歌に、天が下には隱家もなしと歎せ給ふは、恐れ多しとも勿體なし共、たとへていはんものぞなし。されば足利將軍尊氏公の嫡々たる義輝公は、逆臣の爲に弑せられ給ひ、御舍弟一乘院門主覺慶君は、辛じて南都を落させ給へども、計がたき人心なれば、今ぞ彼帝の御製を思召あはせられ、御袂を絞らせ給ふぞ、理り過て哀れなり。されども細川藤高が介抱にて、江州和田伊賀守が館に忍びて住せ給ひつゝ、密に譜代恩顧の武士を召れければ、馳集る人々には、大館、三淵、仁木、武田、一色、沼田、二階堂、牧島、飯川、上野の面々、御味方に參るといへども、其昔は各大身名家なりしかども、此時に至ては零落微勢の武士のみなれば、怨敵誅

繪本太閤記　初篇第九之卷　目録

給ひて行方を知らざれば、すべきやうなく、手を空しくして京へ歸り、松永に此由を告ぐ。久秀足ずりをして悔み怒り「よしなき愚人の長詮議にて、由々敷き敵を討もらしぬ。見よ〱、此人他國に走り、武田、上杉、織田、北條なんどの大家に寄て義兵を揚げ、頓て都に攻來るべし。未だ遠くは落行まじ、手を分て探せよ」とて、近國近在へ間者を入れ、普く探り求れ共、更に行方知れざれば、三老臣を罵り恥しむる事大方ならず。爰に於て三好、松永確執に及び、松永は畠山をかたらひ、三好方は篠原を味方と成し、終に合戰に及びけるが、松永終に敗軍して、僞て和平を乞ひ、金山駿河守と計て、三好義繼を招き、是を大將と仰ぎ、和州多門の城に楯こもり、三好家は阿波の御所を守立て、大軍を發し南都へ出張し、大佛殿に陣を取る。松永奇計を以て不意に夜討し、火を放つて燒討す。さしも建連たる大佛殿、回廊、方丈、厨、一字も殘らず灰燼と成る。三好勢はさん〲に討負け、大和には溜得ず、京都さして迯登りぬ。是より三好、松永合戰止む時なく、暫時も隙はなかりけり。

へ對し大功此上有るべからず。黃泉の下においても、故將軍義輝公、上人の厚情を嬉しく思し給ふべし。一つには檀越たる三好が輩、惡事を轉じて善事と成す事、是二つながら上人の惠なれば、善根此上や候べき」と、血の涙をながしてたのみければ、上人もいたう泪ぐませ給ひ、頓て三好が方へ使僧を遣し、さま〴〵示し給へば、三老臣も上人の敎化に先非を悔み、覺慶君においては毛頭害心これなき由、誓紙を以て上人へ送りければ、藤高天に悅び地に欣び、上人に拜謝して、南都さして急ける。松永彈正此事を聞き大に怒り、「三好一家の愚人原、佛に淫じ僧を歸依し、目前の怨敵を助置き、首級を失ふ期に至つて後悔すとも何の益かあらん。所詮主君を弑害せし我〳〵、草を斬ば根を斷べし、法師なりとて助け置ば、後の禍かぎりあらじ。よしよし、彼は兎もあれ角もあれ、我においては生置まじ」と、手勢を勝つて三百餘人、南都へこそさし向けり。細川藤高は先達て、石山より直に南都へ來り、覺慶君に事の仔細を言上し、「三好、松永內變を生じ、必ず事一決すまじ。此隙にはや〳〵爰を遁れ給へ、何方迄も御供いたし、御先途を見參らすべし」と申しければ、覺慶君も兄の弑せられ給ひし上は、今は我身の上なりと思ひ定め給ひしが、藤高が忠志に力を得給ひ、夜に紛れて南都を落させ給ひ、江州矢島和田伊賀守が方に暫く忍びおはしける。去程に松永が軍兵南都に至り、覺慶を探し奉るに、はや落失

ふを、三好が郎等池田丹後、妻戸の陰に隱れ居て、御足薙て打倒し、障子を以て押臥奉り、上より鎗にて突通す。其時御殿の內火もえ出で、黑煙御所中に滿て、御首は取得ずして退きける。義輝公御年三十歲。嗚呼此日はいかなる日ぞや、足利家十二代の將軍、逆臣の爲に弑せられ、永く泉下の鬼と成り給ふ。武運の末こそ悲しけれ。

○三好松永確執

三好の三老臣、松永彈正等は、阿波の御所に御座ける義榮公と申す御方を京都へ迎へ奉り、禁廷へ奏し、征夷將軍の職を申下し、四人の者互に政事を執行ふ。爰に故將軍義輝公の御令弟、鹿苑寺に御座しを謀て討奉り、其餘の御連枝君達を悉く弑逆し、今御一人の御弟、南都一乘院の御門主覺慶と號し奉るをも討參せんと、三好、松永等其計區々なりけるを、細川藤高甚だ歎き、密に攝州石山本願寺の上人顯如に謁し、「三好、松永不道にして君を弑し、數多の御連枝悉く害し、僅に一乘院の御門主のみ、今に生命を全うし給ふといへ共、頃日急に南都へ押寄せ、討奉る評定最中なり。元來三好の三老臣は、當院の檀越にして、歸依し奉る事他に越たり。あはれ上人の大慈悲心を以て、三好が徒に理を示し、門主の助命を成さしめ給はゞ、將軍家

義經公最期

めぐりあふけふや彌生のみかはみづ名に流れたる花の杯

と、京極黄門の詠じ給ひしも、斯やあらんとやさしかりき。此日松永彈正、毒酒を以て主君三好筑前守義長を殺害す。同席の諸侯、豫め其手段を知るといへ共、松永が權威に恐れ、敢て口外に出す者なし。長慶曾て松永が陰謀を知ず、愁傷に他事を辨へず、家督の事を松永に任せ、病床に臥て立つ事不能。松永久秀爰に於て威勢益強く、長慶が舍弟十河民部が男義繼を以て長慶の養子と成し、一族三好日向守長縁、同下野守政安、岩成主税好通三人を後見と成して、京都を守護せしむ、是を三好の三老臣といふ。皆松永が陰謀に組せし者なり。永祿七年、三好長慶病死す。同八年、松永久秀三老臣と計を定め、將軍義輝公淸水寺へ詣給ふに、路次の警固なりと僞り、帷子の上に具足を著し、兵卒を集る事三千餘人、卒に二條室町の御所に押寄せ、鯨波を作て攻入ける。將軍家の近士、上野、一色、馬木、彦部、有馬、小林、大館、富山が輩、手痛く防戰ふと雖も、元來不意の事なれば、甲冑を著たる者なく、三好、松永が多勢に取込られ、討死する者三十一人、義輝公も今は是までなりと思召ければ、辭世と思しくて、

五月雨か露か淚かほとゝぎす我名を上げよ雲の上まで

かくなん詠じ捨て給ひて、御劍を拔持ちかけ出給ひ、鎧武者三騎切倒し、多勢をめがけ進み給

して、是を糺し給ふ事不能、況や其餘の諸侯に於てをや。一人も其下知を背く者なく、自ら將軍家の輔佐と成り、攝政する事數年なり。後事あつて攝州に在國し、家臣松永彈正久秀をして京都の守護たらしむ。松永元來奸佞邪智の曲者なれば、陰謀を企て、三好が下知と號し、將軍家に對し不禮失言をふるまひ、細川一家を奴隷のごとく侮り輕んじければ、細川晴元、將軍義輝公を進奉り、松永を誅せんとす。將軍家も深く三好。松永を惡みたまひければ、密に細川が計に隨ひ、松永誅伐の計議區々なり。隱れたるより顯るゝはなしと。將軍家深くつゝませ給へども、松永彈正此事を早く悟り、軍勢を率し、細川が館白川に押寄せ、一戰に晴元を追失ひ、直に東山を取圍み、義輝公を討奉らんとす。三好長慶此騷動を聞と等く、急ぎ上洛して松永を制し、軍兵を返さしめ、義輝公、松永と和睦調へ、暫く洛中鎭りける。此時長慶齡既に高く、嫡子筑前守義長を以て國政を執行はしむ。時に永祿四年三月三日、三好義長館において曲水の宴を催し、義輝公を始め奉り、在京の大名小名悉く寄集り、流水に羽觴を飛し、和歌を詠じ、詩を吟じ、終日宴を催しける。去應仁の朝廷、山名、細川亂を發せしより以來、既に百年になんなんとすれども、天下一日も靜ならず、內裏の行事ども行はれず、かゝる優なる催は、堂上にさへ絕たれば、人々目さむる心地して、興ある事限りなし。

濃津を取圍み、長野の一族郎從等をすゝめ、城主長野次郎は國司の舍弟なるを大河內へ送りかへし、信長の舍弟三十郎信兼を安濃津の城主と成し、夫より龜山に至り、關安藝守を攻る。安藝守は江州の六角承禎が後詰を賴みて籠城せし所に、信長佐々木緣者と成りて、鈴鹿山迄出張の沙汰有しかば、大きに驚き、信長の陣に來て降參す。斯刃に血ぬらずして勢州一圓に鎭り、今は八田の一城のみなり。信長急に攻討んと有りけるを、藤吉郎制して、「楠一人捨置たり共、何ぞ患る事の候はん。國司と共に兎も角も落著あるべし。北畠征伐は重て計略を定めて向ふべし」とて、瀧川一益を惣奉行として勢南を押へさせ、目出たく歸陣ましく〳〵ける。

○三好松永等弑二義輝公一

鸚鵡能く物を云へ共鳥類を離れず、猩々よく言へども禽獸をはなれず、今人として禮なきは、よくものいふといへども、亦禽獸の心ならずや。足利尊氏公より十一代の將軍、義晴公の御代に至て、武威權勢大に衰へ、官領細川が家臣三好修理太夫長慶、威を諸侯の上に震ひ、主家細川を蔑にし、專ら天下の政務掌に握り、終に將軍義晴公を追うて、嫡男義輝公を征夷將軍と成し奉り、王莽、董卓が威を振ふといへども、主家細川を始めとして、將軍家すら勢微に

給へば、更に據なき流言にて、武田家は此頃は、越後の上杉と取合最中なれば、外を攻るいとまなく、其上信長と内緣の因もあれば、毛頭異心無之由明白に相知れ、且桑名の城主瀧川左近一益より、使節を以て、山路彈正降參の條僞にて、是兼て楠七郎左衞門、謀計を以て山路をして僞て降參なさしめ、合戰を緩め置き、流言を以て織田の軍を退かしめたる由、具に言上に及びければ、信長卿大に後悔し、藤吉が先見神に通じたるをかへす〴〵感稱有り、重て征伐有るべきとて、永祿十一年春二月、美濃尾張の軍勢悉く催促し、其勢都合四萬餘騎、桑名まで出陣し、この所にて手分を定め給ひ、關、八田、安濃津、細野、神戶、高岡、鹿伏兎、國分等の城々へ悉く軍勢を差向け、同時に攻討べしと其勢盛なり。木下藤吉計謀を以て、江州の佐佐木信長と好を結び、西の方より勢州を攻むるよし流言させければ、軍民甚だ恐れをのゝき、千草、宇野、赤城、稻生の仕士等悉く降參し、先手に加はりければ、大軍を以て高岡の城を圍せ、藤吉郎信長の使者と成て敵城に赴き、山路に說て眞實の降を進めければ、彈正も所詮籠城叶ひがたしと思ひ、能戰ひて力盡なば討死と覺悟せしに、藤吉が誠心を大に悅び、心實に歸伏し、神戶藏人友盛を勸て和睦を取結び、信長卿の子息三七信孝殿を友盛の養子と成して、因を結びければ、神戶の一族、峯、鹿伏兎、國分等と共に降りぬ。爰に於て藤吉、山路と計て安

をまとめ、諸將と共に、大將の本陣へこそ參りける。

○山路彈正僞降信長

高岡の城主山路彈正、力既に盡て降參のよし聞えければ、信長諸將を集めて評議し給ふ。時に木下藤吉進み出でて、「山路が降參僞なるべし。進んで攻討ち、一擧に城を乘取べし」と云ふ。柴田勝家藤吉を拒んで曰く、「征伐は仁を以て大道とす、山路彈正力盡きて降を乞ふ、窮鳥も懷に入る時は狩人も是を殺さず。今彈正を攻殺さば、勢州の將士、君の不仁を惡んで、重ねて歸降するものなく、死力を盡して防戰すべし。然る時は勢州平治せん事覺束なし」信長卿未だ心決せず、衆議紛々として更に一定ならざる所へ、岐阜の城より飛脚到來して、「甲州武田信玄、美濃の三老臣と計を合せ大軍を起し、尾濃兩國へ亂入する由其聞え甚だ急なり。早く軍をまとめ御歸國然るべし」と、追々飛脚重りければ、信長甚だ驚き給ひ、「先彈正が降參を免し、重て事を計るべし」と、歸國の用意をせられける。藤吉郎大に苦しみ、「是必ず敵方に智者有て、流言を以て味方を惑し、大軍を退かせん謀なり」と、身を揉てあせりけれど、「本國に變あらば、此小城攻取て要なし」と衆議一決し、直に歸國し給ひける。去程に信長卿、三老臣を召して事を正し

火せん事を計知り、却て城中より火をかけ、味方の兵士を惑し、戰を寛くせしめん敵の計略と覺ゆるぞ。火を打捨て攻かけよ」と、自ら馬を馳出せば、此下知に勵され、柴田、池田、丹羽、坂井、其勢都合六千餘騎、城の四方を鐵桶の如く取圍み、喚き叫で攻たりける。山路彈正は、民屋へ火を放ば、敵疑うて引取べしと思ひけるに、俄に合戰に及びければ、四方に下知して防ぎ戰ふといへども、忍へつべうも見えざりける。木下藤吉城の容體を伺ひ見、「此城の落ん事、森、坂井が攻口に有べし、力を合せ乘入れや」と、佐々内藏介、前田孫四郎諸共に、森坂井が手に加はり、息をも繼ず攻ければ、難なく矢倉を攻落し、あはや此城此手より落なんとす。是を見て山路彈正、大手の櫓に兵士を上せ、信長の陣に向ひ、「降參致すべき間、攻口を緩め給へ」と、大音にて呼らせければ、大手の大將柴田勝家、頓て此旨信長へ言上し、「左右の攻口へ軍士を立て、備を堅めて引取べし」と申送りければ、藤吉苛て、「今日前攻落すべき時に臨んで戰を止め、退くべきやうやある。先城を踏破り、山路彈正を擒にし、其後降を免し給ふとも遲き事有べからず。唯此儘に攻詰て、一擧に城を乘取べし」と、森、坂井等に催促し、士卒を勵し攻たりける。信長卿は城將山路彈正降參のよし聞えければ、「先攻口を緩め、敵の虛實を窺ひ、重て攻るとも安かるべし」と、度々軍使を以て木下を制し給へば、藤吉郎も今は詮方なく、軍卒

しとて、永祿十年秋八月、美濃、尾張の軍勢一萬餘騎を發し、瀧川左近が居城桑名を本陣とし て、先手の兵三千餘人、楠七郎左衛門正具が籠たる八田の城を攻さしむ。楠正具元より智謀 強勇の良將なれば、五百餘人堅固に籠城し、矢石を飛し、嚴しく防ぎ戰へば、信長が先手の勢、 攻倦んで見えけるにぞ、信長卿、柴田、坂井、池田等又五千餘騎を與へて攻討しむ。三將ひた ひたと塀際に押寄せ、數百の鳥銃一度に討掛け、黑烟の中より鬨を作り、塀に取附き乘入んとす。 城中には楠下知して、矢挾間を閉ぢ、鳴をしづめて居たりしが、寄手塀に取附き登るを見て、 時分はよしと、櫓より大木大石を一同に落掛け、長刀を以て切落せば、柴田、池田が勢死傷の 者數を知らず。信長急に此城落まじきを察し、福富平左衛門、平手監物三千餘人にて押へ、惣 軍を引て高岡の城へ向ひ、四方を圍で攻たりける。此城は山路彈正盛信といふ勇士、一千餘人 楯籠り、織田の大軍を事ともせず、持口を守り、矢玉を惜まず、死力を盡して防せければ、此城 又左右なく攻落すべき樣もなく、夕陽西に傾けば、案内不知の地にて、夜軍せんも覺束なしと て、軍勢を引上げ、桑名の本陣へ歸り給ふ。翌早天に、重て高岡の城を攻らるべしと、又々軍 勢を押出すに、城外の民屋より忽火もえ出で、黑煙天に覆ふ。織田の軍士大に愕き、城兵い かなる計をや設けぬらんと、更に進み戰ふ者なし。木下藤吉郎士卒に下知し、「是は味方の放

於ては、大軍一息に揉立て、一人も殘らず踏潰すべし」と聞えければ、龍興大に悅び、助命の恩を謝して使者をかへし、其翌日永祿七年八月十五日、城を開きて退散す。附隨ふ家人には、齋藤九郎右衞門、長井隼人、同飛彈守、日根野備中守、同彌治右衞門、牧村牛之助、次第々々に城を出で、主從纔に三十餘人、住馴し國を餘所になして、都を志して遁れ行ける。其外城中の軍民、老少男女に至る迄、己がさま〲出行ける。爰に於て美濃一國、悉く織田に屬し、信長喜悅限りなく、功ある者は盡く恩賞をあたへ、就中木下藤吉、濃州征伐において莫大の功有とて、美濃の内にて數多領地を下し賜り、「今度瓢簞の相印、而白き趣向、取譯け味方の吉事なれば、此後例として馬印に用ふべし」と仰渡されければ、藤吉面目を施し、是より後瓢簞を馬印にし、戰功有每に小き瓢を一つ宛增けるにぞ、千生瓢簞とて其名天下に普く高し。

○信長勢州發向

織田上總介信長、齋藤の居城稻葉山に移り給ひ、新に城を造營ありて、號て岐阜城と云ふ。是より美濃、尾張二ケ國の大守にて、諸士をなつけ百姓を撫で、仁政を行ひ給へば、武威自盛にして、震ひ惶れずと云ふものなし。此勢に乘じて伊勢國に發向し、北畠一家を征伐有るべ

の兵堀の中へ飛入り〳〵、水門目がけ掛入ける。城中是を見て大に驚き、鐵炮矢石を飛し、打挫んとする折節、最前藤吉柴薪の中へ火を指入置たれば一同に燃上り、黑烟天を突き、凉じかりし有樣なれば、城兵大に肝を冷し、「搦手へ敵入たり。勢を分て戰へ」と罵る程に、水門の防矢も打捨て、上を下へと騷けり。其隙に木下勢六百餘人城中へ潜り入り、大門を開き鯨を作て切て廻れば、織田の大軍同じく鬨を合せ、我劣じと責入り〳〵、老若男女の厭なく、切立て〳〵戰ひしは、すさましかりし勢なり。

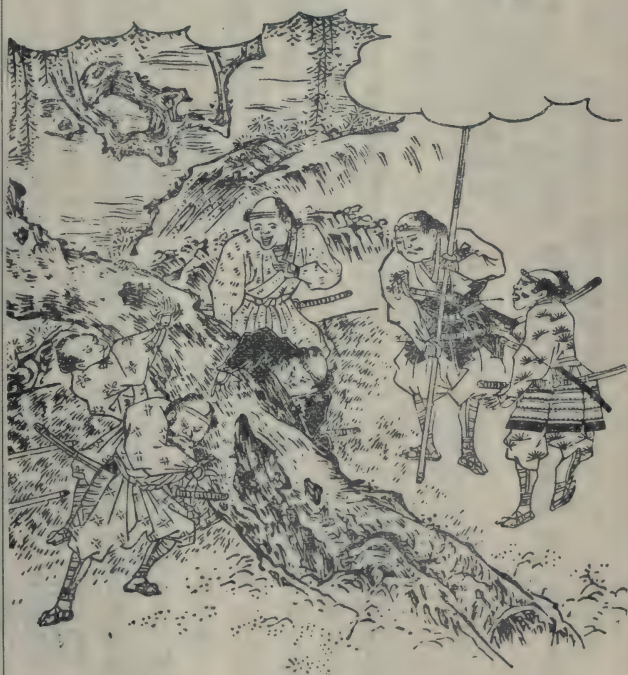
○千生瓢簞之由來

さるほどに齋藤龍興、稻葉山の二の丸まで敵の爲に討破られ、本丸に閉籠り防ぎ戰へ共、終には落城討死と覺悟を定め、最期の戰を挑みける。此稻葉山の城には、城下の百姓老少數多籠り、物の用に立べき者は十に二三分にして、徒に兵糧を費すのみなり。是は已前より木下藤吉郎さまざま謀略をめぐらし、美濃の將士を欺き、百姓を城中へ入しめ、籠城の便なからしめ、此時に至て信長卿より使者を遣し、「齋藤龍興城を開き退去するにおいては、攻口を開き、城中上下の男女悉く助命たるべし。此事多くの軍民、非命に死せん事を歎くが故なり。若承引なきに

こそとて主從八人、山を下りて塀際に至り見れば、一丈有餘の細堀ありて、渉る事不能、いかがはせんと猶豫しが、小六郎、加次田、堀尾の三人、傍に生たる大木の柳を、根もろともに押し倒し、是究竟の掛はしなりと、八人何の苦もなく城中に忍入り、傍をきつと見てあれば、雜兵ども十人餘り、兵粮を炊き終り、柴にもたれて臥居たる。八人の勇士太刀拔持ち、聲をもかけず彼雜兵を悉く切殺し、具足を剝取り銘々著し、齋藤方の兵士に似せ、柴薪を積置たる中へ悉く火を差入れ、飯櫃を持ち、攻口へ兵粮運ぶ有樣にもてなし、大手の方へ急ぎけるを、齋藤方の軍勢、敢て咎むる者もなかりけり。

○稻葉山之城陷落

藤吉郎主從は、終に搦手より大手の塀際へ廻り、今は心安しとて、兼て舍弟小市郎を始め、味方の諸軍へ約束を定たれば、酒器に用ひし瓢簞を竹の先に結附け、塀際高く指出し、八人の勇士水門の樋を引上げ、小六政勝潛出で、爰より押入り討破れと、手を揚て味方を招く。木下小市郎は、兄藤吉が印の瓢簞を見ると等しく、上島主水、淺野彌兵衞、其勢都合六百餘人、塀際に押寄見れは、小六郎水門より味方を招く。すはや此所より責入と言ふ程こそあれ、はやり雄

堀尾茂助
稲葉山乃
城内に

を蹴立てあれ來る。人々あはやと見る所に、獵師一人跡より馳來り、聲をかけて彼猪を呼かへす。猪ふりかへりて飛掛るを、咽首にしつかと取付き、山刀を拔出し、二刀三刀突通せば、猪はいよ〳〵躍り狂ひ、木の根岩石のきらひなく、縱橫無盡に馳たりしが、次第々々に力盡き、終に倒れて死したりけり。藤吉郎此働を見て大に感じ、近く居寄て其姓名を尋るに、堀尾茂助と答ふ。藤吉手を打欣んで曰く「汝父堀尾忠右衛門と同じく岩倉の城に籠り、父を救うて勇を顯たりし少年ならずや」堀尾驚きて「君は何人にて我等父子が素姓を知り給ふや」藤吉が曰く、「我岩倉の合戰に汝が勇壯を感じ、軍中にて名を認め、常に再會せん事を願ふ。我は信長の郎等木下藤吉郎なり。此度齋藤が稻葉山を攻拔んため、此嶮岨を淩ぎ、城の搦手へ出んとす。汝我ために勞を厭ず、道の案内をなさば、重て恩賞を與ふべし」と云ふ。茂助大に悦び、再拜して命に隨ひ、稻葉山へ導きける。

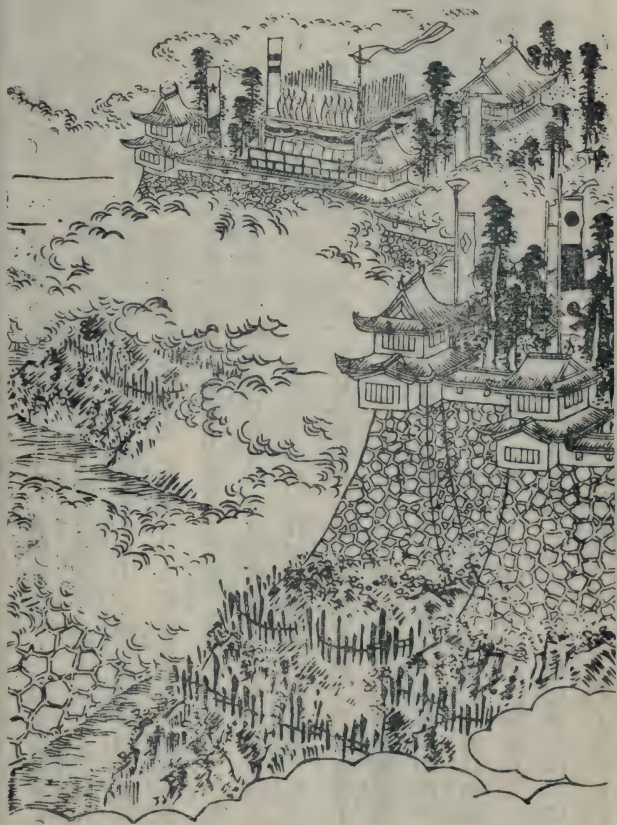
○堀尾茂助導二稻葉山城内一

扨も藤吉主従は、茂助が案内にて道を迷はず、終に稻葉山の絶頂に至り、遙に山下を見おろせば、敵城は眼下に有り。藤吉が推量に違ず、搦手は嶮岨を頼んで用心の兵一人もなし。されば

ぐんでぞ見えにける。

○木下藤吉郎襲二稲葉山搦手一

去程に信長の大軍、稲葉山を攻る事、晝夜三日に至れども、東國第一の名城、一夫是を守れば萬卒破り難き要害なるに、勇剛の壯士、必死の防戰を成しける故、容易落べしとは見えざりける。木下藤吉、つらく戰のさまを見るに、此城力戰にては叶まじと、其夜城下の地理を見るに、城の搦手は峨々たる高山にして、鳥もかけりがたしと見ゆ。藤吉屹と計策を案じ、己が攻口を舍弟木下小市郎に託し置き、其身は小六政勝、弟又十郎、加次田隼人、稲田大炊、靑山新介、日比野六太夫、主從七人、間道を經て搦手へ廻らんと、銘々腰に兵粮を附け、大なる瓢簞に酒を入れ又十郎に背負しめ、頃は八月十三日、申の半刻に陣所を打立ち、瑞立山に登り、峯傳ひに細道を稲葉山の後牧田に出ける時、中秋の月東にのぼり、恰も白晝のごとし。是より嶮岨云ばかりなく、岩石距ち人路を絶え、松柏茂繁りて月の光を覆ふ。藤吉郎元來身の輕き事猿の如く、木の根に取附き岩角を傳ひ、繩梯をおろして人を通し、辛うじて一箇の平地に出づ。爰にて人々酒を呑み飯を喰ひ、暫く休息せし所に、俄に草木動搖して、一丈ばかりの手負猪、土砂

信長斎藤龍興を攻る

父道三義龍と不和にして、二男義平を家督とせんとす。義龍是を憤り、弘治二年春正月、道三遠野に狩す其隙に、兩弟を城中に招き、勇士日根野下野守に命じて殺さしむ。道三大に怒り、義龍を殺んと、勢を集る事五千餘騎、義龍却て七千餘騎を引率し、道三が稻葉山を攻む。道三力盡き討死す、年六十三なり。義龍自立して稻葉山に在城す。永祿四年七月、熱病を煩うて暴に死す。嫡子家督を繼で美濃國を治む、是則ち齋藤右兵衛太夫龍興なり。此時美濃の三老臣とて、國政を執行ふ者三人あり、稻葉伊豫守、安藤伊賀守、氏江常陸介是等なり。木下藤吉信長卿を進め、計略を以て三老臣を味方と成し、永祿七年の秋九月、齋藤龍興が居城稻葉山を攻んとて、先陣柴田權六勝家、二番美濃の三老臣、三ばん池田勝三郎、森三左衛門、四番坂井右近、前田孫四郎、五番佐々内藏助、福富平左衛門、六番林藤八郎、中條小八郎、七番名護屋彌三郎、平手監物、村井長門守、林佐渡守、八番梁田右近、遠山甚太郎、九番大澤治郎左衛門、木下藤吉郎、十番信長卿の御籏本、十隊の惣軍都て一萬二千餘騎、稻葉山を十重二十重に取圍み、息をもつがず攻たりけり。城中にも齋藤家譜代恩顧の郎等ども、必死の防戰此時なりと、鐵炮を放し矢石を飛し、命は塵芥よりも輕く、義は磐石よりも重しと、心を一致に戰へば、寄手さしも大軍なりといへども、手負死人數を知らず、左右なく落城すべきやうもあらざりければ、攻あ

繪本太閤記　初篇卷之八

○信長攻二齋藤龍興一

積善の家には餘慶あり、積惡の家には餘殃あり。美濃一國の大守齋藤右兵衛太夫龍興、父兄の業を繼で、兵足り國強かりしも、信長が寸謀にて瓦の如く解け、塵のごとく散じ、一時に滅亡せるは、龍興が不道より起るといへども、父兄の積惡爰に報い、天地の間に一身を入べき所なく、終に白刃の下に命を落すは、天地自然の理にして、豈人力の及ぶべき所にあらんや。抑齋藤山城守道三入道の素性を尋るに、明應の頃、美濃國稻葉山の城主齋藤自全明蕣とて、智謀勇武の良將あり、其威盛に鄰國を恐しむ。爰に京西の岡の油賣人松波勝九郎といふ美童、十七歳にて明蕣に仕へ、智略有て明蕣が祕藏の臣なり。天文七年、今洲の城主長井秀之を殺し、長井新九郎秀龍と名乘る。同年五月、明蕣病に卒し嗣子なし。新九郎自ら稻葉山の城主となり、齋藤山城守と改む。同九年、美濃半國の領主土岐大膳太夫賴藝を逐て國を奪へり。同十七年、剃髮して道三と號す。男子三人あり、長子は義龍といひ、二男を義平と云ひ、三男を義之といふ。

繪本太閤記 初篇第八之卷 目錄

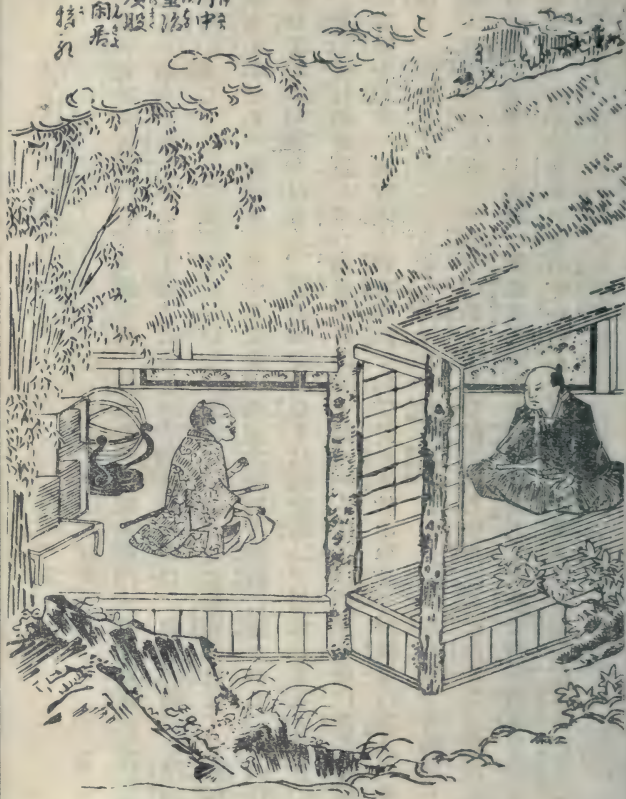
信長攻齋藤龍興
藤吉郎襲稻葉山搦手
堀尾茂助導稻葉山城內
稻葉山之城陷落
千生瓢簞之由來
信長發向勢州
山路彈正僞降信長
三好松永等弑君
三好松永確執

歎少なからず。再び降を進むまじ。爰に某が願有り、我幼稚にして卑賤なり、師に寄て學ぶ事なし。足下幸世事に預ず此所に隱る。閑居を洲股の城中に移し、我師父と成て教導なし給はゞ、生前の本望何事か是に如ん。みよ〳〵齋藤の家織田の爲に亡ぶべし。我師父の爲に計て齋藤の子孫を全うし、祭祠斷絶する事有るべからず」爰に於て竹中大に悅び、「信長へ降り計策を獻ずるにあらず、汝を教導せん爲閑居を洲股へ移すべし」と、直に洲股の城へ入にけり。是藤吉が計策にて、竹中智謀絶倫の士なれば、齋藤の爲に謀略を廻らさば、美濃征伐難儀なるべし、信長に仕へて助ずとも、齋藤家を見繼ずんば、美濃を討事保かるべしと、扨こそかくは計ひける。大澤治郎左衛門も竹中を進めし功により、信長の疑念を免れ、織田の幕下と成りて、本領安堵したりけり。

足下の心はいかん」竹中眼を見ひらき聲を勵し「汝猿面の小冠者、我前に來りて猥に說客をなす事なかれ。我いまだ汝が面を知らずといへども、信長の家臣に木下藤吉郎といへる者ありて、其の面猿の如く、聰明にして頗る軍事を能すと聞けり。前尅より軍談兵話尋常の論にあらず、我を說て信長に降らしめんとする、汝果して木下藤吉郎にて有べし」と云ふ。藤吉莞爾として、「嚴察のごとく某木下藤吉郎なり。足下王佐の才をいだき、父を殺し君を弑する齋藤に仕へ、剩へ金言は耳に逆ひ、良計は用られず、土木と同じく朽果るは、大丈夫の所行にあらず。主人信長足下の大名を慕ふ事既に久し。暗々たる齋藤を捨て明々たる織田を助け、治國平天下の功を全うし、遠くは父母の名を顯はし、近くは英名を身に及ぼし、子孫をして永く富貴を受しめん事、人道の大旨ならずや。我足下の爲に此事を說く。詳に察し給へ」と云ふ。此時大澤治郎左衞門も同じく來つて、共に利害を說て、信長に力を添給へと言すゝむ。竹中大に歎息して、「我曾て其利害を不知に非ず。いかにせん、織田は功業の氣既に盛にして、良臣多く是を助く。齋藤は亡國の象顯はれ、君暴にして臣佞なり、既に亡びん事旦夕に有り。我苟も其の食を喰み、其祿を受て、國陷の時に至つて棄て他國に仕へん事、是又大丈夫の恥とする所に非ずや。國家亡びば我死んのみ。何ぞ改め論ずる事をせん」藤吉郎席を立て禮を恭くし、「足下の高義、感

○竹中重治移二閑居洲股一

宇留馬の城主大澤治郎左衛門は、大澤主水が兒なり。治郎左衛門、齋藤龍興が不仁を惡み、織田の家臣たらん事を、弟主水を以て藤吉に告しむ。藤吉大に喜び、治郎左衛門を清須に伴ひ、信長卿に歸降のよしを言上に及ぶ。信長いかゞおぼしけん、更に許容の色なく、剰へ治郎左衛門に切腹仰付られける。藤吉すべきやうなく、治郎左衛門を洲股に連かへり、事の仔細を物語り、兩刀を捨ていふ、「誰か計らん、信長卿今日足下に死を賜ふ。然れども我又足下の死を見るに忍びず、願はくば我を討て僕が毹意なきを知り給へ」と云ふ。治郎左衛門敢て隨はず、愁然として身の不幸を歎ず。藤吉近く居寄て曰く、「信長常々竹中半兵衛が英智を慕ふ。今竹中齋藤の不道を疎み、閑居して事に預らずと聞けり。我と足下と兩人計を合せ、竹中をして味方へ降らしめば、信長卿敢て足下を疑ず、欣んで用ひ給ふべし」大澤甚だ悦んで、藤吉と共に竹中を説んとす。此時竹中半兵衛は、栗原山に閑室を構へ隱居して、竊に世の治亂を觀る。藤吉貌を變じ名を隱し、竹中が居所に至りて一宿を乞ひ、互に武術兵談を論じ、其旨趣甚だ細なり。時に藤吉問て曰く、「當時尾州の大守織田信長は、仁勇にして大度ありと聞り。我行て仕んとす。

竹中重治
須股の閑居に訪れ

べ、敵の寄するを待かけたり。

○洲股砦城成㆓一夜㆒

翌朝、美濃勢大軍にて押寄せ、遙に洲股を臨み見るに、不思議なるかな一夜の内に、霧あらざるに虹のごとく、雨なきに龍に似たり、一隊の長城、忽然と涌出して、旗を立て兵器を並べ、數千の精兵嚴重に是を守り、馬出の外には柵を張り、逆茂木を引き、究强の兵三千計、矢尻を揃へ筒先を並べ、敵寄ば討て掛らんと、勢込んで控へたり。美濃勢大きに肝を冷し、惘然として醉るがごとく、「是必ず天狗鬼神の所爲なるべし。麁忽に寄て過すな」と、進む景色はなかりけれ。「所詮一先引退き、別に計議を定め討破るべし」と、軍を引て歸りけり。藤吉郎は砦の普請全く調ひければ、使者を以て清須の城へ斯と言上しければ、信長大に愛悅び、頓て洲股の城へ來り給ひ、藤吉が大功を稱し、幷に小六兄弟、加次田、稻田、日比野、青山なんどいへる勇士、皆々目見え仰付られ、「藤吉が旗本に有て益々忠勤を勵むべし」と、金銀を出し賞し給へば、藤吉を始めとし、幕下に屬する者共迄、皆々悅び勇みけり。

揉立る。折節六月中旬の事なれば、俄に白雨盆を傾くるごとく、しのを亂して降ければ、兩陣互に戰を止め、雨の晴るを待居たり。

○藤吉郎再築二洲股砦城一

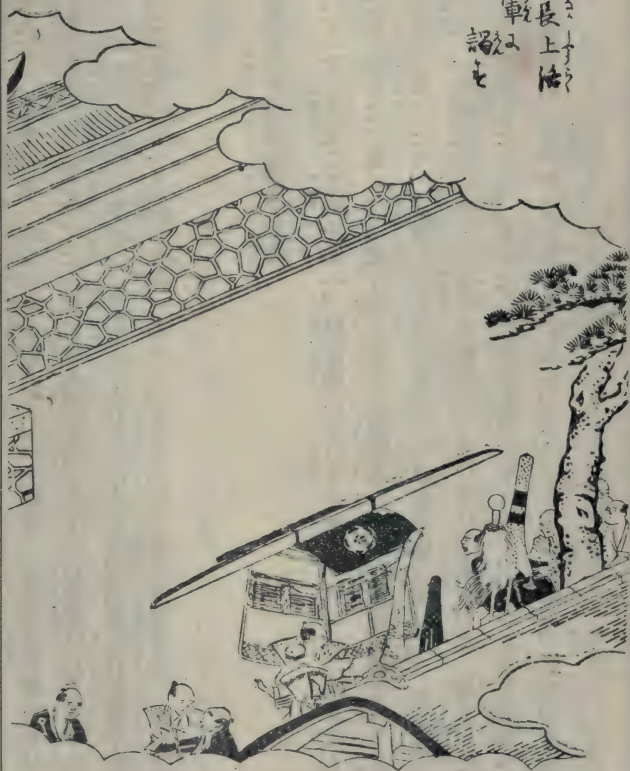
藤吉此時諸卒に命じ、此川の邊悉く泥土にて、雨後の備なくんば合戰難儀なるべしとて、橇轎沓といへる藁沓を俄に作らしめ、軍卒に是を踏かせ、暫く息をつぎ居たり。元來夏月の雨なれば、程なく雲散じ風治り、天色平和なりければ、藤吉下知して、すはや進めといふ程こそあれ、一聲に鯨波を作つて、無二無三に切崩す。美濃勢も鯨を合せ、鎗刀を提げ向ひ戰はんとすれ共、泥土滑にして駈引進退自由ならず、或はつまづき又はすべり、人馬の足並更に定まらず。木下が勢は彼橇轎沓を履たれば、泥土に泥まず、切先を揃へ、さんぐに切て廻れば、美濃勢兼て伏勢を構へ、引包んで討んず計略成けるが、此夕立に計策破れ、大敗軍にて引取たり。兎角合戰を挑む内、石垣諸材悉く調ひければ、夜の內に竹木を運び、合紋を以て貫柱を組合せ、榕鎹にてしめ堅め、塀がかりには板を打て、白紙を以て是を張り、畫工に命じ、矢挾間、炮炮穴を畫しめ、一夜の内に城の普請全く成就したりければ、兵を備へ、塀の内に數多の籏指物を立並

木下藤吉郎再び須股の砦を築く

○小六黨戰二美濃勢一

佐久間、柴田の兩將、洲股の砦修造する事不能、多くの人夫を損じ、竹木を失ひけれど、信長更に責給はず、却て勞を稱したまひ、藤吉郎を召して、「汝洲股の砦、よろしく造作の功を成すべきや」と尋給ふ。藤吉畏て、「臣當家の人夫を用ひず、當國の竹木を切らず、只手勢を召具し、洲股の砦七日の内に全く成就いたすべき」由言上す。信長其の謀計あらんことを察し、藤吉が言葉に任せ、其旨命ぜられければ、藤吉兼て其の用意やしたりけん、蜂須賀、稻田、加次田、日比野が輩に命じ、美濃の國瑞立山、多藝山より、一夜の内に數多の竹木を洲股川へ切落し、一千人の人夫に命じ、河の北尾張の地にて、棟木、梁、柱、垂木、繪圖に合せて作り出し、小六黨の人夫を以て、川の南美濃において、深さ二丈の堀を掘せ、其土を以て砦の土臺に築せ、息をも續ず働きける。齋藤方はかゝる手立ありとは知らず、「又こそ織田勢の砦を築ぞ。討散して竹木を奪や」とて、日根野、今井、牧村なんど、數千の勢にて押寄せ、唯一息に蹴散さんと、無二無三に掛りければ、藤吉兼て小六黨に計策を示し置たれば、さま〴〵の奇計を成し、美濃勢を惱し、砦成就ならしめんとはかる。美濃方、かくては果じと大軍を催し、短兵急に

の將柴田勝家、佐久間に代りて砦を築んと、同じく五千人を引率し、防戰の手配を嚴密に構へ、佐久間が敗走に習はじ物と、精力を盡して勵みける。此よし又々齋藤方へ聞えければ、さらば討破て材木を奪ひ取んと、日根野備中、長井飛彈守六千餘騎、今度も夜討と相圖を定め、柴田が陣前へ押寄せ、鯨波をどつとぞ上たりける。柴田兼て期したる事なれば、少も騷がず、敵を矢頃におびきよせ、かけ並べたる鐵炮をつるべて放つ事雨よりも猶しげし。寄手少しひるみて見えける所を、逞勢勝つて五百餘騎、どつと喚てかけ立れば、美濃勢案に相違して、四途路に成て迯たりける。爰に日根野治右衞門、牧村牛之助兩人は、川の上下より忍び寄り、柴田が勢の後より、思ひもよらず攻たりければ、柴田方大きに驚き、普請方の人夫ども、以前の夜討に手ごりして、勝家が下知をもさらに聞ず、我さきにと迯出し、右往左往に走りけり。柴田大に怒り、鎗を捻つて突廻れど、味方備亂れて惣崩れと成りければ、今は是までなり、討死と思ひ定め、一足も引ず戰へば、齋藤勢手負死人數を知らず。されども大勢勝家を討取んと、追取卷て戰うたり。織田方の將森、池田、二千餘人にて川を隔てゝ控たりしが、新手を以て柴田を救ひければ、からうじて川を渡り、人夫をまとめ引たりけり。

信長上洛
ねる軍に
謡を

力を盡し、成就さすべし。出來の後、其砦の城主たらしむべし」と、一座を急度見給へば、木下藤吉例のごとく進み出て、命を領ぜんとす。時に佐久間信盛、木下に功を奪はれじと、急に詞を發して、「某命を承り、洲股の砦全く成就なさしむべし」といふ。信長悅び、「五千の人夫を以て二十日の間に造立すべし」と嚴しく命じ給へば、信盛謹で其旨を領承し、退きて用意をなす。

○佐久間信盛築二洲股砦城一

扨も佐久間信盛は、五千の人夫に下知を傳へ、織田領にて竹木を切せ、筏に組で川を渡し、三千人を分て敵の亂暴を防がせ、夜を日に繼で急ぎける。齋藤家此よしを聞き、「信長川を渡して砦を築き、足溜りを作り戰んとす、成就しては叶ふまじ、一息に蹴散らせ」とて、牧村牛之助、長井隼人、同飛彈守、一萬餘人を引率し、夜中に押寄せ、さんぐ〵に戰ければ、佐久間心は猛と勇めども、案内不知の敵地といひ、夜中なれば勢の多少も見え分ず、心ならずも川端へ押出され、水に溺るゝ者數をしらず。今は防戰叶ひがたく、はふ〳〵筏に取乘て、尾州の方へ引にけり。齋藤方は多くの竹木を奪取り、十分の得附たりと悅び勇み引取ける。爰において織田家

木を積かさね、一同にまろばしかけたりければ、服部が士卒死傷の者數を知らず、ひるむ所を、城戸を開きて三百餘騎、百挺餘の鳥銃を一度にどつとつるべ放ち、黑煙の中より鯨波を作て突立れば、長島勢討るゝ者麻のごとく、右往左往に敗走す。城兵は敢て進まず、かろ〴〵引上て城に入る。服部左京、元來一益が軍慮己が及ぶ所にあらざれば、國司の加勢を乞て重て攻べしと、敗軍を引て長島へ歸りける。是より瀧川威勢甚だ強く、勢ひ遠近に震ひければ、近郷の國侍木牧、福山、上木、白瀬、濱田、高松の輩、招ざるに來り隨ひ、桑名、員部の兩郡悉く一益に隨ひ、今は動し難くぞ成りにける。

○信長上洛謁二將軍一

織田信長は瀧川に勢州を押へさせ、永祿四年八月上洛して、將軍義輝公並に官領三好修理太輔長慶に謁し、尾州一國の守護に補せられ、益仁政を行ひ下民を愛し、罪を輕くし賞を厚く施し給へば、國人悅ぶ事限りなし。其年も暮れ永祿五年夏のはじめ、信長齋藤征伐の工夫をこらし給ふに、尾濃の境に洲股の大河ありて進退自由を得ず。川向ひ美濃の地に砦を築き、味方の足だまりと成し、緩々征伐するにしかじと、諸臣を召して、「敵地に砦造作すべき者あらば、

へて、勢州を泰山のごとく保くすべし。若不仁不義なる時は、伊勢三郎を以て例となし、忽天兵を引率し、北畠一家を討亡し、勢州一圓に我有となすべし。汝早く大河内に歸り、詳に申し達せよ。政道の邪正により、軍勢を差向べし」と、案に相違の返答、國司の使者色を失ひ、頭をかゝへ、鼠のごとく迯かへりぬ。扨又長島の城服部左京方へも、使者を以て其謂を尋問ひ、「瀧川がふるまひ、悉く服部が身にかゝれり。所存ありや」と責ければ、左京も瀧川が行ふ所心におちず、蟹江桑名を合せ領し、其上織田方の士卒を引入れ、防禦の備をなすよし聞えければ、頓て桑名へ使者を立て、蟹江の城をかへすべきよし申遣しければ、一益答へて、「元より蟹江郡は尾州の地なるによつて、此ごろ織田信長より某を以て蟹江の城主に補せられ、國主の命もだす事不能、暫く蟹江を領する間、其旨心得候へ」と答ければ、使者大きに驚き、急ぎ長島に歸り、事の次第を語ければ、左京以の外に仰天し、「我本願寺より金銀兵糧を借受け、若干の費をいとはず築たる城なるを、彼賊に欺れ、奪取れしこそ安からね。此儘にてはいかでか止ん」と、躍り上つて怒りしが、兵を發して攻討べしと、先國司の使者に此趣を告て歸らしめ、直に三千餘騎を引率し、蟹江の城へ押寄せ、四方を圍で攻たりける。此城には瀧川儀太夫詮益、五百餘騎にて籠りしが、一益かねて小勢を以て大敵を防ぐべき備密なりければ、石棚の上に大石大

○服部左京攻ニ蟹江一

去程に國守の使者桑名に至り、瀧川一益に對面し、國守より申越す趣演舌する。其次第は、「抑當勢州の國中に住居せる者、一城の主より百姓町人に至る迄、皆國主の命に随はざるものはなし。然るに汝逆威を震ひ、當城を襲取り、數多の所領を奪ふ事、其罪輕きにあらず。軍兵を起し、急に征伐せらるべき所、汝よく百姓を撫育して、政道又邪なき由を聞き、寛仁大度の國守、無下に誅伐せんも本意なし、國司の幕下に屬し、守國破敵の業を扶けば、其儘に桑名を領し、尙功にしたがひ恩賞有べし。或は盗心を改めず、國司の命に應ぜずんば、忽軍兵を以て誅殺し、城壁共に粉の如くなし、其罪を糺すべし」と嚴に演ければ、瀧川左近大に笑ひ、「汝心をしづめて我言をよく聞べし。抑我を何なる者と思ふや。應仁以來民の塗炭を憐み、天兵を率し、普く天下に横行し、不仁無道の賊を誅し、有道仁義の君を助く。先の城主伊勢三郎、愚昧にして民をあはれまず、惡政日々に增長し、剰へ戰國の間に挾て、要害の地を守るべき備もなく、一朝一夕に城を失ひしは、悉く彼が暗弱より起れり。其の君たる國司として、かゝる愚人を糺す事不レ能、却て罪を我に問ふは何事ぞや。國司の政道正しき時は、我よろしく扶助を加

近といふ浪人、長島の服部左京と計て先蟠江に城を築き、今又桑名を奪しなり。されども是は先の城主の苛政を改め課役を免し、賞罰を糺し、民を撫育する事親の子を愛するがごとし。これによつて桑名の百姓町人、延喜の聖代、堯舜の御代なりとて、悦び勇む事大方ならず。他領の百姓も桑名に來り、未一旬も過ざるに、賑ふ事甚し。是を以て考るに、山賊野武士の類にあらず。今軍兵を以て攻め給ふとも、領分の百姓かくのごとく歸服せる上は、容易に征伐覺束なし、よく〳〵思慮有て然るべし」と申ける。國守大に色を失ひ、いかゞはせんと議せられけるに、老臣等申けるは、「長島の服部左京、彼と同心して蟠江に城を築き、又桑名を奪ひし事、其謂ありや否やを糺し、返答により兵を發し、罪を問ふべし。且また桑名へも國守より使者を立て、其意趣を正し、國主の幕下と成り隨ひ奉らば、罪を免して桑名を守らすべし。其故は先の城主の不仁不道を惡み、百姓町人今の城主に歸服なすは、伊勢三郎に罪ありて、今の瀧川とやらんに罰なし。其上國主に隨身せる時は、尾州の押へ究竟の勇士なり。急ぎ桑名、長島へ使者を立てられしかるべし」と、衆議是に一決し、其日の評議は果にけり。

やうぞなし。こはいかにと惘れはて、茫然として立たりける。瀧川一益矢倉の上に現出で、大音にて申けるは、「汝等匹夫よく承れ。我は數千の兵士を隨へ、天下を武者修行する英雄なり。今此地に暫く足を留んとすれども、數千の兵卒住すべき所なし。故に當城を乘取り我居城となせし間、此旨よく〳〵心得候へ。我又他國へ赴く節には、城も汝にかへし與ふべし。有難く思ひ妻子を召つれ、何方へも赴くべし」と、城戸を開き、妻子一族譜代の臣下、不殘出し遣しければ、伊勢三郎、あまりの事に言葉も出ず、牙を嚙で怒れども、如何ともする事なく、重て軍を起し微塵になすべしと、妻子を引具しすご〳〵と、大河内へと赴きける。是より左近は桑名に在城し、甥瀧川儀太夫詮益をして蟹江を守らせ、信長卿へ此旨注進に及びければ、信長大に感じ給ひ、直に桑名の城主に命ぜられ、新に五百騎の兵を賜ひ、是を分ちて蟹江と桑名の要害を守せ給ふ。瀧川一益頓て桑名領の仕置を改め、先の城主伊勢三郎が吝なる政道に引かへ、民を憐み、賞罰を正うし、課役を免し、專ら仁政を布施しければ、桑名、蟹江の百姓町人悅ぶ事限なし。扨も伊勢三郎桑名を追出され、はふ〳〵大河内の城に參じ、しか〴〵の由言上に及び、軍勢を申受け、城を取返したき旨愁訴しければ、國主を始め古老の臣下大に驚き、先ものなれたる間者を遣し、事の實否を伺はせけるに、やがて間者立かへり、「桑名を奪し大將は瀧川左

瀧川一益

なし。

○瀧川一益奪二桑名一

瀧川左近一益は、服部を欺き蟹江に城を築せ、密使を以て信長卿へ言上しければ、信長大に悦び、抜群の計略感心少なからざる旨感状を下し賜はり、蟹江の城主たるべき朱印并に逞卒三百人を遣はされ、猶も計議を以て桑名を取得ば、則桑名の城主たるべしと御下知有ければ、左近限りなく悦び、近郷の野武士を招き、防禦の術を調練し、十倍の大軍をも防ぎ戰ふべき形勢なり。同四年春正月、桑名の城主伊勢三郎氏善、年始の賀儀を賀せんとて、國司の居城大河内に赴きけるを、兼て瀧川が入置たる間者蟹江に馳せかへり、しか〳〵の事にて桑名の城空虚のよし告たりしかば、さらば押寄せ、桑名を奪ふべしとて、左近自ら數百騎を引率し、俄に四方を取巻き、短兵急に攻しかば、城中思ひ寄ざる事なれば、防べき手術を失ひ、はふ〳〵のがれ落失たり。一益心保く城を奪ひ、本丸に入て伊勢三郎が妻子を生捕り、一間なる所に置き、番兵を附てよく勞らせ、嚴敷城門を守り、鳴をしづめて控たり。伊勢三郎はかゝる事の有とも知らず、其翌日大河内より歸り來り、城に入らんとする所を、櫓々より弓鐵炮を打出し、面を向くべき

豪傑の士是を助け、今川が大軍を碎き、義元を斬り、破竹の勢を以て勢州を討んとす。勢州を討に先長島を先にすべし。信長大軍を引て當津に至らば、足下信長を防ぐべき備ありや。我竊に足下の爲に是を愁ふ」左近色を失うて云く、「我も常々織田の強敵を患ふ事深し。足下計あらば示し給へ」といふ。一益計なれりと悅び、「信長を防ぐ事何の難き事あらんや。尾張の地蟹江は久しく當地の有となれり、今蟹江の地に城を築き、軍卒を籠て守しめ、長島を攻る時は蟹江より救ひ、蟹江を攻る時は長島より助け、互に相救ひて長蛇の勢を張り、猶蟹江の城を足溜りとして近村近鄕を働かば、年を積で尾張の地を略し、信長を討ん事難きにあらず。且蟹江に城を築くに計あり。足下元來本願寺の上人と善し。信長は本願寺門徒の法敵と惡む所なれば、事を石山の上人に告げ、金銀兵粮を石山にて借べし。果して此事成就すべし。等閑に日を消せば悔るとも益あるまじ」左京大に喜び、石山へ使者を立て、委細を賴み遣しければ、一益が先見に違はず、金銀兵粮こと〴〵く調ひ、一益を以て蟹江の城を築かしめ、「籠城して信長を討給はゞ、地を分て取べし」と、強に賴みければ、一益止事なき體にもてなし、終に數千の人夫を引蟹江に至り、城の繩張十分に引き、息をもつがず築ければ、日あらずして成就し、武器、玉藥、矢石の類悉く運び入れ、一益を大將として五百餘人籠城せしめ、今は防禦の備全しと、悅ぶ事限

めじ、浪人して國々を武者修行し、終に尾州に來り、不破河内守、柴田勝家に寄て遊客たり。不破、柴田等屢一益を吹擧し、信長に仕へしめんとすれども、功なくして祿を喰ん事本意にあらずとて、敢て隨はざりしが、密に信長卿の行状を見るに、大度ある大將、實に興業の君なれば、心を傾け隨身し、手初の功を立つべしとて、信長卿へ計策を獻じ、桑名を取て勢州北畠を押ふべしといふ。信長甚悦び、三千餘騎の逞兵を以て、瀧川に附屬せんと下知し給ふ。左近是を止め、笑うて曰く、「桑名は勢州尾州の咽喉にありて、庸常の地にあらず。豈平勢の合戰にて容易とり得る事を得んや。某單騎にして彼所に赴き、計略を以て奪ふべし。其時君軍勢を出し、力を助け給ふべし」と約束し、只一人、武者修行の行裝に出立ち、勢州さして赴きけり。爰に勢州長島の城主服部左京友定といへる者あり、瀧川左近と同學のよしみあり。故に左近先長島に至り、左京に對面し、互に一別以來の安危を問ひ、談話頗細なり。時に左京問て云く、「足下先年江州を去て、後久しく在所を知らず。今何所に安居せるや」瀧川答て曰く、「某佐々木の家を出て武者修行を成し、東國を悉く廻り、是より中國、四國、西國へ赴んとす」左京元より一益が英智勇略を知れば、爰に止めて共に計議を成さんとす。一益其色を悟て、重て云は、「某生得弱きを助け強きを淩ぐ。當時東國において、國剛に將勇なるは尾張の織田信長にしかず。

繪本太閤記　初篇卷之七

○瀧川一益欺二服部左京一

客あり、相從うて各其志すところをいふ。或は揚州の刺史たらん事を願ひ、或は貲財多からん事をねがひ、或は鶴に騎て高く上らん事を願ふ。其一人の曰く、「腰に十萬貫を纏ひ、鶴に騎て揚州に上ん」と、三つの者を兼んと欲す。是皆其志を言へるなり。應仁の頃より歷代打續たる兵亂にて、天下みだるゝ事麻のごとく、身を立るあり、身を亡すあり。君の爲に身を殺すあり、自立して君を弑するあり。匹夫より出て天下に鳴あり、名家の子孫卑賤と零落せるあり。英雄豪傑競ひ起り、天下交々として庸の心ある事なし。されば一能の士、悉く君を選みて仕へ、高名富貴を子孫に傳へんとす。然れども亂れたる世の淺ましきは、誠忠の士は稀にして、今日西國に臣たりしも、明日は東國に祿を喰ひ、朝に君臣の睦び深かりしも、夕には敵國の將と成り、弓を引き地を爭ふ。亂世の人心虎狼よりも甚し。爰に江州佐々木の被官、瀧川左近一益といふ豪傑あり、勇は首を取る事袋の物を取に似たり、智は手を懷にして敵城を陷しむ。去永祿のは

繪本太閤記 初篇第七之卷 目錄

が軍勢討るゝ者數を知らず。此時藤吉淺野彌兵衛に下知して、構へ置たる筵の籏にて高き岡より差招けば、瑞立山の峯々より、數千の旌旗空にたなびき、數多の軍勢、稲葉山の本城へ押寄ると見えければ、謀士竹中を始として、日根野、牧村、野木の輩大きに驚き、備へ亂れて見えけるを、信長勢得たりかしこしと取てかへして戰ふにぞ、齋藤方大きに亂れ、さん／＼に成て敗走す。信長勇んで、追打にせんと下知し給ふを、藤吉諫めて「敵の將竹中半兵衛は尋常の者に非ず、某が奇計を以て一旦退くといへども、半途より引かへさば、味方の敗北疑ひなし。此隙に川を渉り、一足もはやく引取たまへ」と、馬の口を取て引かへせば、信長も實もとおぼし、惣勢急に引拂ひ、事なく歸城し給ひけり。是は藤吉、兼てこの邊の野武士を數多かたらひ、相圖の籏を動す時は、瑞立山の峯をつたひ、稲葉山へ向ふ體をまねせしめ、齋藤勢をおびやかせし奇兵の計策なり。齋藤勢はさん／＼に敗走し、竹中が堅陣も備亂れ、空しく稲葉山の本陣へと引取けるが、藤吉郎が明察に違はず、竹中半兵衛只一騎、手勢一千餘人にて半途より引かへしければ、敵はや川を渉りて引取ければ、力なくして己が居城へ歸りけり。信長は藤吉を召され、「今度の奇計、味方の軍兵を救ひし事、拔群の働き、誠に神奇妙算といふべし。今より五色の吹貫を以て、汝が家の指物となすべし」とて、甚感悦し給ひければ、藤吉も有難く恩を謝して退きぬ。

木下藤吉郎
奇計を

村にて竹中半兵衛一千餘騎、討て出て戰うたり。柴田等竹中が小勢を侮り、只一揉にと打てかかれば、竹中又さんぐ\に敗北して、其勢四方に散亂す。柴田、佐久間深入せしと心附き、引かへさんとする所に、右左の岡より弓鐵炮を放つ事雨よりも繁く、前後より牧村、野木、竹中三千餘人、村口をふさぎ切所に支へ、餘さじと取卷たり。柴田、佐久間前後左右に敵を受大きに驚き、前に突後に突ても出る事あたはず、既に危く見えける所に、織田の二陣、森、池田、先陣圍れたりと見てければ、二千餘人眞一文字に切てかゝる。齋藤勢は左右へ分れて道を開く。森、池田何とやらん軍のさま怪しけれど、柴田、佐久間を救はんと、かけ通て先陣と一つになれば、齋藤勢引包で討取んと、次第々々に押寄て、網中に入りし魚のごとく、あきれ果たる斗なり。

○木下藤吉郎行二奇計一

信長は、味方の先陣二陣、敵の謀計に當りけりと見たまひければ、籏本の勢に下知して救んとし給ふ時、木下藤吉郎大將の馬前に塞り「味方既に敵の謀に落入たり。引かへし退き給へ」といまだ云も終らざるに、相圖と覺て、耳元に鐵炮ひゞきて、數千の伏兵一同に起り、日根野備中守眞先に馬を出し、八尺餘りの鐵棒を提げ、信長を討とれとて、當るを幸薙立れば、信長

羽守に命ぜらる。出羽守馳行き、見分して言上しけるは、「木下藤吉手勢少々引具し、件の吹貫押立て、先手に進候」と申す。信長殊の外氣色を損じ、出羽守に命じて其旗を切捨しむ。藤吉急ぎ淺野彌兵衛に下知して、筵にて大なる旗を拵へ、繪の具を以て五色に彩り、是を押立て、自若として控たり。信長大に怒り、藤吉を近く召れ、大の眼を開きさん〴〵に罵り給ふ。藤吉謹んで畏り、「今日の合戰、遙に敵の備へを伺ひ見るに、さま〴〵の謀計ありと見えて、軍立尋常ならず。自然味方危急の事あらん時、少しく某計略あり。其期に用ふる相圖の印にて、全く旗にては候はず。此合戰終り候上、某が計策空しく成り候はゞ、其時罪に伏すべし。今日只一日、筵の相印許免願ひ奉る」と、踞りて申上る。信長甚不興にはおぼし給へども、兼々計策深き秀吉なれば、いかなる事をかなすやらんと、其儘すて置給へば、藤吉郎件の吹貫を高く押立進みけるを、諸士軍卒に至る迄、怪まざるはなかりけり。

○竹中半兵衛破㆓信長㆒

去程に信長の先陣柴田、佐久間、鯨波を作て討てかゝれば、齋藤方の先陣牧野牛之助、野木次左衛門三千餘騎、掛向うて戰ひしが、僞負て引退く。柴田、佐久間軍を進めて追討つ所に、加納

木下藤吉郎

ども、譜代の臣下是を補佐す。當國空虚なるを計り、義元の仇を討ば、進退共に道なかるべし。暫く國を守て民を撫で、仁惠を廣くしき、國家の根本を堅し給ひ、兵足り食全き時を計て、静に征伐有とも遲き事有るべからず」と、さま〴〵諫言申けれ共、信長血氣盛にして、更に用ひ給はず、其勢都合六千餘騎、洲股川を打渡り、美濃國へぞ發向有り。爰に龍興が幕下に、菩提寺の城守竹中半兵衛重治といふ者あり。軍學に達し兵書に通じ、計策を帷幕の中に運し、勝つ事を千里の外に究むる子房孔明にも、おさ〳〵劣るまじき智量あれば、美濃一國の軍師として、其唱へ鄰國に高し。今度信長亂入のよし聞えければ、合戰の手分を定め、尾張勢に淡吹せ、信長をも襲ひ討んと、敵の寄るを待居たり。

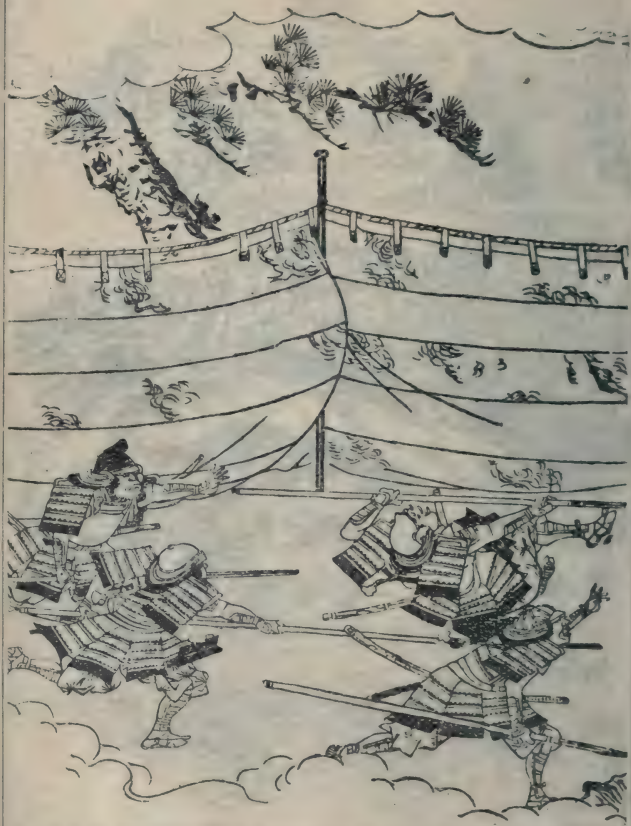
○木下藤吉郎作二筵差物一

信長の先陣柴田權六勝家、佐久間右衛門信盛二千餘人、二陣は池田勝三郎信輝、森三右衛門可成二千餘人、三陣は信長自旗本の勢二千餘人、次第を亂さず押出す。時に後陣先手の中に、木綿を以て大きなる吹貫の旗、へんぽんと風に飄へり、其色は青黄赤白黑の五色を以て染なせり。信長あやしみ「味方の内に斯る簱を指す者なし。誰ならん、見て參れ」とて、軍監簗田出

謹で申ける、「前田犬千代御勘氣を歎き、今度の合戰に討死と心を定め、多く大敵に當り、死戰すれども敢て敵する兵一人もなく、悉く討取り獻覽に備へ奉る。今度當家勝軍の御悅に、伏望らくは犬千代が勘氣御免成し下さらば、歡んで忠を盡すべし」と言上すれば、信長大に悅び給ひ、「犬千代が罪は小にして、此度の譽は大なり。氣味よき若者、勘氣を宥し遣す間、本のごとく給仕すべし」とて、犬千代を召し出され、前田孫四郎利家と名乘せ、士卒を預け、「一方の將たるべし」と仰渡されければ、犬千代淚を流し、恩を謝して退出す。

○信長發向美濃國

信長桶狹間の一戰に、今川義元を討たるよし、國々に聞えければ、小身の信長なりとあなどり居たる諸國の大名城主郡主に至るまで、驚歎せずといふ者なし。爰において信長威名日々に盛に、月々に大いなり。義元が子氏眞駿府にありといへども、暗弱の將にて、父の弔合戰をも企なく、いたづらにこそ暮しける。其年も早暮れ、永祿四年夏四月、美濃齋藤治部太輔義龍死して、其子龍興父に代りて國政を行ふよし聞えければ、信長此時を失はず齋藤を攻討べしと、其用意を催し給ふ。木下藤吉是を留めて、「今齋藤を討の時にあらず。今川氏眞柔弱なりといへ

信長大に今川の軍を破る

今川義元討死

小平太が片足打切り、猶も進で戰ふ所を、毛利新助後より無手と組附短刀を以て脇腹を差通し、終に組敷動かせず。此時義元、新助が左の指に噛附けるを、新助是を事ともせず、終に首を打落し、太刀先に貫き差上たり。義元此時四十二歳、勇名關の東に震ひ、さしも名將の譽れ高かりけるも、運既に盡ぬれば、木下が軍配に透し出され、終に桶挾間の露とぞ消失けり。

○信長大ニ破今川軍一

扨も丹下の戰は、今を最中といどみし所へ、大將今川義元の首を太刀の先に貫き、「織田信長自本陣を攻破り、義元を討取たり。今は誰が爲に戰ふぞや。早く降參して助命を蒙れ」と聲々に呼はれば、今川勢肝を消し魂を失ひ、こはいかにせん淺ましやと、狼狽騷ぎ、右往左往に散亂し、惣敗軍と成にけり。柴田、佐久間、池田、丹羽の勇士、得たりやかしこしと切て廻る程こそあれ、屍は積で岡のごとく、血は流れて川に似たり。信長鐘を鳴し軍をまとめ、凱歌を唱へて清須の本城へ入給へば、上下の諸士を始め、百姓商賈に至るまで、皆萬歳を呼にけり。扨城中に陣を張り、銘々討取る首共を大將の實檢に備へぬれば、褒詞恩賞、夫々に御沙汰ありて、皆面目を施しける。時に木下藤吉郎、今川方の名有る勇士が首十八九實檢に備へ置き、

○今川義元討死

此時桶挾間の義元が本陣は、先手の合戰難儀なるよし、一時に蹴散し捨よとて、旗本の勢不殘丹下の戰を助しめ、纔に一千餘りの近習小姓のみにて控たり。信長は間道を經て義元の後へまはり、今川の旗本不勢なりと見てければ、木下藤吉郎一番に馬を掛出し、揉にもんで馳たる所に、折ふし白雨一村降しきり、俄に大風砂を飛し、木の根を穿ち、人馬の音更に聞えず。藤吉郎鐙ふんばり味方に向ひ、「此風雨こそ熱田明神の神風ぞや、進め〱」と下知するにぞ、服部小平太、毛利新助、遠山甚太郎、中條小八郎、林藤八郎、織田造酒丞を始めとして、逞兵勝て五百餘人、義元の旗本へ無二無三に切込ば、今川方不意の事にて有ければ、大に驚き狼狽騷ぎ、戰ふ者一人もなく、我先にと逃出す。義元怒て、「何者なれば近く來て虎の髯を取や」とて、重代の太刀、松倉鄉といへる名劍を提げ、四方を白眼て立たりける。木下藤吉大音にて、「織田上總助信長、自來て見參す。快く首級を賜り候へ」と、數多の勇士一同に、義元目がけ切込たり。義元元來大力の勇將、信長直に寄たると聞てければ、指違へて死せんものと、勇を震うて戰ひける。服部小平太横合より、鎗を捻て掛合せ、義元が右の太股を突拔たり。義元太刀取延て

向ひ、大隅守が二千餘騎の中へ一文字に切入ければ、織田勢爰を破られじと、佐々木正道、千秋良文命を捨て戰ひしが、今川が新手の大軍を防ぎかね、兩人ともに討れける。しかる所に前田犬千代、最前丸根、鷲津の兩砦にて、比類なき働を成し、猶味方難儀の場所を救はんと、馬に鞭打來りけるが、此合戰大隅守敗北と見えければ、何かは少しも猶豫べき、猛虎飛熊の勇を震ひ、群る敵を切廻れば、犬千代一人に薙立られ、朝比奈が勢色めき立て見えにける。爰に朝比奈が組下の士に、宍戸彌五郎友辰といふ大剛の勇士あり。犬千代がふるまひもの〳〵しやと、鎗提げて向うたり。犬千代勇氣益加はり、只一突に討取んと、おつと喚て突來るを、友辰透して附入り、犬千代が左の大股を突通す。犬千代是を事ともせず、鎗を投すて、腰に差たる鐵鞭を以て、宍戸が兜の眞向をしたゝかに打けるにぞ、さしも大力の宍戸彌五郎、眼くらんで働き得ず。犬千代宍戸が鎗もぎ取り、只一突につき落し、首を取て捨たりける。今川の大將江間左京是を見て、犬千代めがけ打てかゝるを殊ともせず、一鎗に突殺し、勢に乘て殺出し、騎馬の武者十七騎討て落し、其餘の打負數を知らず、一足も引ずして、猶も進で戰ひければ、今川の大軍、犬千代一人に切崩され、右往左往に散亂す。

千餘人、入替て戰へば、織田方にも池田勝三郎五百餘人、柴田に替て相さゝへ、火水に成て切結ぶ。池田が郎等片桐半左衞門、鐵炮を以て近々とねらひ寄り、大將伯耆守を馬より下に討落す。さしも勝誇たる今川勢、暫時の戰に二人の大將を討れ大きに怒り、敵は小勢ぞ、一息に討碎けと、朝比奈小三郎、三浦左馬介、葛山備中守、飯尾豐前守、惣勢合て二萬餘騎、どつと喚て掛たりける。是を見て佐久間右衞門、坂井右近、森三左衞門、名古屋彌太郎、新手の勢一千餘騎、柴田、池田が左右に備へ、「一世の大事此時なり。進で敵に討るゝとも、迯げて子孫に恥を殘すな、進めや〳〵、引な人々」とて、互に恥合いましめあひ、切ども突ども看ず、火花をちらして戰ひけるは、すさまじかりける事どもなり。此時本道に控たる織田大隅守、江州の加勢二千三百餘騎、敵の後を討んとす。こゝにおいて今川勢二萬餘騎、前後に分ちて戰うたり。

○前田犬千代血戰勇力

庵原富永が敗軍桶挾間に來り、味方の戰難儀なるよし、義元へ訴へければ、義元大に憤り、「信長小兒の分際として、我軍將を討たる事奇怪ならずや。急ぎ勢を出して信長を討破れ」と朝比奈備中守、松井五郎に一萬五千餘騎を分與へ、丹下の合戰を助けしむ。朝比奈命を領じて馳

に築置たる中島東西の砦、善祥寺の砦三ヶ所を、數萬の大軍を以て一時に打かこみ、喚きさけんで攻たりければ、元來不勢の城どもなれば、防戰の術既に盡て、或はさし違へて死するもあり、又は亂軍の中に討るゝもあり。織田の主將水野帶刀、山口海老之助、荒川平左衛門を始として、名を惜み義を重くする勇士數多討死し、纔に三時斗の戰ひに、五ヶ所の砦落城しければ、今川勢益勇んで勝に乘り、丹下兩所を一踏に討破んと、潮のごとく攻よせしは、めざましかりし次第なり。

○柴田池田斬₂敵將₁

權六郎勝家は、剛勇不雙の壯士にて、人皆鬼柴田と稱しける大功の兵なれば、丹下兩所の惣勢二千餘騎悉く討て出づ。城中には信長卿の御旗を高く指上げ、大勢にて固たる有樣にもてなし、其身は五百餘騎を引率し、庵原右近が二千餘人の中へ雷のごとく切て入り、面もふらず突立ける。右近勝家と見てければ、鎗を捻て突かくる。勝家三尺二寸の大太刀眞向にかざし、稻妻のごとく切入て、右近が右の腕を肩さきかけて切落し、勢に乘つてもみ立れば、庵原が二千の軍勢、大將を討れしかば、右往左往に散亂し、我先にと迯行ける。是を見て今川方富永伯耆守五

を築たりし、元より今川の大軍を諸方へ引分け、我自義元の旗本へ切込み、一時に雌雄を決せん計策なり。最前鷲津、丸根の兩砦落城し、中島、善祥寺の城も程なく敵に奪るべし。されば當城へ向ふ大軍、其勢頗烈しかるべし。汝死力を盡し、剛くこらへて敵を討ば、今川勢案に相違し、勝誇たる義元、一時に踏崩さんと、本陣の勢を分て當手の戰を救ふべし。其隙に我間道より進んで義元の本陣へ切入り、備なきを討ものならば、義元が首を見ん事、何の難き事か是あらん。皆是汝が勇戰にあれば、穴賢、等閑の戰ひにあらず、勉て誤る事なかれ」と示し給へば、勝家踊り上りて大きに悅び「是臣が望む所なり。敵勢いかに重るとも、三日五日をこらへん事、何條難き事候はん。君御心保んじ給ひ、義元を討取り、目出度拜謁仕るべし。早く間道へ廻り給へ」と進むれば、信長甚だ悅び給ひ、御旗指物を此城に殘し給ひ、信長も爰に出陣の體にもてなし、逞兵五百騎、山の腰なる間道を、揉にもんで急ぎ給ふ。柴田勝家は佐久間が方へも右の計議を申合せ、敵よせばめざましき戰ひをせんものと、かた唾をのんで控へたり。信長兼て丹下の城は我生命にかゝれりと思ひ給へば、善祥寺の北なる鳴海街道に、織田大隅守信廣を大將として、佐々木の加勢を合せて都合二千三百餘騎、陣を取て控させ、丹下の軍始らば、敵の後を襲んと、その用意既に全し。さる程に今川勢丸根、鷲津を一息に攻落し、兼て織田方

信長桶挾に出張す

ければ、信長頓て神前に恐拜し、一紙の願書を捧げられ、祈誓をこらし給ふ所に、社檀の内に轡の音勇しく聞え、白鷺二羽東へ向ひ飛行ければ、信長、藤吉大にいさみ、「當社明神の奇瑞眼前に著明し。今川を討て織田の運を開かん事、此一戰に有べし。勇めや者共、進め〱」と下知すれば、今川が大軍に恐れ、氣勢なかりし士卒までも、かゝる奇特を見る上は、此度の合戰、味方の勝利疑ひなしと、忽ち勇氣百倍し、勇み進んで打立ける。是も藤吉が計策にて、諸軍を勵し功を立んと、兼て社士等に申含め、扨こそ奇瑞を顯はせり。信長卿は、兎にも角にも智勇勝れし木下哉、と密に感じ給ひけり。

○信長進間道討義元

去程に信長卿、軍勢を引率し、笠寺の東なる細繩手を、もみにもんで馳られけるが、東に當つて丸根、鷲津早落城と見えて、黒煙夥しく空にたなびきければ、信長猶も馬を飛し、辰の下尅に漸く丹下の砦に著陣有り。守將柴田權六勝家悦び向へ奉る。信長此所にて暫時休息し給ひ、勝家を近く召れ、下知し給ふは、「今度の合戰、我と今川兩家の勝敗は、此丹下の砦の防戰にあり。汝勇を奮て今川の大軍を打崩し、我をして勝利を得さしむべし。其故は此鳴海表へ七ケ所の砦

繪本太閤記　初篇卷之六

○信長出張桶挾間

老子曰く、自敖者不長と。今川義元桶挾間に本陣を居ゑ、大軍を以て信長が構置たる七ケ所の砦を圍せ、一息に攻伏んと、頻に下知を傳へけるに、鷲津、丸根の兩砦忽ちに落城し、討取首ども實檢に備へ、中島、善祥寺の砦も色めき立て、早落城の體に見えぬるよし、追々注進したりければ、義元「左もこそあらめ」と寛々と打笑ひ、近習の武士小姓の輩に酌を取せ、酒宴をこそは催しける。信長卿は今朝もいと靜に起給ひ、合戰の次第を尋給ふに、鷲津、丸根の兩城は敵強くして防戰叶がたきよし、早打を以て注進有けれど、更に驚き給ふ氣色なく、徐々として控へ給ふ。時に木下藤吉、赤革をどしの具足に、同じ色にて威しける甲を著し、「早御出陣の時尅なり。打立給ふべし」と高聲に申ければ、信長、「さらば向ふべし」と直に御馬に召れ、藤吉もろとも熱田明神の前に控て、味方の勢を待れける。藤吉信長卿に向ひ言上しけるは、「當社大明神は日本武の尊をいはひ祭る社なれば、東國の戎兵を討伐し給ふには、神拜有て然るべし」と申

繪本太閤記 初篇第六之卷 目録

見て、能敵よごさんなれと、鎗を合せて縱横上下、五六合戰ひしが、松山を馬より下に突落し、首を取て立上れば、丸根の方に烟高く登り、是も落城と見えければ、犬千代引かへして大學を救はんと、群る敵を前後左右に切靡け、血路を開き、丸根の城下に來り見れば、城主大學討死し、城は敵將入替り、事既に落著しければ、重て味方の難儀を救ふべしと、中島の城へぞ急ぎける。

大將を守護し控へたり。二股の城主松井五郎八三百餘人、本陣の左へ備へ、今川の家老朝比奈備中守五百人にて右を備へ、手分既に定りたれば、明日は只一息に踏潰さんと、翌るを遲しと待居たる。五月十九日の朝、まだ東雲のころより、今川勢三萬餘騎、鷲津、丸根の兩城を鐵桶の如く取圍み、只一揉に戰破らんと、息をもつがず攻たりけり。丸根の主將佐久間大學、元來強勇の士なりければ、大敵を少しも恐れず、嚴しく防ぎ戰ひけるが、鷲津の大將織田玄番丞、飯尾近江守、今川が大軍に恐怖して、防禦の備へも墓々しからざりければ、寄手勢盛んにして、既に鷲津落城せんとす。時に丸根の佐久間大學矢倉に登り、遙に鷲津の合戰を察し、前田犬千代を以て救はしむ。犬千代元來必死の合戰なれば、敵を撰む心もなく、只一騎丸根を切出て、大敵を凌ぎ、既に鷲津へ馳行ける。然るに鷲津の城早く退去して、主將織田玄番、飯尾近江守、中島の城へ志し、手勢を引て落て行く。犬千代是を見て、遲かりし殘念なりと、只一人横合より勇を振うて突立ければ、勝誇たる今川勢なれ共、犬千代一人に横を討れ、騷ぎ立て進み得ず。織田玄番これを見て、「味方討すな歸せよ」と、五六十人取てかへし、犬千代が跡に添ひ、勇をふるうて戰ひける。爰に今川の臣富永伯耆守が組下に、松山新吾といふ大剛の兵有り。犬千代が働き心にくしと、鎗を捻り突懸る。犬千代は敵を選ばず當るを幸切立けるが、松山を

を忍びつゝ、深き契をこめにける。此頃山口九郎次郎未だ清須に有けるが、犬千代が芳野に密通せし事を聞き、茶道祐甫を以て犬千代が不義を訴ふ。信長大に怒り、犬千代を勘當し永く暇を賜りける。犬千代元來色に耽り酒に亂るゝ戯男に非ざれば、甚歎き、千悔すれ共甲斐なし。時に今年、今川義元上落して織田一家を討伐のよし、其聞え隱れなかりければ、此時命を捨て功を立ずんば、何の時を期すべきと、急ぎ木下藤吉が家に至り、「今度の合戰に討死し、死後の勘氣を免されなば、何程か嬉しからん。執なし願ひ奉る」と、涙をながし頼みければ、藤吉委しく此事を許諾し、丸根の城へ遣し、城主佐久間大學を頼みければ、大學犬千代が節儀を感じ、城中に請じ入れ、戰を相待ちける。

○今川義元陣列

今川方の手分には、先鷲津の城へ富永伯耆守氏繁、朝比奈小三郎康秀を大將として其勢一萬餘騎、二番備三浦左馬介義次五千餘騎是に續けり。丸根の城へは松■■■〔原本の形式に從ふ〕康手勢五百人、義元の加勢庵原右近、飯尾豐後守一萬餘騎、二番手葛山備中守五千餘騎、是も跡に續て打立たり。義元の旗本一萬餘騎、其人々には江間、關口、由井、富塚、縫井、朝比奈、石谷の輩、

今川義元桶狭間に屯を

坂井右近、名古屋彌五郎等、一千餘人を率し、丹下北の砦を守るべし。佐久間信盛、池田勝三郎、丹羽五郎左衞門、森三左衞門は、同一千餘人を以て丹下南の砦を固むべし。我自跡に續て出陣すべし」と命有ければ、各領承して座を立退きけるが、柴田勝家諸士に向ひ、「今度の合戰誠に味方の存亡にかゝれり。君戯の御謠に、一度生を受滅せぬ者の有べきと、押かへしてうたひ給ひたるは、今日の合戰命限に戰へとの上意成るべし。人々力を一致にして、粉骨碎身、一世の勇名此時なり。進み給へ旁」と、馬に鞭打出ければ、誰か少しも猶豫すべき、我劣じと打立ちしは、勇々しかりけるありさまなり。

○犬千代赴二丸根城一

明れば五月十八日、丸根、鷲津の兩城、手合の戰有るべしと、その用意區々なり。爰に一箇の小說あり、信長の小姓頭に前田犬千代、さしも強勇の壯士なりけれど、人木石にあらずして、愛著の情はなれがたく、奥局の中に芳野といへる女を垣間見、戀の山路の道しるべなく、命も今は絶なんと、人傳ならでかきくどく、數の玉章たまくに、一夜は逢瀬の情をと、きのふも今日も翌の日も、逢ぬをかこち見ぬを恨み、つらき思ひに沈ければ、女も今は心解け、繁き人目

を尋ぬれば、藤吉答へて「某小兵にして勇氣うすし。いにしへの朝比奈三郎義秀に比せば我望足りなんと、義秀を轉倒して秀吉とは改めたり」と答へければ、皆人笑うて止にける。

○今川義元屯ニ桶挾間一

扨も永祿三年五月十日、今川治部太輔義元、伊豆、駿河、三河、遠江の軍勢都合四萬六千餘騎、僞つて五萬餘騎と披露し、同十八日、鳴海表桶挾間を本陣として、先織田方の砦、丸根、鷲津を攻潰んと、在々所々を放火して、其勢野に滿ち山にはびこり、すはや織田の城々砦々、目の前に踏破れなんと、危き事限りなし。鷲津、丸根の兩城今川の大軍に恐れ、防戰叶ふまじと思ひければ、脚力を以て救の勢を信長卿へ乞ふ事、櫛の齒を引くが如し。されども信長は深き軍慮ありて、必勝の戰を心にこめ給ひ、少しも驚き騒ぎ給はず、其夜諸士を召されて酒宴を成し、軍の評議曾てこれなく、福富太夫を召れ猿樂を仰付られ、信長みづから扇を開き、「人間纔五十年、外典の内を競ぶれば、夢幻のごとくなる、一度生を受け、滅せぬものの有るべきや」と敦盛の曲舞を抑かへし〳〵、再三うたひ舞給ひ、酒宴の興を益し給ふ。漸夜も三更の頃御下知有て、「鳴海の要害丹下二ケ所の砦は味方の存亡の切所なり、等閑の輩守る事叶まじ。柴田勝家、

ければ、藤吉落涙して恩を謝し、頓て尾州へ歸りける。時に兼て申合せし小六が一黨、約束を違へずして、其勢都合一千三百餘人、越知川へ出向ひければ、藤吉大きに悦び、件の具足を著せ、旗指物を押立て、江州佐々木家の加勢なりと僞り、勇んで入國したりければ、織田家の諸士はいふも更なり、領分の百姓まで、信長卿の武德めでたく、佐々木の加勢至りぬれば、今川が大勢恐るゝに足らずと、衢に出て躍り悦び、國家長久とぞ祝しける。藤吉江州の次第、野武士をかたらひ具したるよし、詳に言上しければ、信長卿甚だ感悦ましく〳〵、忠節智謀今に始めずと稱し給ひ、先佐々木家より實の援兵來りしと披露し給ひ、密に藤吉と計策を定めて、今川を討破らんと勇み給ふ。時に藤吉郎信長卿に重て申上げけるは、「六角義秀、其先祖佐々木源藏秀義の一字を以て名を改むべしとて、國次の太刀を我に與ふ。某元來他國の主の下知を以て名を改むべきいはれなければ、辭退すべき筈の所、先此度は六角家實の加勢にあらずといへども、今川の大敵を討破る際に至つて、六角と齟意ありては、味方の便よろしからずと、態と其旨を令承して退き候。此上は君の御下知にまかせ候ふべし」とて、六角より賜ひたりし國次の刀を信長卿へ指出しければ、信長卿御氣色麗しく、「是又汝が功なり。他國の主たりとて憚る事有るべからず、改名して然るべし」と仰けるにぞ、是より名を秀吉と改めける。人有て改名の故

ず。藤吉其意を察し又申けるは、「援兵の事許容これなくば、具足、旗差物、弓鐵炮の軍器二千斗、拜借の儀仰付られ下され度し。某賤くも信長の命を受け、遙々當家へ使をなし、許容なしとて此儘歸國致さん事、甚面目を失ふ所なり。右拜借の具足を取持せ、道々の野武士を語らひ、具足を著せ旗をなびかせ、江州の援兵なりと僞り、味方の勢を勵す時、今度の合戰、今川を討破らん事信長が方寸にこれあり。あはれ此兩條許し給はれ」とねがひければ、流石の承禎も尤とや思ひけん、「具足の事は望みの通り與へ遣すべし」といひけるにぞ、藤吉甚だ悅び、恩を謝して退きける。

○江州援兵至二尾州一

去程に江州の國主六角義秀、織田の使者木下藤吉郎が才智人に秀しを深く感じ、其夜藤吉郎を近く招き、「抑汝いかなる人の子孫なるや。我深く汝が器量を慕ふ。今より後義を結んで交りをなすべし。我は才薄く多病にして、亂世に生るといへども、馬に跨り戈を取て人と地を爭ふ事かたし。然といへども先祖においてはおさ〳〵人に恥しめを蒙らず。我祖源藏秀義の一字を取て木下藤吉郎秀吉と名乘り、功名を後世に殘すべし」とて、國次の太刀一腰、手自藤吉に與へ

近江の國主六角義秀といふは、其先宇多天皇の末孫にて、佐々木源藏秀義が男、太郎左衛門定綱より、代々江州の主として觀音寺の城に居す。弘治三年、義秀幼稚によりて、叔父右京太夫義賢後見として國政を執行ふ、後入道して拔關齋承禎と號す。時に永祿三年五月、木下藤吉郎織田の使者として觀音寺の城に至りければ、國主義秀、執權承禎藤吉を召し出し、使節の趣意を尋ねけるに、藤吉謹で信長卿の趣意を演べ、織田家扶助の加勢を賜ひ、今川と雌雄存亡を究度由、詞を盡して告けれども、承禎許容の色なかりければ、藤吉重て「今度江州より織田を救ひの軍勢を出し給ふは、強ち織田一家の利のみにあらず、諺にいへる脣破れて齒寒し。信長今川の爲に滅亡せば、義元破竹の勢にて當國へ亂入すべし。しかる時は當家の損亡又知るべからず。今信長へ援兵を賜ひ、織田の軍を助け給はゞ、信長死力を盡し防戰し、たとへ國やぶれ家亡ぶるとも、今川の勢大半は碎に足べし、自然信長勝利を得ば、江州の保き事泰山の如し。爰を以て、織田、佐々木親しく交をなさずといへども、脣齒の國なれば相互に助け保ちて、兩國おのづから安堵なるべし。願くは此利害を察し給へ」と云ふ。國主義秀は若年多病にて國政にあづからずといへども、頗寬仁にして大度あり、藤吉が云所悉く理に中り、其上君命を恥かしめざる才智を感じ、援兵を出し信長を救ひたき所存なれども、入道承禎愚にして更に承引せ

屬し名ある勇夫には、稻田大炊助、青山新七、同小介、河口久助、日比野六太夫、長江半之丞、加治田隼人、松原内匠等、皆一人當千の勇士なり。木下藤吉郎幼稚の時、此小六が許に一年計扶持せられ居たりければ、今度江州へ赴くとて、蜂須賀村に立寄り、小六が家に往て對面す。小六大に悦び、一別以來の安危を問ひ、互に親しみ細なり。藤吉郎密に語りけるは、「今度駿州今川義元、大軍を引率し上洛せんと企つる其序、路々の敵國を悉く切取んとす。我國鄰國たるを以て直に合戰に及ばんとす。然れども我國勢少なく兵足らず、味方の將士皆恐怖の色あり。依之江州佐々木六角義秀に助勢を乞て、今川と雌雄を決せんとて、某此使を蒙り、今江州に赴かんとす。密に計に、義秀柔弱にして、承禎入道決斷に拙し、多分助勢の事調ふまじ。足下此時手下の野武士を悉く集め、江州の援兵なりと披露せば、織田の軍勢氣力を直し、戰ふに勇あらん。此儀足下の助勢を賴む」由語りければ、小六兼て藤吉が器量拔群なれば、我及ぶ所にあらずと常々尊み、折節の音信を通して隨身したりければ、仔細なく領承し、口限を約し、越知川の邊にて出會すべきと申しあはせ、藤吉郎は江州へこそ出行けり。

○藤吉郎說㆓六角承禎㆒

下、中島等の切所に七ヶ所の砦を築き、二百騎三百騎の勢を籠置き、敵の大軍を分ち小勢と成て戰ひ給へ。敵の勢を以て味方の勢に競れば、二十倍に過たるべし。されば何の砦を攻むとも、悉く大勢にて向ふべし、等閑にては當るべからず。籠城の將士必死の戰を成し、手痛く防ぎ戰はゞ、義元大軍をたのみ心驕て、諸方の手へ勢を盆し、一時に砦を攻落さんと計べし。其時君逞兵を勝て旗本へ攻入り、義元と雌雄を決せんに、恐らくは敵小勢にして備なく、多分味方の勝利成べし。たとへ義元を討ずとも、本國へ追歸すべし」信長此計策に隨ひ、人夫を分て丸根、鷲津、善祥寺、中島、丹下等に七ヶ所の砦を築き、兵士を籠て義元の大軍を防がんとす。爰に藤吉郎つくぐ諸士の容體を考るに、今度の合戰、味方無勢なるを以て、必定の勝利覺束なしと、あやぶみおもふ氣色あり、かくては合戰勇なかるべしと察し、一つの密計を出し、江州の六角義秀、同義賢入道承禎に援兵を乞ひ、其勢を合せ今川と防戰あるべしと申上げ、自從者四五人を引連れ、江州さして急ぎける。

○藤吉郎定〻謀赴〻江州〻

尾州海道郡蜂須賀の住人小六政勝は、諸國の野武士一千餘人を集め、其勢甚盛なり。其手に

が組下と成りて、共に軍慮を談ぜんと乞ふ。信長卿殊に愛悅び給ひ、「藤吉が勇智、兵家の奇密に達し、數度の計策悉く當らずと云ふ事なし。實に我家の柱石、稱なくんば有べからず」と千貫の御加增有て、都合千五百貫、老臣同前の格に仰附られければ、丹羽、池田、森、林等、君の御計尤かくこそ有るべしと、共に悅び勇みける。猶重て平手監物を召され、「汝藤吉に劣たるを嫉妬の念もなく、木下が組下と成りて忠を勵む段、神妙の志感歎少からず。いよ〳〵心を合せ、國家の盛榮を計るべし」と、かず〳〵引出物を賜りければ、木下、平手有難く恩を謝し、頓て御前を退きけり。

○信長築二七箇所之砦一

永祿三年の春正月より、夏の始めに至るまで、今川勢攻登ると風聽せしかど、今に至て是を果さず。林、森、柴田等強て降參を進めけれども、藤吉一人敢て此儀を可なりとせず。信長も又降る事を快とし給はず、終に衆議一決して、今川の大勢を引受け、運を天にまかせ雌雄を決すべしと、評議定りければ、さらば防禦の備を成すべしと、藤吉郎計策を獻じて云く、「義元大軍にて攻來る、味方小勢を以て當らんには、豫め備を成すべし。先鳴海の邊、鷲津、丸根、丹

○木下藤吉郎知行加増

扨藤吉又一陣を布き、陣前に出て、「我陣を知れりや」と云ふ。平手遙に藤吉が陣を見渡し、又手を打て大に笑ひ、「是無名の陣なり」藤吉が曰く、「是も又楠の用ひ給ひし菊水の陣なるぞ。足下此陣を破り得んや」平手藤吉に嘲哢せられ大に憤り、五百人を一備とし、只一突にと討てかゝる。藤吉が備は、先陣後陣二手に備へて控へしが、先陣突立られ、しどろになつて引取れば、平手得たりと、短兵急に揉たるにぞ、藤吉郎が後陣、備を開き味方を引入れ、手毎に持楯に狭間をひらき、或は五枚又は十枚、かけがねを以て列ね合せ、忽然として城郭のごとく、前後左右に取廻し、鯨波を發し、じりゝ〳〵と進み寄る。平手大に驚きけるが、是非なく力戰して突破んと、士卒を下知してはげしく討ば、件の楯の狭間より、弓矢鐵炮を雨の如く射出し、面を向ふべき樣もなし。平手是にひるんで見えける所を、彼楯城をさつと開き、始僞り負たる二百餘人、面もふらず突出れば、平手今は叶はじと、散々に成りて敗北す。大將をはじめ並居る諸士、「したりや〳〵」と、稱歎の聲暫しは鳴も止ざりけり。平手監物兼ての覺悟大に相違し、藤吉が出沒進退鬼神のごとくなるに感服し、何樣尋常の器にあらずと、偏執の心を散じ、終に藤吉

○平手監物布陣營

去程に木下、平手の兩士、各手勢五百人に竹鎗竹刀を持たせ、鐵炮は玉を込ず、矢は根を放ち、假に戰ひの趣を成す。先平手士卒に下知して一陣をつらね、陣頭に出でて、「藤吉郎此陣を知れるや」と云ふ。藤吉も同じく進み出て、「知らず」と答ふ。平手大に笑つて、「是は楠正成が常に布たる菊水の陣なり。汝陣取の名さへ知らずして、能是を破り得んや」藤吉答へて、「我其名は知らざれども、破る事は能知れり。足下試みに能守り候へ。只今打破りて見せ申さん」と、我備の内に入り、大澤主水、淺野彌兵衛に各百騎を分ちあたへ、左右に備へ、自三百騎を引て正面より向ふ。平手が陣は兵を四つに分ち前後左右とし、前門あり後門有り。藤吉が三百騎、前門より進んで陣中へ突て入る。平手が門戸忽ちに變じ、左右の備等しく藤吉が後を討ち、引包んとする所を、淺野、大澤左右に別れ、藤吉が戰ひに目もかけず、平手が後陣へ無二無三に突かゝれば、藤吉が三百騎、備をさつと引分け、前後に當つてもみ立る。さしも布つらねたる菊水の陣、ばらり〳〵と解て敗走す。

平手木下と
兵書を
論ず

黙して是を見るべし」といふ。去程に信長の御前において、平手、木下軍學の論ありとて、織田大小の將士、席に滿て是を聞く。平手先問うて曰く、「足下武術に於てよく習練せりと聞及べり。兵書の旨に通じぬるや、試に軍法を論ぜん」といふ。藤吉答へて、「某不學にして兵書を知らず」平手又曰く、「夫軍中に將たる者は、飽まで兵書を諳じ、陣列を布進退を節に中て、而後戰へば必勝つ、討ば必破る。足下兵書を讀まずして衆に連り戰の論をなすは、頗る小兒の戲に近し」藤吉曰く、「孫子もいはずや、兵法陣法臨氣應變に如ずと。味方其法を以て陣を布ば、敵も又其破るべき利を以て向ふべし。陣をつらね備を立るも、氣に臨で變じ、變に應じて化するを以て良將とは言ずや。某兵書を讀まずと雖も、臨氣應變して堅陣をも破り、强敵をも能碎く事を知る」平手曰く、「足下猥に臨氣應變の說をなせども、氣に臨み變に應ずるは兵書の惣論にして、呉子孫子も是を容易しとせず、況や足下に於るをや」時に佐久間信盛怒つて曰く、「所詮兵書を知らず」と云ふ。藤吉、「論は無益なり、臨氣應變の覺悟、見物したし。試に陣法をつらね、互に守破の功を以て上覽に備ふべし」と。此詞に論は止て、平手、木下をして、淸須の外曲輪において陣法を戰はしむ。

繪本太閤記　初篇卷之五

○木下與二平手一論二兵書一

三國志諸葛亮が傳に曰く、先主遂に亮に詣る事凡三たび、往て乃見ゆ、因て人を屏け、與に事をはかる、以てこれを善とす、情好日に密なり、關羽張飛等悦びず、先主曰く、孤が孔明あるは、猶魚の水あるが如し、尊號を稱するに及んで、亮をもつて丞相とす云々。木下藤吉郎信長に仕へていまだ數年ならざるに、勢州の大軍を一戰に追降し、戸部、山口を敵の手に討せ、其計策悉く的中しければ、信長甚悦び給ひ、先主のいはゆる魚の水を得たるに均しく、晝夜席を同くして、軍事のみを談じ給ふ。織田家の諸士も甚驚き、歸服の色を顯しけれども、柴田、佐久間兩人は、偏執日頃に百倍し、藤吉を恥しめんと、織田家軍學の士平手監物と密に計り、軍學兵書の問答をすゝむ。此旨信長卿より平手木下に御下知有ければ、大澤主水、藤吉に向ひて、「是全く柴田、佐久間等申合せ、足下を恥しめん計なり、覺悟ありて然るべし」といふ。藤吉答へて、「我も左あらんと思ふなり。平手ごときの腐學者、いかんぞ某を恥しめんや。我に手段あり、

繪本太閤記初篇第五之卷　目録

く木下藤吉が方寸より出でし計略にて、手を動さずして敵國の謀士を殺す事、掌の物をさすが如し。嗚呼織田の家に藤吉ありて後、天下廣しといへども、人物あらざるを知るべし。

意なり」と呼り、左馬介に無手と組附たり。山口も聞ゆる勇士なれば、「心得たり」と組合ひ、上に成り下に成り、暫く勝負は見えざりける。朝比奈備中守大に聲を勵し、「山口左馬介上意を以てめし取るゝ所に、比興のふるまひ甚以て尾籠なり。申譯あらば君の前にて言開べし」と、其言語甚嚴重なり。左馬介實もと思ひ、少しひるみて見えけるを、新十郎取ておさへ、難なく繩を掛たりけり。九郎治郎は玄關にて、父が安否をいかゞぞと、眼を配て控へし所へ、組子の力者十餘人、甲冑に身を堅め、「上意なり」と取まきたり。九郎治郎今は是迄と太刀拔はなし、力者三人切て落し、腹かき切て失たりけり。さても九郎治郎が切腹故、いよ〳〵山口父子叛逆に一決し、元來義元思慮短き大將なれば、左馬介を糺明にも及ばず、戸部新十郎に申附け、引出して切せける。左馬介新十郎に向ひ、「汝我を父の仇なりと討手を願ひし事神妙の至なり。されども我今川家において一點の不忠を存ぜず、信長の反間に的り、誤つて汝が父を討といへども、是全く今川の大事を思ふ故なり。今度又織田方の反間にて、我父子が命を失ふ。みなこれ今川衰微の始めなり。我黄泉の下にて新左衛門に對面し、二心なき志を申開くべし。汝よく身を愼しみ、主人の安危を見奉れ」と、いひ終つて切れけり。戸部といひ山口といひ、今川が柱石の臣なりしに、かく命を半途に失ふこと、義元滅亡の機ざしなりと、後には思ひ合されたり。併是悉

の加勢是に辟易して、鳴海の城へ引入ける。扨も今日の合戰、不審き事なりとて、今川の加勢心を附るに、最前敵より城内へ射込し矢も、悉く根を除きたりければ、扨は山口父子叉信長に隨身して、我々を透し討ん計策なりと大きに疑ひ、散々に成て退散し、此由飛札を以て義元へ訴へける。是も藤吉が謀略にて、今川の手を以て山口父子を討せんと計りし者なり。

○山口父子亡命

扨も山口左馬介に討れたる戸部新左衛門が一子新十郎と云ふ者、今川が腹心に遠州濱松の城主朝比奈備中守にたよりて、父が無實の死を歎き、今度山口父子信長の軍兵を引受け怪しき戰を成したる事、全く山口が叛心なる由を訴へ、父が仇、君の敵、山口父子を誅伐せん事を愁訴しければ、備中守大に驚き、急ぎ此旨を義元へ言上しけるに、是より先、鳴海の諸士より山口が戰ひの様子飛札到著し、評議まち〳〵の時なりければ、朝比奈が訟に義元大に怒り、急使を以て山口父子を義元が城へ招く。山口父子其仔細を怪しめども、召に應ぜざる時は却て疑はれん事を恐れ、父子諸共に駿府へこそは急ぎける。既に義元の本城に至り、九郎治郎は玄關に控へ、左馬介唯一人、執次の侍に誘れ、奥深く參ける。とある妻戸の蔭より戸部新十郎顯れ出で、「上

びけるが、只一戰に打負け、遁れて甲州に至り、武田信玄を頼み、しばらく爰に止りけり。

○反間計討二山口父子一

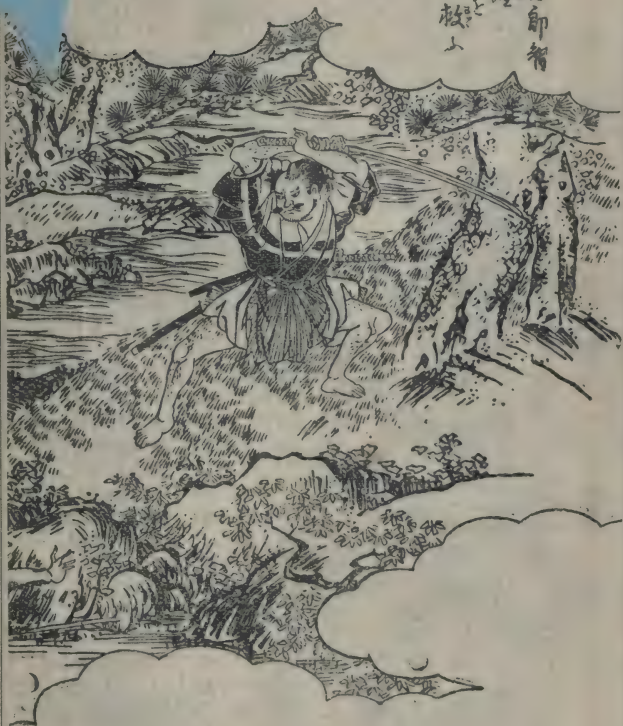
今川義元、不日に上洛のよし、其沙汰頻なりければ、信長卿又々軍の評議有けるに、柴田、佐久間が輩は、已前の如く降をすゝむ。藤吉郎はさまぐ\利害を説て、今川と戰うて利なるよしをすゝめ申ければ、信長卿甚悦喜ましく\て、今川寄ば戰はんと、其用意しきりなり。爰に鳴海の城主山口左馬介父子、今川上洛せば其時味方の難儀なりとて、兼て藤吉郎計策を定め置き自八百餘騎を率し、鳴海の城を取圍みて攻ければ、鳴海近邊に砦を構へし今川方の諸士ども、皆山口に力を合せ、一同に討て出たりければ、木下が軍兵偽り負て引退き、伏勢を以て弓鐵炮を雨のごとくに放ちけるが、いかゞしたりけん、鐵炮に玉を込ず、矢の根を拔て放けるにぞ、今川勢少しもひるまず、息を限りに追討けるが、木下が將淺野彌兵衛、馬上にて大音揚て申けるは、「是は山口が勢にはあらず、今川よりの加勢の者なり。早く用意を改め、鐵炮に玉を込み、矢の根をさして射とれや」と下知をなせば、今まで空鐵炮、根なしの矢を射かけたるが、忽備へを改め、筒を竝べ矢尻を揃へて、今ぞ實の弓鐵炮を雨よりも繁く放ければ、山口が勢、今川

は己が舊惡を恐れ、淺野彌兵衞が麁忽より事起れば、彼を尋出し罪に行ひ、百姓を宥むべしと、例の利口を以て事を逃んとす。此時信長卿より使者到來し、求馬及び二人の手代を召れければ、求馬も今は辭しがたく、半死半生の手代を召しつれ、清須へこそは赴きける。藤吉郎又一揆の中へ使者をたて、庄屋、年寄其外魁たる者四五人を召出し、村方勘定帳面等を取寄吟味の上、「求馬百姓等對決に及ぶ所、悉く求馬及び手代どもが私慾に究り、三人ともに死罪に決し、今一人の役人淺野彌兵衞は、傭はれたる者なれば、罪一統に行ひがたし。此者は犬山領を追放すべし。百姓共も徒黨を企一揆を起す事、大禁を犯す科輕きにあらず。一揆の内より三人を刑に行ひ、國法を糺すべき間、汝等此旨承り、急ぎ誰なりとも三人を召連罷出べし。遲退に及ばゞ役人を以て召捕り、求馬諸共刑罪に行ふべし。但手負たる者にても國法は立べし」と云捨て座を立てば、百姓どもは藤吉が計を大に悅び、有難しと三拜し、急ぎ犬山に歸り、淺野彌兵衞に切れたる必死の手負三人を清須へ差出し、法のごとく行ひて、事故なく鎭りける。淺野彌兵衞は木下が仁智により、必死の難を逃れ、是より藤吉郎に隨身し、忠義の志深く、度々軍功を露し、後淺野彈正少弼長政と號せるは、此彌兵衞が事なりけり。右の決談嚴重に犬山へ申送りければ、信清甚面目を失ひ、是より何となく信長卿と不和にして、終に反逆の企ありて、合戰に及

り百姓一同に、のがすまじとて追ひけるは、危かりける有樣なり。

○藤吉郎智計鎭二一揆一

人の正に起らんとする時は、果して逃れがたき愁苦患難あり。是天其人をして大任を命ずる所なり。淺野彌兵衞は思ひ設けざる騷動にて、多勢を切ぬけ、血刀を引さげ走りけるが、淸須の城下にて端なく木下藤吉に行合たり。藤吉甚だ驚き、其所謂を尋るに、彌兵衞息つぎ敢ず、しかじかの事物語るに、早一揆の百姓共逃すまじと追來る。藤吉、かくては彌兵衞危かるべしと、伴ひて淸須の城中へ引入たり。一揆原百餘人堀際まで押寄けれども、さすが信長の居城なれば、左右なく不禮も成がたく、とやせまし、かくやあらましと罵り合ふ、其騷動いはん方なし。藤吉郎足輕に命じ、其趣意を糺し問はせければ、百姓ども信淸の惡政を訟へ、役人を下し賜るべきよし强訴に及びければ、藤吉郎此旨信長卿へ言上に及び、「百姓共は追て再許有べき間、一先村々へ引取べし」と申渡せば、信長卿の威勢に恐れ、犬山さして引取りける。扨も犬山領には、近村近鄕の百姓三萬餘人馳集り、竹をそぎて鎗と成し、領主の城へ押寄んと、其評議最中なり。織田信淸此騷動を聞き、大に驚き且怒り、小川求馬を召して、早く退治すべきよし命ぜらる。求馬

義吾郎智淺雉と救ふ

んと思ふ哼なれば、更に役人の權威を恐れず、扇子料、菓子料の賄賂は曾て成ず、剩へ休息所さへまうけざれば、三人の手代大に怒り、庄屋年寄を召し、さん〴〵に罵れども、百姓ども更に詫る氣色もなく、結句役人を嘲哢し、「上を學ぶ百姓なれば、御上の非禮を見習ひて斯の仕合なり」と一向恐るゝ體なければ、役人等甚怒り、「上を誹る愚人ども、搦捕て糺明せん」と立上れば、數十人の百姓共、てんでに鋤鍬提て、「不道の役人打殺して、日頃の恨をはらせよ」と、ばら〳〵と立寄ば、淺野彌兵衛は元來慵れ人なれば、舊年の惡政を知らず、一途に百姓の無禮なりと思ひ、「惡き下賤等一々首を竝ぶべし」と、太刀拔放し、手の下に二三人切倒せば、其勢に恐れけん、ばら〳〵と迯たりけるが、近鄕近村の百姓ども、此騷動を聞と等しく、「非道の役人活置ば、いつか恨みを散ずべき。擲き殺せ打殺せ」と得物〳〵を携へて、雲霞の如く取捲たり。二人の手代大に恐れ、日來の惡事を詫るといへども、百姓どもは曾て耳にも聞入ず、なんなく二人を打倒し、半死半生に打擲す。彌兵衛群る百姓を西へ追東へ靡け、五六度斗かけたりけるが、次第々々に百姓增り、幾千萬と云數を知ず、鬨を作て押寄しは、恐しかりける次第なり。彌兵衛今は敵しがたく、討死せんと思ひけるが、此所にて百姓を相手に犬死せんも無念なりと、不勢なる所を目がけ、おつと喚て切て入り、難なく一方を打破り、淸須を指て走りける。跡よ

○犬山領騷動

爰に信長卿の從弟に、織田十郎左衛門信清といふ人あり。尾州犬山の城主にして、所領の地數多持し、其威勢甚剛し。是が寵臣に小川求馬といへる者あり。巧言令色を以て信清の寵を得、一家の政事悉く求馬が手裏にありて、權勢一家中に並ぶ者なし。元來佞奸の小人なれば、華美を好み酒色に耽り、驕奢日々に增長し、領地の百姓を虐げ、課役年々に重りければ、農家一統に困窮して、其惡政を恨み、淸須に參じ、信長卿に愁訴して事を糺さんと、より〳〵其企を成しにける。此求馬が卑役、村方支配の手代三人有けるが、何れも求馬が選み用ひし者共なれば、利に走り賄賂を貪り、民百姓の歎きを看みず、一向過役を增しければ、領地の百姓皆其肉を喰んと欲す。時に此手代の中一人、重き病に臥して立つ事能はず、淺野彌兵衛といふ者を傭ひて手代の役を勤しむ。此彌兵衛は同國淺野村の百姓彌左衛門といへる者の子にて、信長の臣藤井又右衛門が甥なり。幼少の時より力量衆に越え、生長て農夫を嫌ひ、武術を勵み兵書を讀む。父彌左衛門沒去の後は、農を棄て伯父又右衛門が方に育はれ居たりけるが、今度求馬が手代に傭はれ、二人の手代諸共に、村方檢見に廻りけるに、領地の百姓ども兼々苛政に苦しみ、出訴せ

に相違し、思ふに違ふ藤吉が早業やと、感ぜぬ者はなかりけり。

○藤吉郎智服ニ主水一

上島主水、今日の戰ひに甚恐れをのゝき、此人凡人ならず、我及ぶ所にあらずと、實心に歸伏の色を顯し、約束のごとく藤吉が組下と成り、誘れて木下が家に歸りぬ。藤吉一間なる所へ主水を招き、「汝上島とは假の氏、齋藤家の臣宇留馬の城主大澤治郎左衛門が弟同苗主水、間者と成りて當家へ入込み、信長卿を弑せんと計るならん。志を改め、今日より誠を以て仕へなば、寛仁大度の信長卿、舊惡を捨て厚く用ひ給ふべし」と云ふ。主水是を聞て全身冷汗を流し、肝を散し魂を失ひ、低頭平身して答曰く、「明察のごとく齋藤家の臣大澤主水は則某なり。足下いかにして斯詳に我素姓を知り給ふ」藤吉笑うて、「汝が中間彌介といふ者は、某が腹心の者なり。清洲の源左衛門と云ふ商人を口入として汝が家に仕へせしめ、治郎左衛門より汝へ遣す書狀是にあり」と數通の證を出し、「是皆某が計りたるに非ず、我君の明智にて、兼て某に仰て此計策を行はしめ給ふなり」と云ふ。主水是を聞益驚き、殊に藤吉が功を君に讓り、才智に誇らざるを感服し、心を傾け信長卿に仕へて、忠勤をはげみけり。

吉に仰聞らる。藤吉委細畏り、御前に於て上島と試合仕るべき御受申上げぬれば、頓て主水をも召出され、「假の試合に眞劒を用ふる事其謂なし」とて、兩方互に八尺の竹鎗を與へ給へば、主水心中に、竹鎗にてもあれ、藤吉郎を半死半生になしくれんと、力足を踏で立向へば、柴田をはじめ、林、佐久間其餘の人々も、あはや只今藤吉郎、主水が爲に突とめらるべしとて、手に汗握つて見物す。時に藤吉御前に向ひ、「某等皆君の臣にて候へば、假の試合に勝も負るも意趣はこれなし。されども勵みの爲に候へば、某負なば上島が組下と成り、上島負なば某が組下へ仰附られ下さるべし」と申上る。上島も「此儀至極尤に候。勝負を以て組下に成すべし」と申合せ、左右方互に身繕し、竹鎗提げ立上る。元來上島鎗術に熟したる壯士なれば、小兵の藤吉唯一突と、上段に構へ飛かゝる。藤吉は天然不思議の早業、凡人の及ぶべき所にあらず、其上松下が家にありて、劒術および鎗長刀弓鐵炮に至る迄、一を聞て萬を知り、身力を盡し修し得たる手練なれば、飛違うて稻妻のごとく突入ければ、主水心中に大きに驚き、此者いかなればかく鍛練せしやと甚恐れ、一世の祕術爰なりと、精神を勵し戰ひけるが、不思議なるかな、日輪に向うて戰ふごとく、眼くらみ、五體すくんで働き得ず、難なく藤吉、上島が鎗打落し、一突に突伏たり。信長卿扇を開き、「藤吉勝たり、木下仕負せたり」と譽め給へば、一座の人々案

僞つて降參し加勢を乞とも、何ぞ猥に其儀に順はんや。齋藤又大敵なり。臣下には日根野備中守、齋藤四郎左衛門、永井小牧が輩、西美濃に稻葉伊豫守、安藤伊賀守、謀士には竹中半兵衛重治なんど、聞ゆる名士數をしらず、足下の詞の如く、容易に美濃を攻め破らんや。實に當家存亡の秋なり。君宜舊臣の諫に從ひ、今川へ降參の儀然るべし」と言上す。信長卿心迷ひて更に決せず、藤吉郎が詞の內、何とやらん趣意ありげにおぼしければ、「軍評定は重て決すべし」とて、其儘座を立せ給へば、皆々退出したりける。

○藤吉與上島戰鎗法

其夜上島主水、柴田が許へ行きて密に談じけるは、「木下藤吉猥に辯舌を震ひ、君を勸めて國家を陷れんとす。君又血氣にはやり給へば、藤吉が詞を是なりとし給ひ、足下を始め諸老臣の諫を用ひ給はず。所詮某と藤吉に、眞劍にて鎗の試合を仰附られ下さらば、永く當家の禍を除くべし」といふ。柴田も兼て藤吉が物毎にさし出づるを心惡く思ひければ、主水が所存に組し、信長卿へ主水が願を言上に及びけれど、上島は鎗術の達人、藤吉が手練の及ぶべしとも思ひ給はず、躊躇としていまだ答へ給はざる前に、木下藤吉郎出仕しければ、止ことを得ず此旨を藤

工夫、是又戰國の心がけ、我心にも叶へり。兩人ともに此後いよ〳〵水魚のごとく忠勤を勵むべし」とて、百人の足輕共へも御酒を被下、頓て御歸城したまひけり。

○信長軍評定

此時駿州今川義元、北條武田をかたらひ、數十萬の大軍を率し、上洛するよし聞えければ、信長諸臣を集め評定せられけるに、佐久間信盛すゝみ出て申けるは、「義元大軍を以て攻登るに、味方小勢にて戰はん事、鷄卵を以て大石に當るが如し。一旦今川に降を乞ひ、時を見合せ大業を起し給はんこそ、長久の計ならん」と言上す。林、柴田の舊臣、此儀尤然るべしと、一同に降參をすゝめけれど、信長いまだ心決せず、藤吉郎を召して問ひ給ふに、藤吉謹で答へけるは、「某頃日駿州へ間者を入れ、今川の虛實を伺ひ聞しに、急に上洛するにも非ず。某一つの謀計あり。諸老臣の勸めに從ひ、今川へ僞つて降參し、美濃の齋藤龍興を征し、其國を以て義元へ獻ずべき旨を告て、今川の加勢を乞受け、尾州駿州の兩旗をなびかし、齋藤を攻亡し、而して美濃、尾張の兩勢を合せ今川を防ぎ給はゞ、義元といへども恐るゝに足らず」時に末座より上島主水進み出て、「藤吉郎が申條、理に似て理にあらず。今川義元大國に跨て、智謀の士國に滿てり。

○上島木下試二鎗長短一

扨此日を始めとして三日が間、上島が方にては、汗水に成り手練を磨き、藤吉方を突崩さんと、息をもつがず調練す。木下方には、更に鎗術の稽古はなく、日々酒食を與へ、笑談のみに日を暮しぬ。第四日の早朝、兼て申合せし如く、上島、木下各五十人の足輕に竹鎗を持しめ、馬場の東西に陣を布く。信長卿、柴田、佐久間、池田、森を始め、今日の勝負いかゞぞと、かたづを呑で御棧敷に出席ある。菅谷九右衛門、相圖の太鼓を打て戰ひを初む。東西の兵士等、鼓の拍子につれて間近く成りぬ。すはや鎗を合すと見えける時、木下兼て計策を定め置きたれば、五十人の士卒忽ち三手に別れ、一統同音にゑい〳〵おふと鯨波を發し、勢に乘じて無二無三に突かくる。上島が士卒鯨波に辟易し、あわてふためき、此頃習得し鎗の手段も出ばこそ、しどろに成て迯出せば、木下藤吉郎扇を開き、「進め〳〵」と下知するにぞ、彼長き鎗にて突ふせ薙ふせ、たゝきふせ、半丁ばかり追ひたりけり。菅谷九右衛門鐘を鳴し、戰を止む。木下方の士卒共十分の勝利を得、勝鯨を三度揚げ、勇み悅び引取しは、目ざましくこそ見えにける。信長卿、上島、木下兩人を近く召され、「主水自鎗を遣ば短きを以て利を得べし。藤吉は衆と共に勝の

古の功もなく、立まじりて混雜し、果は訇しく罵り合ひ、小兒の戲の如くなりければ、主水大に怒り、竹刀を以て士卒等を打叩程こそあれ、皆々大に主水をうらみ、其日の稽古は果にけり。扨又木下方には、同五十人の足輕ども、鎗の稽古とて集りしを一間に請じ、藤吉自酒肴携へ出で、士卒等に與へ、「先々酒飯にても呑喰ひ、快く醉を催し歸るべし」とて、家人等に命じさまざま馳走を成し、山海の珍味數を盡し、膳部の結構、國主郡主を饗應に等し。彼下郎ども大に欣び、追笑輕薄を言ならべ、引受々々飲食し、頓て喰事も終りければ、藤吉郎足輕等に向ひ、「扨今日は銘々宿所へ歸り休息いたし、明日又々來るべし」とて、座を立つて入んとす。足輕等暫しと押とめ、「下郎ども今日參上致したるは、鎗術調練の爲にて候へば、御指南下され候へかし」と一同に申ければ、藤吉郎打笑ひ、「今日は稽古に及ばず、酒食だに調うたらば、早々歸り休息致すべし」と云ひすてて入ければ、士卒共すべき方なく、相つれて歸りけり。其道すがら更に語り合けるは、「上島殿は當家にて鎗の御家、木下殿は未鎗術鍛練無之故、此度の仕合はとても上島殿には勝まじき了簡故、鎗のけいこはなく、後日の口ふさげに酒食の饗應ありし物と覺ゆるなり。何にもあれ、勝も負も我々が力にあらず、木下、上島の身に掛りたれば、先酒にても飲みたるぞ快し」とて、取々噂してぞ歸りける。

指出る木下藤吉、進み出て申けるは、「某が存るは、長を鎗の能とす。短き時は其能なし。試みに鎗術不知の足輕に命じ、長き鎗と短き鎗とを與へ戰はしめば、必長き方勝を取べし。是則鎗の能なり。論には不及、目前に試み給へ」と云ふ。主水是を聞て大に怒り「足下鎗術に暗くして猥に言を發す。我五十人の足輕を預り、三日が間鎗術を教んに、汝長き鎗を持せて戰勝べきや否や」藤吉笑うて「勝と負とは此席に論じて益なし。某も五十人の足輕を預り、三日の間長き鎗の利益ある事を教へ、第四日に至らば馬場前にて戰せ、長短いづれの損利有や試むべし」といふ。信長卿も此儀面白かるべしとて、菅谷九右衛門を召して、足輕百人を上島、木下へ分ち遣し、鎗術調練すべきよし仰渡され「稽古熟せば、我も馬場前に出て見物すべし」とて、座をたち給へば、藤吉、上島、其外の諸士も悉く退出す。

○上島木下調二練鎗法一

扨も菅谷九右衛門は信長卿の仰を承り、百人の足輕を上島、木下兩人へ分ち遣し、鎗術を調練せしむ。上島主水五十人の士卒を集め、短を以て長に勝のゆゑんを委しく語り聞せ、各竹鎗を與へ、朝より暮に至るまで、大汗に成て教ふれども、不智短才の下郎どもなれば、更に稽

繪本太閤記　初篇卷之四

○論木下與上島利鎗長短

靜ならぬ世にしあれば、年改りぬれど、四方拜、朝賀などの古例もつと〳〵に行はれず、何となく打騷きたる世の中こそ疎しけれ。況兵を練り軍を手習し、攻擊を事とする武家においてをや。みよし野の花、雲間に咲みだれ、更科の月、いかに隈なくさやけくとも、誰か長閑き心ありて、是を稱し彼を詠めんや。今日は誰がしが軍を發し某が國を襲ひ、きのふは誰が爲何某も討れぬるよと、武に携はらぬ雲の上人、又はいやしき賤の男までも、假初の語草も常ならず恐しきぞ、亂れたる世の形勢なりけらし。永祿二年も空しく暮れ、同三年春正月十五日、織田家の臣下殘りなく登城し、式日の祝詞を述べ、信長卿も殊に氣色麗く、數尅酒宴を催し給ふ。信長卿諸士にむかひ、「鎗の柄は長きに利ありや、短きに利ありや」と尋給ふ。此時鎗術を申立て、當家へ仕官せる上島主水すゝみ出て、「鎗は實に短きを以て利あり」と申す。元來信長、長柄の鎗を好み給へば、主水が論を心元なく思ひ給ひ、「諸將各その見識を申すべし」と仰ければ、諸事に

繪本太閤記　初篇第四之卷　目錄

らず成けり。是則ち藤吉郎が信長卿へ申上し計策なり。信長頓て岩倉の城に入給ひ、諸士の功を稱し給ふ。柴田藤吉郎を誘ひ御前に罷出で、「此度の落城、悉く藤吉郎が計策にて候へば、御勘氣御免下されかし」と言上しければ、信長大に悅び給ひ、「藤吉郎は以前の如く出仕を許すべし。就中勝家が働、七郞左衛門を討取し勇武、拔群の高名なり」と厚く稱じ給ひけり。

○堀尾茂助力戰

岩倉の城の西南に的て一つの高山あり、岩倉山と號す。藤吉郎五百人の士卒を引具し、此山へ登り、樹木を切柴を積み、硫黄焔硝をそゝぎ入れ、時の至るを待居たる折節、申の下尅に西風烈しく吹起れば、積置し樹木へ一同に火を懸け、鯨波をどつと上ければ、城中大に驚き、頭を上て見てければ、火光天をこがし、黑烟地を覆ひ、大木大石火炎につれて城中へ吹き落しければ、何かは以てたまるべき、城戸をひらきて一同に逃出るを、待まうけたる織田の軍勢、柴田、佐久間を始めとして、狼狽まはる岩倉勢を、爰に切ふせかしこに薙立て、四角八面に追つちらす。爰に堀尾茂助は生年十六歲、父忠右衛門大勢にかこまれたるを見て、大太刀を眞向にさしかざし、群る織田勢を右に突き左に突き、或は切て兩段とし、東西に馳南北に破り、一道の血路をひらき、終に父忠右衛門を救ひ出し、道を奪うて退きける。藤吉郎高吉山上より此血戰を見て大に驚き、士卒を以て其姓名を問しむ。士卒馬に鞭打ち、「軍中の勇士姓名をとめよ」と大音に呼れば、「堀尾茂助吉晴」と答ふ。藤吉歎じて、「あつぱれ勇士、我郎等になさばや」とつぶやきけるが、後果して臣下と成れり。扨も城兵右往左往に散亂しければ、伊勢守が幼稚の兒も、其行方をし

岩倉落城

なく、食攻にせんと評定しける所へ、木下藤吉郎來り、柴田勝家に密に對面し、「我愚にして君の計策をしらず、實に北畠追討と心得、御諫言申し御氣色を損じたる事、千悔すれども益なし。所詮此合戰に討死仕り、泉下の鬼と成りて、愚直なる某が志を顯はし度存念にて、是迄參り候。あはれ足下の御慈悲にて、士卒の中へ御加へ下され、討死の後も、御執成にて御不興御免下され候やう、偏に賴み存ずる」由、淚を流し語りければ、柴田元より强きを凌ぎ弱きを助くる生質なれば、藤吉が所存を大に感心し、信長卿の御前に出で、藤吉郎が願ひ詳に言上し、一方の大將御免下され度よし願ひわびけるにぞ、信長卿は兼て藤吉と計策を定め給ひたれば、態と面色をあらゝげ給ひ、「藤吉が推參、甚その謂なし。追かへす奴なれども、其方が推擧も默止がたければ、當城攻において一つの功を立べし。夫を賞に容赦し遣すべし」と仰せ渡されければ、柴田有難しと退出し、藤吉に右の次第をば物語り、「此度の戰には我功を御邊にゆづり、御不興御免相違有まじ」と申ければ、藤吉其時近く居寄り、「某此城を一戰に落申さん計略あり。是を功に貴殿の御取成にて、御不興御免下されまじくや」と申ければ、柴田、「其計略いかゞ」と問ふ。藤吉柴田が耳に口をよせ、かやう〳〵と密語ければ、柴田大に悅び、己が手勢五百人を藤吉に分ち與へ、諸陣へ觸て合戰の用意區々なり。藤吉郎欣然と軍勢を引き、西をさして出行けり。

州御征伐と披露し給ひ、軍勢を佐矢川迄出し、直に岩倉へ向ひ攻給はゞ、城中不意の事なれば、必敗軍に及ぶべし。されども岩倉は名城なり。軍士に織田七郎左衛門、堀尾忠右衛門なんど聞ゆる勇者あれば、容易に落城は致すまじ。かやう〳〵に計給はゞ、一時に大功を立べきなり」と、信長卿の御耳に口を附け、謀を言上す。信長横手を打て大に喜び給ひ、軍談數尅に及び、藤吉郎は退出しける。木下が計は岩倉落城の章にてしるべし。

○信長攻岩倉城

去程に信長卿、勢州征伐と號し、其勢三千餘騎、三手に分ち、先陣柴田勝家、後陣は佐久間左衛門、自中陣に備へて佐矢川へ出張し、此所にて、「勢州征伐とは僞、實は岩倉の城を攻むるなり」と下知し給へば、諸軍大に驚き、信長卿の軍慮、鬼神も計がたしとて感じあへり。さらば敵の不意を打べしとて、もみにもんで岩倉へ押寄せ、鯨波を作り鐵炮を飛し、無二無三に攻ければ、城中より織田七郎左衛門、同源左衛門、堀尾忠右衛門、切先をならべて討出で、火水に成て戰ひしが、元より城中思ひよらざる合戰なれば、武しといへども信長に切破られ、織田七郎左衛門も柴田勝家に討れ、漸城中へ引入ける。是より城中堅く防ぎて出る事なし。信長卿力

せ給ふ。

○藤吉郎獻計策

去程に織田信長、佐矢川を陣拂ひして本城へ歸り給ひ、猶も勢州の容様を伺ひ給ふに、織田家の勢に恐れ、軍勢を出すべき氣勢なきよし聞せ給ひ、さらば臆病神の醒ぬ内に、勢州を征伐すべしとて、諸將を召して出陣の御下知あり。木下藤吉いかゞおもひけん、「此度の御出陣こそ味方の勝利覺束なし。在國有つて、根をつよくし給はんこそ肝要なれ」と、度々諫言申ければ、信長甚怒り給ひ、「汝佐矢川の軍功に誇り、我令を用ひず、不吉の言葉奇怪なり。我勢州を平治し歸城する迄、出仕致すべからず」とて、御座を立せ給へば、柴田、佐久間が輩、常々藤吉郎が出過たるを惡みければ、「よき教訓なり、已後を愼候へ」とて、ほゝ笑て退出す。信長卿元來思慮深き大將なれば、其夜藤吉郎を密にめされ、勢州征伐の謀を尋ね給ふ。藤吉郎謹で言上しけるは、「岩倉の城主織田伊勢守死去せるといへ共、老臣織田七郎左衛門、同源左衛門、山内伊之助等、伊勢守が幼稚の子を守立て、味方合體の色を成せども、實は虚に乘じて我國を呑とす。今君遠く勢州を征し給ふ時は、忽岩倉より軍を起し、此本城を奪とるべし。某密に計り候に、君勢

紏さんと、藤吉郎を召しけれど、行方なく逐電せしよし、盜賊は藤吉郎に相違なしと、陣中此噂とりぐ\なり。然れども信長卿はこれを信じ給はず、藤吉は大丈夫なり、いかんぞ盜賊をなして出奔せんや、仔細こそあらめと思しける所へ、盜賊を搦め取たるよし聞し召れ、直に福富を召され、以の外氣色を損じ給ひ「汝武士の家に生れ、己が帶せる刀に差たる笄を失ふさへ覺悟なき振舞なるに、剩へ事の實否をも正さず、猥に罪なき者を訴へ出で、己が非を文んとする事、悉く武夫の所行にあらず。信長が臣下にかゝる嗚呼の曲者ありと、他國に沙汰せられんも面目なし。今日より永く勘當たるべし」と、大きに怒りて責給へば、平左衞門申上べき詞なく、赤面して居たりけるを、藤吉郎まかり出で、「謹で申上げけるは、「君御怒りはさる事に候へ共、平左衞門が麁忽斗に候はず。某貧賤小身にして、はかぐ\しき甲冑をさへ所持せざれば、かゝる疑ひを蒙るも、皆某が不德のいたす所にして、他人の誤りにはあらず候。平左衞門君の御嗔を蒙り、いかばかり悲しく存候はん。重ての功を以て今度の誤を償しめ給はゞ、寬仁の御はからひと、家中一統恐悅限りなかるべし」と、さまぐ\取成し申しければ、信長卿殊に感じ給ひ、福富をそのまゝ勤仕せしめ、藤吉郎が今度の軍賞なりとて、五百貫の所領を下し賜り、且老臣木下雅樂頭が家を繼で、新參の辱を免るべしと、是より中村を改め、木下藤吉郎高吉と名乘ら

信長卿、勢州の軍勢又も仕寄ば戰はんと、佐矢川に陣を取て、嚴にこそ控たり。

○福富平左衛門失レ笄

馬を相するにこれを痩たるに失ひ、人を相するにこれを貧きに失ふとかや。信長卿の家臣に福富平左衛門といふ者あり。佐矢川の陣中にて、細龍を彫ものせる黄金の笄を失ひ、さま〴〵詮議なせども更に知る者なし。人有り平左衛門に告て云く、「中村藤吉郎盗取て匿り」と。爰に於て平左衛門、藤吉郎を疑ふ事甚し。藤吉郎大に迷惑し、我貧賤なるを以て斯る惡名を蒙るこそ口惜けれ、所詮此盗賊をさがし出さずんば、惡名を雪ぐ事を得じと、密に津嶋の町に行き、堀田孫右衛門といへる豪富なる町人の家に至り、主に逢て事の次第を物語り、「金龍の笄を以て質物に入る者あらば、其者を捕へ置き、直に知せ給はるべし。此盗賊相知れなば、黄金十兩を以て是を賞すべし、猶他家へ持行き賣まじき物にも非ず」とて、右の趣を津嶋の町中へ觸させ置き、孫右衛門方に滯留して、音信をこそ待にける。果して藤吉郎が推察に違はず、足輕體の者一人孫右衛門が宅に來り、金龍の笄を以て錢五貫文を借んと云ふ。藤吉郎悦び、直に搦め捕て信長卿の御前へ引せ、始終の事言上に及びけるに、是より先福富平左衛門此事を申上げ、其實否を

して軍の評議有けるに、柴田勝家、佐久間信盛詞を揃へ、「誠に寡きは多きに敵せず。敵は大勢、味方は小勢、此所にての合戰心元なし。清須の本城に引退き、壘を高うし、湟を深くして敵を待べし」といふ。時に遙末席に控へ居たる中村藤吉郎、此事を聞て大に笑ひ、「勢州の軍勢何萬ありとも、是蟻の群るがごとし。此合戰味方十分の勝利、早く川を渡りて合戰を始め給へ。某昨夜百姓を案內として、密に敵の備へ、川の淺瀨を試み候。敵は川上、川下に伏勢を構へ、味方渡さば引包んで戰はんとす。味方其備へをなして、短兵急に戰ひなば、敵の大勢何の用にか立べき」といふ。信長大きに悅び、「さらば藤吉郎は淺瀨の案內なれば、此度の先陣仕るべし」とて、御召替の鎧兜、夕貌といふ御馬を賜り、「高名せよ藤吉」とて、手づから手鎗を與へ給へば、藤吉郎有難く頂戴し、「淺瀨の先陣仕らん。進み給へ人々」とて、一散に乘出せば、池田勝三郎、坂井右近、森三左衞門、我劣じと川を渡す。信長卿、柴田、佐久間兩人に五百人の勢を與へ、川の上下より密に涉り、伏勢を破らしむ。勢州勢謀の洩たるは曾てしらず、「すはや織田勢の川を渡すぞ。僞り負て思ふ圖に引よせよ」とて、且戰ひ且走る。柴田、佐久間の兩勢、思ひもよらず兩方より伏勢を打破り、どつとをめいてかゝりければ、勢州勢案に相違して、風に木の葉の散がごとく、さん〴〵になりて迯たりけるが、佐矢川にはたまり得ず、大河內の本城へ退きけり。

門を商人に仕立て、笠寺の城へ入込せ、新左衞門が自筆の書翰を需め、其筆跡を謀書して、信長へ降參し山口父子を殺すべきよしの書面をこしらへ、又九郎次郎が手跡を僞て、右戸部が信長へ內通の書翰を奪ひ取し趣に認め、鳴海の城左馬介が方へ遣しければ、左馬介大に驚き、急ぎ義元へ其旨注進し、命を受て笠寺の城へ押よせ、無二無三に攻たりけり。戸部新左衞門勇士なりといへども、元來不意の事にて防戰の手配なく、山口が勢城中へ亂れ入て切廻れば、其身鎧を著するひまもなく、素肌にて鎗を提げ、近寄る兵十騎計突殺し、今は是迄とて腹かき切て死たりけり。九郎次郎は淸須にありて此由を傳聞き、甚だ驚き、父が所存を聞んと、夜に紛れて鳴海の城へ來り、左馬介が物語に、信長が反間に當りしを始めて悟り、父子ともいよ〳〵驚き恐怖し、織田勢の攻來らん事を恐れ、合戰の用意區々にて、晝夜易き心はなし。信長卿は戸部が討死を聞き、手を打て大に笑ひ、藤吉郎が才智人に越しを、密に感じ給ひけり。

○佐矢川合戰

永祿二年四月十七日、勢州北畠具敎、二萬餘騎を引率し、信長を攻んと、佐矢川へ出張す。信長卿も五千餘人にて出陣し給ひ、佐矢川を中に挾みて對陣し、いまだ敢て戰はず。信長諸將をめ

宥し給はらば有難く候はん」と願ひければ、信長卿此旨許容し給ひ、即時に貳百貫文を下し給ふ。藤吉郎大に悦び、是を以て大工左官の棟梁に分ち與へ、先の朱印の僞ならざるを示しければ、人夫ども悦び勇み、其仁德になつきけり。此普請速に成就せし事、藤吉郎が才智衆に秀し故なりと、信長卿を始め參らせ、家中一統、其計策を感じあへり。

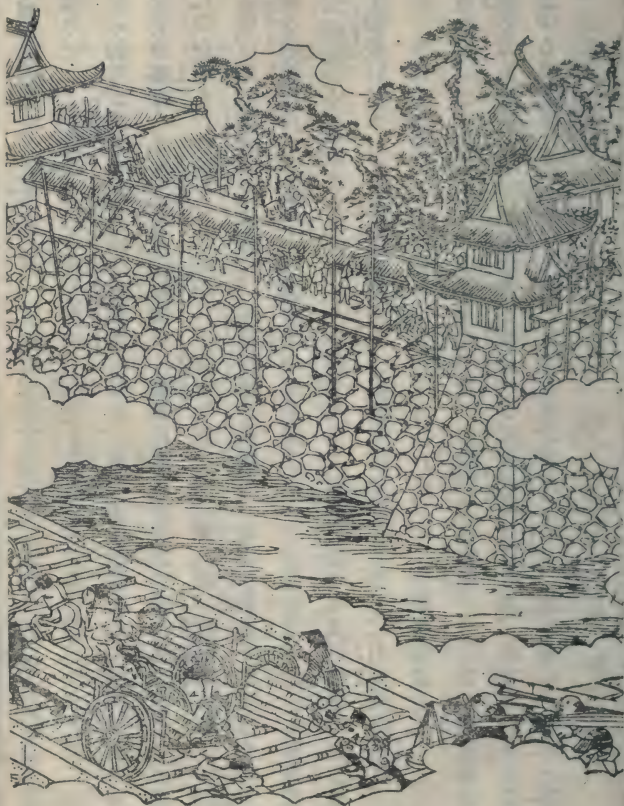
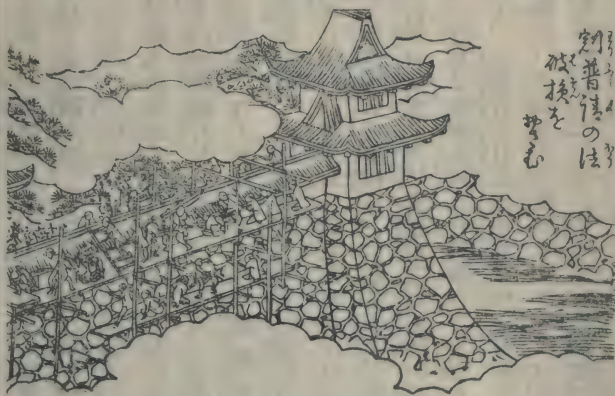
○反間謀殺戸部新左衞門

此山口父子は織田家の舊臣なるが、去る天文十九年、今川義元が幕下と成りて、鳴海の城に楯籠り、叛逆の色を顯はせり。此年信長十七歲、軍兵を率し、鳴海城を攻め給へども、山口父子勇にして容易征しがたく、其儘捨置給ひしが、信長卿の威勢日々月々に盛なりしかば、永祿元年、山口父子降參を乞て、悴九郎次郎を信長へ勤仕させ、左馬介は鳴海に在て今川の押を成す。是實の降參にあらずして、義元上洛の砌、裏切すべき計略なり。されば九郎次郎今度の城修復も、態と出來延引させしめ、今川方の便よからんことを計けるに、藤吉郎が才智にて首尾よろしからず、出仕をも止められ、欝々として籠り居たり。藤吉郎山口父子が反心を察し、信長卿へ進めて、左馬介が手を借り、今川の功臣笠寺の城主戸部新左衞門を討しむ。其計畧は、森三左衞

○割普請法治₂破損₁

扨も城普請の人夫ども、九郎次郎が反心にて、怠りがちに日を暮しけるが、今度の奉行中村藤吉郎誠實の教訓に先非を悔み、信長卿の仁惠を悦び、其翌日より卯の尅に役所に集り、棟梁の下知に隨ひ、己々が場所を割附け、一坪に五人づつと定め、息をもつがず汗水に成て働きける。藤吉郎是を見て心中に甚だ歡び、好言を以て讃稱し、猶下知を傳へて、「他の作事を顧ず、自分の場所を出精すべし」とて、別に貳百人の人夫を以て土砂を運び、石を荷せ、又三十人を以て臨時の用事を達しければ、半日の間に石垣全く成就し、午の尅に至りて拍子木を打て人夫をまとめ、中飯を與へ酒を呑しめければ、食事終りて休息もなく、直に柱立に取かゝり、早左官ども壁をぬり、其明日に至つては、塀櫓に至迄殘りなく成就す。信長卿は藤吉郎が普請の日限覺束なく、其日の暮方、小姓近習を引具し、外廓に出て見給へば、昨日迄まだ營の最中なりしが、今日ははや塀石垣櫓まで輝々しく立つらね、全く成就したりければ、甚感じ思召て、褒美として百貫文の加增を賜りければ、藤吉郎謹で頂戴し、扨改めて申けるは、「今度の破損修復、速に成就ならしめんため、作事の人夫へ貳百貫文の賞錢を與へ置候。願はくは當時貳百貫の拜借を

調置し酒肴を取出し、人夫共に與へければ、大工左官等大に悅び、「有難き御もてなし、辭退は却て無禮なり」と、下賤の習ひ會釋もなく、引受々々呑たりけり。藤吉郎人夫等に向ひさとして申けるは、「汝等が輩みな信長卿の御領地に住し、多年妻子を保んじぬれば、云ずとも君の厚恩は忘るまじき事ならずや。今近國鄰國悉く敵國にして、治世の時と異なり。されば御城の修復も延々に日を費し、成就せざる其中へ、大軍を以て襲ひ來らば、信長卿は何によつてか敵を防ぎ給はんや。敵、國中へ亂入せば、町家村里を亂暴し、汝等が輩妻子老少悉く白刃の本に命を落し、屍を溝洫にさらさすべし。銘々忠を思ひ身を思はゞ、此普請、暫くも怠りなく、粉骨細身して、一時も早く成就ならしむべし。右御褒美として鳥目貳百貫文の御朱印を下し賜はる。是又有難く頂戴いたすべし。普請成就の上、此御朱印を以て右鳥目に引替賜はれば、大切に納め置くべし。先にも申す如く、御領分に住む汝等なれば、かゝる御褒美は是なくとも、君の御爲身の爲なれば、はげみ勤むべき筈の事なるを、仁愛深き信長卿、若干の恩賞を賜ふ事、誠に恐多き御惠みならずや」と、信義を盡し實情を吐き說聞せければ、人木石にあらざれば、理に當つて感ずる事なきにあらず、人夫ども藤吉郎が演說に伏し、淚を落し、先非を悔み、三日の内に必ず出來せしむべきよし、返答を申上げ、暇申して其日は宿所へ歸りけり。

割普請の法
破損を修む

て申附る趣は、此度の普請、纔塀石垣の修理に數日を費す事、君の御氣色甚よろしからず、依て某を以て奉行職を替しめ給ふ。凡石垣一坪を修理せんに、大工二人左官一人、外に手傳二人、都合五人を用ひなば一日にも成就すべし。左あれば塀破損凡百間なれば、是を一坪五人がかりと定め、惣人數五百人を以て成就ならしむべし。併ながら要害堅固に構ゆる作事なれば、一日に出來すべき手積なれども、三日を限りに營むべし。先今日休息いたし、明日より出精すべきよしを申渡す。大工左官の輩、右の趣領掌して退くといへども、兼て九郎次郎が内意を受け、態と普請を延引せしめければ、今度の奉行中村藤吉郎が令を用ゆべきや、用ゆまじきやと、寄合私語居たる所へ、山口九郎次郎密使を以て棟梁どもを己が館に招き、「藤吉が下知を用ひず、いよ〳〵普請延引の手積り、ぬかりなく心を用ゆべし」とて、金錢を與へ申含めければ、棟梁ども委細畏り退きけり。其翌日より普請の場所に至り、外見には出精し、造作を急ぐ體に見ゆれども、其實は土臺石垣などの損じざる所もわざとゆるがせ、徒に日を暮さんとす。藤吉郎此體を見て、前奉行山口九郎次郎が反心謀計を察し、士卒に命じて酒肴を求めさせ、午の尅に休息を申附け、人夫共を呼集めて申けるは、「扨今日は早朝より甚の出精、某に於て滿足限なし。君も汝等が勞を休んとて、御酒を賜る間、有難く頂戴し、先日よりの積欝を散ずべし」とて、

仕るごとし。理なるかな、藤吉天下掌握の時、北の政所と稱し、後に高臺院と號したてまつるは、此御方の事なりけり。

○藤吉郎普請奉行

或時信長卿の居城、淸須の城塀百間斗崩れけるを修理せんとて、鳴海の城主山口左馬助が子九郎治郎を作事奉行に仰附られ、晝夜を分ず修理せしめ給へども、日を重て成就せず、既に二十餘日に及びければ、藤吉郎大にあせり、「今戰國の中に挾て、壘を高くし塹を深くすべき秋なるに、かく等閑に數日を過すは危き事に非ずや。近國の强敵卒に襲來らば何に寄て防ぎ戰はんや。思はざるの甚しきなり」とつぶやきけるを、信長卿聞しめされ、「いかにや小猿、汝數日を費さずして、城塀石垣修理すべきはかりごとありや」と仰せければ、藤吉謹で申けるは、「某此普請の奉行とならば、三日の間に城塀石垣全く成就ならしむべし。畢竟奉行を始めとし、職人共怠りがちに心を用ひざるにより、纔の破損に數日を費す事、無益の至りに候」と申上げける。信長卿兼て藤吉郎が器量知しめされければ、試みに藤吉郎を以て九郎次郎に代しめ、「三日の中に相違なく成就ならしむべし」と嚴に命じ給ふ。藤吉郎畏て令承し、頓て大工左官の棟梁を召

「又右衛門女八重、某と兼て夫婦の契約あり、父又右衛門此事を知らず、貴殿に婚姻を許しぬれども、とても此事成就すまじ。足下俠氣を以て某が罪を免し、此婚儀異變なし給はゞ大悦少からず」といふ。犬千代甚だおどろきけるが、是は藤吉郎が頓計にて、彼女に外に約せし男有べし、いかにぞや藤吉ごとき猿面冠者に斯まで深く馴合べきと察しければ、態と面を和らげ、「某曾て足下にかゝる契約有る事をしらず、不覺にも申出し、多罪のがるゝ方これなし。今より我婚姻は相止め、足下の媒妁と成て、必ず此事成就ならしむべし」といふ。藤吉犬千代が心根をしりぬれば甚迷惑し、種々に理れ共、犬千代ます〳〵意地強く、信長卿へ申上ぐる事既に決定す。藤吉郎大に困り、ぜひなく又右衛門夫婦に此事を告ぐ。又右衛門も詮方なく、女八重に此事を語れば、此女藤吉が醜面をきらはず、悦んで是を諾す。又右衛門夫婦大に悦び、又藤吉郎を招きて此由を物語に、藤吉郎いよ〳〵難澁し、「此一件我一時の計策にて、かくならんとは思ひもよらず、いかにもして事を延し、重て計儀有るべし」といへど、又右衛門更に承引せず、「事既に爰に至れり、いかんとも成しがたし。且娘足下に嫁せん事を希ふ。殊更君の御聞に達しぬれば、いづれ異變成がたし」とて、終に吉日を選み、則ち犬千代を媒妁として、八重と藤吉を夫婦とす。犬千代ひそかに兩人が容體を伺ふに、さらに隔るけしきもなく、八重が藤吉を敬ふ事、臣の君に

繪本太閤記　初篇卷之三

○藤吉郎娶藤井又右衛門女

孤陰は則生ぜず、獨陽は則長ぜず、故に天地の配は陰陽を以てし、男は女を以て室とし、女は男を以て家とす。故に人生の偶は夫婦を以てす。陰陽和して後雨澤降り、夫婦和して後家道なれり。信長卿の足輕頭藤井又右衛門一女あり、名を八重と呼り。元より家富榮ける中に出生せし女なれば、萬の業に拙からず、加之容貌艶美く、紅粉の色を借ずして、自の國色此鄕中に唱へ高し。爰に信長卿の小姓頭に、前田犬千代といへる若者あり、此八重を戀慕ひ、媒人を以て又右衛門に女を乞ふ。又右衛門大きに悅び、先豫め約諾をなし、女八重に此事を語る。いかゞ思ひけん此女、犬千代に嫁ん事を嫌ひ、父の麁忽に約せし事を恨む。爰において又右衛門中村藤吉郎を招き、此次第を物語り、犬千代に理を告て婚姻異變の儀を計しむ。藤吉令承して、犬千代が許に至り、對面してさま〴〵すかし說ども、元來犬千代强勇の壯士なれば、曾て以て承引せず、「婚姻異變の趣意を聞て其後に返答すべし」といふ。藤吉郎計策を構へ僞て云く、

繪本太閤記 初篇第三之卷 目錄

外に人はなきぞ」藤吉郎謹で、「さん候、今朝は例日より君の御出半時斗早く候ふ程に、未一人も參らず候」と申す。信長又問て、「汝一人、何として早く參りたるや」藤吉答へて、「下郎事今朝のみにあらず、毎朝衆人よりは一時づつ早く參り、御出立を相待候」と申す。爰において信長卿、藤吉が勤勞衆に越たるを感じ、終に重く用ひ給ふ。程なく臺所奉行の役に選出され、諸事の費を省き、樣々工夫を以て、臺所の物入少きやうに取きまりければ、始めて三十貫の扶持を下し賜りける。又ある時小牧山御狩の時、山中の樹木を數へさせ給ひけるに、多くの木なれば混雜して算へ難く、人々甚困りたるを、藤吉郎工夫を以て、細き繩を三尺斗に切て木の根に結附け、惣繩數何程と定め置き、殘りし繩を算みれば、一本も相違なく、いと易く數へ終る。是又藤吉郎が時に取ての才智なりと、人々感じけるとなり。

藤吉郎
信長卿
に仕ふ

ど申事、曾て以て一向存不申。只當家に奉公仕度望みに候へども、不肖の某、一應にて召抱も有るまじくと、口に任せて僞りを申て候へばこそ御目に止り、貴殿の御尋にも預り、拙者が本望何事か是にしかんや。仰ぎ希くは御吹擧を以て中間奉公にても仕り、忠勤を盡し奉り度」由打歎て願ひければ、藤井も案に相違して、此旨言上に及びければ、信長大に笑はせ給ひ、「不敵のふるまひ、言語道斷、をかしき奴なり。汝が組下と成し中間に召抱へよ」と、直に御馬飼に仰せ附けられ、小猿々々と召されける。

○藤吉郎小牧山算二樹木一

扨も藤吉郎は御馬飼と成り、晝夜馬草飼料の手配由斷なく、其暇には一向手を以て馬の惣身を撫ければ、暫くの間に其毛色美しく輝けるにぞ、信長卿の御目に止り、草履取を仰附られけるに、寒季の時節は御草履を己が懐に入て溫め、萬思召に叶ひける。信長卿はいまだ壯年にまし〳〵、殊更强氣の大將なれば、嚴冬極暑といへども更に厭ひ給はず、毎朝卯の尅より馬を責給ひけるが、ある朝雪最う降積て、寒氣至て烈しきに、常よりも早く起給ひ、玄關に人蔭も稀なれば、誰か有と召れけるに、「藤吉郎にて候ふ」と答ふ。信長藤吉に問て宣ふ、「いかにしてか汝の

事に思召し、問うて宣ふは、「汝武道において何事をか心得たるや」此時藤吉聲をはげまし、「某、上は天文を悟り、下は地理に通じ、其中において悉く知らずといふ事なく、辨へずといふ事なし。實に亂世の孔明、治世の周公、召抱て其能を試み給へ」といふ。信長卿驚き給ひ、先手下と成して其實否を正さんと、足輕頭藤井又右衛門を召て藤吉を預け給ひ、頓て本城へ歸り給ふ。此藤井又右衛門といふものは、元は尾州津島の町人なりしが、家富榮え、代々織田家の用金を調達し、時の用ひ重かりしが、應仁の亂れより、盜賊しきりに徘徊し、金銀を貯へ市中の住居成りがたく、淸須の城中に居を移し、信長卿の時に至て足輕頭を仰附られ、堅固に勤役したりける。又右衛門女を以て藤吉に嫁せしむる事は、後の章を見て知るべし。

○藤吉郎仕㆓信長卿㆒

其夜藤井又右衛門は、信長卿の仰を承り、藤吉郎を近く招き、其生國、姓名竝に御前にて申上たりし天文、地理、兵學の事を尋ぬるに、藤吉郎答て申けるは、「某が父は中村彌助昌吉と申て、先君備後守殿に仕へ足輕を勤め、戰場にて膝口を射られ、仕を止めて當國中村に住し百姓と成る。某則彌助昌吉が忰、中村藤吉郎と申者にて候ふ。勿論先に申上げたる天文、地理なん

緩弛なりければ、濃姫こまぐ〳〵と文に委細を認め、父の許へ告ければ、道三大に驚き怒り、終に堀田春日の兩人を斬罪す。是信長が寸謀なり。かゝる智謀の大將なれば、藤吉郎志を織田にかたむけ、折を見合せ居たりける。

○藤吉郎見二參信長卿一

永祿元年九月朔日、織田上總介信長卿、小牧山に狩し給ふ。藤吉郎折よしと、靑き木綿の陣羽織を著し、兩刀を帶び、御狩場に推參し、「大將の見參に入べし」と申ければ、織田家の功臣柴田權六郎勝家怒つて曰く、「我君に直訴せんとは推參なり。察する所敵國の間者成べし。からめ捕て拷問せよ」と、士卒に下知して取卷たり。藤吉少しも恐れず、「某曾て左樣なる怪しき者に非ず。たとへ敵國の間者たりとも、小兵の某只一人、大勢出合からめ給ふに及ばず。敵の間者と見定め給はゞ、夫に附て中に行ふ謀もあるべし。思慮なき一言、笑ふに絕たり」といふ。信長遙に此由を聞給ひ、藤吉を近く召れ、其來由を尋ね給ふに、藤吉謹で申けるは、「君今日の御狩に數多の鹿猿を得給へども、天下國家の爲には益なし。我一人を得給ふ時は、忽ち天下を平定し、四民萬歲をうたふべし。此事を申さんため推參いたし候なり」と申ければ、信長卿希有の

を生じ、毎夜道三が女濃姫が熟睡を伺ひ、密に起きて外に出で、曉に至て歸る事一月餘り、濃姫是を怪みて、「君忍びて心を通はし給ふ者あらば、露して召せ給へ。妾聊も妬む心侍らず。何ぞ身を窶して深く包ませ給ふぞや」と、恨み顔なりければ、信長、「いかでかさる事の侍らん。我一つの祕計ありて、人に語るべき事にあらねば、疑はるゝも理」とて、又前の如くする事一月斗、濃姫いよ〳〵心を苦め、「是程にまで心置れ參せんとは兼ては思ひ知らざりける女心の愚さよ、御志の厚からん方をば是に居させ給へかし。妾は何地にも出でていなばや」と涙を流しかこちければ、信長詮方なき體にもてなし、「汝が父道三入道我とは久しき仇なり。一旦和團なして御身をむかへ參らせぬれ共、是我本心にあらず。今美濃の家老堀田道空、春日丹後の兩人、密に我と心を合せ、道三を殺害し、夜子丑の刻限に火を揚て、相圖とすべしと固く約束したりしが、此五十餘日が間、毎夜星をいたゞき霜を踏で是を望めども、未火の相圖これなきは、今に其便りを得ざる者なるべし。今宵にも相圖の火を揚ると等しく、軍兵を率し濃州へ亂れ入り、齋藤一家討亡すべし。穴賢、口より出し給ふな」と物語り、是より濃姫に守衛の兵士を附置き、道三方の文通などを禁じければ、濃姫は信長の物語をまことなりと思ひ、日夜心を苦しめけるに、かの守兵信長の内意を受て、態と怠りがちに、或は眠り、又は席を立て外に出なんど、甚

あわてふためき、忍びて先へ歸りけり。扨も信長は正德寺に至り、休息の間に入りて卒に裝束を改め、かちんの素袍烏帽子を著し、威儀堂々と座に著給へば、齋藤が臣下は言に及ばず、織田の近習用人迄、恐て平伏したりける。入道道三、頓て其席に立出て、互に慇懃叮嚀を演べ、深く因を結びけるが、信長道三が面を屢打守り、「前々町口にて、障子の透間より我を伺ひ、笑ひたはむれし曲者に能も似給ひける者かな」とつぶやき給ひければ、道三心中に大に恐れ、かゝる眼力有る大將、いかでか人の下位に立んや、我子孫も終には信長の門前に馬を繫ぐべしと歎息せられけるが、齋藤一家信長の爲に亡びぬるこそ、道三が先見明かなりと謂つべし。さても山海の珍味、饗膳美善を盡し、其日の宴會終りければ、互に暇を告て、信長頓て退出ある。道三入道も半途まで送り參らせけるが、途中の行列以前のごとく華美しきに、齋藤家の行裝は兼て古風を守り、目立ざるを專一とせし事なれば、何となく威を奪はれ、みすぼらしくこそ見えにけり。されば美濃一國の軍民等、信長は活達の勇將かなと、密に感じ思ひけり。

○信長奇謀斬二堀田春日兩士一

信長道三が女を娶り、因を結ぶといへども、終には美濃國を斬取べき所存有けるが、信長一計

において謁見せしむべきよし申送り、諸事の應對、萬事の行粧、古風を守り、信長に美濃の正しき國風を知らしめんと、其用意まち〳〵なり。去程に織田方には家老林土佐守、柴田勝家等、「信長濃州に赴き給はん事、其恐れなきに非ず、事によせて辭退有るべし」と諫めけれども、信長曾て用ひ給はず、同五月廿六日、正德寺へこそ赴き給ふ。既に富田の庄の町口に至り給ふに、其行列出立の異やう成るに、美濃の人民肝を潰し、天晴勇々敷觀物哉と、袖をつらね、膝をまじへて見物す。此よし道三入道に達しければ、信長いかなる出立にて來りけんと、近習少々召つれ、民家の内より伺ひ見るに、信長卿の行列こそめざましけれ、鐵炮三百挺左右に列し、次に三間柄の朱鎗三百筋、是も同左右に備へ、其次に步行の者百餘人、悉く赤き裝束を著し、馬前を守護す。信長卿の出立には、朱を以染なせし瓜の大紋のかたびらに、虎の皮の半袴を著け、熨斗附の太刀脇差を藁繩を以て卷せ、緋の苧を打て腕ぬきを附け、烏帽子を著せず、萠黃の平打にて髮を卷立て、腰のめぐりには火打袋、馬手指、瓢簞などの物を多く結附け、栗毛なる荒駒に白淡はませて、上下の同勢一千餘人、次第を守て打せける。道三を始め近習の人々興をさまし、扨珍らしき出立かなと、思はずどつと笑ひけるを、信長吃と見咎め、「我姿を見んとならば、我前へ出て見るべし。無禮は寬し遣すなり」と、大音に呼はりて打過るを、道三聞て大に驚き、

信長と
道三と
正徳寺に
會しを

物は低頭平身、「君御若年にましますと雖も、天性自然の英才にして、かゝる計策有る名將とも知らず、誹謗がましき諫言、かへす〲も恐れあり。父政秀も草の陰にて御心體を承り、何程か嬉しく思ひ侍るべし」とて、信長卿諸共に、紅涙數刻に及びけり。信長重て仰けるは、「汝今初て我本心を知るといへども、堅く他に語るべからず。我久しく此行をなすべき所存にもあらざれば、頓て行狀を改め、堅固に國政を執行ふべし。然る時は中務が諫死により、信長が正路に歸せしと云はゞ、中務が忠死空しからじ」と有難き君命に、監物とかうの言葉もなく、只涙にぞくれけるが、信長卿の智仁、凡慮の及ぶべき所にあらずと密によろこび、いよ〱忠志をはげみけり。

○織田信長與齋藤道三會於正德寺

天文十八年春二月、備後守信秀未存生の事なりしが、濃州の國主齋藤山城入道道三が女を以て信長が室とす。然るに其翌月三月、信秀卒去ありて、子息信長家督相續せるといへども、其行跡正しからず、頗る狂人に似たりとて、舅道三信長に對面し、其器量をためし、柔弱の將なりせば、聟に成て益なければ、襲て尾州を切取べしと、使者を以て信長を招き、濃州富田の正德寺

ず、平手退いて思惟するに、我信長卿の御乳母として、幼くまします時より、晝夜御傍を去らず守立てまゐらせたりしに、かく異風を好み給ひ、御心揃はせ給はずしては、新に家督に著せ給ひ、若何して國家を保じ持給はんや、況今四方悉く敵國にして、互に透を伺ひ奪んと計る秋なり、自然當家滅亡に及び、國陷るの時に至らば、何の面目か有つて死して先君に謁し奉るべき、所詮死を以て諫奉らば、萬が一つも御用ひの事も有るべしと心を定め、一紙の諫書に數條の利害を演記し、息男監物に遺言して、死後信長卿へ呈せしめ、軍學陣法、六韜三略の奥旨ども悉く監物に傳へ、終に腹搔切て死たりける。監物は涙ながら、かの諫書を持して信長卿に捧げ、泣々事の次第を言上すれば、信長大きに驚き、其遺書を開き見て、聲を發して悲み歎き、「さしも才智賢き中務も、我本心を知らずして、諫死を遂たるこそ、かへす〴〵も殘念なれ。我新に父を失ひ、今戰國の中に跨り、尋常にては國を保つ事能はず。さる故に傍若無人の行狀を成して、鄰國の强敵を物の數とせざるは、我深き計策なり。往來の僧を捕へ、我異風を彼等にしめし、金錢を與へ去しめたるは、信長こそ活氣の若者、尋常の將にあらずと、諸國へ風聽させん爲なり。或は我を狂なりと思ひ、伺ひ來る者あらば、微塵に成して勇を示し、終には天下に縱横せん我本心を知らざりけるこそ悲しけれ」と、諫書を面に押當て、さめ〴〵と泣き給へば、監

く語り罵れども、誰有て信長卿の趣意を知りたる者もなく、「狂人同前の國主なれば、定めて罪なき我々を殺し、慰みに成し給ふなんめり」とて、聲をあげて泣もあり、年老たる僧どもは、前世の報い、過去の因果、佛の教導此時なりと、經を讀み、佛名を唱へ、騒しき事言ふ計なし。時に同四月下旬、信秀卿の盡七日に當り、萬松寺にて追福の法事執行るべしとて、彼捕へ置たる僧法師を不殘よび出し、萬松寺へ伴ひ、信長僧衆に對面し、「今日亡父中陰の滿忌に當りたれば、千僧供養をなさんため、兼日より留置たり。銘々宗旨々々に隨ひ、よろしく讀經供養たのみ入る」由、叮嚀を盡し告給へば、數多の僧ども、始めて心を保んじ、悦び勇み、もろ〳〵の經共を轉讀し、佛事作善畢りければ、更に重菜の齋を調へ、僧法師を供養し、若干の金子を與へ、布施となし、おの〳〵暇を給りければ、いかなる憂目にかあはんずらんと歎き悲みし衆僧も、籠中の鳥の雲井に翔ける心地して、おのがさま〴〵出行ける。家中の諸士も、案に違ひし信長の行跡、兎にも角にも、異風を好み給ふは長久の計にあらずとて、人々眉をひそめけり。

○平手政秀諫死

扨も信長卿の行跡正しからざるにより、平手中務政秀、屢〻諫言を勸むれども、曾て用ひ給は

八方へ迯散たり。信長急に令を傳へ、すはや今こそ引取るべしと、まだ夜の明ざる程に陣拂して、名古屋の城へ歸り給ふ。此合戰の次第、悉く圖にあたり、進退掛引、天晴大將軍の器量備り給ふを見て、平手中務をはじめ、もろ〳〵の軍士兵卒に至るまで、末たのもしく悅びける。然るに天文十八年三月三日、織田備後守信秀卒去ありて、信長家督相續し給ひけるが、信秀病床に臥し給ふ頃ほひより、信長卿何となく物狂はしく、外見にかゝはらず、衣服より髮のかたちまで、異相を好みたまひ、馬上にて菓なんどを喰ひつゝ往來し、傍若無人の行跡のみ多かりければ、家中の人々、安からず思ひ、かくては織田の家も滅亡しぬべしとて、さま〴〵諫言すといへども、信長更に用ひ給はず、いよ〳〵我意に募られけるを、歎かぬ者はなかりけり。

○信長千僧供養

或時信長、領地四方の出口々々に關を居ゑ、守りの役人を數多備へ、往來の僧法師を悉く捕へしむ。此事又例の物狂ひなりと、平手中務誠に歎き、晝夜隙なく諫言しければ、信長甚だ迷惑し、席を避て平手に對面せず、猶も下知を傳へて僧法師を捕へける程に、既に三百人に餘りける。彼往來の僧共は、いかなる事ありてかく大勢の僧を捕へ置るゝ事にやと、銘々かまびすし

胤、尾州の大守斯波武衛家の臣下なりしが、去る應仁の亂より斯波家大に衰へ、信長の父信秀の時に至て斯波の一家滅亡し、終に尾州一國悉く織田に屬しぬ。時に天文三年の頃、織田信秀一男子を生む。童名を吉法師と號し、生得聰明怜悧にして、信秀の寵愛大方ならず。天文十五年、十三歲にて元服し、織田三郎信長と呼ぶ。翌十六年、信長十四歲にて二千餘騎を率し、今川義元を討んと參州へ出馬し、吉良大濱の邊を相働く。是信長卿の初陣なり。御乳母平手中務政秀、士卒に下知して在々所々に放火せしめ、敵出て戰はゞ、力戰して信長卿の高名に備へんと、野陣を構へて敵を待ども、三河勢一人も出て戰はず。爰において中務、信長を進めて陣をはらひ、本城へ歸らんとす。信長此時十四歲、いまだ幼年なりといへども、良將の器備り給ひければ、平手が軍配を用ひず、此所に陣をかため、二千餘騎を七手に別ち、備へを立て控へける。三河勢は敵さま〴〵放火亂妨をなせども敢て出づる事なく、却て敵の退くべき道に埋伏して、其不意を打んとす。されども信長勢、野陣を取て滯留しければ、兼ての計策相違して、さらば今宵夜討すべしとて、其勢一千五百人、子の刻過る頃信長の陣へ押寄せ、鬨を作つて切入たり。信長勢兼て期したる事なれば、相圖の鐵炮を鳴すと等しく、七手の軍兵二千餘人、三河勢を中に取込め、引包んで戰ふにぞ、今川方案に違ひ、さん〴〵に亂れて、討るゝ者數をしらず、四角

つくぐ〳〵と打守り、傍へ招き、其相貌を熟察し、大きに驚き申しけるは、「足下の相奇なり、妙なり、必ず天下に主たるべし。然りといへども、目前視る所賤しき匹夫下郎なり。今戰國の時に的て、淺井、朝倉、今川、佐々木、齋藤、北條、武田、上杉をはじめ、諸國の勇將威を震ひ權を爭ひ、天下を倂呑せんとする其中に、匹夫の足下に斯る尊き相有こそ不思議なれ。我年來和漢の相書に眼を晒し、修し得たりし相法も、今日はじめて疑を起せり」藤吉郎大に笑ひ、「我今こそかく賤しき身なれども、いかなる僥倖有て立身すまじきものにもあらず、今の詞後に應ぜば、其時厚く賞すべし」と云すてゝ別れける。此修行者、秀吉天下一統の時、安國寺の惠瓊和尙とて、十万石を下し賜り、天下の祈禱所と成りけるは、此考相の所謂なりける。

○信長高祖

去程に藤吉郎は古鄕中村に歸り、父母一族を集め、松下より鐙の料とて預りし黃金を別與へ、「我松下に仕ふるといへども、小器の之綱、我出身の便惡し。父が古主織田信長、仁勇の大將なれば、織田に仕へて驥足を伸べし」とて、其時を見合せけり。抑尾州淸須の城主織田上總介信長卿の家系を尋るに、桓武天皇の末葉にして、平相國淸盛の嫡孫、三位中將平資盛十九代の後

武備志

藤吉郎
尾張より

得し三面の大黒天を取出し、妻にあたへて云く、「抑此尊像は弘法大師の御作にて、是を信仰せる者は必ず三千人の司と成よし申傳ふ。汝信仰して後の榮を祈るべし」と云ひければ、妻打笑ひ、「さある靈驗あらたなる尊像は、和主信心して立身をも祈給ふべし。わらはは女の身なり、望なし」と云ふ。藤吉やがて大黒天を手に取上げ、「我望はかゝる小き事にあらず、是を所持して更に用なし」と、傍なる石に打附れば、不思議なるかな、此尊像、一塊の灰をなげたるごとく、微塵に成つて飛散たり。此人天下を掌握すべき祥瑞なりと、後にぞおもひ合せたり。

○修行者考二相藤吉郎一

漢の高祖、三尺の劍を提げ、芒碭山に白蛇を斬て、漢家四百年の基業を起し給ひしも、其始は泗上の亭の長たりしより興れり。若き時色を好み業にすさみ、人おしなべて是を疎む中に、單父の呂文一人、沛公を相して甚だ尊み、其女呂顔を與へて沛公に娶す。後此女を呂后と稱し、呂文を呂大公と號す。依て思ふに天智天皇に乞食の相ましく〵、明雲座主に殃死の相有りしも、しかるべき所謂あるべし。藤吉郎松下が下知によつて、尾張國へ赴くとて、矢矧の橋の茶店にて暫く休息したりけるが、遠近の旅人、老若男女打まじり休ひける中に、修行者一人、藤吉を

繪本太閤記　初篇卷之二

○藤吉郎爲下赴二尾州一需上レ鎧

大公望が妻は覆水盆に納らずの譬に慙ぢ、朱買臣が妻は米錢の惠を得て悔いて縊る。是婦人常の情なり。宜なり匹夫匹婦、いかんぞ大丈夫の志をはかり知らん。扨も松下之綱は、富士川の合戰に、藤吉郎比類なき働を成しければ、いよ〳〵重く用ひける。之綱元來藤吉が大志あるをよく知れば、去て他家に仕へん事を恐れ、同じ家人に川村治右衞門が娘きく女といへるを藤吉に娶せ、永く己が家に留めんとす。彼きく生質容儀嬋娟く、藤吉がかたち醜を嫌へども、主命もだしがたく、終に夫婦と成りけれど、鬱々として樂まず。或時加兵衞藤吉を召て「今尾州織田信長が家に、桶側にあらざる胴丸とて、右の脇にて合せ、伸縮自由なる鎧を用ゆるよし、汝が古郷なれば、織田家にたより、此鎧を調へ來るべし」と、黃金六兩を出し、鎧の料にあて與ふ。藤吉委細令承し、退いて妻に別を告る。此妻よき折なりと思ひければ、一先離別せん事を希ふ。藤吉も其詞に隨ひ、離緣の一紙を認め、尙別れの驗とて、先年秋葉權現の神前にて拾ひ

繪本太閤記　初篇第二之卷　目錄

其夜武田信玄より、山本勘助、山形三郎兵衛の兩將に命じ、北條、今川の和順を取結ぶ。兩家武田の武威に服し、異議なく和談とのひ、軍を治めて歸城しける。

に傾き、兩陣更に鐘を鳴して軍ををさめ、篝を焚て對陣す。

ざんなれと一參に馳來り、日向守が乘たりける馬の太腹をしたゝかに突通せば、馬は驚きはねあがる。日向守もたまり得ず、大地へどうと落たりける。藤吉透さず走り寄り、踏附て鎧の透間を二刀さし、押へて首を打落し、本陣さして歸りける。伊藤が士卒是をみて、あれよ〳〵とあせれども、川中の事なれば、急に堤へ上りがたく、敵ははや引取ければすべき方なく、此旨氏政へ注進す。藤吉郎は伊藤が首を提げ、松下に逢て事の次第を物語れば、加兵衛之綱大に驚き、頓て其首を以て大將義元に披露す。義元藤吉郎を近く召よせ、直の褒詞を賜ひければ、陪臣の面目なりと、勇で席を退きけり。扨北條方には初度の合戰を仕損じ、先敗の恥辱を雪んと、大道寺駿河守七千餘騎にて川を渡す。今川方には飯尾豊前守、朝比奈に替つて備へを立、兩陣鐵炮を打かけ、鎗を合せて攻戰ふ。爰に伊藤日向守が姪に伊藤彌作といへる大剛の勇士あり、叔父が討死を無念に思ひ、弔合戰に敵の大將を討取んと、只一人今川の本陣へ切入たり。松下加兵衛之綱かくと見るより、馬を飛して馳來り、鎗を捻て突かゝるを、彌作は寶藏院の鍵鎗を手練したれば、松下と鎗を合せ、半時斗戰ひけるが、松下鎧の袖を鍵鎗に引かけられ、既に馬より落んとす。藤吉走りよつて、鎗の柄の中より丁ど切はなせば、伊藤は馬よりどふと落つる、之綱得たりと鎗をのべて突とめ、馬より飛下り、おさへて首を取たりける。此時既に日光西山

北條の勇將伊藤日向守、五千餘騎川を渡して、今川の先陣朝比奈備中守といどみ戰ふ。朝比奈備中守三千餘人四手に分ち、歩行立の兵五百騎、悉く長柄の鎗を持て、伊藤勢の川を渡して進み來るを突きしらます。伊藤日向守下知を傳へて、騎馬の武者一千人、どつと喚でかけ出で、鯨波を作つて戰ひければ、朝比奈が歩行武者散々に成つて迯たりけり。伊藤勢あますまじと追所に、堤の左右より朝比奈が伏兵一千餘騎、伊藤が勢の中を裁切り、鳥銃を雨のごとくに打出し、喚きさけんで戰ひければ、伊藤方に討るゝ者數をしらず、四道路に成て敗走す。日向守は手合せの戰ひに敵の計に的り、味方敗北するを見て口惜き事に思ひ、いらつて士卒を勵すといへども、敗軍の習ひにて返し合す兵もなく、力及ばず殿して退きけるが、多勢一同に河を渡り、溺死せんも拙しと、一町斗川下に至り、士卒等に瀨ぶみさせ、堤の上に馬を立て控へたり。爰に松下加兵衛之綱も、義元の召に應じ、旗本を堅めけるが、出陣の時、木下藤吉郎手勢に加り、戰ひに赴かん事を希といへども、加兵衛之綱是を許さず。藤吉郎力なく、さればとて家に止て主人の生死さへ不知も本意なしと、知音の方にて具足一領かり出し、隱れて戰場に至り、合戰を見物して居たりけるが、今日は我初陣なれば、よき首とりて高名せんと、そこよ爰よと伺ひしに、伊藤日向守只一人、堤に馬を立て味方の引を眺め居れり。藤吉郎これを見て、よき敵ご

と、木刀構へ座に直れば、藤吉今は詮方なく、同じく木刀提て稽古場に立並べば、數多の門人息をつめ、こは面白き試合なりと、拳を握り見物す。宇市は、藤吉の小冠者只一打に打殺すべしと、木刀を大八相に構へ、微塵になれと打つてかゝるを、右へかはし、左にはづし、附入て宇市が左の目の上をはつしと打てば、宇市眼くらんで太刀筋みえず、ひるむ所を太刀打落し、「勝負はいかに」と聲かくれば、並居る門人一同に、「仕たり〳〵」と譽にけり。宇市は面目を失ひ、無念ながらも席を立て、隱れて歸宅したりける。松下加兵衛此事を聞き大に悅び、藤吉を召て其修行を尋ぬるに、藤吉答て、「某曾て武術を學たる事なし。當家に至り諸門弟の稽古を熟察し、密に心中に之を錬り、晝夜忘るゝ時なし。人に對して打合たるは今日こそ初めなり」と申ければ、松下殆感じ入り、「汝が相貌尋常ならず、後果して出身すべし。今日より武術兵書の奥義を以て悉く汝に教へ、我腹心と成すべし」と、是より門人と同席にて、萬の稽古怠りなく、切磋琢磨の功を積み、藍より出でて藍よりも猶靑く、其行末ぞ賴もしき。

○中村藤吉郎初陣高名

弘治三年の春、北條氏政氏直父子、大軍を率し駿州へ亂入し、富士川にて今川義元と合戰ふ。

れて濱名を去にけり。扨も今川の諸士日々松下が家に來り、晝は鎗術、劒術の稽古、其外弓、鐵炮に日を暮し、夜は軍學、兵書を講じ、一日一夜の閑隙なし。日吉丸嬉しき事に思ひ、少しのいとまもあればかの稽古を觀察し、心の内に習錬せり。夜は襖を隔て兵書を聞き、悉くこれを骨に記し、一を聞て萬を察し、頗武術兵學の趣旨その大抵を記臆せり。爰に初めて足を止め、年つもりて十八歳、天文廿二年の春、元服して中村藤吉郎高吉と名乗り、慢なく勤仕しけり。

○中村藤吉郎與二川島宇市一試二劒法一

松下が弟子の中に、川島宇市といへる血氣の若者有り、力量衆に越え、刃刀の術に慢じ、松下門下の隨一なりと自負し、人を見る事芥の如く、同門の壯士悉く之を憎む。或日中村藤吉郎例の如く稽古場に至り、試合の勝負を見る。彼川島宇市藤吉郎に向ひ、「汝青男の身分として毎度我々が稽古を見物す。我師家の下僕なれば定めて少しは嗜有べし。汝が稽古の爲なれば、我合手と成りて一太刀試み得さすべし」と詰り進むれども、藤吉郎固く辭退し、「試合は期に臨み容謝成がたきものに候へば、自然某勝を取候ては氣の毒なり」と迯出るを、宇市引とめ大に怒り、「汝如き小冠者何ぞ我を打負さん。奇怪の大言、武士の面立がたし。早く來つて勝負を決せよ」

海道郡小六方に養れ居たるよし、委しく物語れば、源左衛門大きに驚き、「彼は聞ゆる強盗の張本なり。再び彼所に行く事なかれ」と、己が家に養ひ置き、父母にもかくと語りければ、母の欣大方ならず、猶此上も然べき主人をたのみ宮仕させてんと、呉々頼み聞ゆれど、源左衛門も日吉丸が行狀を疎みぬれば、何地へ仕へたりとも末永く勤むべき者にあらずと、其儘におのが家に育ひける。爰に多賀の社 觀音院の順光房といふ僧、諸國の大名諸士の家に御祈禱の御札を配納しけるが、召作れたる下僕病に臥して立つ事能はず、此故に日傭の人を需んとす。源左衛門幸なりと悦び、日吉丸を順光房の下僕となし、東國へこそ下しける。然るに日吉丸旅中宿宿泊り〱にて、萬の事其取廻しいとかしこく、物馴し發明に、順光房大によろこび、よき從僕を得たりとて、日々怠らず廻る程に、終に遠州濱名に著し、松下加兵衛尉之綱が家に宿す。此之綱は武術兵學の奥儀を悟り、今川義元の旗本にありて千五百貫を領し、今川一家の武道の師にて用ひ重く、其名頗鄰國に高し。之綱順光房が召連たる僕を觀るに、其相貌甚だ奇にして、面は猿のごとく、眼中に重瞳あり、近く招きて物語をなすに、言語分明にして其聲至て大也。松下奇童なりとて甚だ怪み、順光房に乞ひて下僕とす。順光房元來傭ひたる人なりければ否む事なく、日吉丸を松下が家にとゞめ、中村に行きて其由を告ぐべしとて、之綱に暇を乞ひ、別

が間まどろまず、心神勞れ、机によりて臥したりける。漸あつて目覺め、あたりを見れば、かの村正の刀なし。大きに驚き、いそぎ日吉丸を呼出せば、あつと答へて、日吉丸、件の村正脇ばさみ、小六が前に出にける。小六舌を卷て甚恐れ、「汝が智計我曾て及がたし、末たのもしき童かな」とくれ〴〵感心したりける。是は日吉丸雨だりの下に笠ばかりを捨置き、しのび來りし體にもてなし、その身は寢所へかへり、常のごとくよく寢て、夜の明る頃、小六が草臥寢ん事をはかり知り、しのび入て盜取たり。其計畧ある事かくのごとし。

○松下加兵衛見㆓日吉丸㆒

去程に中村彌助昌吉は、日吉丸が長松の商家を出奔して、既に一年に及べども、風の便りも聞えざれば、母は晝夜あんじ暮し、兎やあらん、角やあらんと昌吉に計れ共、彌助昌吉思ふ仔細あれば、更に日吉丸が行衛も尋ねず、案じ煩ふ氣色もなし。清須の源左衛門は母の歎きをおもひやり、いかにもして日吉丸が在所を尋ねんと、さま〴〵心をつくしけるが、其かひありて、熱田明神へ參詣しける道にて端なく日吉丸に行合たり。源左衛門大に喜び、母の歎きを語り聞かせ、是非を云せず我家に連歸り、「扨しも此年月、何處に宮仕して有りけるや」と尋ねけるに、

目を覺し、「すはや盜賊入たり」と、てんでに棒よ斧よと、上を下へと騒ぎける。日吉丸はいかゞして出おくれけん、只一人跡に殘り、見附られなば忽ち捕らるべしと卽智を出し、手頃の石を井の内へ投込み、あつと一聲さけびければ、「すは盜賊は井の中へ落ちたり」とて、皆々爰に集れば、此隙に日吉丸虎口をのがれ、拔足して表へ出で、跡をも見ずして出行けり。

○小六考二日吉丸智一

扨も小六正勝は、日吉丸を尋常の者にあらずと思ひ、其智を試んとて、ある時日吉丸を近く招き、「汝年幼稚と雖も才智たくましく、人並なる働きをなせば、無刀にても見ぐるし。此刀は青江村正にて、我祕藏せる指料なれども、才智を以て三日の内に盜み取ば、汝の物となして帶すべし」と云ふ。日吉丸難有しと令掌し、座を立つて退きけり。小六は彼村正を枕元に直し置き、少しも眠らず用心す。其夜も次の夜も日吉丸曾て來らず、第三日の夜に至りて、雨しきりに降て物すごく、小六はいよ〳〵心を配り、日吉丸が來るを待つ。旣に子の刻過る頃、雨だりの下に人ありと覺えて、雨の笠をたゝく音しきりなれば、扨は猿めが忍び來り、我寢るを伺ふにこそと、息をつめて居たりけるに、夜もほの〴〵と明渡れど、日吉丸は終に來らず。小六は三日

めをかうむるいはれなし。我前へ來り禮をなして通るべし」といふ。小六驚き立寄みれば、十二三歲の小兒なりければ、心に甚恐れ、思はざりき不禮を謝し、「さてしも汝何國いかなる者の子なるぞや。幼き身として不敵の一言感ずるに餘りあり。我に從ひ奉公せば、厚く惠みて召つかふべし」と尋ねけるに、日吉丸しか〴〵の事を物語り、「元より行べき方もなく、仕ふべき主人もなし。仰にしたがひ仕へ奉らん」といふ。小六大によろこび、「我々が業とするは、鐵壁の堅きを破り、財寶を奪ひ、心の儘に榮耀をなす。汝幼稚といへどもさかしき者なり、今宵奉公の手初に、然るべき豪富の家へ手引して、其方が器量を見すべし。功によりて稱すべし」と云ふ。日吉丸令承し、先に立て岡崎の町はづれに至り見れば、富有の家居三軒斗、垣を高くし、忍びがへし密になし、用心堅固に構へたり。小六下知して、「東の端なる家こそ入に便りありて退くに心易し、彼家に押入るべし」と云ふ。手下の者ども、心得たりと戸口に立寄り、槌を以て戸を打破らんとす。日吉丸是を止め、「虛を伺うて財を奪ふに、音しては勝利あらじ。我此門を開くべし、そこに待せ給へ」とて傍をみるに、柹の大木ありて、其枝葉繁茂して塀の上に覆へり。日吉丸さら〳〵と此木に登り、枝を傳ひ梢にいたり、終に塀に取附て門內に飛入り、頓て內より戸を開けば、小六が輩やす〴〵と忍入り、財寶衣服あまた奪ひ、さう〴〵迯れ出けるに、家內の大勢

舞ふにぞ、終に主人の怒りを受く。此陶器家にても、一月斗は家業の事に由斷なく、飯器皿鉢を作る事年久しき先輩に勝り、主人も深く是を愛し、世になき物に思ひけるが、いつとなく怠りがちにて、夙に出て夜に歸り、晝といへども眠に憚らず、夜中又心に任せさまよひ歩き、放蕩限りなかりけれど、此主人思慮ある者にて、敢て怒らず、其儘に捨置ける。或時其家の稚子三歳なるを抱き、よしなし事打いひて戲れ遊び居たりしが、かゝる賤しき業をなし、何日まで人に恥かしめられんやとて、彼小兒を井の元へつれ行き、索を以て井筒の籰にしかと結附け、「頓て助くる人有べし、暫く其所に辛抱せよ」と云捨て、三河路さして出行けり。

○日吉丸見二小六一

爰に尾州海道郡の住人、蜂須賀小六正勝といへる者あり、亂れたる世の習ひにて、近國の野武士をかたらひ、東國街道に徘徊し、落武者の武具を剝取り、人家に押入財寶を奪ひ、其手下に屬する者一千餘人、勢ひ近國に震ひける。或夜屬手數多引具し、岡崎橋を渡りけるに、彼日吉丸此橋の上によく寢て、前後もしらで有けるを、小六通りざまに日吉丸が頭を蹴て行過る。日吉丸目をさまし、大きに怒り、「汝なに奴なれば不禮をなすや。我幼稚といへども汝が爲に恥し

す。其とき屋の上に靈星現はれ、照す事白日のごとし。生長の後難戰の時に臨ば、必此星上にあらはれ、凶を轉じて吉となす事常に然り。此兒生れながら齒を生じ、其面猿に似たり。名を日吉丸と號けれど、猿によく似たりとて、人みな猿之助と呼習はせり。父母も尋常の小兒にあらざれば、徒に土民となさんも本意なし、僧となさば知識とも成りなんとて、八歳の時、同國光明寺の徒弟となり、手跡學問をすゝめける。日吉丸稚心にも、僧徒の業は乞食の所爲なりときらひ、手習學問は曾てなさず、近き邊の小兒を集め、竹を持せて戰の形勢をなし、自石上に立つて指揮する事、大將軍の器既に備れり。寺中の輩甚恐れ、此兒僧業を勤むべき者に非ずとて、密に寺を追はんとす。日吉丸是を聞て大に怒り、兒子法師を打擲し、器物を破り、經卷を亂し、本尊如來を打摧き、さま〴〵の惡行をなし、寺中を鬧しければ、住持殆育ひあぐみ、親里へこそ歸しける。父元來家貧しければ、妻の從弟清須の源左衞門といへる商人を頼み、日吉丸を奉公に遣はしけれど、爰に半年、彼所に一季、乃至一月二月にて悉く追出され、遠參尾濃の國々に仕へを需る事三十八軒、偏に氣象人に超え、度量世に勝れたれば、奴隷の手に恥を受ざるも理なり。同國長松の陶器家に仕へたりしが、日吉丸いづくにても初めの程は主人の氣を量り、己が業に怠らず、出精して勤めぬれど、いつしか下賤のさまのうとましく、心の儘に振

日吉丸誕生

と呼べり。是則豊臣秀吉公の御先祖なり。

○日吉丸誕生

中村彌助昌盛が妻懷妊し、月滿て男子を生む。昌盛大きに欣び、「神詑空しからざれば、亂れたる世を治むべきは此子なるべし。若此子にあらずんば是が生る孫ならん」と、最愛よのつねならず、生長て彌右衞門昌高と云ふ。一男子を生む、是を彌助昌吉と號す。昌吉若冠にして武を好み農を嫌ひ、同國淸須の城主織田備後守に仕へて足輕を勤しが、駿河國守今川義元と合戰の時、めざましき働をなし、其名を稱せられしが、此時膝口を深く射られ、行歩心に任せざれば、仕へを止て舊里に歸り、剃髮して筑阿彌と號す。妻は持萩中納言保廉卿の女なり。先に保廉卿、無實の罪によりて尾張國の流人となり、獵師治太夫が女に馴て一女子を儲け、程なく罪を赦され歸洛し給ひ、かの女子母もろとも都へ召さるべき契約なりしが、保廉卿早く身まかり給ひぬれば、日蔭の身となり、母方の祖父治太夫が許に生長し、奇偶にや有けん、彌助昌吉が妻となり、夫婦むつまじく暮しける。此妻日吉權現に祈て男子を得ん事を希ふ。其靈ありてや、或夜の夢に、日輪懷に入と見て忽懷妊し、孕む事十三月、時に天文丙申正月元日寅の一天、男子出生

英雄豪傑國々に蜂起し、威を張り力をあらそひ、君を弑し父を殺し、あるひは起り又は亡び、上天子の尊きより、下庶人の賤き迄、安き心更になく、深き淵に臨み、薄き氷を踏が如し、恰も七雄三國に彷彿り。爰に叡山西塔の僧に昌盛法師と云者あり、つら〳〵天下の形勢を見給ふに、王法佛法ともに廢れ、亂世に生れ亂世に死し、泰平の日ある事を知るものなし。かくては天下の人民こと〴〵く修羅道に墮落し、何日か成佛の期に遇んや、所詮今の世の衆生濟度は、天下泰平ならしめんにはしかじと一大願を發し、竹生島に參籠し、亂を退け治をなさん事を祈る事一百日、既に滿んとする其曉、異靈の神女出現まし〳〵、昌盛法師に告給ふは、「夫治亂興廢は天地の流行、治究る時は亂を生じ、亂極つて治に復する事、寒暑晝夜の往來のごとし。今の時や、亂いまだ極らず、治をなすに道なし。然りといへども汝丹誠をこらし祈念する事神に通じ、汝が家に一人の奇子を生しめ、天下是が爲に太平を謳ふべし。はやく還俗して子孫の功をまつべし」と靈告を蒙りて、則夢は覺たりけり。昌盛法師奇異の思ひをなし、大願既に成就せりとよろこび、山門を辭し故郷江州淺井郡に歸り、妻を具して耕をいとなみ、子孫あらん事のみを希ひ、年月を過しける。後事ありて尾州愛智郡中村に住し、地名を以て氏となし、中村彌助昌盛

繪本太閤記

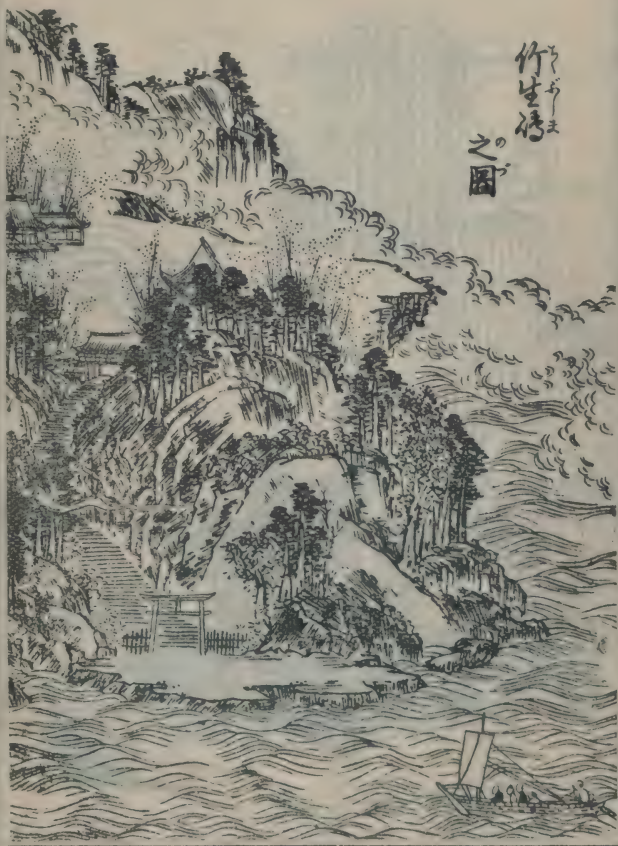
初篇　卷之一

○發端

積土成山風雨興焉、積水成川蛟龍生焉。微少も積て止ざれば必強大に至る。本朝後奈良院の朝廷、天文の時に當て、天一人の英雄を降し、此人歴世の大亂を鎭め、萬民の塗炭を救ひ、四海一統掌に握り、夫が餘り遠く朝鮮を征し、彼邦人をして雷霆のごとく恐れしめ、鬼神のごとく敬しむ。是尾州愛智郡中村の土民筑阿彌が子にして、童名を日吉丸と呼び、生長て木下藤吉郎と名乘り、後の稱は羽柴筑前守、天下一統の後、終に關白職を經て、豐臣太閤贈正一位豐國大明神と號し奉り、犬擲つ童子、市に立つ老婆迄も、其武德成功を尊む事、豈小を積で大をなすと謂ざるべけんや。其高祖を尋るに、足利の季應仁の頃、山名細川亂を起せしより以

竹生嶋之圖

木下藤吉郎像

藤吉郎像賛

公之未出世喪乾坤　天生雄傑夢兆朝暾
將耀其照以破昧昏　儀表殊異面貌類猿
迹多可議德協彼元　用兵如鋌芟彼凶頑
忽擢卒伍俄主大藩　視之其末尙是泥蟠

平安　皆川　愿謹題

信長公像賛

足利氏末　禍亂如揉　四海雲擾　干戈罔休
天誕鉅武　英發寡儔　兵威日盛　戰無遺籌
抑強扶弱　育穀除蟊　遠畧益展　將逮九州
甞肆嫚罵　股肱成仇　賊穿暗路　火滅崑丘

平安　皆川愿謹題

正二位織田右大臣信長公像

一身禍福憂國之心
判然在利義之間谷
風所喚驚菲之比是
讀此冊子之處

拙古戲筆

繪本太閤記 初篇第一之卷 目錄

寛政丁巳歳初秋

大佛殿吏山下大和守
源　重　直

詩は聲あるの畫、畫は象あるの詩とかや、文は世の事實における詩のまたつばらかなるものにして、これに畫をあはすれば、窓中に萬里の遠を縮め、机上に千載の古をまねき、象と聲とまさに視聽くがごとし。此文卽是也。豐太閤の初生より、天下の權を掌握し給ふに及び、一世の雄功を記し、人をして驚歎せしめ、且傍他人の事狀におきても、隱れたるを顯はし、うもれたるをあきらかならしむるもの、賞すべき哉。そもく昇平とし久しく、民人枕を高うして腹を鼓し、干戈といふものの世にある事をしらず。あはれ此記の錄する所を見て、いまの治世の忝きを思ひ、心を正うし、身を修めて、各其職を愼しみ守らんことこそ、ねがはしけれ。吾方廣殿は、豐太閤の名殘とどまる跡にして、予も殿下の吏に屬するをもて、此端に言を添へむ事をもとむ。予は文筆に乏しければ、固辭すれども、需めてやまざれば、聊數言をのべて責を塞ぐのみ。

いはまくもあやにかしこきは、豐臣の神のみいつになも有ける。そのかみ蘆原のいやみだりに亂りにたるを、燒鎌の利鎌もて、かり拂ふ事、ことむけませるはては、から國までたゞなびけになびけ給ひし、やまとだましひの生のまにま、ちはやびたるみ功を、卽皇國風の假字にかきうつして、修飾なくものしたるこそ、ふさはしともふさはしけれ。ことさへぐ漢學の徒、あかぬわざになあはめそしりそ。玉しきのま楫かけなべたる船も、岩たゝむ高ねに漕のぼさむは、絕てえあらぬわざになむ。海はや高み、山はや山の幸こそあらめ。

すめろぎのおほ宮どころ古へにかへしそめたる神ぞこのかみ

寛政十一年冬

方廣殿大夫松非西市正兼出羽守

みなもとの永喜

昔者豐公之霸也。一匡天下。濟世安民。澤被後世。不亦大乎。粤有公之本傳幾許卷。藏于某家久矣。其書也。蓋代勳績奇謀神策粲然可觀矣。寬政丁巳歲。始鋟于梓。加之以圖畫。形勢如指掌。三篇先成。行于世焉。每篇有序。天正壬午歲。自一擧誅逆徒。至于陷長濱城。勒爲第四篇。今刻成。書肆某請序于余。固辭不聽。故題于卷首。以塞其譴耳。

寬政十一年己未夏五月

方廣王室侍臣

南紀藤白太神六十八世裔

鈴木求馬穗積重翼

享和元年辛酉三月

廣福王府侍臣

舍人親王後胤大藏卿從二位賢忠六代孫

青水造酒淸原宣久

凡天壤之間。有非常之物。則必有非常之應焉。雲之從龍。風之從虎。不其然乎。其於人亦復然。故世有勳業非常之君、則必有傑然非常之臣焉。蓋氣運之與時勢。不得不然也。在昔豐太閤起於布衣。馳騁列國于干戈之中。攬挫群雄乎鼓鼙之間也。義士悍將爲之爪牙。而能垂非常之勳業矣。若夫加藤清正。英武拔萃出群、行兵之妙。雖孫呉良平或不過之。小西行長次之。亦同貴寵。及公之討朝鮮。命爲先鋒。分兵兩道。深入絕邈之域。破堅降强猶拉朽矣。乘席卷之勢。如入無人之境。鮮軍戒懼鼠竄。呼爲鬼將。自非傑然非常之士。豈得如此哉。行長雖亦同勞績。然而妬忠良爭威權。無有報王之實。惜夫使之知由理義。其亦遠出于清正之下乎。要之自非公之德威。不能使二子盡其材術也。自非二子之材術。不能使公遂志于異域也。嗚乎風雲之於龍虎。維其氣運哉。維其時勢哉。

繪本太閤記 上 內容細目 終

繪本太閤記 上 內容細目

三篇

繪本太閤記 上 目錄

初篇

二篇

繪畫は最初全部を縮寫印行せん豫定なりしも、其小に過ぐるは感興を妨ぐる事少なからず、頁數の激増はまた其豫定の實施を許す能はざりしを以て、事實の比較的重大ならざるもの、若しくは本文と相關聯する所淺きものの如き、其若干を割愛するの止むなきに至れり。

本書の校訂及び校正に關しては、文學士日高奈太郎及び椿强祐の二氏を煩はしたる所尠なからず。記して謝意を表す。

大正三年一月

校訂者　塚本哲三

緒言

豐臣秀吉を傳するもの、小瀨甫庵の太閤記あり、或は同者の筆に成れりと傳ふる太閤軍記あり、其他眞書太閤記、太閤諸國軍記、太閤素生記等枚擧するに遑あらず。本書亦其一に居る。本書は寬政年間の述作に係り、各篇時を異にして世に出でたるものの如し。繪は大坂の畫家法橋玉山の畫く所、歷史畫として甚だ價値あるものと稱せられ、文は未だ其筆者を詳にせず。本書元より所謂繪本にして、文は其客たる觀なきを得ずと雖も、平明達意、よく太閤生涯の委曲を寫すに於いて、また遺憾なきものといふべし。之を史實の典據として見るべからざるや論なし、而も英傑太閤を主人公としたる一篇の軍記として見る時は、痛快壯烈誠に卷を掩ふを知らざるの趣なくんばあらず。況んや無數の插畫と相俟つて、趣味更に津々たるものあるをや。是れ亦愛書子の逸すべからざる好個一篇の典籍と稱すべし。

本書は明治二十二年木版原本の再刻を見たる外、未だ活字本の世に流布するものあるを知らず。今本文庫に收むるに當りては、句讀を加へ、會話に鉤識を施して地の文と區別し、假名遣を一定し、充字の甚しく妥當を缺くものを改めたる外、事實文格共に一點の改竄を加へず。

繪本太閤記

上卷